SSN 0918-1334

考古論叢 神奈河

第12集

小田原城八幡山遺構群における石器群について……橋詰　潤

川尻中村遺跡・原東遺跡出土試料の炭素年代測定について……小林　謙一
今村　峯雄
天野　賢一

筒形土偶の背景に向けて……高橋　毅
― 神奈川県の縄文後期前半期土偶の事例から ―

逗子市池子遺跡群の弥生時代集落について……谷口　肇

隠蔽された「小田原式」……鈴木　正博
―「小田原の土器」の復権と「小田原式」研究の展望 ―

古代鎌倉の卜骨と三浦半島……押木　弘己
― 律令期における海浜部集落の一側面 ―

相模の横穴墓……田村　良照

神奈川における古代集落・官衙・寺の鍛冶……冨永　樹之
―神奈川の古代製鉄・鍛冶遺構―

平成16年(2004)4月
神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は、鶴岡八幡宮文書のうち、北条時宗が文永3(1266)年5月2日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈河」に拠るもので、これが地名神奈川の初出文書である。

考古論叢　神奈河

第12集　　平成16年４月

＊目　次

小田原城八幡山遺構群における石器群について ……橋詰　潤　1

川尻中村遺跡・原東遺跡出土試料の炭素年代測定について ……小林　謙一　15
今村　峯雄
天野　賢一

筒形土偶の背景に向けて ……高橋　毅　31
－神奈川県の縄文後期前半期土偶の事例から－

逗子市池子遺跡群の弥生時代集落について ……谷口　肇　47

隠蔽された「小田原式」 ……鈴木　正博　71
－「小田原の土器」の復権と「小田原式」研究の展望－

古代鎌倉の卜骨と三浦半島 ……押木　弘己　95
－律令期における海浜部集落の一側面－

相模の横穴墓 ……田村　良照　115

神奈川における古代集落・官衙・寺の鍛冶 ……冨永　樹之　153
－神奈川の古代製鉄・鍛冶遺構－

神奈川県考古学会

小田原市八幡山遺構群における石器群について

橋詰　潤

1. はじめに
2. 八幡山遺構群の位置と遺物出土状況
3. 石器群の整理の方法
4. 八幡山遺構群出土の石器について
5. まとめ
6. おわりに

1. はじめに

神奈川県小田原市八幡山遺構群は県立小田原高校校舎建替工事に伴う事前調査として、2002年1月～9月まで発掘調査（範囲確認調査、本調査を含む）が、2003年3月～8月の間に整理作業がおこなわれ、2004年3月に報告書が刊行された（かながわ考古学財団2004）。本遺構群においては小田原城の二の丸外郭にあたる八幡山大堀切、藤原平南堀、南入堀、西曲輪西堀が確認されており、初期小田原城の構造を考える上で貴重な調査事例を提供している。

一方で縄文時代遺物包含層から土器・石器等が豊富に検出されており、その中には充実した内容の早期土器群や神子柴型石斧・異形部分磨面石器などの非常に特徴的な石器が含まれている。しかし、報告書においては諸々の事情からそれらに対して多くの紙面を割くことができず、事実記載に関してはごく一部について触れたのみであった（橋詰2004）。

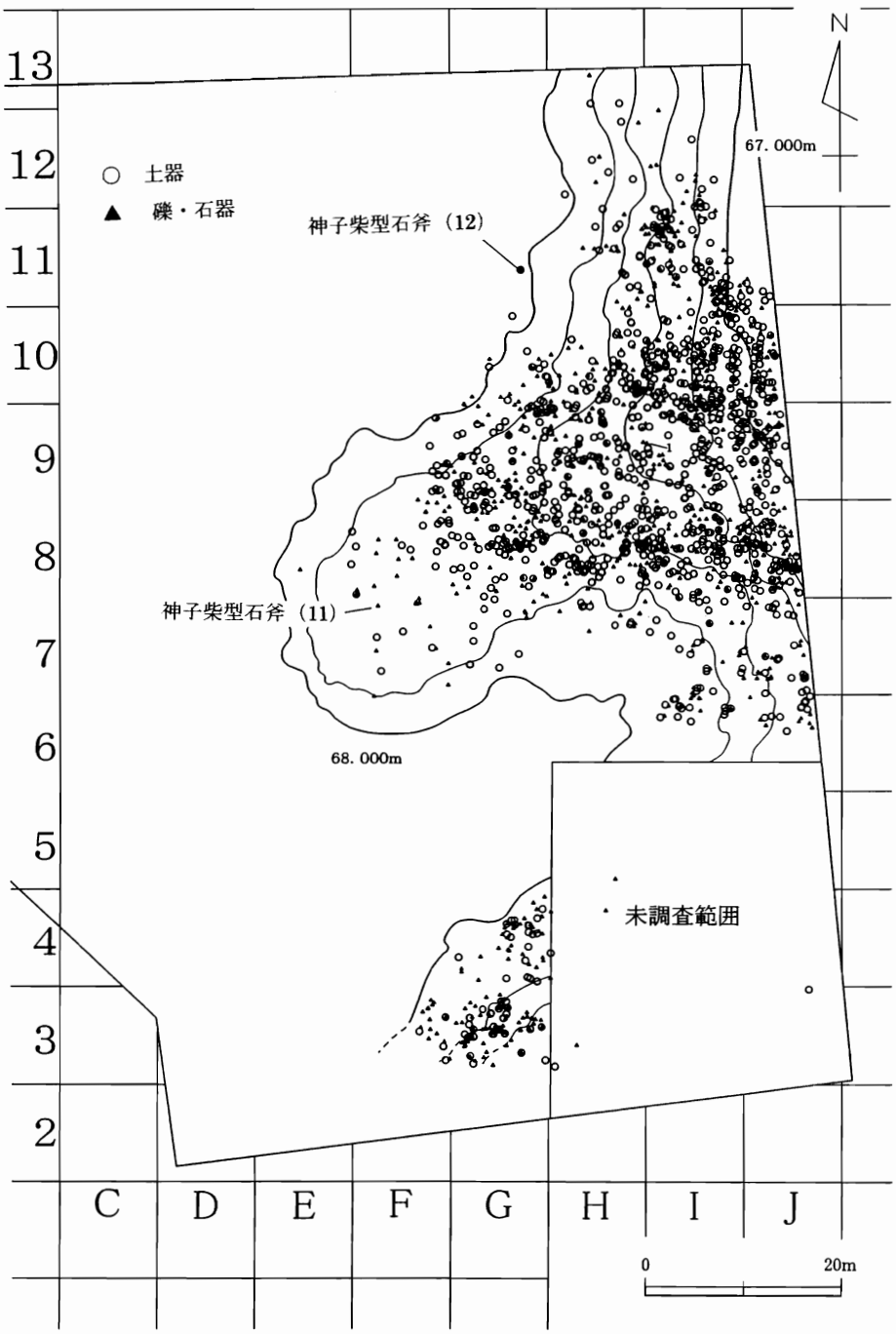
今回の報告においては本遺構群出土遺物の重要性を鑑み、出土石器群の基礎的な資料提示をおこない整理作業に参加した者として報告責任の一端を果したい。

2. 八幡山遺構群の位置と遺物出土状況

本遺構群が所在する小田原市は、神奈川県南西部に位置し、西に箱根古期外輪山から延びる山岳地帯、東に大磯丘陵、北には丹沢山地、東南から南にかけては相模湾に面しており、市域中央部は酒匂川水系によって形成された沖積平野である足柄平野が広がっている。

本遺構群は箱根外輪山から派生する丘陵の先端部、小峯御鐘ノ台から派生する八幡山尾根中腹（現在の小田原高校周辺）に位置し、南西に早川、北東に山王川、酒匂川が流れる。

本遺構群調査区の本来の地形は西から東へ下る傾斜地で、東から西へ埋没谷が入り込んでいたが、小田原高校のグラウンド造成の際に平坦面を作出するために西側が大きく削平されている。そのため遺物包含層は、東から入り込む小支谷が残存している東半のみに残存しており、遺物も東側に集中して検出されている（第1図）。残存する遺物包含層は地震の影響により土



第１図　縄文包含層遺物出土状況

層が複雑に反転していたり、地すべりの痕跡を残しているなど堆積状況が複雑で、遺物を層位ごとに区分して取り上げることは困難であった。実際、土器・石器は様々な型式や形態のものが明確に区分することが不可能な状態で出土している。

3. 石器群の整理の方法

八幡山遺構群の石器の整理をおこなうにあたり、まず発掘現場から持ち帰られた遺物の中から石器を選び出す作業を行った。その結果、包含層出土石器177点、配石出土石器48点の計225点の石器を抽出した（剥片、砕片を除く）(1)。その後それらの石器の器種分類をおこない、石器観察表の作成および完形品を中心として図化作業をおこなった。結果的に報告書には石器の実測図、図化石器の観察表とごく一部の石器に関する事実記載のみの掲載となった。そのため本稿においては報告書において果せなかった包含層出土の各器種の事実記載、観察表の掲載、考察をおこなう。

今回八幡山遺構群の石器の資料提示をおこなうにあたり、再現性の有る基準による整理・記載をおこなうことを目的として、既存の定義を参考にしながら（加藤・鶴丸1991など）、特に二次加工のあり方を基準として器種分類をおこなった。筆者は器種とはあくまでも研究者の作った、資料整理を目的とした便宜的な分類のための項目と考えている。そのため、本稿においては機能について加味した器種分類はおこなっていない(2)。各器種の分類基準は以下の通りである。

石鏃：尖頭部と基部を、浅く側縁が並列する規則的な剥離(3)によって作出したもの。

異形部分磨面石器：俗に「トロトロ石器」と呼ばれる石器である（岡本1982）。脚部をもつ大型の石鏃様の形態で、器体に「トロトロ」とした質感の光沢の磨面をもつもの。

楔形石器：対向する二辺に剥離痕を有しているもの。本器種に見られる剥離痕はいわゆる二次加工ではなく、打点が潰れているといった特徴が認められる。

削器：素材剥片の側縁の長さの二分の一以上に二次加工が施されたもの。

掻器：素材剥片の端部に急角度の二次加工が施されたもの。

両面調整石器：本遺構群においては小型で両面に二次加工が施されている石器の中で、平面形が不整形で断面形も分厚いものとして設定した。石鏃の未製品の可能性もある。

二次加工有る剥片：素材剥片への二次加工が側縁の長さの二分の一以下のもの。

微小剥離痕有る剥片：素材剥片の縁辺に微細な剥離痕が認められるもの。

微小剥離痕有る砕片：素材剥片の縁辺に微細な剥離痕が認められ、素材の長さ、幅が共に１cm未満のもの。

石核：全面がネガティブな剥離面で構成され、最終剥離面の打点が確認可能なもの。

第1表　八幡山遺構群縄文包含層出土石器器種組成

	石鏃	石鏃？	両面調整石器	異形部分磨面石器	楔形石器	楔形石器？	掻器	削器	削器？	二次加工有る剥片	微小剥離痕有る剥片	微小剥離痕有る砕片
黒曜石	25	1	2		19	1	1	2	2	45	18	1
安山岩												
ガラス質黒色安山岩	1	1			1					1	1	
細粒凝灰岩							1					
中粒凝灰岩												
凝灰岩												
カクセン岩												
多孔質安山岩												
チャート				1								
ホルンフェルス												
計	26	2	2	1	20	1	2	2	2	46	19	1
%	14.7	1.1	1.1	0.6	11.3	0.6	1.1	1.1	1.1	26.0	10.7	0.6

原石：本遺構群の近傍では採取できない黒曜石の礫を搬入した原石と考え、本器種として認定した。

神子柴型石斧：本遺構群においては森嶋稔氏による「大型で横断面が三角形かカマボコ形をした石斧である。刃部を研磨したものと研磨しないものがあり、刃部刃線が直線をなすものと弧状になるものがある」石斧という分類基準（森嶋1988）を採用する。

打製石斧：両面あるいは片面からの剥離によって、断面形が両凸レンズ形、または楕円形に整形された素材の一端に刃部を作出したもの。

磨製石斧：両面あるいは片面からの剥離によって、断面形が両凸レンズ形、または楕円形に整形された素材の一端に刃部を作出したものの中で、最終的な調整が研磨によっておこなわれたもの。

乳棒状石斧：磨製石斧の中で断面形が楕円形であり、棒状のもの。

礫器：礫、あるいは礫面を大きく残す剥片の一端に、片面あるいは両面から剥離を施し刃部を作出したもの。

磨石：円礫の片面あるいは両面に磨面が認められるもの。

特殊磨石：角柱状、円柱状の礫の側縁に平坦な磨面をもつ磨石。

石錘：礫の両端に剥離あるいは研磨によって、対向する抉り部を作出したもの。

凹石：礫の一部に凹部をもつもの。磨石同様に磨面を有するものも多いが、明瞭な凹部をもつ

石核	石核？	原石？	神子柴型石斧	打製石斧	乳棒状石斧	磨製石斧	礫器	磨石	特殊磨石	石錘	凹石	石皿	計	%
14	8	1											140	79.1
							1	4	3	2	3	1	14	7.9
				1			1	1					8	4.5
			1		1	1	3						7	4.0
			1	1		1							3	1.7
							1						1	0.6
							1						1	0.6
											1		1	0.6
													1	0.6
				1									1	0.6
14	8	1	2	3	1	2	7	5	3	2	4	1	177	
7.9	4.5	0.6	1.1	1.7	0.6	0.6	4.0	2.8	1.7	1.1	2.3	0.6		100.0

ものは本器種に分類した。

石皿：扁平な礫の片面あるいは両面に平坦、あるいはやや窪んだ磨面をもつもの。

※以上設定した器種分類に厳密には該当しない石器も一部存在した。それらは最も近いと考えられる器種にあわせ「石鏃？」というように便宜的に器種設定した。

4. 八幡山遺構群出土の石器について

ここでは本遺構群縄文包含層出土の石器群の各器種についての事実記載をおこない、可能な場合はそれらの石器の位置付けについても言及する。一部報告書と重複する部分もあるが、本稿ではより詳細な記載をおこないたい。また、包含層出土石器の器種組成は別表の通りである（第１表）。

石鏃：石鏃？としたものを含めて28点出土し、報告書では無欠損品を中心に10点図化(4)した。無茎凹基のものが大半である。長さの平均は1.9㎝、幅の平均は1.6㎝である。使用石材(5)は２点がガラス質黒色安山岩である以外は全点黒曜石である。

特徴的な形態のものとして、いわゆる「鍬形鏃」が２点出土している（第２図―１）。兜の飾り部分を逆さにしたような形態のためこのように呼称されており、基部の中央から

大きく逆U字の抉りが入り、抉りの両側の基部が幅を持って作出されている。本形態の石鏃は押型文土器に伴うとされている（八幡1948、斎藤1987、及川2003）。

その他に長さが1㎝前後の平基と凹基の小型石鏃があり（第2図―2・3）、表裏縄文土器・押型文土器に伴うとされる極小正三角鏃（及川同前）との関係が想定される。

異形部分磨面石器：1点出土している（第2図―5）。チャート製で、先端はやや丸みを帯びる。本遺構群出土例は側縁と脚部間に抉りが無く、側縁から脚部までが直線的で、本器種の他の多くの例（岡本1982、鈴木他2001）とはやや異なる特徴的な形態をもつ。器体中央部に強い光沢をもつ磨面があるだけでなく、脚部の間の逆U字の抉りを作出するための剥離面以外の、全ての剥離面の稜線上に磨耗光沢が認められる。肉眼観察では線状痕等が確認できないため、本石器の操作方向、あるいは接触対象の運動方向は不明である。

神奈川県内では、現在までに本例以外に大地開戸遺跡、市ノ沢遺跡の2例を筆者は確認している（かながわ考古学財団1995、市ノ沢団地遺跡調査団1997）。

楔形石器：楔形石器？としたものを含め21点出土し、2点図化した（第2図―4）。長さの平均は2.4㎝、幅の平均は1.7㎝で、素材剥片の剥離を意図したような大型のものは存在しない。使用石材は1点がガラス質黒色安山岩である以外は全点黒曜石である。

掻器：2点出土し、全点図化した（第2図―6・15）。小型の黒曜石製と大型の細粒凝灰岩製のものがある。大型の細粒凝灰岩製のものは礫器との区別が困難であったが、使用石材の緻密さおよび二次加工の丁寧さから礫器とは区別して捉えた。

削器：削器？としたものを含め4点出土し、2点図化した（第2図―7・8）。使用石材は全点黒曜石である。全点素材の剥片を縦位に利用している。

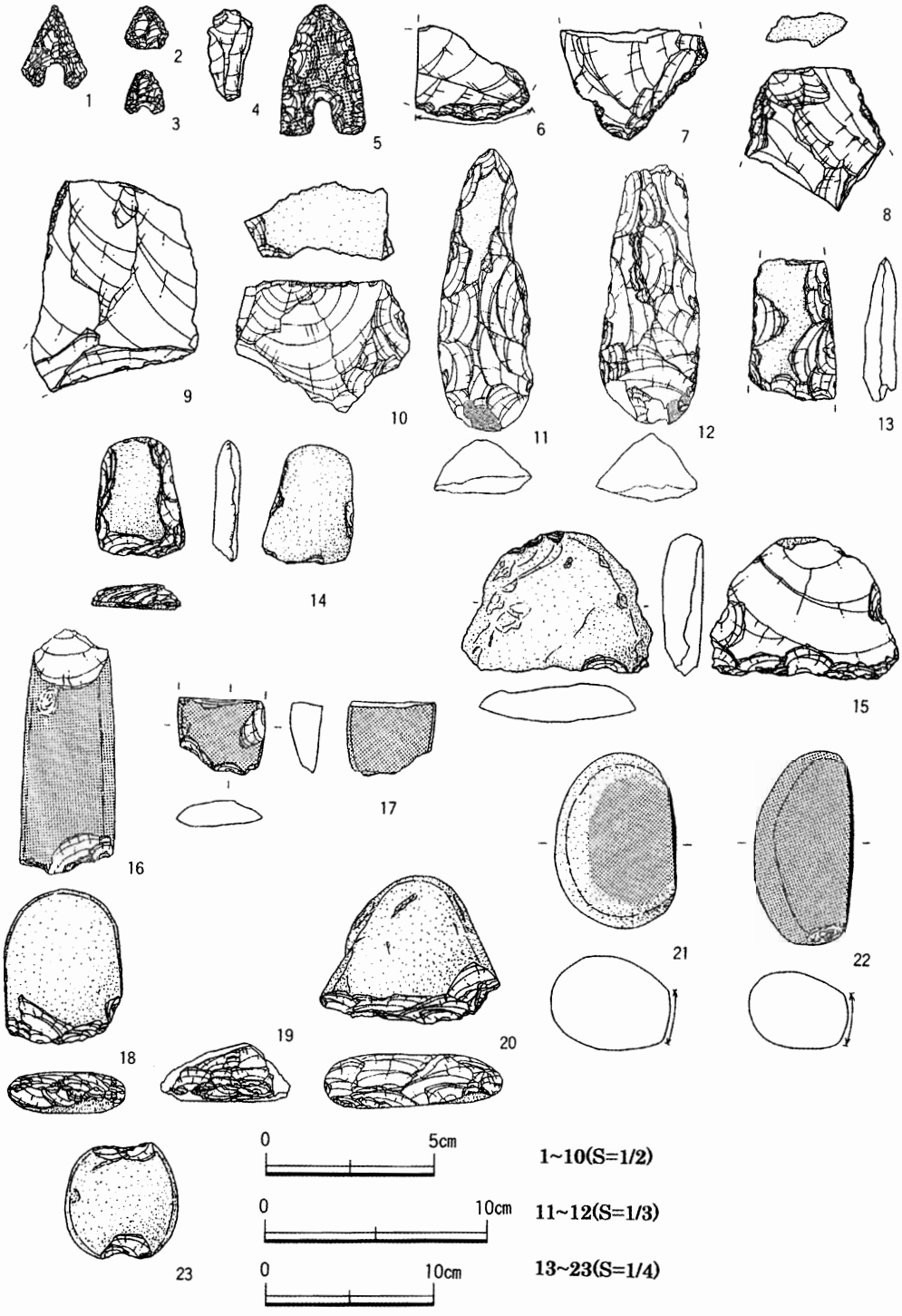
二次加工有る剥片：46点出土している。長さの平均は2.6㎝、幅の平均は2.8㎝である。使用石材は1点がガラス質黒色安山岩である以外は全点黒曜石である。

微小剥離痕有る剥片・砕片：20点出土し、1点図化した（第2図―9）。長さの平均は2.9㎝、幅の平均は2.7㎝である。使用石材は1点がガラス質黒色安山岩である以外は全点黒曜石である。

石核：石核？を含め22点出土し、1点図化した（第2図―10）。長さの平均は2.8㎝、幅の平均は3.3㎝で、石鏃以外の他の剥片石器へ素材を供給するには、本遺構群出土のものはやや小型である。図示した1点のように角礫を素材とし、その平坦な面を打面としたものが多い。使用石材は全点黒曜石である。

神子柴型石斧：2点出土し、全点図示した。

第2図―11は表面左側縁が外湾、右側縁が内湾し、刃部は丸みを帯びる。刃部正面観はやや表面側に湾曲し、側面観は片刃状である。研磨は刃部表裏のごく一部のみに施されている。表面に一部礫面を残しており、円礫素材と推測できる。断面三角形である。使用石材は細粒凝灰岩である。



第２図　縄文包含層出土石器

第２図―12は表面両側縁とも直線的で、刃部は丸みを帯びる。刃部正面観は丸のみ状で、側面観は片刃状である。研磨は表面の一部のみに施されている。裏面に素材剥片の腹面を残しており、分厚い縦長剥片が素材と推測される。器体中央の稜上から剥離が施されることにより、顕著な断面三角形となっている。使用石材は中粒凝灰岩である。

本遺構群においては、両面調整の石器製作に伴って生じるいわゆる「ポイントフレーク」(6)は出土していない。また、本石器とセット関係をなすような石器の出土も認められない。単独出土といえる状況である。小田原市域では天神山台遺跡で類例が発見されている（小田原市教育委員会1994）(7)。

打製石斧：３点出土し、全点図化した。第２図―13は短冊形の平面形の打製石斧である。刃部と基部を欠損している。主に周縁調整によって器体を整形している。表面に礫面を残し、裏面には素材の腹面を残しており、素材剥片を縦位に利用している。使用石材は中粒凝灰岩である。

第２図―14は小型扁平な礫の主に表面の周縁に剥離を施し、器体整形および刃部の作出をおこなっている。使用石材はホルンフェルスである。

もう１点（報告書第98図―25）は器体の大半を欠損しており、平面形の推定は困難である。使用石材はガラス質黒色安山岩で、両面加工品である。

本遺構群出土の石斧の器体側縁の整形には「潰し」の技術は用いられていない。

乳棒状石斧：１点出土している（第２図―16）。磨面を切る剥離が刃部方向および基部方向から施されており、折損後の再加工と考えられる。本例のような再加工の痕跡が観察される例は、山北町尾崎遺跡（神奈川県教育委員会1977）などでも認められる。製作、使用時におこる破損を修正しながら継続的に使用された石器といえる（秋田2004）。使用石材は細粒凝灰岩である。本形態の石斧は縄文前期中葉の黒浜期より一般化し、神奈川県内の縄文中期においては本形態が磨製石斧の形態の中心となる（鈴木1991）。

磨製石斧：２点出土している。第２図―17は刃部側の一部以外は欠損しているが、刃部には研磨面を切る剥離が施されており、刃部の再加工と考えられる。使用石材は細粒凝灰岩である。もう１点（報告書第100図―42）は平面形が楕円形で扁平な礫の一端に研磨面があり、さらにそれを切る剥離が施されている。いわゆる「礫石斧」に刃部再生がされたものと考えられる。使用石材は中粒凝灰岩である。また「礫石斧」は早期～前期初頭に特徴的に見られる形態の石斧である。

礫器：７点出土し、全点図化した（第２図―18･20）。素材の礫の一端に刃部を作出したもの以外に、表面の全面に剥離が施されたもの（第２図―19）も含めている。長さの平均は9.0cm、幅の平均は8.7cmである。使用石材は細粒凝灰岩、凝灰岩、安山岩、ガラス質黒色安山岩、カクセン岩など多様である。

石錘：２点出土し、全点図化した（第２図―23）。本例は、２点とも打ち欠きにより素材の礫

の両端に抉りを作出している。使用石材は２点とも安山岩である。

磨石・特殊磨石：磨石が５点、特殊磨石が３点出土し、磨石を４点、特殊磨石を２点図化した（第２図―21・22）。磨石の長さの平均は8.0cm、幅の平均は7.3cm、特殊磨石の長さの平均は9.9cm、幅の平均は6.4cm、厚さの平均は4.7cmである。使用石材は磨石の内１点がガラス質黒色安山岩である以外は全て安山岩である。

本器種に残された痕跡には、磨面以外に敲打痕が認められ、様々な操作法が想定される。特殊磨石は縄文早期中葉から前期初頭にかけて見られるが特に押型文土器に伴う例が多く、別称としてとして「穀摺石」、「石摺り石」などがある（斉藤1987、会田2000）。

凹石：４点出土し、３点図化した。長さの平均は9.3cm、幅の平均は8.0cm、厚さの平均は5.3cmである。礫の表裏中央部に顕著な凹部が存在し、磨面が組み合わされることが多い。使用石材は１点が多孔質安山岩、残りが安山岩である。

石皿：１点出土している。上部および下部を欠損している。扁平な礫の中央にはっきりとしたくぼみが磨りにより作出されている。安山岩製である。

5. まとめ

本遺構群出土の縄文時代遺物は、明確な遺構に伴うものは配石出土のものしかなく(8)、さらに包含層出土の遺物は先述したように堆積環境が複雑であり、層位の区分によって出土遺物の前後関係を推定することが困難である。そこで、非常に曖昧ではあるが出土した土器型式の検討およびその出土量の多寡、そして出土石器の検討から大まかに石器の位置付けを推定し、まとめにかえたい。

本遺構群出土の土器は、早期の土器として稲荷台式？、大浦山式、三戸式、田戸下層式、竹之内式？、鵜ヶ島台式および繊維を含む無紋土器、さらに押型文土器がある。前期の土器は十三菩提式、大歳山式がある。中期の土器として加曽利Ｅ３・４式、曽利Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式がある（報告書 pp104～126）。型式数および出土量では早期の土器が、その中でも押型文の出土量が最も多い。

出土石器の中で時期が推定可能なものは、旧石器終末から縄文草創期初頭の中に位置付けられる神子柴型石斧、押型文土器に伴う鍬形鏃と異形部分磨面石器、表裏縄文から押型文土器に伴う極小正三角鏃との関係が推定される小型の石鏃、早期から前期初頭に位置付けられる特殊磨石と礫石斧、前期中葉から中期に位置付けることができる乳棒状石斧がある。

以上から本遺構群出土遺物は、土器の量比としては早期の土器が卓越し、その中でも押型文土器が最も多く、石器においても時期推定可能なものは早期のもの、特に押型文土器に伴うとされるものが最も多いといえる。よって、これらの検討から縄文包含層出土の石器については

早期、その中でも特に押型文土器期に帰属するものが多いと推測できる。

ただし、本遺構群出土の早期土器にはかなりの幅がみられ、押型文土器の中でも幅が認められる(9)。現状ではその幅の中で、非常に大雑把な推定、および可能性の指摘ができるのみといえる。

6. おわりに

本遺構群出土遺物は一括性が低いために、上述の分析および評価が限界といえる。神奈川県内でも西方に位置する地理的な環境にもよると考えられるが、神奈川県内の遺跡においてある程度まとまった形で、押型文土器およびそれに関連する石器を資料提示できた事には一定の意義があると考える。

現状では神奈川県内の押型文土器関連資料は、資料蓄積の段階にあるといえる。昨年、押型文土器に関連するまとまった論集が発行されており（利根川同人2003)、多くの注目すべき論考が収められている。本地域においても資料の蓄積を待ちいずれはそこで提起された問題、視点を加味し改めて当該資料を検討したいと考えている。

謝辞

本報告をおこなうに際し、以下の諸先生、諸氏からのご教示・ご協力をいただきました。末筆ながら、ここに記して感謝いたします（50音順・敬称略)。

井澤　純、岩瀬　彬、内田和典、大上周三、加藤久美、小池　聡、柴田　徹、諏訪間順、
戸辺千裕、土屋　慧、中村健太郎、宮井　香、山田昌久、依田亮一

註

(1) その他に黒曜石の剥片が392点、その他の石材の剥片が数十点あるが、今回の分析から除外した。

(2) 現在までに慣習的におこなわれている「器種」分類、そして先験的にその「器種」に付与されている機能の評価には問題があると考えている。例として、技術形態学的に礫器と分類した石器は、刃部の微細な剥離痕の検討やその遺跡で出土した剥片および剥片石器が礫器とどのような関係があるのかを検討した上でなければ、重量のある刃器なのか石核なのか、あるいは両者が複合したものであるのか評価はできない。他にも本遺構群でも出土している特殊磨石は「植物加工具」と「皮なめし具」の２者の機能が推定されている（斉藤1987、会田　2000）など、分類した「器種」とその機能の推定の間に問題があるものが多い。石器の機能に関する議論は使用痕分析や実験的な研究を経た上ではじめて可能だと考える。よって、器種組成から生業を推定するような研究も以前からおこなわれてきてはいるが、このような研究もその前提となる段階で多くの問題を含んでおり、まずは基礎的な検討が必要と考えている。

(3) 押圧剥離による剥離痕の可能性が高いと考えているが、現段階では実験等によって検証しているわけではなく、今回は剥離痕の特徴の記述に留めた。

(4) 以下図化点数は報告書での数を示す。

(5) 石材の鑑定は柴田徹氏（考古石材研究所）による。

(6) 両面体の側縁を打面の一部に取り込むために、打面は剥片背面側からの剥離による切子状を呈することが多い。また両面体の側縁からの剥離であるため、剥片の縁辺角（打面と背面のなす角）が90°を超えることはほとんどない。縁辺角が小さいため曲げ型の剥離が多出し、リップを擁するものが多く、背面の剥離面の剥離方向は多方向を示すといった諸特徴を持つ剥片。

(7) これらの例のほかに、本遺構群の西方約300mの地点でも小型の神子柴型石斧が出土していることを諏訪間順氏（小田原氏教育委員会）よりご教示いただいた。

(8) 配石からは特殊磨石が1点出土しており、このことから縄文早期から前期初頭の可能性があるが、特殊磨石が後世に配石に転用された可能性もあるため、時期の確定はできない。

(9) 山田昌久氏（東京都立大学）、戸辺千裕氏（東京都立大学大学院）のご教示による。

引用・参考文献

会田　進　2000「縄文時代早期の「石摺り石」（いしずりいし）—いわゆる「穀摺石」の形態分類と使用痕の分析—皮なめし具の可能性を追う—」『樋沢遺跡』岡谷市教育委員会・塩尻市教育委員会

秋田かな子　2004「縄文時代中期磨製石斧の変形例」『考古学ジャーナル』512

市ノ沢団地遺跡調査団　1997『市ノ沢団地遺跡』

及川　穣　2003「出現期石鏃の型式変遷と地域的展開—中部高地における黒耀石利用の視点から—」『黒耀石文化研究』2

岡本東三　1982「トロトロ石器考」『人間・遺跡・遺物—わが考古論集』1　文献出版

岡谷市教育委員会　1987『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』

小田原市教育委員会　1994『天神山台遺跡』小田原市埋蔵文化財調査報告書第50集

加藤晋平・鶴丸俊明　1991『図録　石器入門事典〈先土器〉』柏書房

神奈川県教育委員会　1977『尾崎遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告13

かながわ考古学財団　1995『青野原バイパス関連遺跡群』かながわ考古学財団調査報告5

かながわ考古学財団　2004『小田原城跡八幡山遺構群Ⅱ（第2次調査）』かながわ考古学財団調査報告161

斎藤幸恵　1987「第6章　押型文系土器文化の石器群とその性格」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』岡谷市教育委員会

鈴木道之助　1991『図録　石器入門辞典〈縄文〉』柏書房

鈴木道之助・石橋宏克・宇井義典　2001「千葉県内出土のトロトロ石器」『千葉県史研究』9

利根川同人　2003「特集：押型文土器とその周辺」『利根川』24・25

橋詰　潤　2004「第Ⅵ章　第3節　縄文時代における時期推定可能な石器について」『小田原城跡八幡山遺構群Ⅱ（第2次調査）』かながわ考古学財団調査報告161

森嶋　稔　1988「生産と生活の道具」『長野県史』考古資料編1－4

八幡一郎　1948「鍬形石鏃—石鏃の最古型式」『日本考古学』1

付表　八幡山遺構群縄文包含層出土石器観察表

遺物注記No.	報告書図版No.	器種	石材	長cm	幅cm	厚cm	重(g)	欠損	被熱	備考
J遺物-11	第97図-7	石鏃	黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.4			
J遺物-58		楔形石器	黒曜石	1.9	1.2	0.4	0.8			
J遺物-99		石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.1	有		
J遺物-100		二次加工有る剥片	ガラス質黒色安山岩（以下GAnと略称）	6.2	2.2	4.1	60.0	有		
J遺物-109		磨石	GAn	8.3	7.0	3.1	290.0			
J遺物-123	第97図-17	微小剥離痕有る剥片	GAn	6.4	4.9	1.2	40.0	有		
J遺物-127	第97図-18	楔形石器	GAn	2.7	1.3	0.7	2.0	有		
J遺物-143	第99図-29	礫器	細粒凝灰岩	10.2	9.6	2.4	290.0			
J遺物-148		凹石	多孔質安山岩	9.9	9.8	9.0	540.0	有		
J遺物-172		特殊磨石	安山岩	8.3	6.6	4.8	450.0	有		
J遺物-224	第97図-14	削器	黒曜石	3.4	4.2	1.6	13.0			
J遺物-228		石鏃？	黒曜石	3.5	2.7	1.5	9.2	有		
J遺物-248		二次加工有る剥片	黒曜石	3.4	1.5	1.5	4.3			
J遺物-249	第100図-41	石皿	安山岩	18.5	22.5	5.2	2250.0	有		
J遺物-259		二次加工有る剥片	黒曜石	2.7	2.3	1.1	5.7	有		
J遺物-266	第97図1-4	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.4	0.8			
J遺物-271		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	3.7	2.5	0.8	4.8	有		
J遺物-274		楔形石器	黒曜石	2.2	2.9	1.8	7.7			
J遺物-281		原石？	黒曜石	3.1	2.5	1.2	11.1			
J遺物-282		二次加工有る剥片	黒曜石	2.5	4.3	1.3	13.3	有		
J遺物-290		石鏃	黒曜石	1.6	1.9	0.6	1.1	有		
J遺物-292		二次加工有る剥片	黒曜石	2.2	4.4	1.3	11.0	有		
J遺物-294		二次加工有る剥片	黒曜石	1.6	3.2	1.0	4.5	有		
J遺物-296	第97図-15	掻器	黒曜石	2.7	3.4	1.1	8.9	有		
J遺物-297		石核	黒曜石	3.0	3.4	2.0	18.0			
J遺物-299		石鏃	黒曜石	2.6	1.8	0.6	2.0	有		
J遺物-306		二次加工有る剥片	黒曜石	3.7	3.1	1.4	12.9	有		
J遺物-308		二次加工有る剥片	黒曜石	3.1	2.8	2.7	11.4	有		
J遺物-310		石核？	黒曜石	2.3	1.0	1.6	4.9			
J遺物-311		楔形石器	黒曜石	3.6	1.3	1.3	4.9	有		
J遺物-313		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	4.2	2.4	1.1	7.8	有		
J遺物-314	第97図-5	石鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.4	0.7			
J遺物-316		二次加工有る剥片	黒曜石	4.5	3.5	1.5	14.4	有		
J遺物-318		二次加工有る剥片	黒曜石	2.8	2.8	1.0	6.5	有		
J遺物-323		二次加工有る剥片	黒曜石	2.5	2.6	0.6	3.2	有		
J遺物-326	第97図-2	石鏃	黒曜石	2.4	1.9	0.4	0.9			
J遺物-330		石鏃	黒曜石	1.7	1.6	3.0	0.5	有		
J遺物-331		二次加工有る剥片	黒曜石	1.9	2.9	0.9	3.6	有		
J遺物-338		石核	黒曜石	1.7	3.4	2.7	20.5			
J遺物-353	第97図-13	石核	黒曜石	3.8	5.2	2.3	33.0			
J遺物-354		楔形石器	黒曜石	1.9	2.0	0.8	2.8	有		
J遺物-361		石核	黒曜石	1.2	3.9	1.4	6.6			
J遺物-364		両面調整石器	黒曜石	3.3	3.1	1.9	14.1			石鏃未成品？
J遺物-454		楔形石器	黒曜石	0.6	1.5	0.2	0.2	有		
J遺物-471		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	3.3	2.2	0.7	5.6			
J遺物-507		石鏃？	GAn	2.6	1.5	0.7	2.4			
J遺物-545		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	2.8	2.1	0.6	2.1			
J遺物-547		石鏃	黒曜石	1.9	1.7	0.6	1.1	有		
J遺物-557	第100図-36	特殊磨石	安山岩	10.2	7.0	5.7	610.0			
J遺物-566	第99図-26	礫器	安山岩	11.7	12.7	5.6	980.0	有		
J遺物-574		二次加工有る剥片	黒曜石	5.6	1.9	0.8	7.0	有		
J遺物-575		二次加工有る剥片	黒曜石	2.1	2.4	0.6	2.9	有		
J遺物-640		二次加工有る剥片	黒曜石	0.9	1.2	0.4	0.4	有		
J遺物-754	第99図-31	礫器	カクセン岩	9.1	6.9	2.6	275.0	有		
J遺物-786		二次加工有る剥片	黒曜石	1.9	2.8	0.6	3.0			
J遺物-789	第98図-25	打製石斧	GAn	4.5	6.5	2.6	90.0	有		
J遺物-796		石鏃	黒曜石	—	—	—	3.3			
J遺物-802	第100図-40	凹石	安山岩	9.6	6.7	3.1	340.0		○	
J遺物-810		石核	黒曜石	2.2	4.2	—	33.0			

遺物注記No	報告書図版No	器種	石材	長cm	幅cm	厚cm	重(g)	欠損	被熱	備考
J遺物-864		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	1.8	3.0	1.0	4.0	有		
J遺物-867		楔形石器	黒曜石	2.3	2.3	0.8	4.6	有		
J遺物-879	第97図-6	石鏃	黒曜石	2.1	1.9	0.3	0.7			
J遺物-881	第97図-9	石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.5			
J遺物-889	第100図-39	磨石	安山岩	13.5	9.2	4.7	910.0			
J遺物-900	第98図-24	打製石斧	中粒凝灰岩	8.3	5.0	2.0	100.0	有		
J遺物-924		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	3.7	3.5	0.5	4.1	有		
J遺物-926		石核	黒曜石	1.9	2.8	1.3	6.0	有		
J遺物-928		石核	黒曜石	3.2	2.6	1.6	10.1	有		
J遺物-929		石鏃	黒曜石	2.7	2.1	0.7	3.0			
J遺物-930		楔形石器	黒曜石	3.1	2.4	1.0	6.3	有		
J遺物-931		二次加工有る剥片	黒曜石	2.4	3.4	1.0	4.5			
J遺物-933		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	3.1	3.7	0.9	6.3	有		
J遺物-943		二次加工有る剥片	黒曜石	3.2	1.7	0.9	3.8	有		
J遺物-947		石鏃	黒曜石	1.0	0.8	0.2	0.1	有		脚部片
J遺物-991		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	2.4	0.9	0.6	0.8	有		
J遺物-993	第99図-27	礫器	凝灰岩	8.9	7.2	5.6	455.0	有		
J遺物-994		二次加工有る剥片	黒曜石	2.8	5.8	2.1	21.9	有		
J遺物-1004		二次加工有る剥片	黒曜石	2.4	3.7	1.3	8.6			
J遺物-1005	第99図-30	掻器	細粒凝灰岩	8.3	10.9	2.2	300.0			
J遺物-1039	第100図-38	凹石	安山岩	9.8	7.5	3.6	395.0		○	
J遺物-1072		楔形石器	黒曜石	3.4	2.9	1.3	11.5			
J遺物-1098		二次加工有る剥片	黒曜石	1.3	3.0	0.7	2.6	有		
J遺物-1099		二次加工有る剥片	黒曜石	1.6	1.8	0.7	1.9	有		
J遺物-1100		二次加工有る剥片	黒曜石	1.9	2.7	1.0	4.2	有		
J遺物-1177	第97図-10	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.8			
J遺物-1181		石核	黒曜石	3.4	4.5	1.7	21.8			
J遺物-1187		石核	黒曜石	2.7	2.9	2.4	16.3			
J遺物-1200	第98図-21	乳棒状石斧	細粒凝灰岩	14.1	5.4	3.9	486.0	有		
J遺物-1203		二次加工有る剥片	黒曜石	2.4	1.9	0.7	3.5			
J遺物-1210		石鏃	黒曜石	2.2	2.4	0.7	4.0			未成品
J遺物-1220	第97図-1	異形部分磨面石器	チャート	3.8	2.5	0.5	5.4			
J遺物-1228		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	2.4	2.6	0.8	2.9			
J遺物-1229		楔形石器	黒曜石	1.7	1.1	0.8	1.1	有		
J遺物-1236		石鏃	黒曜石	0.9	1.1	0.2	0.2	有		
J遺物-1258		削器？	黒曜石	1.5	2.2	0.7	2.3	有		
J遺物-1269	第100図-37	凹石	安山岩	7.9	8.0	3.7	302.0	有	有	
J遺物-1272		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	1.8	1.8	0.7	1.2	有		
J遺物-1279		石核？	黒曜石	2.5	4.7	1.4	12.6	有		
J遺物-1294		二次加工有る剥片	黒曜石	1.7	1.5	0.4	1.0	有		
J遺物-1322		二次加工有る剥片	黒曜石	2.5	1.0	0.5	1.1	有		
J遺物-1336		石核？	黒曜石	4.4	5.4	1.9	31.2	有		
J遺物-1344		二次加工有る剥片	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.7	有		
J遺物-1355		石核	黒曜石	2.1	2.2	1.9	7.8			
J遺物-1356		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	1.7	2.2	0.7	2.3			
J遺物-1370		二次加工有る剥片	黒曜石	1.8	1.8	0.8	2.6			
J遺物-1417		二次加工有る剥片	黒曜石	4.1	4.9	1.5	19.9	有		
J遺物-1420	第97図-16	削器	黒曜石	4.3	4.1	1.2	16.0	有		
J遺物-1438		石核？	黒曜石	2.7	2.0	1.4	6.3			
J遺物-1442	第98図-23	打製石斧	ホルンフェルス	7.1	5.1	1.5	85.0			石材相模川産
J遺物-1463		石核	黒曜石	2.1	3.7	2.2	20.3			
J遺物-1476	第99図-28	礫器	細粒凝灰岩	8.7	10.4	3.3	390.0			
J遺物-1510		楔形石器	黒曜石	3.1	1.2	0.6	2.1			
J遺物-1522		二次加工有る剥片	黒曜石	2.0	3.5	0.9	6.0			
J遺物-1523		二次加工有る剥片	黒曜石	2.3	3.5	1.2	10.7	有		
J遺物-1530	第97図-11	石鏃	黒曜石	1.3	1.2	0.3	0.3			
J遺物-1538		二次加工有る剥片	黒曜石	1.7	2.0	0.4	1.0	有		
J遺物-1540		石核？	黒曜石	1.9	1.5	1.9	6.3			
J遺物-1553		二次加工有る剥片	黒曜石	5.5	6.4	1.7	41.2	有		
J遺物-1557	第99図-32	礫器	GAn	7.5	7.4	3.4	240.0			
J遺物-1587		石核	黒曜石	6.3	5.7	3.0	94.9			
J遺物-1653	第100図-35	特殊磨石	安山岩	11.2	5.7	4.7	450.0		有	

遺物注記№	報告書図版№	器種	石材	長cm	幅cm	厚cm	重(g)	欠損	被熱	備考
J遺物-1666		二次加工有る剥片	黒曜石	2.0	3.3	0.8	4.5			
J遺物-1685		微小剥離痕有る砕片	黒曜石	3.0	1.5	1.3	3.6			
J遺物-1692	第98図-19	神子柴型石斧	細粒凝灰岩	16.8	5.4	3.2	332.0			
J遺物-1694	第97図-3	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.6	有		未成品、楔形石器の可能性も
J遺物-1698		石鏃	黒曜石	1.0	1.8	0.4	0.7	有		
遺構外遺物-5		二次加工有る剥片	黒曜石	3.0	2.1	0.9	3.7			
遺構外遺物-9		二次加工有る剥片	黒曜石	2.6	2.3	0.8	3.2	有		
遺構外遺物-10		楔形石器	黒曜石	2.4	1.2	1.2	4.1			
遺構外遺物-45		楔形石器	黒曜石	1.6	1.1	0.7	1.6			
遺構外遺物-63		石鏃	黒曜石	2.4	1.6	0.5	1.5	有		
遺構外遺物-91		楔形石器	黒曜石	2.6	2.6	1.1	8.1			
遺構外遺物-100	第99図-33	石錘	安山岩	6.9	6.6	1.5	105.0			
遺構外遺物-127		楔形石器	黒曜石	2.7	1.3	0.7	2.0			
遺構外遺物-139		石核？	黒曜石	1.7	1.4	1.3	3.1			
遺構外遺物-144		二次加工有る剥片	黒曜石	2.2	1.6	0.6	2.5			
遺構外遺物-157		二次加工有る剥片	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.5	有		
遺構外遺物-180		二次加工有る剥片	黒曜石	1.5	1.7	0.7	1.6	有		
遺構外遺物-181		二次加工有る剥片	黒曜石	2.9	1.9	0.9	3.2	有		
遺構外遺物-182		楔形石器	黒曜石	1.4	1.2	0.9	1.4			
遺構外遺物一括	第97図-8	石鏃	GAn	2.4	1.3	0.4	0.8	有		
試掘5グリット	第109図-9	礫器	細粒凝灰岩	7.0	6.5	4.0	230.0	有	有	試掘時出土
試掘5グリット	第109図-10	磨石	安山岩	8.1	6.7	6.4	460.0	有	有	試掘時出土
試掘3-2グリット	第109図-8	磨石	安山岩	6.2	6.6	4.6	210.0	有	有	試掘時出土
F3グリット一括-80		両面調整石器	黒曜石	1.7	2.1	0.5	1.6			石鏃未成品？
H9グリット一括-53		二次加工有る剥片	黒曜石	1.4	4.1	0.7	4.1	有		
H9グリット一括-55		楔形石器	黒曜石	2.9	1.4	1.0	3.8	有		
H9グリット一括-56		楔形石器	黒曜石	2.2	1.5	0.8	2.6			
H9グリット一括-58		二次加工有る剥片	黒曜石	1.8	2.5	0.6	2.1	有		
H9グリット一括-66		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	3.3	3.5	1.8	13.8	有		
H9グリット一括-69		二次加工有る剥片	黒曜石	3.5	2.1	0.9	4.9	有		
I10グリット一括-86		石鏃	黒曜石	1.9	1.1	0.4	0.6			
I9グリット一括-85		石鏃	黒曜石	1.6	1.1	0.3	0.4			
22TR遺物-4		石核？	黒曜石	3.3	3.7	1.4	18.3			
22TR遺物-48		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	2.3	2.5	0.7	2.7	有		
22TR遺物-87		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	1.3	3.5	1.1	3.8	有		
22TR遺物-90		二次加工有る剥片	黒曜石	2.5	1.6	0.6	2.3	有		
22TR遺物-93		二次加工有る剥片	黒曜石	2.3	3.5	0.9	6.6			
22TR遺物-95		石核	黒曜石	3.6	2.5	1.2	9.7			
22TR遺物-96		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	3.3	3.2	0.8	7.0			
22TR遺物-98		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	2.5	3.1	1.4	9.5			
22TR遺物-125		二次加工有る剥片	黒曜石	5.1	5.5	1.2	25.9	有		
22TR遺物-126		石核	黒曜石	3.0	3.2	1.2	10.0			
22TR一括-37		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	2.5	2.7	0.9	5.5	有		
22TR一括-39		石核？	黒曜石	2.2	2.5	1.4	7.2	有		
22TR一括		石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.4	1.0			
25TR遺物-11	第98図-20	神子柴型石斧	中粒凝灰岩	15.5	6.0	4.2	372.0	有		
29TR遺物-2		微小剥離痕有る剥片	黒曜石	2.0	1.5	0.5	1.0			
プール2	第109図-3	磨石	安山岩	4.0	6.9	4.6	164.0	有	有	試掘時出土
YH2住遺物-63		楔形石器？	黒曜石	2.2	0.6	0.4	0.4	有		
YH4一括-3		楔形石器	黒曜石	2.5	1.1	0.8	1.9	有		
YH5住遺物-10	第99図-34	石錘	安山岩	4.2	4.6	1.4	40.0	有		
YH5住遺物-33	第97図-12	楔形石器	黒曜石	2.8	2.7	1.8	0.8			
YH5住遺物-47		削器？	黒曜石	0.6	1.0	0.6	0.3			
YH5住遺物-53		石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.5	1.0	有		
YH5住遺物-57		加工礫	—	6.3	4.4	0.9	140.0			
	第100図-42	磨製石斧	中粒凝灰岩	7.5	4.8	2.0	113.4		有	礫石斧

川尻中村遺跡・原東遺跡出土試料の炭素年代測定について

小林謙一・今村峯雄・天野賢一

はじめに
1．川尻中村遺跡・原東遺跡の概要
2．測定対象資料と炭化物の状態
3．炭化物の処理
4．測定結果と暦年の較正

はじめに

考古学において炭素年代を利用することは、既に数十年に及ぶ長い歴史があるが、いまだ十分な研究方向が見いだされているとは言い難く、極端にいえば、単に測定し結果を報告書に掲載するに留まっている場合が多々見受けられる。ＡＭＳを用いた炭素年代による高精度編年の手法は、近年において、大きく進展しつつあり、微量な資料による測定が可能になったことから、土器付着炭化物（煮焦げやスス）を試料として測定することによって、直接土器自体の年代（正確には付着炭化物の年代）を計ることが可能となった。実際の手順としては編年学的位置づけの明確な土器付着炭化物・集落内出土炭化材について、放射性炭素同位体比をＡＭＳを用いて測定し、同時に測定した$\delta^{13}C$値を用いて補正して、炭素年代を得る。炭素年代自体は実年代ではないため、年輪年代の確定した年輪資料等の^{14}C測定に基づいて得られている較正曲線を用いて暦年代を推定する。炭素年代は、あくまで実年代ではないことを、理解した上で検討していく必要がある。

考古学研究において、年代測定を有効に用いるためには、考古学側・分析側両者が、互いに検証可能な協業体制が必要であることはいうまでもないが、最も肝要なことは試料の選択において、資料提供者・分析者両者が、分析目的・試料の環境や条件について、十分な理解を図ることと思われる。混入の可能性が少なく、出土状況が明確で共伴資料が確定し得るような、分析に最適な資料を選定し、さらに測定結果を土器自体の出土状況や土器編年に対比させて、検証を重ねる必要がある。遺跡や調査の状況によって、試料の攪乱や汚染の度合い、バインダーなどの取り上げ時の処理や保管状況に当然違いがあり、それに起因した汚染除去が必要になる場合もあるし、試料の量の多寡によっても前処理の方法に工夫を加える必要が生じる可能性もある。こうしたことも試料を扱う人間が把握していなければ、得られた年代に対する正しい解釈を得ることも、また試料を生かすことも難しい。年代測定の報告においても、単に結果の数値を記すだけではなく、どのような試料を、どのような方法で処理したか、試料の観察、処理方法の記録を明示することと、報告後も可能な限り再検討が可能な状態にとどめる努力が必要

である。

本稿は、１を天野、はじめに・２～４を今村の監修のもとに小林が分担執筆した。

１　川尻中村遺跡・原東遺跡の概要

川尻中村遺跡・原東遺跡は、神奈川県北部の津久井郡城山町に所在する。両遺跡は、相模川が山梨県方面から東進し、関東山地から平野部へ流れ、大きく屈曲しながら南進する付近に位置する。相模川中流域にあたり河口から約34km遡った位置にあたる。川尻中村遺跡は、相模川左岸の相模原市域に向かって大きく広がる平坦な台地上の縁辺部、原東遺跡は、西側背後に標高374mの城山を控えながら、北側は相模川及び南側は相模川支流の串川に挟まれた幅狭の舌状台地中央部にそれぞれ位置する。川尻中村遺跡は標高140mであり、標高115mの原東遺跡を見下ろす関係にあたる。川尻中村遺跡は西に隣接する谷津川を隔てて北西に位置する川尻遺跡と隣接している。川尻中村遺跡・原東遺跡は、橋梁新設のため1996年～1998年まで発掘調査が実施され、両遺跡の中心的な部分についてその構造を明らかにすることができた。

川尻中村遺跡　住居跡91基・集石10基・焼土跡３基・土坑310基・ピット854基などが発見されている。住居の時期は、中期中葉期から中期末葉期までほぼ断続的に継続する集落である。いわゆる環状を呈する集落で、大部分の住居は径130m程度の範囲に構築されている。なかでも中期後半加曽利Ｅ式期に構築されたと考えられる列石は、集落と土坑群を区画するよう径30mの円を描くよう配置されるもので注目できる。本遺跡の住居は中期中葉期11基、中期末葉期１基で、その他のほとんどは中期後半の加曽利Ｅ式・曽利式期にあたると考えられるが、遺存状態が良好でなく時期比定が困難な住居も認められる。遺物は極めて豊富な量が出土しており、中期土器が18万点・約６トンを数え、その他土偶などの土製品類や石器なども含めてそのあり方についても特筆される。

原東遺跡　住居跡24基・集石５基・焼土跡５基・土坑19基・ピット36基などが発見されている。住居の時期は川尻中村遺跡と同様に中期中葉期から中期末葉期まで断続的に継続する集落である。南北幅約100mの舌状台地先端部に形成された集落で、住居群は平坦面中央部に径70m程度の範囲に配置されているものと思われる。中期末葉期の敷石住居は合計５基認められ、川尻中村遺跡との主体的な時期の差異がある可能性が考えられるが、両遺跡ともに集落全体は明らかになっていない。

その他両遺跡に近接して国指定史跡として著名な川尻遺跡も縄文時代中期から後期にかけての集落がある。これら３遺跡が時期的に重複しており、かなり密接な関係が考えられるため、個々の遺跡のみならず総合的な視点から遺跡群として捉えていく必要がある。

2　測定対象資料と炭化物の状態

縄紋時代中期の集落である川尻遺跡群中村遺跡（試料略号SOKN）・原東遺跡（試料略号SOHE）出土の炭化材及び土器付着物の炭素年代を求めた。炭化材については、竪穴住居の炉または埋設土器内出土炭化材・炭化物のについて測定した。遺存状況の良い試料は、顕微鏡観察した。試料については以下の通りである。土器の編年的位置づけについては、縄文中期集落研究の新地平で設定された多摩・武蔵野の中期土器編年（いわゆる新地平編年）（黒尾・小林・中山1995）に対比させる。炭化材の樹種同定においては、林昭三氏の顕微鏡写真集を参照した（林1991）。測定試料の出土住居及び土器を、第１図～第４図に示す。

SOKN 230　川尻中村遺跡13号住居の埋甕である埋設土器（報告書313図２）内出土の炭化材。13号住居は、２・12・25号住居に切られている。土器は、勝坂２式土器（新地平７ｂ期）である。試料の炭化材は、環孔材で、広葉樹である。

SOKN 323-A・B　川尻中村遺跡53号住居炉体土器（報告書355図１）内出土の炭化種実である。53号住居は、62・67・81・82号住居に切られる。53号住居は、炉がａｂ２基認められ、そのうちの新しい炉と考えられる炉ｂに埋設されていた土器である。土器は、勝坂２式土器（新地平７ｂ期）である。試料は、クルミ果実と思われる。

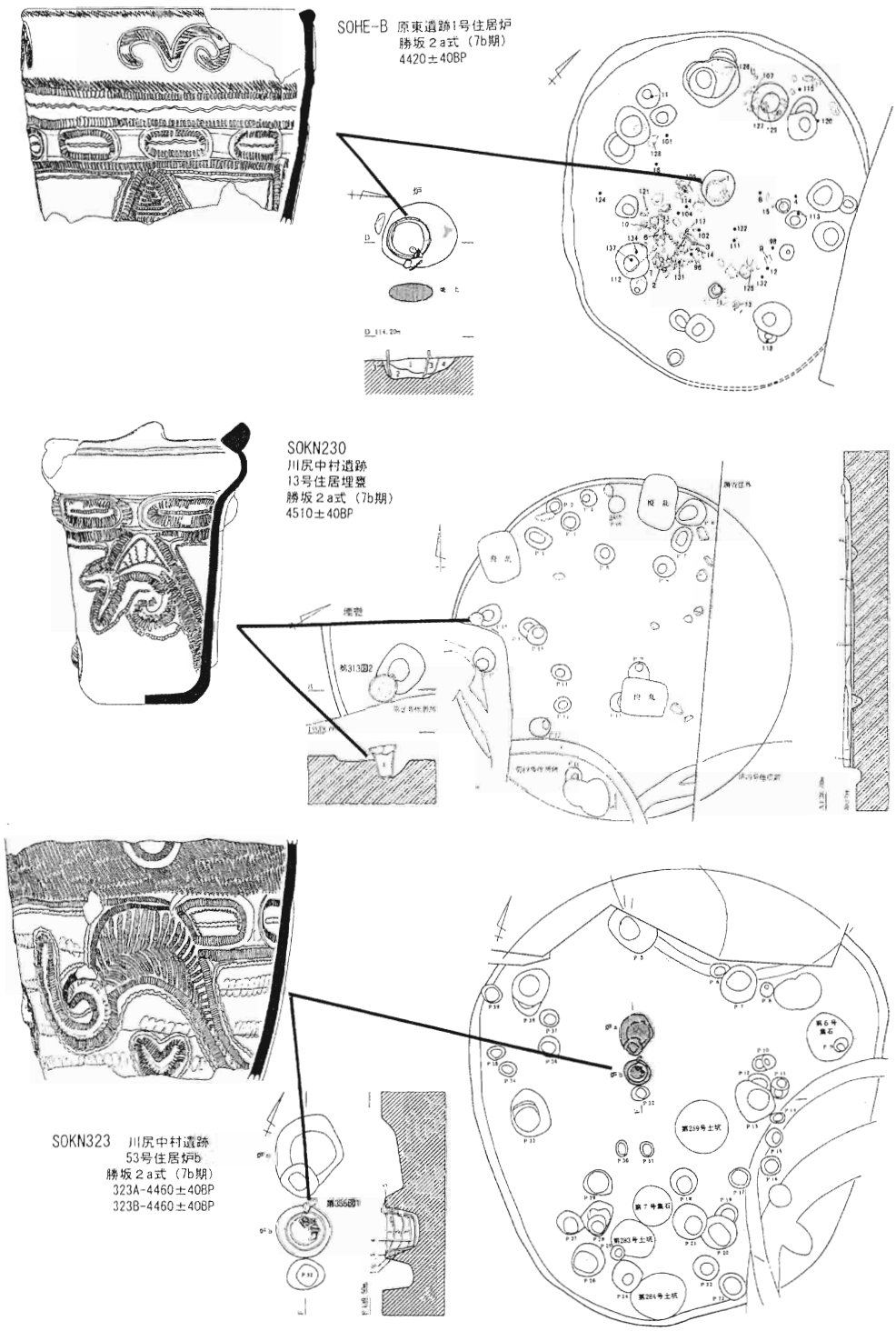
SOKN 116　川尻中村遺跡19号住居１号埋甕（報告書325図１）内出土の炭化材である。19号住居は、激しく重複されている住居跡で、24・25号住居を切り、４・15・22号住居に切られている。土器は、加曽利Ｅ１式（新地平10ｃ期）である。

SOKN 201　川尻中村遺跡44号住居床面下埋設土器（報告書344図１）内出土炭化材である。44号住居は、59号住居を切り、42・43号住居に切られている。土器は、曽利Ⅱ式（新地平10ｃ期）の大型深鉢である。試料の炭化材は、環孔材で、放射状の導管配列が観察される。クリ材の可能性がある。

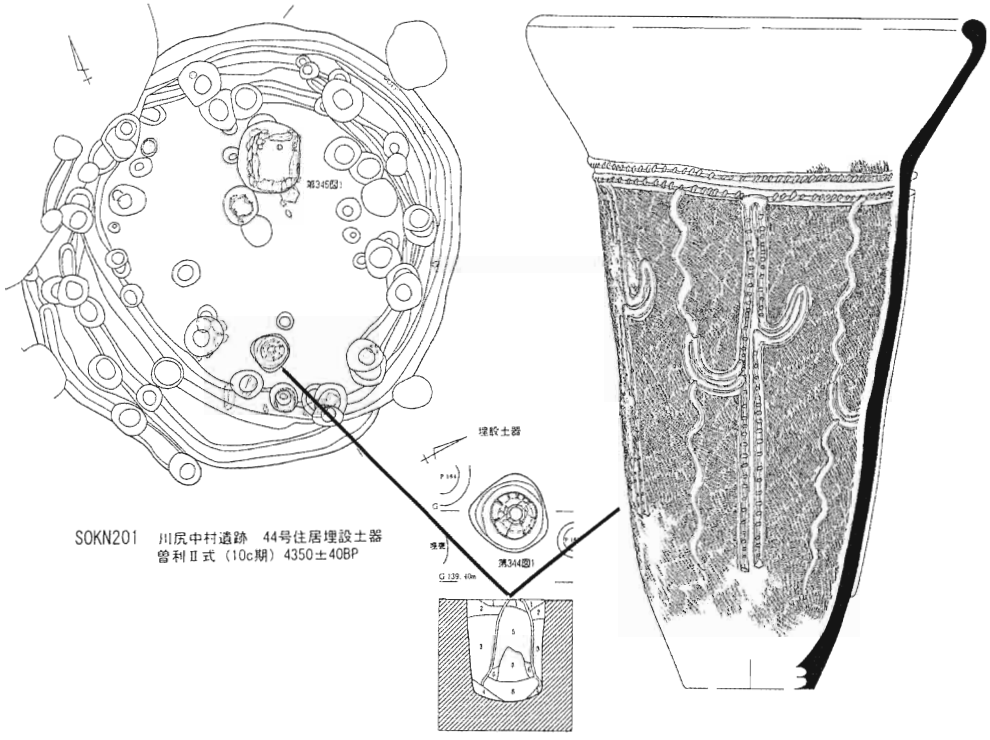
SOKN 200-A・B　川尻中村遺跡81号住居炉体土器（報告書386図１）内出土の炭化材である。81号住居は、53号住居を切っている。土器は、曽利Ⅲ式期のＸ字状把手付大型甕（新地平11ｃ期）である。81号住居には、別に重弧文系の系譜である口縁部平行沈線充填の曽利Ⅲ式古段階土器（新地平11ｃ期相当）が出土している。SOKN200-Ａは炉覆土上層、Ｂは炉覆土下層出土の炭化材である。樹種は不明であるが、散孔材の可能性がある。

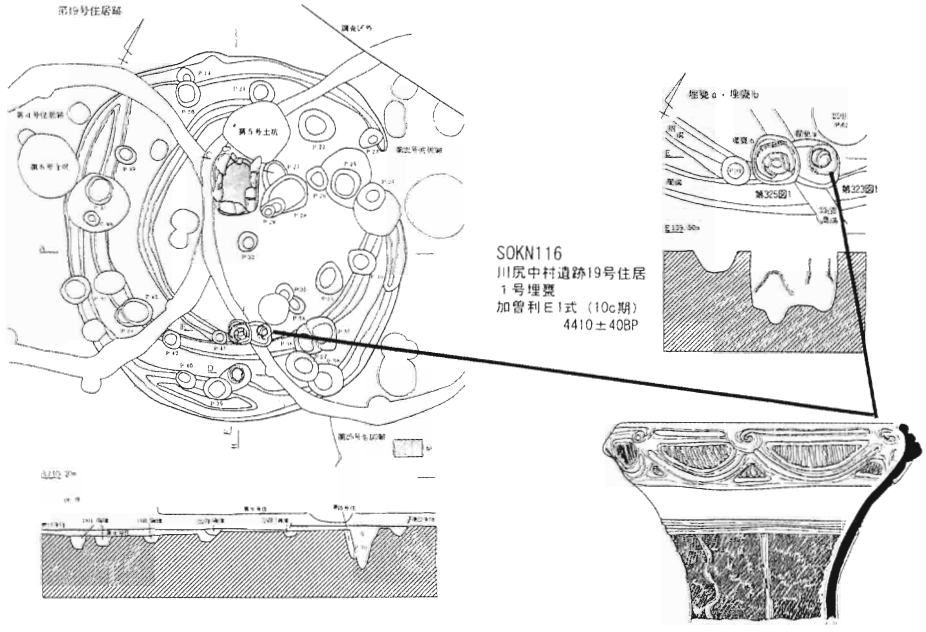
SOKN 173　川尻中村遺跡26号住居埋甕（報告書328図１）内出土炭化材である。26号住居は、３・33号住居に切られている。土器は、胴下部のみであるが、磨消縄文の柱状区画の土器であり、加曽利Ｅ３式土器である。区画内に弱く縄文がすり残されており、加曽利Ｅ３式古段階（新地平12ａ期）と捉えておきたい。26号住居は33号住居に切られている。

SOKN 13　川尻中村遺跡７号住居覆土中出土土器（報告書308図７）の内面に遺存していた生漆と思われる漆膜である。土器は、内部に生漆が付着しており、パレットのように使用した漆

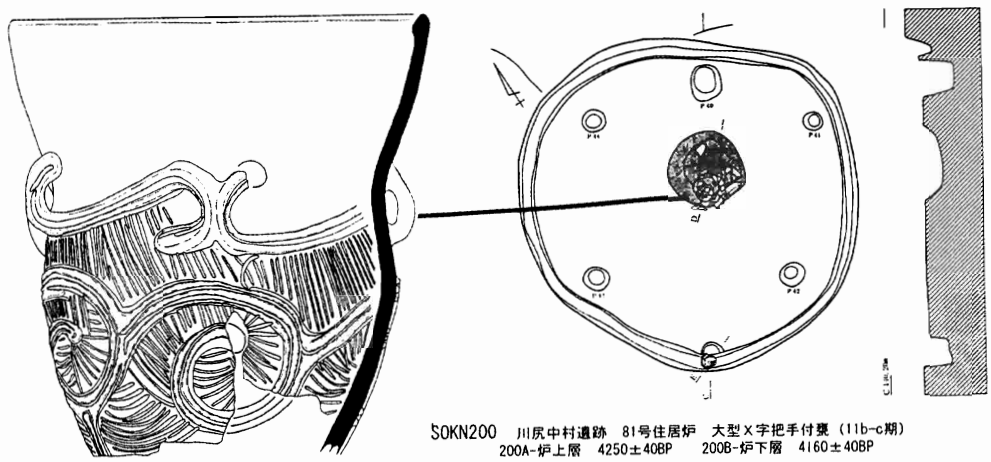


第１図　川尻中村遺跡・原東遺跡の年代測定土器（住居１/120・炉など微細１/60・土器１/８）





第２図　川尻中村遺跡・原東遺跡の年代測定土器（住居１/120・炉など微細１/60・土器１/８）



第３図　川尻中村遺跡・原東遺跡の年代測定土器（住居１/120・炉など微細１/60・土器１/８）

容器であり、加曽利Ｅ３式（新地平12ａ期）の胴下部と考えられる。７号住居は、埋甕ｂのみは勝坂式土器であるが、他の埋甕ａ・ｃ、炉ｃの炉体土器、床面上の伏甕と考えられる土器は、加曽利Ｅ後葉期の土器であり、他の覆土中出土土器も加曽利Ｅ３式で新地平12ａ期相当の土器と捉え得る。

SOKN 160　川尻中村遺跡７号住居覆土中出土土器（SOKN13）内出土炭化材である。試料は、環孔材であり、広葉樹である。試料の炭素量が少なく、測定を保留した。

SOKN 318　川尻中村遺跡71号住居埋甕（報告書378図１）内出土炭化材である。土器は、加曽利Ｅ２式（新地平11ａ期）である。試料の炭素量が少なく、測定を保留した。

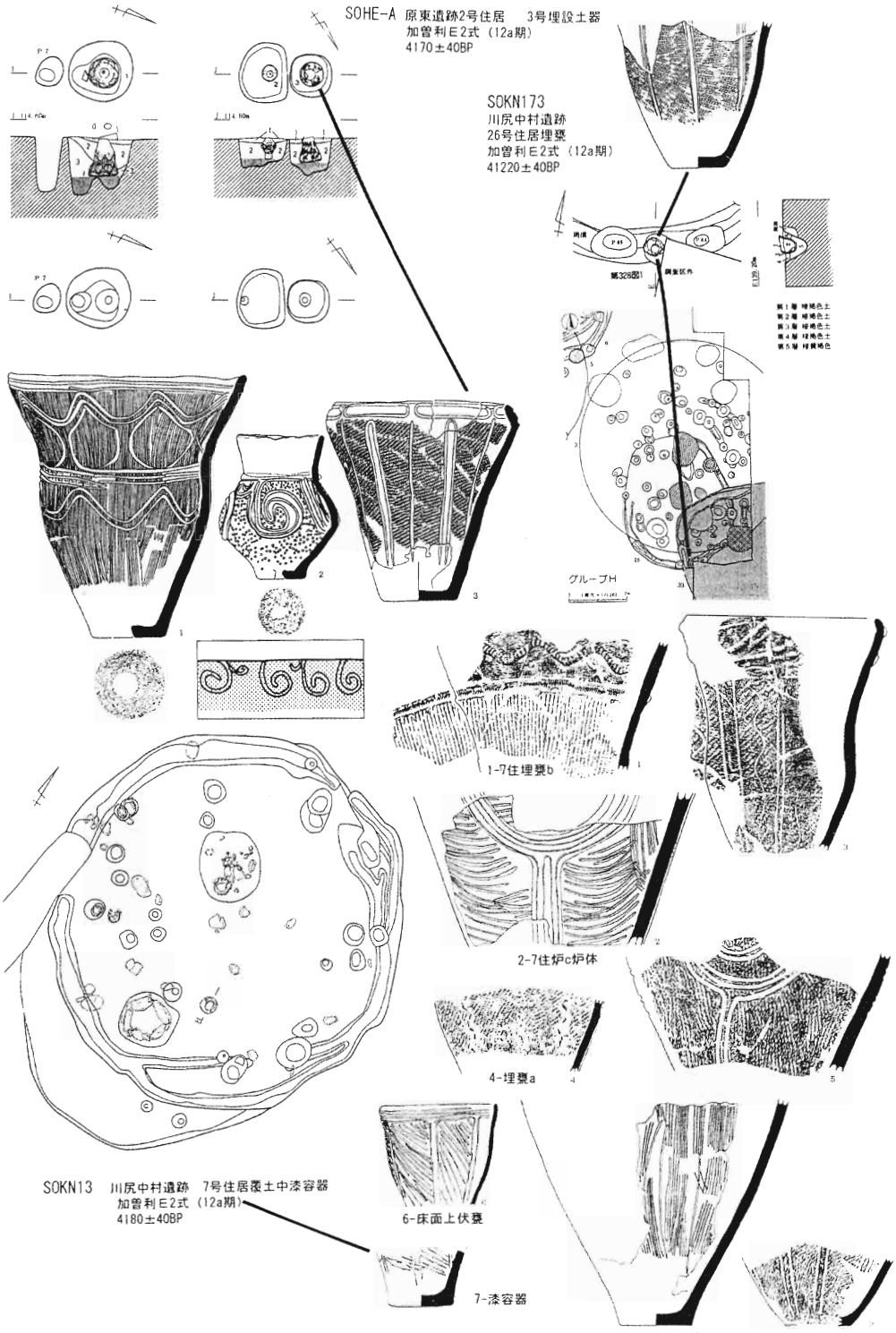
SOKN 52　川尻中村遺跡31号土坑埋甕（報告書402図１）内下層出土炭化材である。土器は、曽利Ⅲ式（新地平12ｂ期）である。試料の炭素量が少なく、測定を保留した。

SOHE-A　原東遺跡２号住居３号埋甕（報告書40図３）内出土の炭化材。環孔材であり、放射状の導管配列が観察される。コナラ属またはクリ材の可能性がある。埋甕は、加曽利Ｅ３式(新地平12ａ期）の完形土器である。

SOHE-B　原東遺跡１号住居炉体土器（報告書24図１）内出土の炭化種子。土器は、勝坂２式土器（新地平７ｂ期）である。試料は、長さ４㎜ほどの種子果実である。

3　炭化物の処理

試料については、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は今村・小林が、(2)の作業以下は、地球科学研究所を通じベータアナリティック社へ依頼し、炭酸ガス化と精製、グラファイト化およびＡＭＳによる炭素14測定を行った。



第４図　川尻中村遺跡・原東遺跡の年代測定土器（住居１/120・炉など微細１/60・土器１/８）

⑴前処理：有機溶媒による油脂成分等の除去、酸・アルカリ・酸による化学洗浄（ＡＡＡ処理）。
⑵二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化）、精製して不純物を除去。
⑶グラファイト化：（またはコバルト）鉄触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。
（前処理）

まずアセトンに浸け超音波槽で５分間、さらに振とう器で１時間処理し、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した。次いでＡＡＡ処理として、80℃各１時間で、希塩酸(1N-HCl) で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（１回）し、さらにアルカリ（1 N-NaOH）でフミン酸等を除去する。今回は、SOHE-A・B、SOKN 173・201・233-A・Bは４回、それ以外は３回処理を行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。つづいて、酸処理を１回行い中和後、水により洗浄した（２回）。今回、土器付着の漆試料は量が少なく、採取した全量を前処理した。炭化材では、それぞれ半分程度を前処理し、おおむね４～３割弱程度の量が回収されている。例えば、比較的回収量の少なかったSOHE-Bは、111㎎の試料を前処理して、28.0㎎を回収した。SOKN 160・318・52は、回収された量が少なく、今回は測定しなかった。

4　測定結果と暦年の較正

ＡＭＳによる炭素14測定は、ベータアナリティック社へ委託して行った。Beta-の番号はベータアナリティック社の測定機関番号である。

年代データの^{14}CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した炭素14年代（モデル年代）であることを示す（BPまたはyr BPと記すことも多いが、本稿ではBPとする）。^{14}Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（１標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C同位体比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料炭素の同位体効果を測定し補正する必要がある。最近は、AMS測定で^{13}C/^{12}C比を同時に測定し補正する。同位体効果を補正した^{14}C/^{12}C比から、表に示した炭素14年代値（モデル年代）が得られる（英語ではConventionalと表記される）。また、別個に炭素13用ガス試料を用いて質量分析計によりδ^{13}C値を測定し試料の特性の指標とすることが多い。通常、標準（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの炭素13/12比）からの偏差値δ^{13}C（パーミル，‰）で示される。

測定値を較正曲線INTCAL98（暦年代と炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版）と比較することによって実年代（暦年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦

年較正プログラムは、OxCal Program に準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は２標準偏差に相当する、95% 信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BC で示す。（　）内は推定確率である。

番号			炭素年代	測定値
試料№	測定機関番号	$\delta^{13}C$	^{14}CBP	暦年較正cal BC
川尻中村遺跡（SOKN）				
230	Beta-154799	−25.5‰	4510±40	3350-3080(94.3%),3050-3040(1.2%)
323A	Beta-154797	−25.2‰	4460±40	3340-3140(55.9%), 3140-3010(35.9%), 2970-2960(1.6%), 2940-2930(1.6%)
323B	Beta-154798	−28.4‰	4430±40	3320-3210(23.7%), 3180-3150(4.2%), 3120-2910(67.4%)
116	Beta-154804	26.2‰	4410±40	3320-3210(0.4%), 3310-3230(10.7%), 3170-3160(1.3%), 3110-3100(1.7%), 3100-2910(80.6%)
201	Beta-154800	28.9‰	4350±40	3080-3060(6.4%), 3030-2880(88.4%)
200A	Beta-154801	25.9‰	4250±40	2920-2850(54.0%), 2810-2730(31.5%), 2730-2690(8.9%)
200B	Beta-154802	26.5‰	4160±40	2870-2650(85.8%), 2650-2620(8.0%), 2600-2600(1.1%)
173	Beta-154803	28.0‰	4220±40	2900-2840(28.4%), 2810-2670(65.2%), 2640-2640(0.6%)
13	Beta-154806	26.1‰	4180±40	2880-2830(18.8%), 2820-2650(71.0%) 2650-2620(5.7%)
原東遺跡（SOHE）				
A	Beta-154807	26.2‰	4170±40	2880-2820(20.2%), 2820-2650(68.2%), 2650-2620(6.8%)
B	Beta-154808	26.8‰	4420±40	3320-3220(17.7%), 3170-3150(2.4%), 3110-2910(75.3%)

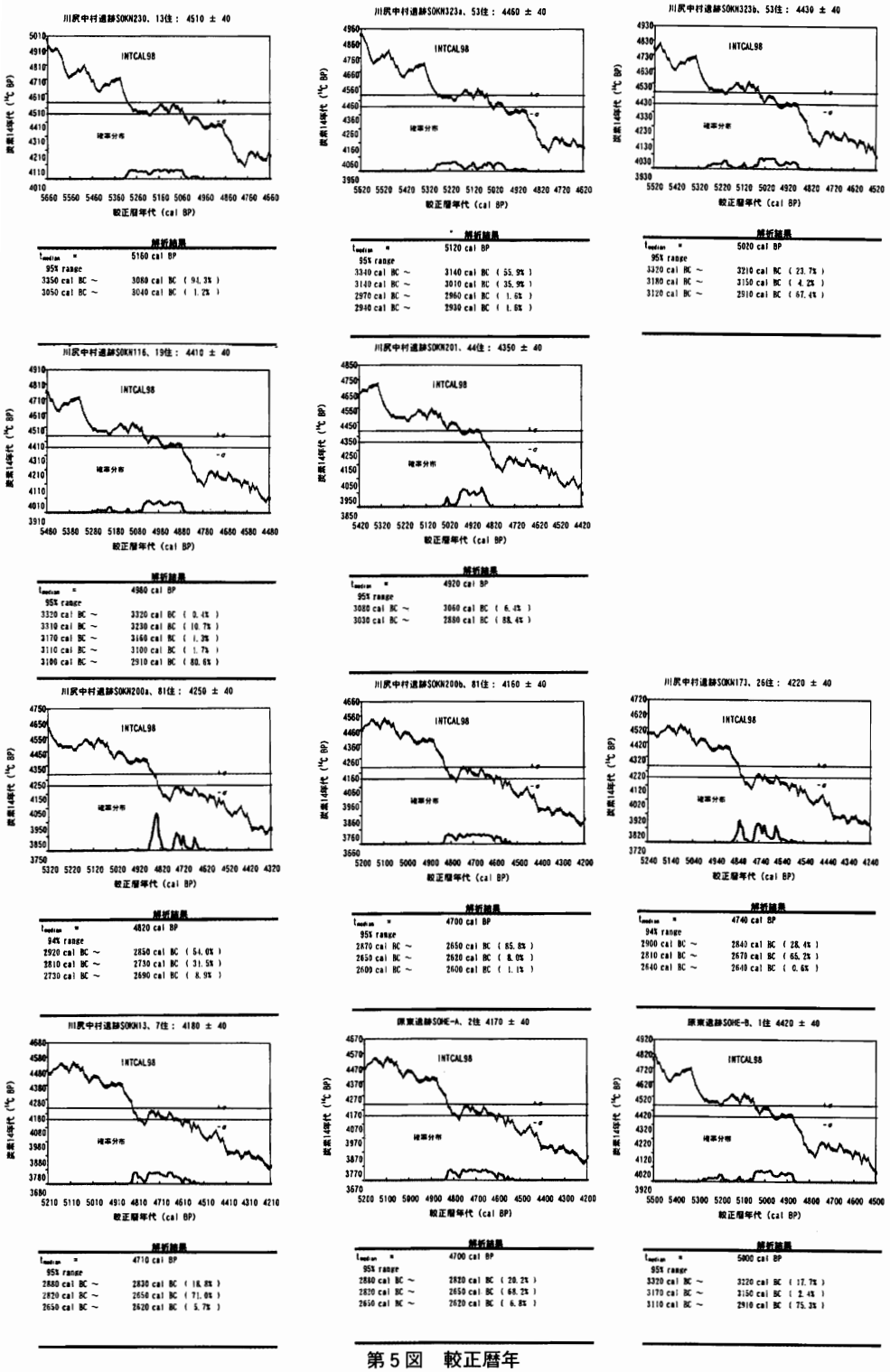
〈結果〉

今回測定した試料を、土器編年と対応させて検討する。

勝坂２式期に属する試料は、SOHE-B、SOKN 230、323 である。これらの試料が包含されていた土器は、いずれも勝坂２式の抽象文系土器であり、かながわ考古学財団の「勝坂式土器文化期の様相」（かながわ考古学財団1999）では、第Ⅲ期Ｅ群（抽象文系）土器とされるもので、多摩・武蔵野編年に照らすと、前述の通り新地平編年７ｂ期に相当すると考えられ、ほぼ同一の時期に属すると評価される。このうち、SOKN 323 の試料では、２つの炭化種子の測定を行っており、この AB の測定は、同一の時期に廃棄された植物遺体と考えられる。AB の較正暦年代の重なる暦年のうち、10%未満の確率である暦年を除くと3320-3210cal BC、3120-3010cal BC が、相当する可能性が確率的に高い。このうち、後者の暦年は、筆者らによるこれまでの測定結果からみると SFC 遺跡Ⅰ区集落など勝坂３式期の年代が相当する（小林・今村・西本・坂本2002）。この試料が属する勝坂２式土器に近いと考えられる立川市向郷遺跡20次調査１号土坑の測定年代（小林・今村2002）などを考えると、前者の3320-3210cal BCの暦年が相当する可能

第1表　川尻中村遺跡・原東遺跡測定資料一覧

略号	試料No	測定機関番号	図	遺構							δ13C/12C	炭素年代 BP	較正暦年 cal BC								
川尻中村遺跡																					
SOKN	230	Beta154799	313図2	J13住	埋甕		埋甕内	炭化材	勝坂2	新地平7b期	25.5‰	4510 ±40	3350-3080	94.3%	3050-3040	1.2%					
SOKN	323A	Beta154797	355図1	J53住	炉b内		炉覆土	クルミ子実	勝坂2新	新地平7b期	25.2‰	4460 ±40	3340-3140	55.9%	3140-3010	35.9%	2970-2960	1.6%	2940-2930	1.6%	
SOKN	323B	Beta154798	355図1	J53住	炉b内		炉覆土	クルミ子実	勝坂2新	新地平7b期	28.4‰	4430 ±40	3320-3210	23.7%	3180-3150	4.2%	3120-2910	67.4%			
SOKN	116	Beta154804	325図1	J19住	1号埋甕		埋甕内	炭化材	加曽利E1新	新地平10c期	26.2‰	4410 ±40	3320-3320	0.4%	3310-3230	10.7%	3170-3160	1.3%	3110-3100	1.7%	3100-2910 80.6%
SOKN	201	Beta154800	344図1	J44住	埋設土器		埋甕内	炭化材	曽利Ⅱ	新地平10c期	28.9‰	4350 ±40	3080-3060	6.4%	3030-2880	88.4%					
SOKN	200A	Beta154801	386図1	J81住	炉内	上層	炉覆土	炭化材	x字把手甕	新地平11c期	25.9‰	4250 ±40	2920-2850	54.0%	2810-2730	31.5%	2730-2690	8.9%			
SOKN	200B	Beta154802	386図1	J81住	炉内	中層	炉覆土	炭化材	x字把手甕	新地平11c期	26.5‰	4160 ±40	2870-2650	85.8%	2650-2620	8.0%	2600-2600	1.1%			
SOKN	173	Beta154803	328図1	J26住	埋甕		埋甕内	炭化材	加曽利E3	新地平12a期	28.0‰	4220 ±40	2900-2840	28.4%	2810-2670	65.2%	2640-2640	0.6%			
SOKN	13	Beta154806	308図7	J7住	漆容器	覆土	土器内面	生漆	曽利3b	新地平12a期	26.1‰	4180 ±40	2880-2830	18.8%	2820-2650	71.0%	2650-2620	5.7%			
SOKN	160		308図7	J7住	漆容器	覆土	土器包含	炭化材	曽利3b	新地平12a期											
SOKN	318		378図1	J71住	埋甕		埋甕内	炭化材	加曽利E2	新地平11a期											
SOKN	52		402図1	31土坑	埋甕	下層	埋甕内	炭化材	曽利3	新地平12b期											
SOHE	A	Beta154807	40図3	J2住	3号埋甕		埋甕内	炭化材	加曽利E3	新地平12a期	26.6‰	4170 ±40	2880-2820	20.2%	2820-2650	68.2%	2650-2620	6.8%			
SOHE	B	Beta154808	24図1	J1住	炉体		炉体覆土	種子	勝坂2	新地平7b期	26.8‰	4420 ±40	3320-3220	17.7%	3170-3150	2.4%	3110-2910	75.3%			


川尻中村遺跡SOKN230、13住： 4510 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 5160 cal BP
95% range
3350 cal BC ～ 3080 cal BC (94.3%)
3050 cal BC ～ 3040 cal BC (1.2%)
川尻中村遺跡SOKN323a、53住： 4460 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 5120 cal BP
95% range
3340 cal BC ～ 3140 cal BC (55.9%)
3140 cal BC ～ 3010 cal BC (35.9%)
2970 cal BC ～ 2960 cal BC (1.6%)
2940 cal BC ～ 2930 cal BC (1.6%)
川尻中村遺跡SOKN323b、53住： 4430 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 5020 cal BP
95% range
3320 cal BC ～ 3210 cal BC (23.7%)
3180 cal BC ～ 3150 cal BC (4.2%)
3120 cal BC ～ 2910 cal BC (67.4%)
川尻中村遺跡SOKN116、19住： 4410 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 4960 cal BP
95% range
3320 cal BC ～ 3320 cal BC (0.4%)
3310 cal BC ～ 3230 cal BC (10.7%)
3170 cal BC ～ 3160 cal BC (1.3%)
3110 cal BC ～ 3100 cal BC (1.7%)
3100 cal BC ～ 2910 cal BC (80.6%)
川尻中村遺跡SOKN201、44住： 4350 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 4920 cal BP
95% range
3080 cal BC ～ 3060 cal BC (6.4%)
3030 cal BC ～ 2880 cal BC (88.4%)
川尻中村遺跡SOKN200a、81住： 4250 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 4820 cal BP
94% range
2920 cal BC ～ 2850 cal BC (54.0%)
2810 cal BC ～ 2730 cal BC (31.5%)
2730 cal BC ～ 2690 cal BC (8.9%)
川尻中村遺跡SOKN200b、81住： 4160 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 4700 cal BP
95% range
2870 cal BC ～ 2650 cal BC (85.8%)
2650 cal BC ～ 2620 cal BC (8.0%)
2600 cal BC ～ 2600 cal BC (1.1%)
川尻中村遺跡SOKN173、26住： 4220 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 4740 cal BP
94% range
2900 cal BC ～ 2840 cal BC (28.4%)
2810 cal BC ～ 2670 cal BC (65.2%)
2640 cal BC ～ 2640 cal BC (0.6%)
川尻中村遺跡SOKN13、7住： 4180 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 4710 cal BP
95% range
2880 cal BC ～ 2830 cal BC (16.8%)
2820 cal BC ～ 2650 cal BC (71.0%)
2650 cal BC ～ 2620 cal BC (5.7%)
原東遺跡SOHE-A、2住 4170 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 4700 cal BP
95% range
2880 cal BC ～ 2830 cal BC (20.2%)
2820 cal BC ～ 2650 cal BC (68.2%)
2650 cal BC ～ 2620 cal BC (6.8%)
原東遺跡SOHE-B、1住 4420 ± 40
INTCAL98
確率分布
較正暦年代（cal BP）
解析結果
median = 5000 cal BP
95% range
3320 cal BC ～ 3220 cal BC (17.7%)
3170 cal BC ～ 3150 cal BC (2.4%)
3110 cal BC ～ 2910 cal BC (75.3%)

第５図　較正暦年

性が高い。同様に、川尻遺跡群での他の事例を見ると、SOHE-Bの較正暦年では3320-3220cal BC、SOKN 230 の較正暦年では 3350-3080 cal BC の暦年が相当する可能性が高いと考える。

加曽利Ｅ１式期は、SOKN116、201が対比される。SOKN201が包含されていた土器は、縄紋地文の上に隆線が貼り付けられており、曽利Ⅱ式の古段階と捉えられる（山形1989）。SOKN 116は、胴部文様帯は縄紋地に隆線が垂下し、加曽利Ｅ１式新段階である（黒尾1995）。両者とも、新地平編年10ｃ期に相当する土器内部の包含炭化物である。SOKN 116 は 3100-2910 cal BC、SOKN 201 は 3030-2880 cal BC がそれぞれ最も確率的に高く、両者の暦年はおおむね重なっている。類例の測定として、町田市三矢田遺跡10号住居炉体土器付着物など、いくつかの測定を重ねている（測定結果の報告は現在作成中）が、それらの結果ともよく合致している。

加曽利Ｅ２式期は、SOKN 200 が包含されていた土器が対比される。新地平編年11ｃ期に相当すると考えられる炉体土器内部出土炭化物を２点測定した。炉内上層出土の SOKN200A は 2920-2850 が54.0%の確率、2810-2730 cal BC が31.5%の確率で、炉内下層出土のSOKN200B は 2870-2650 cal BC に８割以上の確率である。この両者は、同一の時期に帰属すると考えられ、81号住居の炉が使用された時期は、両者の重なる暦年代である 2870－2850 cal BC か 2810-2730 cal BC に含まれる可能性が高いと考える。同様の時期の測定としては、連弧文系土器を炉体土器にしていた慶応義塾湘南藤沢キャンパス内（SFC）遺跡Ｉ区の消失住居である第６号住居跡の炭化材（4230±40BP）及び炉壁土器付着炭化物（4170±40BP）の測定値と比べても、非常に整合的である。これらを含めて考えると、2810 cal BC よりも新しい時期である確率の方が、いずれの試料でも高い。また、2800 cal BC より古い段階は、他の測定例を勘案すると加曽利Ｅ２式前半（新地平 11a-b 期）に属する可能性が高い（小林・今村・西本・坂本2002）。よって、SOKN 200 が出土した、加曽利Ｅ２式後半段階である81号住居の炉が使用された暦年代は、2810-2730 cal BC に含まれると捉えておきたい。

加曽利Ｅ３式期は、SOHE-A、SOKN 173、13 を包含・付着していた土器があたり、新地平編年12ａ期に相当する土器に関連する試料である。３つの試料の暦年較正の結果の確率分布はよく似た年代を示しており、2820-2670 cal BC 前後の年代に、３試料とも６割以上の確率で含まれている。加曽利Ｅ３式については、東京都大橋遺跡で多数の測定結果を得ており、それからみると大橋集落の古い段階である新地平12ａ期は、おおよそ 2760-2720 cal BC 頃と考えている（小林・今村・西本・坂本2002）。川尻中村・原東遺跡の測定結果もよく合致している。

以上の年代比定のうち、これまで行ってきた筆者らの他遺跡での測定例（小林他2002）を加味した上で、土器型式から見て連続する加曽利Ｅ１式（の後葉）・２式（中葉）・３式（前葉）の年代をつなげてみると、加曽利Ｅ１式後葉は 2880cal BC を含む年代である可能性が高く、次に加曽利Ｅ２式中葉は 2810 cal BC 前後の暦年、加曽利Ｅ３式の当初段階である新地平12ａ期は 2800-2700 cal BC に含まれる可能性が高いと考える。

以上のように、勝坂２式期および、加曽利Ｅ１～３式期の竪穴住居の実年代把握に、有効な

データを得ることができた。筆者らが行っている、SFC遺跡、大橋遺跡などの他遺跡の年代測定結果と合わせて検討することで、南西関東地方中期集落における、土器型式および集落における実年代の把握にせまることができよう。

この分析は、日本学術振興会科学研究費　平成13年度基盤研究（A・1）（一般）「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」（代表　今村峯雄）の一部を用いている。試料の採取・土器の観察においては、建石徹氏、阿部功嗣氏に多くのご協力とご教示を得た。分析試料のうち、炭化材の樹種同定に当たっては、国立歴史民俗博物館辻誠一郎助教授のラボにおいて観察を行った。漆容器・漆については、国立歴史民俗博物館永嶋正春助教授にご教授を得た。上記の方々・機関と、今回の試料利用の配慮を頂いた（財）かながわ考古学財団に、感謝申し上げます。

参考文献

天野賢一他　2000　原東遺跡「かながわ考古学財団調査報告」79　（財）かながわ考古学財団

天野賢一他　2002　川尻中村遺跡「かながわ考古学財団調査報告」133　（財）かながわ考古学財団

今村峯雄　2000「考古学における14C年代測定－高精度化と信頼性に関する諸問題－」『UP選書　考古学と化学をむすぶ』東京大学出版会

今村峯雄・小林謙一・西本豊弘・坂本稔　2002「AMS^{14}C年代を利用した東日本縄文前期～後期の土器・集落の研究」『日本文化財科学会第19回大会　研究発表要旨集』日本文化財科学会

黒尾和久　1995「縄文中期集落研究の基礎的検討（Ⅰ）－時間軸の設定とその考え方について－」『論集宇津木台』第1集　宇津木台地区考古学研究会

黒尾和久・小林謙一・中山真治　1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『縄文中期集落研究の新地平』　縄文中期集落研究グループ

小林謙一・今村峯雄・西本豊弘・坂本稔　2002「AMS^{14}C年代による縄紋中期土器・集落研究」『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』日本考古学協会　49－52

小林謙一・今村峯雄　2002「3章　分析　1向郷遺跡出土試料の炭素年代測定」『立川市埋蔵文化財調査報告12　向郷遺跡Ⅵ』88－92

かながわ考古学財団縄文時代研究プロジェクトチーム　1999「神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅴ」『研究紀要』4　15－34　（財）かながわ考古学財団

辻誠一郎・中村俊夫　2001「縄文時代の高精度編年：三内丸山遺跡の年代測定」『第四紀研究』Vol. 40 No. 6

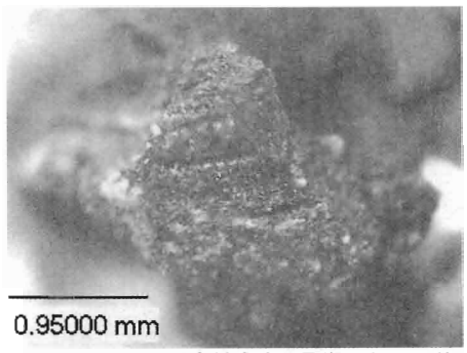
中村俊夫　1999「放射性炭素年代測定法」『考古学のための年代測定学入門』長友恒人　古今書院

林昭三　1991『日本産木材　顕微鏡写真集』　京都大学木質科学研究所

山形真理子　1989「曽利式土器における施文順序の意義」『甲斐の成立と地方的展開』　角川書店

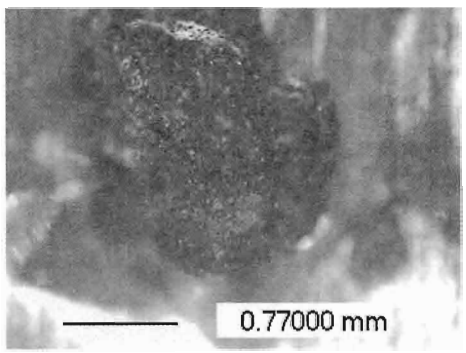
山本直人　2002『加速器質量分析放射性炭素年代測定法による縄文時代集落の存続期間に関する研究　平成11年度～平成13年度科学研究費補助金基盤研究（c）（2）研究成果報告書』

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Back, J. W., Burr, G/S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., Van der Plicht, J. and Spurk, M. 1998 INTCAL 98 Radiocarbon age calibration, 24, 000-0 cal BP. Radiocarbon 40 (3), 1041-1083.

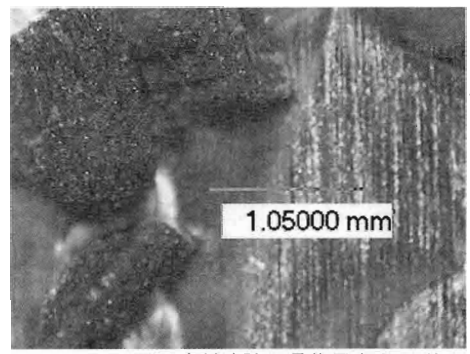


1. SOKN200B 川尻中村遺跡81号住居出土 20倍

2. SOKN200B 川尻中村遺跡81号住居出土 33.6倍



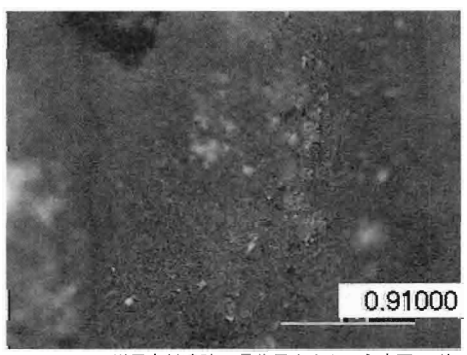
3. SOKN318 川尻中村遺跡71号住居出土 20倍



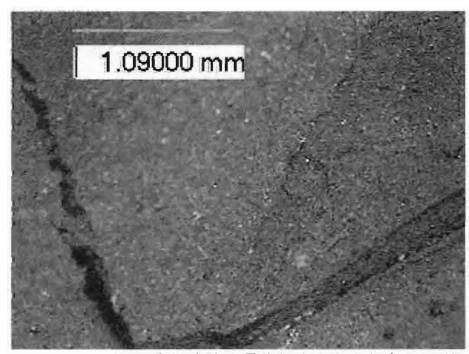
4. SOKN318 川尻中村遺跡71号住居出土 20倍

5. SOKN323 川尻中村遺跡53号住居出土クルミ表面 4倍

6. SOKN323 川尻中村遺跡53号住居出土クルミ裏面 4倍

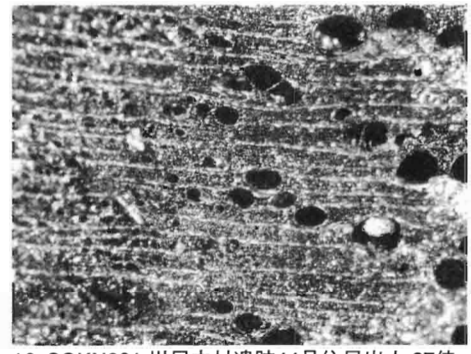


7. SOKN323 川尻中村遺跡53号住居出土クルミ表面 20倍

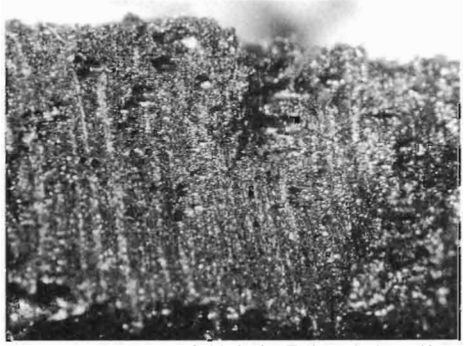


8. SOKN323 川尻中村遺跡53号住居出土クルミ表面 20倍

9. SOKN2230 川尻中村遺跡13号住居出土 18倍

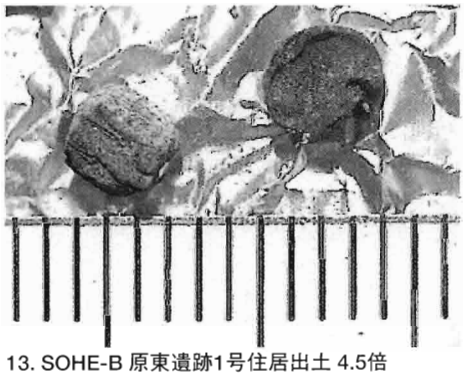


10. SOKN201 川尻中村遺跡44号住居出土 27倍

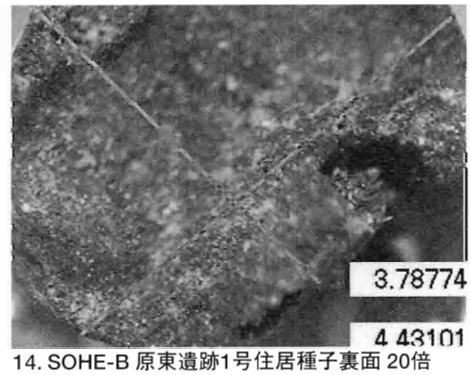


11. SOKN160 川尻中村遺跡7号住居出土 27倍

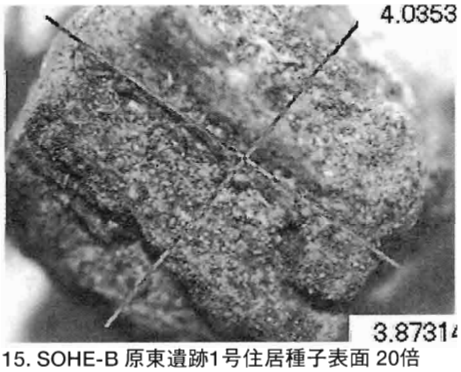
12. SOHE-A 原東遺跡2号住居出土 33.6倍



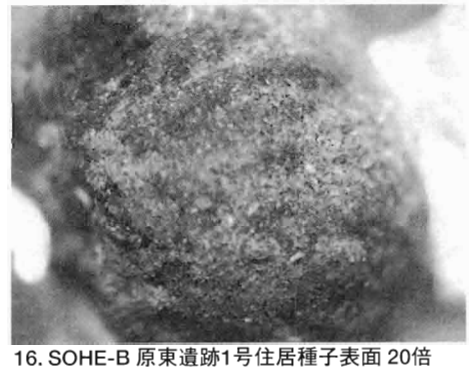
13. SOHE-B 原東遺跡1号住居出土 4.5倍



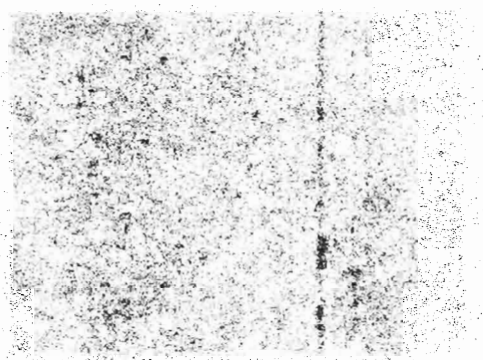
14. SOHE-B 原東遺跡1号住居種子裏面 20倍

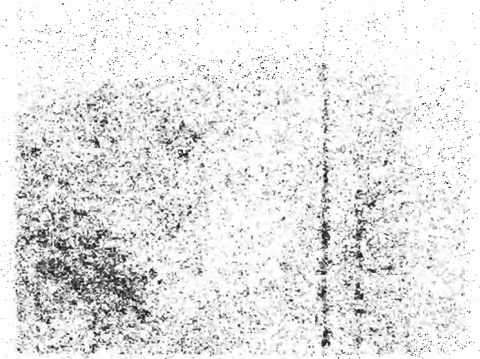


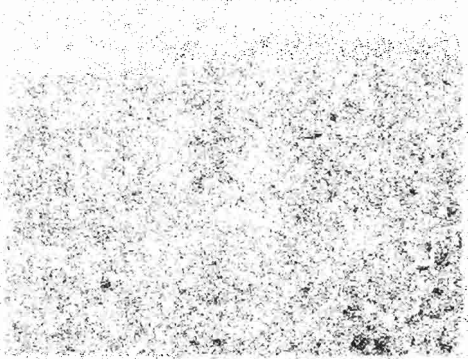
15. SOHE-B 原東遺跡1号住居種子表面 20倍

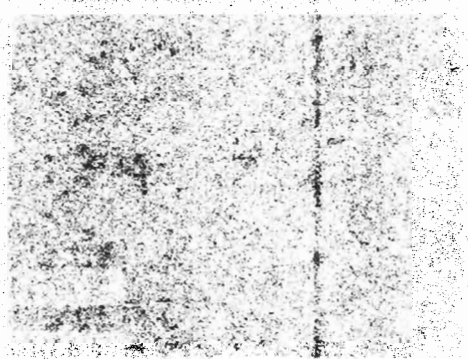


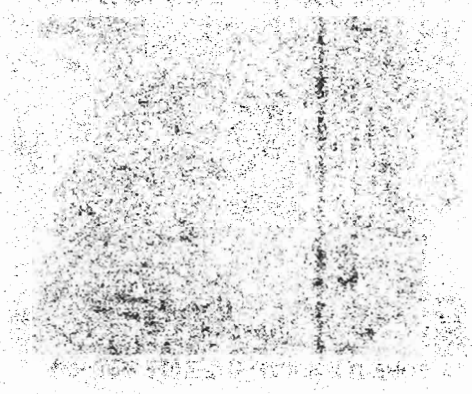
16. SOHE-B 原東遺跡1号住居種子表面 20倍

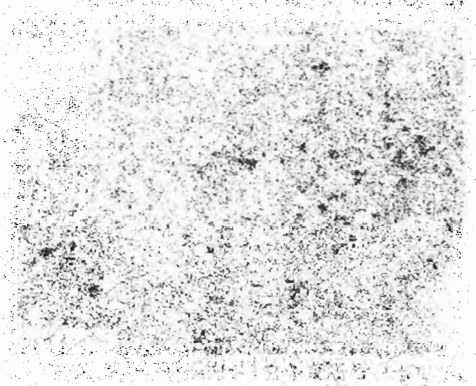












筒形土偶の背景に向けて

－神奈川県の縄文後期前半期土偶の事例から－

高　橋　　毅

1. はじめに
2. 本論の視点
3. 縄文後期前半の神奈川県の様相
4. 筒形土偶からの問題提起
5. おわりに

1. はじめに

土偶から縄文人をどのように理解できるだろうか。縄文時代の様々な時代や地域において土偶はどのような役割を果たしていたのかという問題である。土偶は形態から容易に機能や用途を推測できないこと、使用状態を直接復元できるような出土状態や使用痕のようなものが乏しいこと、そのような土偶を必要とした精神的側面に関わる問題にアプローチするための理論や方法論も成熟してないことなどのいくつもの問題を含んでいることが指摘されている（藤本1983、小林1997、渡辺2001）。同様な問題を持つものとして、土偶を含む第２の道具（小林1996）や記念物（小林編1995）などの施設がある。

筆者はそうした資料から当時の人々の生活を説明するための理論や方法について考え、考古学的な分析を基本にして当時の集団や社会、精神的側面にどこまで迫ることができるかという問題を研究している（註１）。現在は資料集成、属性の観察とデータ化を進めている一方で、遺物と遺構を関連付ける視点や製作技術と集団と社会の関係、精神的側面と物質的要素の関係について検討している。そこで今回は神奈川県の縄文時代後期前半（主に堀之内式期）の土偶からいくつかの問題を考えてみたい。

2. 本論の視点

神奈川県の後期前半の土偶を扱う理由はこれまで神奈川県の縄文後期遺跡の整理作業に携わる機会があったこと、縄文後期の土偶研究が資料集成や基礎的な研究の部分で一定の効果をあげていることにある（註２）。それらの成果に基づき関東地方を中心に後期土偶の展開について簡単にまとめると以下のようになる。

①縄文時代中期末から後期初頭における土偶は関東地方からほとんど発見されておらず、わずかに東北地方のものと類似した土偶が北関東に出現する程度である（註３）。そして後期前半以

降徐々に土偶の出土量は増加する。分布は西日本にも広がる。
②関東の後期前半の土偶は主に三つの形態がある。それらは手足や胴部の形態の違いによって識別される。各形態の分布や系統、出土数には違いが見られる。関東全域に分布するが、中心となる地域がやや異なる。

以上のような後期前半の土偶の展開について考えていくために、基礎データの整理とその過程で気付いた問題について検討を行う。まず後期前半の神奈川県内の土偶を形態から二つに区別する。これは土偶の残存状態が必ずしも三形態の違いを指摘できるほどに良好なものではないということにより、今回はそのような破片の資料も対象にしているためである。次に土偶出土遺跡を集成して、遺跡分布や土偶の出土量を示す。さらに二形態の分布や出土量の比較を行う。そして、二形態のうち筒形土偶の型式学的な編年研究や、横浜市原出口遺跡20号住居址の事例を通じて神奈川県における筒形土偶の展開について検討する。

尚、本論での時間的枠組みは全般的に『縄文土器大観』(小林1989)に準拠するが、土器の細別や土偶の編年については適宜参照する文献を述べたうえでそれらも用いる。

(1) 土偶の形態

後期前半の土偶は主に三つの異なる形態がある。一つは筒形、二つめはヒト形、三つめは板状の土偶である。本論では後期前半期土偶の三形態を、筒形(図1－8～16)とヒト形（図1－1～7）の二形態に区別して県内の集成を行った。二つの形態は手足の有無や胴部の形状に大きな違いがある。以下形態的な特徴を記す。

筒形土偶は胴部の上方がやや細くなった円筒の形をしている。胴部の中身は空洞で粘土が詰まっていない。さらに手足の表現がなく平らな底部によって自立する様子は筒状を呈する。そして胴部の上に顔面部を乗せるが、定形的な筒形土偶は顔面部がやや傾斜し、蓋のように中空の胴体の上に直に張り付いている。筒形の名称は、そのような作りを持つ土偶に対して「容器形土偶」と区別するために名づけられた（神林1943）（註4）。

ヒト形は首や手足の表現がある土偶である。そのうち胴部が細身でどっしりと安定した下半身によって自立するものがあり、首は上方または斜め前に突き出て特徴ある顔面を支持する。この形態に対しては「ハート形土偶」の名称で用いられている。ハート形土偶は群馬県郷原遺跡出土の土偶（山崎義男1954）の顔面部を野口義麿氏が「ハート形」と称したのがこの名称の由来といわれている（植木1990)。

他には板状の胴部に手足や手のみが付く土偶がある（山崎和己1995)。筒形やヒト形が立体であることに対して板状は二次元的な表現の特徴がある。筒形やハート形に比べると事例は少なく、具体的なまとまりの把握にはまだ至っていない。板状の土偶は事例の少なさやその位置づけの問題を考慮してヒト形として扱う。

本論ではこのようにハート形土偶や板状の土偶に対して、胴部の作りや手足の有無を区別す

ヒト形：1～7　（　）内の数字は図2遺跡番号に対応

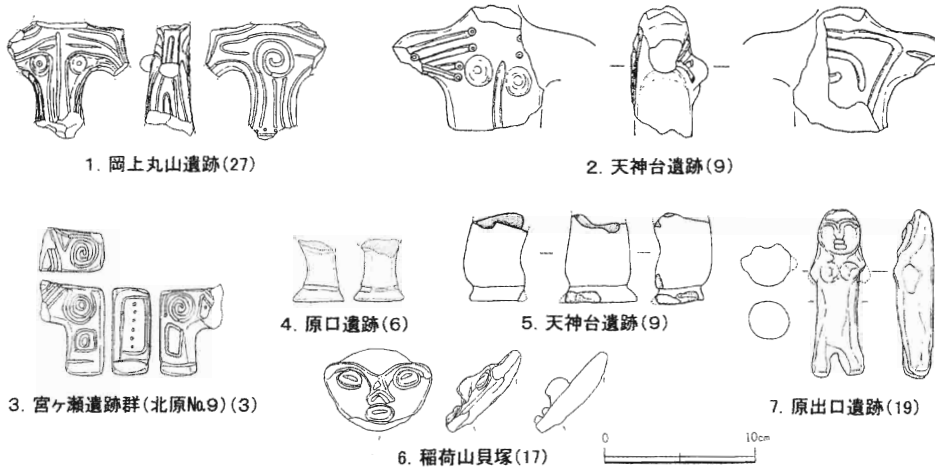


図1　筒形とヒト形

る立場から総称してヒト形を用いる。また破片資料という制約によって板状の土偶との識別が困難なことから板状の土偶もここに含めて扱いたい。よってヒト形の胴部形状はやや多様となる。

（2）土偶の形態に対する立場

土偶に見る手足の有無や胴部の形状の違いは何を意味するのだろうか。これまでに手足や胴部形状の違いについては「立像形」と「省略形」というようなデザインの違いとする見方や（能登・永峯1977）、文化や心性を異にする集団の違いが反映されているという見方がある（磯前1985・植木1990）。磯前順一氏は筒形土偶とハート形土偶の分布や発見数、形態や文様の多岐にわたる検討から、両者の背景に何らかの集団の違いを想定している（磯前1985）。植木　弘氏も「筒形」や「ハート形」などに区別される土偶の形態を「外面形式」として集団の心性の違いが反映しているという仮説を明確に提示している。そして心性を異にする集団同士の関係が「外面形式」の分布に現れているとして、形式相互の時期的な関係や分布から集団の対立や共存といった背景を想定した（植木1990・1997）。

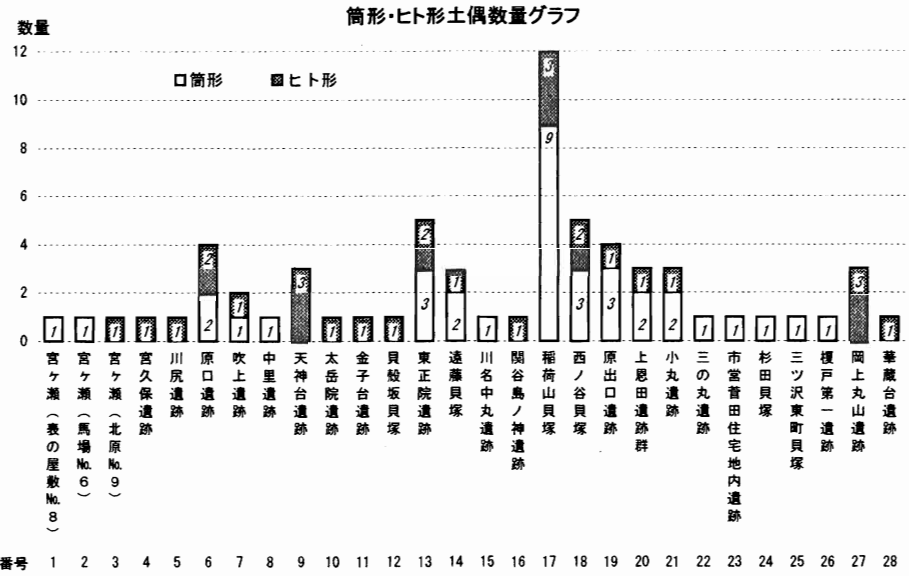
このように土偶の形態の違いに当時の何らかの違いが反映されているという考え方や、形態の違いが文化や心性などを異にする集団の存在を示しているという考え方は、土偶の形態をどう見て、どう分類するかということと関わっている。ここでは、今後この問題を検討していくためにも土偶の分布や出土数といったデータを整理したい。ひとまず本論では植木氏と同様に、土偶形態を製作者の所属する集団の心性や伝統の反映と仮定して、その土偶の分布や遺跡内で異なる形態の土偶同士が存在していたことについては、多様な集団同士の交流・交渉関係の存在を仮定しておく（植木1990）。

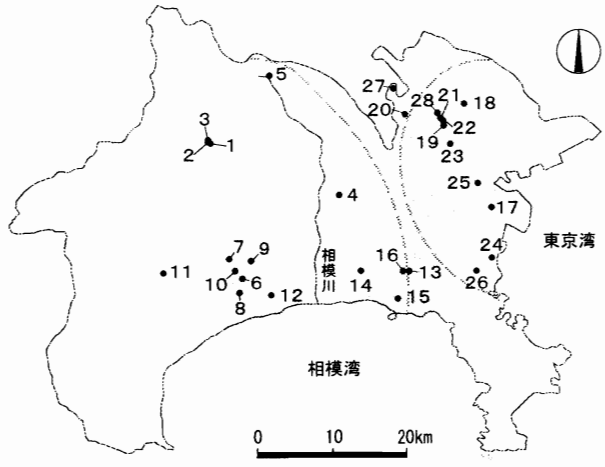
3. 縄文後期前半の神奈川県の様相

ここでは神奈川県内の後期初頭から前葉の発掘調査報告書を対象に土偶を集成した結果を述べる（註5）。主に出土遺跡の概要や分布、数量について示し、県内の土偶の様相を整理した。

（1）出土遺跡概観（図2）

今回土偶出土遺跡として集成した遺跡は28遺跡である。神奈川県の後期の遺跡分布は大まかに見ると、丹沢山地や箱根山地を除くとほぼ全面的に発見されている（山本1990）。そのなかで土偶出土遺跡の分布は、東京湾岸沿いや下末吉台地、相模湾岸沿いの台地や大磯丘陵などにまとまりがある。さらに丹沢山中や内陸にも存在しているがまとまりには欠ける。時期的な傾向は堀之内1式期や堀之内2式期主体の遺跡が多い、一方で称名寺式期主体といえる遺跡は少なくこの時期の土偶と判断できるものはない（註6）。





後期前半期土偶の様相			
土偶総数 64個		出土遺跡 28遺跡	出土遺跡の平均土偶数 2.3個
最多出土数	12個（土偶総数の18%）	[筒形・ヒト形]共存遺跡	8遺跡（出土遺跡の29%）
最少出土数	1個	[筒形・ヒト形]共存遺跡出土数	38[25/13]個
最少出土遺跡数	17遺跡（出土遺跡の61%）	[筒形・ヒト形]共存遺跡の平均出土数	4.8個
筒形土偶総数	36個（土偶総数の55%）	筒形単独出土数	11個
筒形出土遺跡	18遺跡（出土遺跡の64%）	筒形単独遺跡	10遺跡（出土遺跡の36%）
筒形出土遺跡の平均出土数	2個	筒形単独遺跡の平均出土数	1.1個
ヒト形土偶総数	28個（土偶総数の45%）	ヒト形単独出土数	15個
ヒト形出土遺跡	18遺跡（出土遺跡の64%）	ヒト形単独遺跡	10遺跡（出土遺跡の36%）
ヒト形出土遺跡の平均出土数	1.6個	ヒト形単独遺跡の平均出土数	1.5個

図2　遺跡位置と筒形・ヒト形の出土数

出土遺跡の様相は住居址の他に貝塚や土器集中域を伴う場合が多い。神奈川の後期の遺跡は海岸部では貝塚、内陸の西部では敷石住居や配石を伴う遺跡が多いが、そのような遺跡と土偶出土遺跡の関係は検討されていない。

（2）出土数（図2）

集成した土偶は総数64点である。最大の出土数は稲荷山貝塚で12点出土している（註7）。次に東正院遺跡で5点、西之谷貝塚で5点、原口遺跡と原出口遺跡で4点となっている。このように土偶が複数出土している遺跡は28遺跡中11遺跡である。

出土数の地域的な傾向は東京湾岸や下末吉台地（遺跡位置17～28）で36点、相模湾岸の丘陵地（遺跡位置6～16）で23点である。さらにこれらの遺跡を東京湾岸に近い一群と相模川を挟んで東西に分けた相模湾岸の二つの群（遺跡位置6～12と遺跡位置13～16）に区別して見ると、三つの遺跡群の出土量傾向に類似点が見られる。各遺跡群は稲荷山貝塚、東正院遺跡、原口遺跡のような複数出土遺跡を含み、出土数1点の遺跡が近隣に分布するという傾向である。

東京湾岸と相模湾岸との出土数の違いが見られた要因の一つは稲荷山貝塚の出土数にある。稲荷山貝塚例を除いてみると、複数出土遺跡や出土数1点の遺跡が各地に大きな偏りなく散在する状況である。これらの出土遺跡数や出土点数のデータは、考古資料の形成過程などを考慮すると、当時の様相を反映しているとは必ずしもいえないだろう（註8）。当時よりも出土量は少なく示されている可能性が高い。また地理的な区分もここでは便宜的なものである。そのような条件を加味したうえで扱う。

他地域では後期前半期の土偶が1つの遺跡から数十点出土する長野県北村遺跡（平林他1993）などがある。それらの中心を占める形態はヒト形であり、筒形中心で大量保有といえる遺跡は発見されていない。神奈川においてまたは筒形土偶の中心地域においては、土偶を必要とする意識が少ないのだろうか（註9）。この点を考えるにあたって、やはり関東における中期末から後期初頭の土器群に伴う土偶がないという状況や、その時期の土器群と系統関係にある「下北原式」（安孫子1981）が後期前半堀之内1式期の神奈川においては主体であるということを再認識しておく。

（3）各形態の出土数（図2）

全64点のうち筒形は36点、ヒト形は28点である。筒形とヒト形が共に出土する遺跡は28遺跡中8遺跡である。筒形が単独で出土する遺跡は10遺跡、ヒト形単独は10遺跡である。地域的に近接する遺跡群では東京湾岸は筒形24点、ヒト形12点と筒形が多く、相模湾岸では筒型10点、ヒト形13点とややヒト形が多く出土している。

筒形が出土する遺跡とヒト形が出土する遺跡はどちらも18遺跡と同じ程度である。東京湾岸と相模湾岸で比べても遺跡数はほぼ同じだが、ヒト形が相模湾岸に多く、筒形が東京湾岸に多

い。あくまで現状での結果にすぎないが、この点は神奈川県内での地域的な差異として捉えておく（註10）。

（４）小結

以上神奈川県の後期前半期土偶の集成から気づいた問題点を以下にまとめて記す。

①神奈川においても称名寺式期に土偶が知られていない。

②土偶は堀之内式期には県内のほぼ各地に分布する。

③神奈川の地域は土偶の出土数が多いとはいえない。

④筒形とヒト形の分布状況や出土数がやや異なる。

①③のような土偶が低調な事については、中期末あるいは中期後半にまでさかのぼって土偶の様相を考える必要があるかもしれない（註11）。

④の違いは東京湾岸と相模湾岸の遺跡で比較した場合に表れてくる。ヒト形の出土数は両地域ともあまり変わらないが、筒形の出土数は差がある。例えば内陸や山中の遺跡（遺跡番号1～5）を見てみると、全体的に出土数は少ないが、筒形が多いとはいえない。やはり東京湾岸に筒形が多いことが再確認できる（磯前1985）。筒形に比べてヒト形は県内に偏りなく散在している。相模湾岸や内陸、山中などの神奈川県西部方面では筒形よりも目立つ存在である。

筒形やヒト形の分布状況が異なっていたり、筒形が多いという地域的な傾向があるのに対して土偶出土遺跡がどのような環境に置かれ、どのような性質を有していたのかということは興味深い。この点を考えるには当時の地理的な環境や自然環境、そして遺跡群にみるような社会的な環境などを考慮しなければならないだろう。後期の遺跡は低地部分への進出に見られるような遺跡立地の変化や、小規模な遺跡がいたるところに散在していて遺跡数も多いなどの状況がある。県西部に見られる敷石住居址や配石遺構、沿岸部に見られる貝塚などから推測できる遺跡の役割との関係もあるのではないかと考えるが、現状では土偶出土遺跡が特定の機能を持つかは不明である（註12）。

4. 筒形土偶からの問題提起

ここでは、筒形土偶の編年的な位置づけと原出口遺跡（石井1995）の事例について検討し、後期土偶の展開を捉える方法について考えた。

（１）編年的位置付け

筒形土偶は神林氏によってその内容が示されて後期の堀之内式の時期として認定された（神林1943）。分布の中心も南関東にあり、ハート形土偶や堀之内式土器との類似性があることもわかってきた（江坂1960）。型式学的な検討から堀之内式１式・２式に細別され（磯前1985）、

植木氏は第1段階を称名寺式期に位置づける4段階の編年案を示した（植木1990）。土偶の胴部文様と土器文様の類似性、胴部の作りの変化に注目して、胴部の中空の作りを、底部からの繰り抜きによる方法から輪積み方法への時間的な変化と仮定し4つの作り（図1）を時間差として捉えた（註13）。その後加曾利B1式期における事例などをあげて、5段階の変遷を提示した（植木1997）。筒形土偶の時期幅を称名寺式～加曾利B1式に比定し、第5段階を加曾利B1式との共伴という根拠から設定した。

植木氏の編年で今後検討すべき点は、第1・2・3段階の土器編年との関係、第4・5段階の型式学的な検討などがあげられよう。第4段階が堀之内2式に伴うことは、筒形土偶の底部付近に横展開する文様が安定して施文されていることと堀之内2式の深鉢の胴部上半に同じく横展開する文様が施文されることの類似性によって肯定できる。

以上の事を踏まえて、編年にあてはめてみると、図1－8・10が第3段階、図1－11～16が第4段階に位置づけられる。

ここで問題となるのは図1－9原出口遺跡の土偶の位置づけである。原出口遺跡の土偶の断面が示す胴部の作りや口の表現、胴体のプロポーションなどは4段階のものといえる。文様構成も第4段階に主に見られる底部付近の横展開の文様が見られるが、モチーフが第4段階に一般的なものではない。胴部にも縦位に蛇行する沈線が施文されているが、この類似例は第3段階の稲荷山貝塚出土の土偶である。以上の理由により第3段階と第4段階の中間に位置づけておく。この土偶を含め原出口遺跡の事例は充分な検討をおこなう必要がある。

（2）原出口遺跡20号住居址の土偶出土事例の検討（図3）

遺跡から発見される土偶はごく細かな破片であり、同一個体と認識できる僅かな破片からの推定になる場合がほとんどである。接合関係については不明だが、概ね同一の貝層や同一の住居覆土内でのものなど極めて近い距離での接合である。遺跡内の破片だけではほとんど完全な形にならない（註14）。そして、土偶破片の出土地点は主に貝層や土器集中部や遺構覆土とその周辺からの出土である。遺構覆土の場合も雑多な土器片の廃棄と同様な背景と考えられる場合が多く、特別な関係を指摘できる例は少ない。

そのなかで原出口遺跡20号住居址の事例（図3）は示唆に富む。床面から丸棒状胴部に手足のついたヒト形の土偶（図3－6）が1点（註15）と、他地域の土器群の要素を持ったほぼ完形に近い土器（図3－1～4）が4個体、注口土器（図3－5）が1個体出土している。さらに覆土にも床面の土器と類似する要素を持つ土器や、ほぼ同一時期の土器が出土している。そのうち覆土中に口縁部を伏せた状態で出土した土器（図3－7）の口縁部付近に筒形の土偶（図3－8）の破片があり、覆土中に接合する土偶の破片が散らばっていた。20号住居址は別の住居址との重複関係において新しい住居址であり、斜面部に立地する古い住居址よりも斜面上方に位置する。20号住居址は床面の厚い焼土の堆積から火災住居と考えられている。

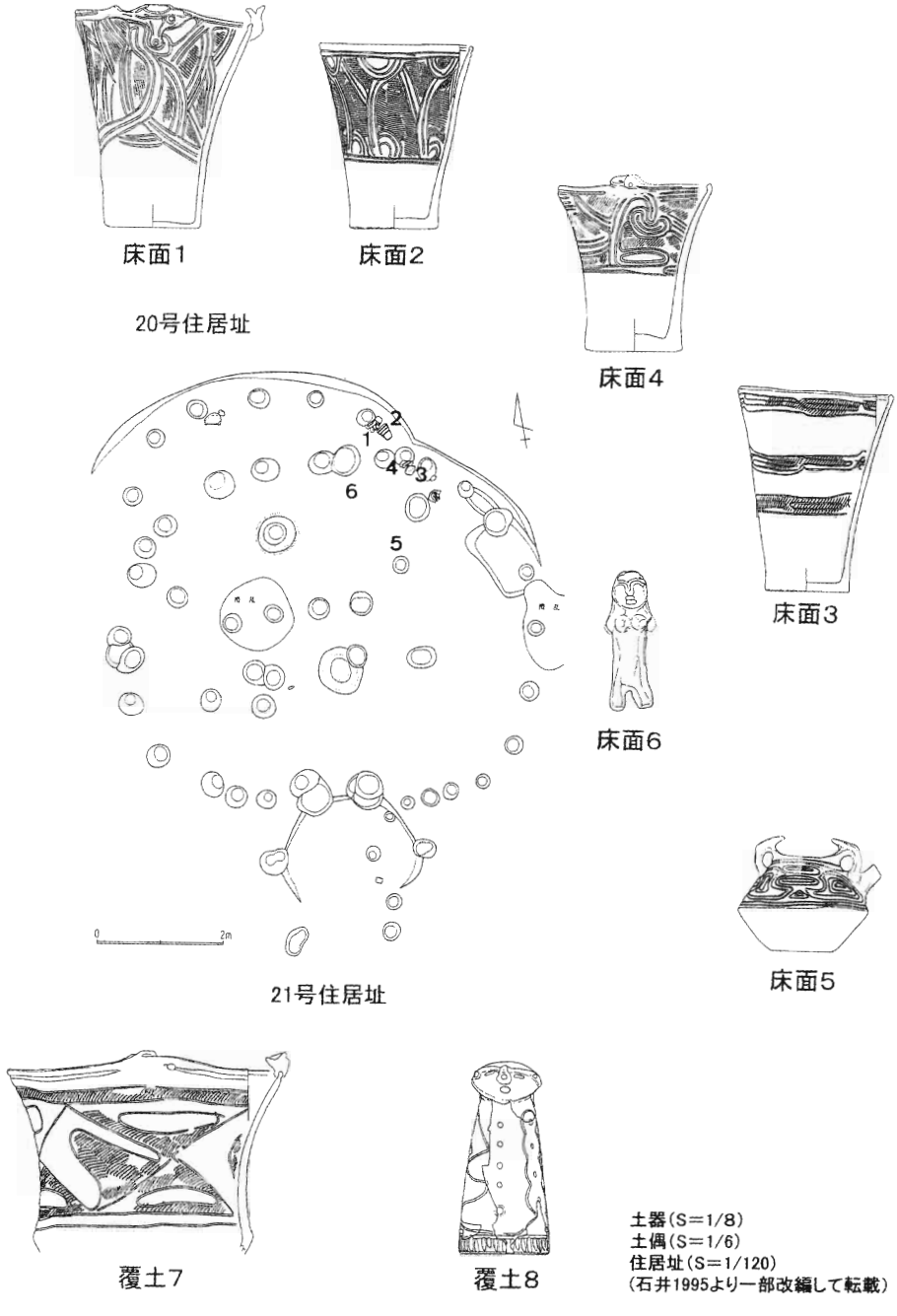


図３　原出口遺跡20号住居址の土偶出土事例

この事例の重要な点は3つある。

1つは床面の5個体の土器と胴部丸棒状ヒト形の土偶の関係である。石井　寛氏はこの土器群に東北や北陸の土器群との類似性を指摘している（註16）。

この土偶と5個体の土器は時期的にも同一とみなせるが、土偶の系統については問題がある。手足の表現からは、おそらく筒形と異なる背景で製作された可能性が推測できるが、胴部の形状や顔面部の形状は、筒形土偶の編年案(植木1997)によるところの第1・2段階のものに類似している。そこには共伴した土器に関係する集団の影響を考えられるが、このような事例から、土偶の形態に集団の違いが反映されているかという問題を手足の有無や胴部形状の違いだけではなく、細部の形状や文様を含めた製作工程を分析することからから考えていきたい（註17）。

2つめは二つの土偶の時期である。覆土から出土した筒形の土偶も床面のヒト形に近い時期を想定できる。この住居の覆土の土器も床面の土器に近い時期を示すものが含まれており（石井1995）、筒形土偶は堀之内1式期終末から堀之内2式期初頭に比定できる。これにより、筒形土偶編年（植木1997）第3段階と第4段階の中間は、おおよそ堀之内1式期終末から堀之内2式期初頭と考えられる。

3つめは土偶の用途または廃棄方法についてである。石井氏はこの出土状況に「特別な意味」があったとする。丸棒状胴部の手足を有する無文のヒト形土偶の機能・用途を考えるうえで「他地域」の要素を持つ複数の土器と「火災住居址の床面」で共伴していることは重要である。今のところ筒形土偶にこのような出土事例はない。両者の土偶には異なる用途があるのかもしれない（註18）。

以上3つの点を確認したが、土偶の位置づけを問題とするうえで1つめと2つめの点に注目して筒形土偶の第3段階と第4段階の事例についてさらに検討してみる。特に1つめの点は、筒形土偶の細部の形状や文様などから、製作工程の違いやそれらの選択性について土器と比較をしながら検討することの重要性を示す（鈴木正博1995）。土器との関係性は同じ土製品という点で製作者や製作集団などのあり方を考えるのに有効な視点である。

（3）土器と土偶の関係

称名寺式主体の遺跡では筒形土偶の出土はない。堀之内1式期には沿岸部の遺跡や貝塚などに筒形土偶の出土がある。そうした遺跡では関東東部の堀之内1式の様相を持つ縄文地文の土器が出土する。さらに原出口遺跡では東北や北陸の様相を持った土器が出土している。

このような事例から、他地域の様相を示す土器などが出土する遺跡に筒形土偶が出現する傾向があるのではないかと予測する。

そうした土器は堀之内1式期の細別（石井1993）から見ると堀之内1式の後半であり、安孫子氏のいう「下北原式」が主体を占めていた堀之内1式の前半の様相ではない。「下北原式」と土偶との関係が弱いという状況は「下北原式」が安孫子氏が指摘したように称名寺式の深鉢

からの連続性を持っていることに原因があると考えられる（安孫子1981）。

堀之内1式期の後半には堀之内2式期に一般化する深鉢の祖形が出現してくる。そのような土器群の展開と関係して筒形土偶も展開していくとすれば第3段階と第4段階の筒形土偶の違いと土器群の様相の変化に関連性が見出せるのかもしれない。

つまり手足の表現のないことや文様構成などの「外見上」は第3段階と第4段階の筒形土偶に連続性を指摘できるが、胴部の作り方や文様構成、モチーフなどの細かい属性のような「外見上では正確に伝わりにくい」属性に注目すると、第3段階の土偶は胴部のつくりや細部の形状、文様の施文が安定しない土偶が多く、分布も散漫である。それに比べて第4段階の土偶は関東南西部を中心にきわめて安定したスタイルをとる。胴部の作りや、文様構成、モチーフなどの統一がとれており、モチーフは深鉢土器に類似する三角形のものや、注口土器と類似する鋸歯状のものが見られる（註19）。こうした第3段階と第4段階の筒形土偶の様相の違いにはおそらく土偶や土器を取り巻く様々な背景の変化が介在している。

以上のように土器様相の変化に関連して筒形土偶が展開する第3段階と第4段階のあたりに原出口遺跡20号住居址のような土偶の出土状況があるということからも、土器や土偶の様相の変化には何らかの関係がある。その変化は土器や土偶の製作者や製作集団のあり方が関係している。そこで製作工程などの技術的な視点の分析は製作技術や集団の変質を明らかにすることができよう。

5. おわりに

神奈川県の縄文時代後期前半期土偶の様相を検討した結果、筒形とヒト形が東京湾岸と相模湾岸で異なる出土量や比率で存在していた可能性が示された。しかしその傾向が集団構成などと、どのような関係があるかを検討するには至っていない。そこで筒形土偶の編年的な位置づけや原出口遺跡20号住居址の出土事例を検討した結果、筒形土偶の変容や広がり方は同時期の他地域の土器群と関係し、筒形の安定した展開は在地の土器群との関連性があることが考えられた。

この点に関しては土偶の製作工程を想定しながら「見た目で伝わる」と考えられる手足の有無などの属性と「見た目では伝わりにくい」と考えられる細部の形状や文様の属性を抽出して、両者の遺跡内・遺跡間でのあり方を示すことで、広域に展開する背景と地域的なレベルでのあり方を考えていけるだろう。さらに土器の広がり方や文様、特にどのような土器の文様と類似するかといった点に注目することで土偶と土器の製作者または製作集団の存在を指摘できるだろう。例えば筒形土偶の内部の形状を作り出すには、「見た目」などではなく、土偶の製作工程のあり方を共有できる機会がなければ類似性は現れないであろう。製作機会を異にしても「見た目」の手足の有無を真似できるような関係とは異なり、製作工程を同じくする土偶の広がり

方は製作者あるいは製作集団の広がりや土偶の分配などが想定できよう。さらに製作工程や文様の施文順序を共にする土器の抽出を行い遺跡内や遺跡間の分析を進めることによって、甲野勇氏（甲野1953）に指摘されたような土器を作る部族と周辺部族との交易のあり方を遺跡と遺物によって具体的に検討できるかもしれない。また製作工程を異にする土偶や土器に注目することで遺跡内の異なる集団の存在についての仮説（小林1993）を検証できよう。

本論の内容は神奈川県内から出土した土偶に対して、これまでの論考や他の考古資料の分析や仮説に照らしながら土偶の様相を検討して解釈を進めたものである。今回は個々の土偶や土偶同士の関係についてはあまり言及していない。特にヒト形としているものは非常に多様であり、筒形との関係も一様ではないだろう。それらを説明するためには土偶同士の関係性を明らかにして位置づけていく型式学的な操作が必要になるだろう。土偶の様相の検討についてもこれまでの分析に対して未熟な理解で進めたためにかなりの誤解を含んだ内容であるかもしれない。今後はそれらの修正を行い、今回の作業によって気づいた課題も検討していきたい。本論の内容や問題点などについて多くの方のご指摘を受けられればとても幸いである。

謝辞　本論の掲載に至るまで多くの方から受けたご支援やご厚意は言葉で言い尽くせないものがある。横浜市歴史博物館の小倉淳一氏には資料見学に際して御配慮を受けた。小林達雄先生、石井　寛氏、小滝　勉氏、藤波啓容氏には常日頃からお世話になっており、本稿を草するにあたっても大変お世話になった。特に藤波氏と編集の小滝氏には、締め切りを越えての原稿提出まで懇切丁寧に御指導して頂いたことは今後も忘れることはできない。改めてこの場を借りて感謝の意を示したい。

註

1　筆者と同様な研究姿勢として阿部友寿氏の研究があげられる。阿部氏は渡辺仁氏の著作『縄文土偶と女神信仰』(渡辺2001)を対象にして、阿部氏自身が土偶の意味機能に迫るための「説明方法」を検討している(阿部2002)。特に文化人類学的な成果を駆使して土偶を取り巻く様々な事象の「関連性」の説明とその重要性について指摘しており、渡辺氏の著作と同様に注目できる。

2　後期前半の土偶研究のこれまでの成果と展望については上野修一氏がまとめているので参照されたい(上野1999)。上野氏は研究史を振り返り、今後の課題として時間的な位置づけや系統の把握に課題があることを指摘している。

3　例えば群馬県前橋市上川久保遺跡の土偶(能登・永峯1977)がある。この土偶について能登　健氏は縄文後期に関東地方に展開する筒形土偶の「祖形」としての位置づけを与え、形態状の類似性から石棒との関連性を指摘した。その後、植木　弘氏は刺突文様を理由に東北地方との関連を指摘しながら後期初頭称名寺式期に位置づけた(植木1990)。なお鈴木保彦氏はこの土偶を筒形土偶として扱うことに否定的な見解を述べている(鈴木1990)。

4　その後、さらに中期中葉に胴部中空の筒状を呈する土偶が発見されたが時期や分布から系統的な連続性が否定されている(小林1977、能登・永峯1977)。

5　資料集成は主に『土偶シンポジウム栃木大会　関東地方後期の土偶シンポジウム資料集』(1995)（以下『シンポジウム資料集』とする）と『土偶シンポジウム栃木大会　関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』(1995)(以下『シンポジウム発表要旨』とする）を参考にした。そしてシンポジウム以降の資料を若干集成した。尚、『シンポジウム資料集』の神奈川の集成(鈴木保彦1995)には後期中葉以降の土偶も含まれている。これについては、『シンポジウム発表要旨』に掲載された板状土偶を扱った山崎和己氏の指摘による1点と山形土偶を扱った森脇　淳氏の指摘による原出口遺跡出土事例を除いた7点を検討対象から除外した。

6　神奈川県内遺跡の時期的傾向としては後期中葉以降の遺跡は事例が極めて少ない(山本他2001)。

7　図1－8の稲荷山貝塚の筒形土偶は以前の発掘で出土したものであり、他の土偶とはやや離れた場所から出土している。今回はそうした事例も含めて稲荷山貝塚出土土偶としている。他に注意する点として、顔面部のみの土偶（図1－6）が出土しているが、これはハート形に典型的な顔面部表現としてヒト形に扱う。その理由は、①ハート形の顔面部は隆帯の貼付とその隆帯上の刺突で目と口を表現していること、②筒形土偶顔面部の目の表現は沈線であり、口の表現は穿孔であり胴部の中空部にまで貫通していることが挙げられる。

8　長岡史起氏は後期の遺跡分布を対象に当時の遺跡分布である「真の分布」が、現在発見されている遺跡分布である「見かけの分布」として現れてくる要因を長年の自然的な影響や現代の発掘調査体制などのあり方から説明している(長岡1989)。

9　堀越正行氏が堀之内貝塚の分析からこのような1遺跡の土偶保有数の問題を展開している(堀越1996)。

10　神奈川という範囲の中での地域的な差異については、鈴木徳雄氏が堀之内1式土器の検討から相模川の東西の違いを想定した(鈴木1984)。

11　当地域では石棒のような第2の道具や敷石住居や埋甕などが中期後半から連綿と存在し続けているのに対して土偶は見当たらなくなる。このような事象は、当時の社会や精神的な側面を探るうえで重要な視点を示してくれよう。

12　土偶の出土遺跡と非出土遺跡の検討は、土偶のような第二の道具と環状列石・巨木柱列・環状盛土のような記念物との関係を考えるきっかけになるだろうと考えている。第二の道具や記念物は当時の観念的な側面の反映として見られ、遺物の分布、出土状況や出土量、遺跡内・遺跡間での属性分析、記念物自体の分析などの詳細な分析が未だ活発ではない。これらを統合して分析するための視点や方法を考えて、それを実践して第二の道具や記念物を評価していくことを大きな目的としてあげておく。

13　この点については磯前氏も注目していた。磯前氏は植木氏が輪積みとして指摘するつくりを「もっとも発達したもの」、それら以外のつくりを「退化した」ものと捉えた。そして前者が中心となる「西関東海岸部」と後者が中心となる「他の周辺地域」といったような分布の「中心」と「周縁」の違いとして理解し、「他の周辺地域」に広がるものは「退化あるいは地域独自のものに変形しており個体間のばらつきが大きい」と指摘した(磯前1985)。これは重要な指摘であると考えている。関東地方に広がる筒形土偶の胴部の作りには地域差があるということであり、この点を重視して筒形土偶の属性分析の視点や方向性が検討できる。

14　土偶の残存状況については、土偶の機能・用途論と関係して古くから議論が展開してきた。この点に関しては(小野1999)や(植木1999)を参照されたい。

15　この土偶は丸棒状の胴部形態に着目した場合に筒形土偶の祖形と見ることもできるが、手足の表現や胴部の作りから中空の意識を判断できないこと、無文であることなどからヒト形に含める。しかし、筆者はこの土偶の顔面部の角度や眉の表現は非常に筒形土偶に似ていることから、ヒト形や筒形といった区別を超えた属性分析を考えている。

16　石井氏は原出口遺跡20号住居址出土の4個体の「相模系朝顔形深鉢」に、従来の堀之内1式の「縦位懸垂の文様構造」とは異なる「横長のJ字状」を呈した「3帯の横位区画文」のあり方や、「縦位懸垂の文様構造」による区画が不明瞭になる点などの文様構成やモチーフ、沈線の描出方法などの幾つかの要素を総合的に捉えて、「十腰内系土器群」や「南三十稲場式土器」との関連性を指摘した。と同時に、これらの土器群をめぐる背景を検討して、「堀之内1式終末から堀之内2式初頭」にかけての変容の問題を整理している(石井1995)。

17　磯前氏は筒形とハート形土偶の細部の形状に見られる類似性について指摘している。両者に共通して見られる「後頭部把手」について、それを作る太平洋側と作らない日本海海側との地域差を見いだしている。筆者は、このような属性の選択によって、筒形やハート形といった手足や胴部の形態などの差を越えて細部の形態から地域的なまとまりを捉えられることは、両者の製作方法や製作集団を考えるうえで重要な事実であると考えている。磯前氏の指摘には筒形土偶内の変異を考えるだけではなく他の土偶も含めた分析の有効性が示されている。

　特にヒト形で胴部が中空の造りを持つ土偶が中部地方を中心に分布しているが、これらの土偶を考えるにあたっても筒形との関係が問題になる面があるだろう。

18　さらに原出口遺跡の土偶の問題を考えられる事例として、東京都北区東谷戸Ⅱ遺跡のＳＫ02号土坑の事例を挙げておく(中島他1994)。土坑覆土から、胴下部に隆帯が一巡しているほぼ完形復元できたヒト形土偶1点と堀之内1式期の「相模系朝顔形深鉢」(石井1993)などが出土している。これらの土偶の位置づけについては鈴木正博氏の「下位土偶」(鈴木1982)の考え方から検討すべき事例であると考えている。「下位土偶」とは、「素朴な飾りたてない様式に特徴があり、物流体系に組み込まれない用途を本来的な意義とするものである。下位土偶の形態は様々であるが、夫の各種の別は必ずしも帰属体系統を意識したものではない。寧ろ、住居址単位に代表される小集団ないしは個人に帰属される可能性が強い。任意の一遺跡に於いて発見された下位土偶は、夫の遺跡に直接関係を有した個人によって製作され、夫の製作者と直接関係を有したる小集団ないしは個人のある目的を達成する為に存在したのである。従って製作という行為あるいは過程そのものが呪術的な意義を持ち得るのであり、製品そのものの存在意義は、同一小集団ないしは個人への連係帰属に於いて成立する」とされる。

19　鈴木正博氏は堀之内2式の注口土器とハート形土偶、一部の筒形土偶に文様の類似性を指摘している(鈴木正博1995)。同じ後期の東北地方では深鉢土器の文様との類似性から土偶の文様が捉えられる(中村1995)。さらに、縄文中期において谷口康浩氏は深鉢と土偶との造詣や文様の関係性を指摘している(谷口1998)。特に勝坂式土器と有孔鍔付土器や人体の表現に見られる文様との類似性を指摘して、それら土偶を「勝坂系土偶伝統」として文様や造詣が後の時期の土偶に継続していることを見出した。さらに、勝坂式土器の終息と共に土偶と土器の関係が希薄になり、土偶が「曽利式土器や加曾利Ｅ式土器との間に、文様・造詣の何らの共通点をも有しない」と指摘している点は、その後の土偶の展開を考えるうえで極めて重要な指摘である。各時期・地域において土偶の製作に、あるいは文様にどのような背景や意味があったのだろうか。土器と土偶の関係が希薄になることと中期末から後期初頭の関東地方に土偶が低調になることは関係があるのだろうか。そして深鉢土器や注口土器と土偶の造詣や文様との関係が強くなることと後期土偶が増加することにも何か関係があるのではなかろうか。

引用・参考文献

安孫子昭二　1981「縄文後期の土器　関東・中部地方」『縄文土器大成　第3巻　後期』講談社

安孫子昭二　1997「関東地方縄文後期の動態」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1)　勉誠社

阿部友寿　2002「道具」としての土偶の位置－渡辺　仁著『縄文土偶と女神信仰』を読んで」『先史考古学論集』第11集

石井　寛　1993『牛ヶ谷遺跡　華蔵台南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅣ　横浜市ふるさと歴史財団
石井　寛　1995『川和向原遺跡　原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅨ　横浜市ふるさと歴史財団
石井　寛　1999『小丸遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25　横浜市ふるさと歴史財団
磯前順一　1985「筒形土偶について」『常総大地』13号　常総大地研究会
市川正史・恩田　勇　1994『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ　北原(№9)遺跡(2)　北原(№11)』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21　神奈川県立埋蔵文化財センター
植木　弘　1990「土偶の形式と系統について～東日本の後期前半における三形式の土偶をめぐって～」『埼玉考古』第27号　埼玉考古学会
植木　弘　1995「筒形土偶の系譜とその周辺」『土偶シンポジウム栃木大会　関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
植木　弘　1997「筒形土偶の系統とその周辺」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1)勉誠社
植木　弘　1999「遺物研究　土偶　(機能論・用途論)」『縄文時代』第10号第４分冊　縄文時代文化研究会
上野修一　1997「東北地方南部における縄文時代中期後葉から後期初頭の土偶について－ハート形土偶出現までの諸様相－」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1)勉誠社
上野修一　1999「遺物研究　土偶　(後期土偶)」『縄文時代』第10号第４分冊　縄文時代文化研究会
江坂輝弥　1960『土偶』校倉書房
大野雲外　1910「土偶の形式分類について」『人類学雑誌』第26巻　第296号　東京人類学会
小野美代子　1999「遺物研究　土偶　(総論)」『縄文時代』第10号　第４分冊　縄文時代文化研究会
岡本　勇　1979『神奈川県史資料編20　考古資料』神奈川県
岡本　勇他　1986『古代のよこはま』横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編
恩田　勇他　1997『宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ　表の屋敷(№８)』かながわ考古学財団調査報告19　かながわ考古学財団
川上久夫他　1976『港南台』神奈川県埋蔵文化財調査報告９　神奈川県教育委員会
神林淳雄　1943「筒形土偶について」『人類学雑誌』第58巻　第６号　日本人類学会
甲野　勇　1953『縄文土器のはなし』世界社
小林達雄　1977「祈りの形象　土偶」『日本陶磁全集　第３巻　土偶・埴輪』中央公論社
小林達雄監修　1989『縄文土器大観　第４巻　後期　晩期　続縄文』小学館
小林達雄　1993「縄文集団における二者の対立と合一性」『論苑　考古学』坪井清足さんの古希を祝う会　天山舎
小林達雄編　1995『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学　別冊６　雄山閣出版
小林達雄　1996『縄文人の世界』朝日選書
小林達雄　1997「縄文土偶の観念技術」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1)勉誠社
坂本　彰他　1975『横浜　緑区史』資料編第１巻　緑区史刊行委員会
坂本　彰他　2003『西ノ谷貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告33　横浜市ふるさと歴史財団
杉山博久　1985『秦野市史』別巻考古編　秦野市
鈴木次郎他　1995『宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ　馬場(№6)遺跡』かながわ考古学財団調査報告４　かながわ考古学財団
鈴木徳雄　1984「関東西部における縄文後期前半の土器様相」『王子台遺跡とその周辺』東海大学文化部連合会考古学研究会

鈴木正博　1982「埼玉県高井東遺蹟の土偶について」『古代』第72号　早稲田大学考古学会
鈴木正博　1995「「土偶インダストリー論」から観た堀之内２式土偶―土偶の編年的位置は土器から、土偶間の動特性は土偶からー」『茨城県考古学協会誌』第７号　茨城県考古学協会
鈴木保彦　1972　『東正院遺跡調査報告』神奈川県教育委員会・東正院遺跡調査団
鈴木保彦　1990「筒形土偶」『季刊考古学』第30号　雄山閣出版
鈴木保彦　1995「神奈川県」『土偶シンポジウム栃木大会　関東地方後期の土偶シンポジウム資料集』土偶とその情報研究会
竹石健二他　1986『川崎市麻生区岡上小学校遺跡調査略報』日本大学文理学部史学研究室
谷口康浩　1998「土偶型式の系統と土器様式－勝坂系土偶伝統と中期土器様式との関係－」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(2)勉誠社
寺田兼方他　1993『遠藤貝塚（西部217地点）』藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査団
永井正憲　1985『関谷島ノ神西遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
中島広顕他　1994『西ヶ原貝塚Ⅱ・東谷戸遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第12集　北区教育委員会
中村良幸　1995「北上川流域周辺の動向」『土偶シンポジウム栃木大会　関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
長岡文紀他　1987『宮久保遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15　神奈川県埋蔵文化財センター
長岡文紀　2002『原口遺跡Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告134　かながわ考古学財団
長岡史起　1989「南関東における縄文時代後期の遺跡分布－見かけの分布と真の分布－」『神奈川考古』第25号　神奈川考古同人会
能登　健・永峯光一　1977「呪的形象としての土偶」『日本原始美術体系３　土偶・埴輪』講談社
橋本昌幸　1988『市営菅田住宅地内遺跡発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会
平林　彰他　1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書110－北村遺跡』長野県教育委員会
藤巻幸雄・石坂茂　1996「群馬県出土の土偶－その変遷と地域的様相－」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』13　群馬県埋蔵文化財調査事業団
藤本　強　1983「総論」『縄文文化の研究　９』雄山閣出版
堀越正行　1996「堀之内貝塚出土の土偶」『市立市川考古博物館年報』第23号　市立市川考古博物館
松田光太郎他　2001『稲荷山貝塚』かながわ考古学財団調査報告131　かながわ考古学財団
村上吉正・吉垣俊一　1997『中里遺跡(№31)　西大竹上原遺跡(№32)』かながわ考古学財団調査報告30　かながわ考古学財団
森脇　淳　1995「東京湾西岸地域の諸様相」『土偶シンポジウム栃木大会　関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
山崎和己　1995「板状土偶とその他の土偶」『土偶シンポジウム栃木大会　関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
山崎義男　1954「群馬県郷原遺跡出土土偶について」『考古学雑誌』第39巻第３・４合併号　日本考古学会
山本暉久　1990「３　縄文時代中期と後期の遺跡分布」『神奈川の考古学』第１集　神奈川県埋蔵文化財センター
山本暉久・長岡文紀・恩田　勇・松田光太郎　2001「神奈川県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
渡辺　仁　2001『縄文土偶と女神信仰』同成社

逗子市池子遺跡群の弥生時代集落について

谷口　肇

1. はじめに
2. 池子遺跡群の弥生時代集落の様相
3. 小結

1. はじめに

逗子市池子遺跡群は、神奈川県東南部、三浦半島付け根部の西側(相模湾側)に位置する。米軍住宅建設に伴い、1989年から1994年まで神奈川県立埋蔵文化財センター及びその業務を引き継いだ財団法人かながわ考古学財団による発掘調査が実施され、弥生時代以降近世に至るまでの各時期に渡り、多大な調査成果が得られたことは周知のとおりであり、それらは『池子遺跡群Ⅰ』(1994)～『同Ⅹ』(1999)として、同センター及び財団よりすでに報告書がまとめられている。さて、中でも特筆される調査成果の一つに筆者も調査及び出土品整理に携わったNo.1－A地点とした調査区より、弥生時代中期後半「宮ノ台期」の旧河道が検出され、多量の木製品を含む豊富な遺物が出土したことが挙げられる。筆者は上記の報告の中では出土遺物の記述を専ら担当したが、あまりに多種多様な遺物の様相をまとめるのに精一杯で、それらを残した当時の集落あるいはその生活について思いをめぐらす余裕はなかった。今回、本誌面をお借りし、池子弥生集落の動向について、先の遺物の分析結果も考え合わせた上で、筆者なりの検討を試みることとしたい。

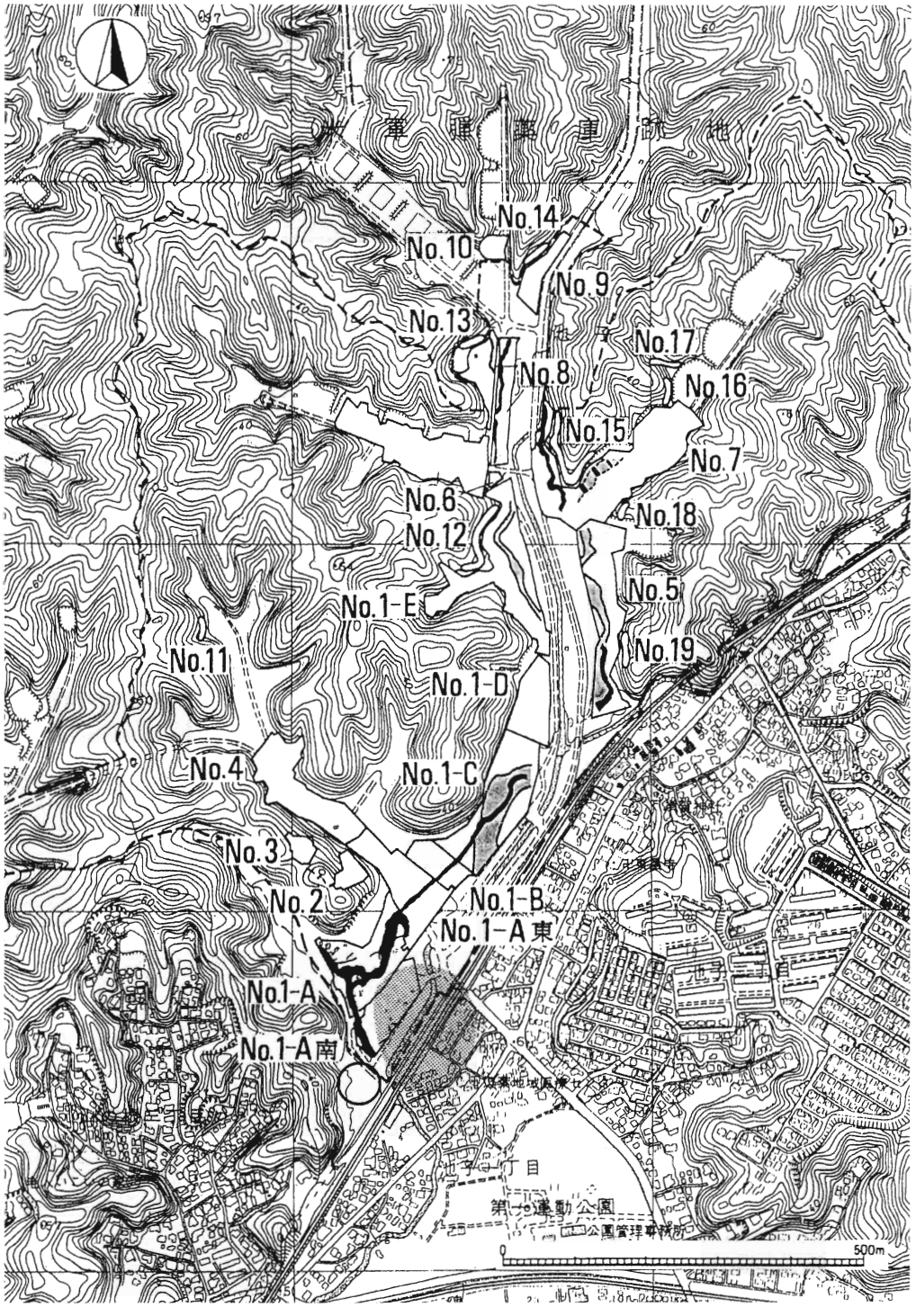
2. 池子遺跡群の弥生時代集落の様相

池子遺跡群は、現在の逗子湾海岸線より2kmほど東北側に入った平地部と丘陵部が接する箇所の一帯に位置し、南西側(海側)の平地部とそこから樹枝状に丘陵を開析した谷戸部に立地する（第1図)。現在、平地部東南側を京浜急行線の線路敷で画されているが、実際はその先にも遺跡は広がるものと想定される。標高はおよそ平地部で4～6m、谷戸部で6～10mとなる。

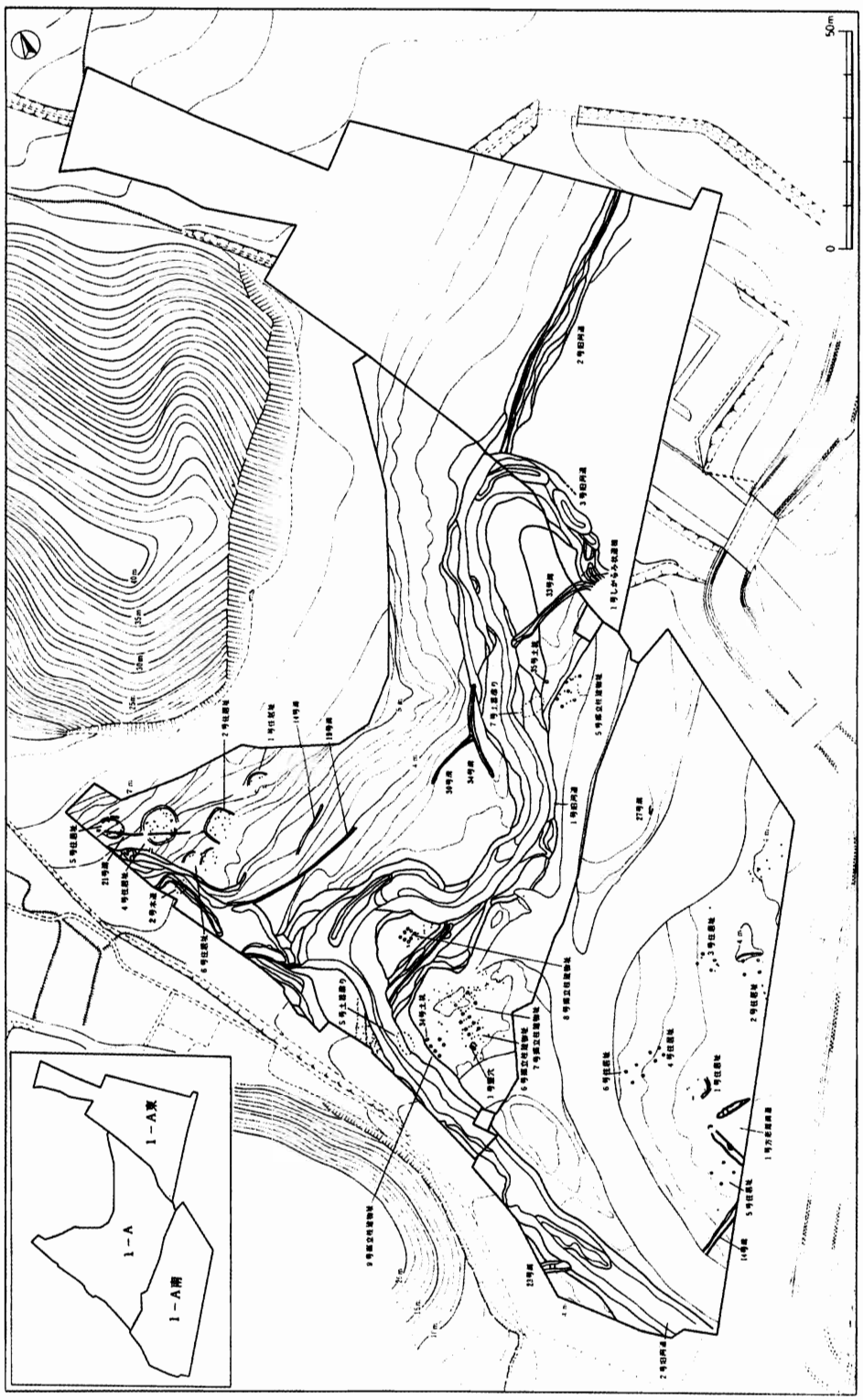
発掘調査は、平地部分と谷戸部分及び一部の丘陵部分について、便宜上No.1～19地点に分けて実施されたが、No.1地点はさらに南から北にA～Eに分かれ、さらに追加調査分としてNo.1－A地点の東と南にNo.1－A東・同南地点が設定されている（第2図)。なお、かながわ考古学財団の調査後、No.1－A南地点の西側隣接地において、逗子市の医療保険施設建設に伴い東国歴史考古学研究所による発掘調査が実施され、「池子桟敷戸遺跡」として報告がなされている

第１図　池子遺跡群の位置（報告書より作成）

（第２図の○、若松他2000）。ここでは必要に応じて「池子桟敷戸遺跡」の調査成果も随時取り上げることとする。弥生時代の遺跡は、その平地部分（№１－Ａ・同南・同東地点）に先述した旧河道を含む中期後半の集落が展開する（第３図）が、谷戸部でも少量だが同時期の遺構・遺物が発見されている。それ以前は弥生時代前期末～中期前半の遺物が№１－Ａ地点を中心に散発的に出土しているに留まる。中期後半「宮ノ台期」の集落は旧河道の堆積状況から、その終末段階で洪水によると考えられる砂礫で一気に埋没したことに伴い廃絶するようだが、引き続いて後期前半の小集落が№１－Ａ地点西北側及び北西側谷戸部の№４地点で検出されている。本稿ではそれらの中で最も活動が活発だった「宮ノ台期」の集落の動向を検討する。



第２図　池子遺跡群の各調査地点及び弥生時代以前の流路全体図
（○が池子桟敷戸遺跡、トーン部分集落推定範囲）



第３図　池子遺跡群No.１－Ａ・同東・同南地点における弥生時代面全体図

（1）「宮ノ台期」以前の様相

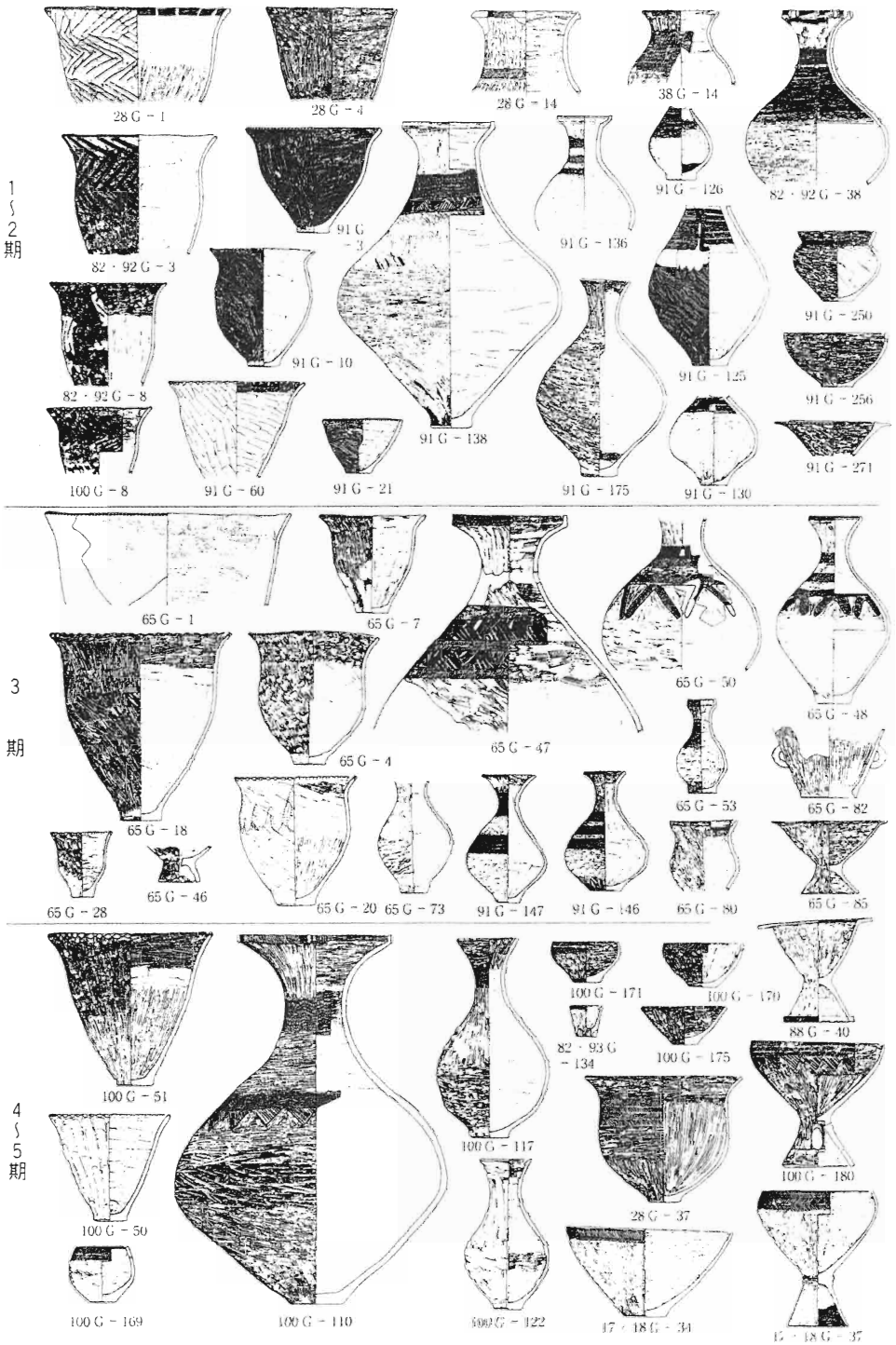
池子遺跡群における「宮ノ台期」以前の様相については、簡単にまとめると、№1－A地点「宮ノ台期」河道の底面～最下層より混在した状態で出土した縄紋時代晩期終末～中期中葉の土器片が資料のほとんどであり、そのほか同地点北西側の№1－A東地点及び№1－C地点でも当該期の資料が若干量出土している。№1－A地点の状況については、おそらく調査区北東側の「宮ノ台期」以前の河道上流部に廃棄された土器片が、「宮ノ台期」河道の再下刻（註1）によって撹乱され、結果的に河道の最下層にバラバラに再堆積したものと思われる。ただし、弥生中期中葉でも末期段階の資料は、それまでの北西谷戸側中心とは異なり、調査区中央の河道屈曲部付近まで分布範囲を広げており、この段階に平地側への進出と共に河道に対する人為的な「働きかけ」が行われていた可能性もあるが、上記の理由で単純層位は明確でなく、また周囲の微高地上にも住居址等の痕跡は残されていなく、実態は不明である。いずれにしても、このような中期中葉末頃の変化については、また先述の「小海退」によって、沖積低地部において居住地または可耕地として利用可能となった範囲が拡大したと推定されることと関係するものと思われる。

（2）弥生時代中期後半「宮ノ台期」の動向

弥生時代中期後半、いわゆる「宮ノ台期」は冒頭に記したように、特に№1－A地点における旧河道内の大量の出土遺物で知られるが、そういった遺物の量やヴァラエティといった物質的な成果よりも、むしろ未製品が多量に出土した木製品や骨角器の製作が水辺で行われていた可能性が高いことや「しがらみ」や水路と思われる溝状の遺構が発見されていることなど河道に対する積極的な「働きかけ」が認められる点が、集落の性格として前代と最も異なる要素であると指摘できる。報告書でも集落を含めた№1－A地点周辺の当該期土地利用の様相が概括されているが、筆者としては報告書で分析した土器の細分案を基に、№1－A地点以外の調査成果も合わせて、ここで池子遺跡群全体の「宮ノ台期」の動向を検討することとしたい。

（a）時期の細分について

筆者は報告書においては、№1－A地点で出土した「宮ノ台式土器」を安藤広道氏等の研究成果を参考にした上で、出土状況・層位などを考慮して池子「宮ノ台」1～5期にとりあえず分期した（第4図）。内容は報告書を参考していただくとして、壺の特徴で言えばおよそ1期は前代の伝統下にある縄紋＋沈線紋といった紋様・施紋が色濃く残存する一方で、プライマリーな中期東海的櫛描紋壺が別個体として伴う段階、2期はそれら縄紋等在地的紋様と東海的櫛描紋が1個体の紋様（帯）の中で融合し、多少複雑な様相を呈する段階、3期は櫛描紋的要素が後退し、縄紋帯中心の施紋にまとまってくるとともに紋様部分と塗り分ける赤彩技法が目立ってきて、羽状縄紋も出現する段階、4期は「結紐紋」など曲線的な紋様がほぼ消滅して、頸部と肩部の羽状縄紋帯がメインとなり、塗り分け赤彩技法が顕著になる段階、5期は4期の



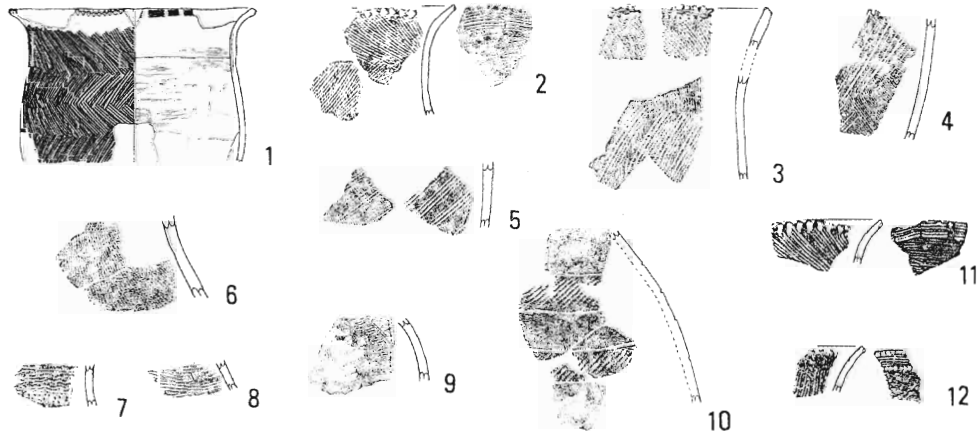
第４図　池子遺跡群No.１－Ａ地点出土「宮ノ台式土器」の時期設定

傾向がさらに徹底化され、ほぼ羽状縄紋帯のみとなる段階である。甕の様相で言うと、１期には横走羽状紋や内面鎖状紋が残存するが、２期までには消滅し、３期まで一定の割合で残存する口縁端部刻み技法が４期には表裏押捺技法にほぼ完全に交代する一方で、初期から見られていたヘラナデ技法が４～５期に特に顕著になるとまとめることができる。

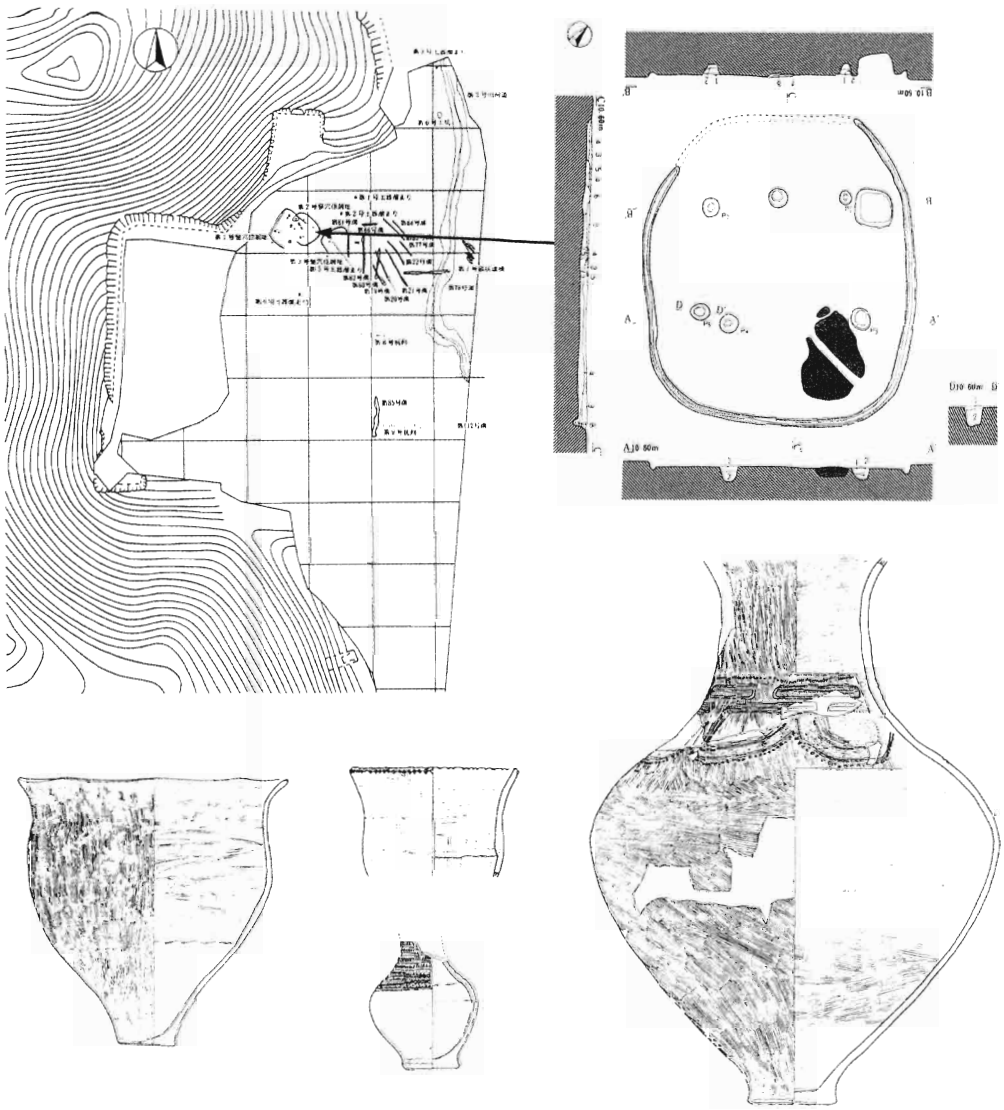
（ｂ）１期の様相

そもそも「宮ノ台期」旧河道は、No.１－Ａ地点調査区北西側の谷戸を源とし、それから谷筋に沿って南方に下るが、途中でそのまま丘陵裾沿いに南方向に直線的に流れ下るものと東側の低地部に蛇行しながら流れるものとに分岐する。前者を「南側流路」、後者を「東側流路」とする。

まず、１期の様相だが、河道内には南流路にややまとまって土器が出土するほかは、各所で破片が散発的に出土するのみである。ただし、前段階までの資料の出土が顕著だった河道上流の北西側では不明瞭で、これは先述した中期中葉末の傾向を引き継いでいるかのようである。一方で中期中葉末の資料が出土しなかったNo.１－Ａ東地点北側埋没谷において、破片ながらやや量的にまとまって出土していることが注意される。それを含めてこの段階における前代と異なる特徴的な「動き」は、谷戸部の奥でも遺構や遺物が確認できることであり、No.６地点で３期の土器だまりに混入して１期の甕破片及びNo.８地点でこの段階の竪穴住居址１軒が単独で発見されている。No.８地点では遺構外からも１～２期の甕破片が出土している（第５図）。特にNo.８地点の竪穴住居址は、ほかと隔絶した環境で検出されている点、また土器の様相が実際No.１－Ａ地点のそれと多少異なる点（特に在地色残存の方向）など、単なる住居ではなく、あるいは特異な性格を有していた可能性も窺える遺構として注目される（第６図）。なお、No.１－Ａ地点河道周辺における木製品の製作はこの段階に開始されていた可能性があるが、河道内で１期の土器のみと伴出した確実な資料に乏しい。以上の状況から、１期は池子の谷戸全体への「働きかけ」の模索期あるいは初期段階と評価できるかもしれない。



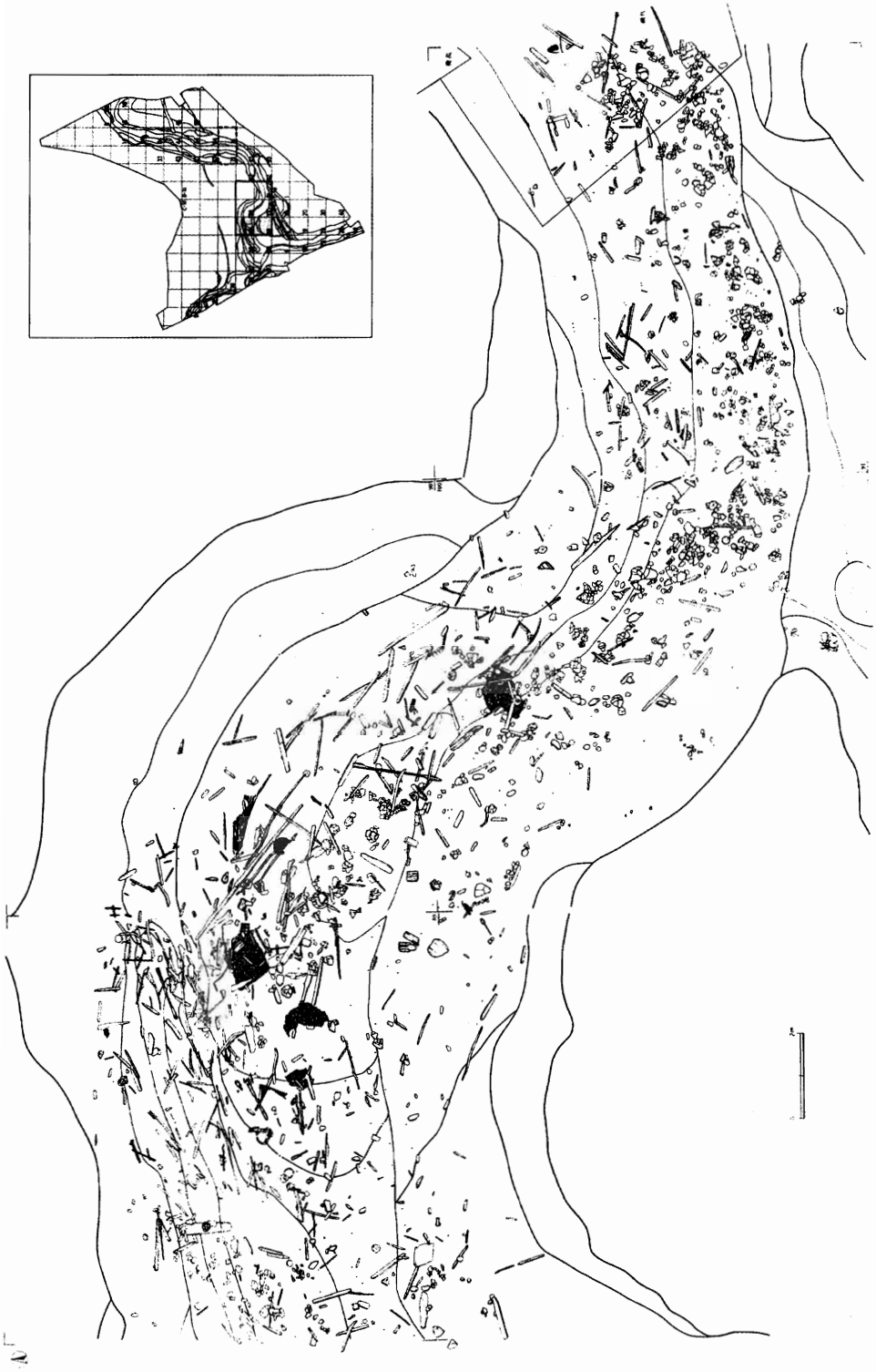
第５図　No.１－Ａ東地点埋没谷、No.６地点遺構外、No.８地点遺構外出土１期資料
（１～10－No.１－Ａ東、11－No.６、12－No.８）



第６図　No.８地点検出１期竪穴住居址及び出土土器

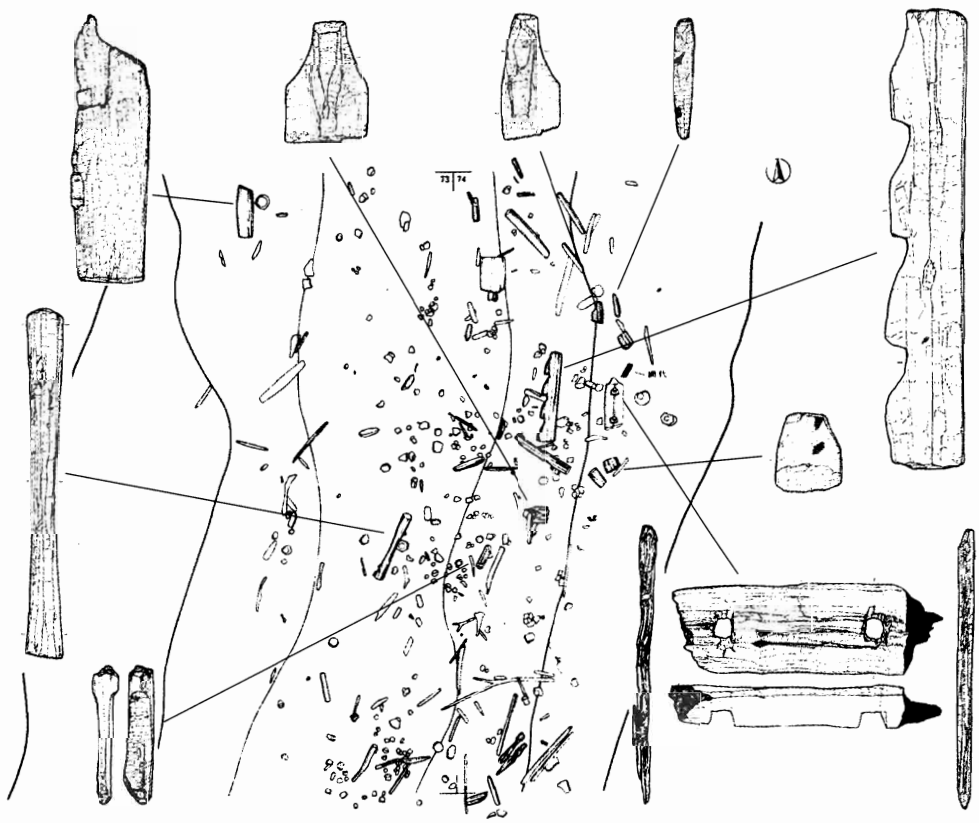
（ｃ）２期以降の河道周辺における各種生産・製作活動について

そして２期には、No.１－Ａ地点旧河道より土器・木製品・石器・骨角器など多彩な資料の出土が確認されるようになる。特に調査区中央の河道屈曲部分、後述する「中州」東側周辺における集中出土傾向（第７図）はこの段階からである。それらの中でも「水漬け」状態で出土した未製品に示されるように、広鍬など農具を中心とした木製品の製作が確実に行われるようになることは注目される。木製品以外にも骨角器及びその材料と思われる切断痕のある鹿角あるいは敲打痕の著しい敲き石・磨石の出土も顕著になり、河道周辺における骨角器や各種石器の製作活動も開始されたようである。



第７図　No.１－Ａ地点「宮ノ台期」旧河道遺物出土状況
（左上全体図太枠部分、点線枠は第８図）

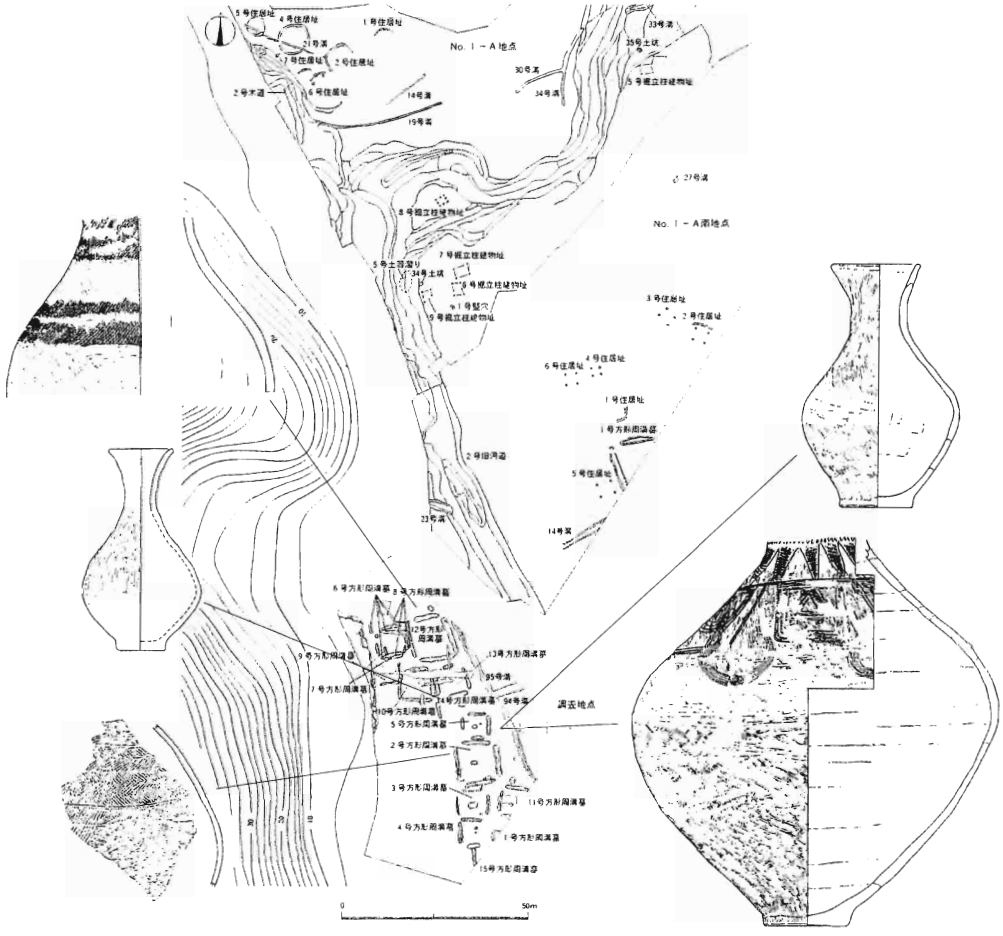
こういった各種生活用具の河道周辺での製作傾向は、３期以降「宮ノ台期」を通じて継続し、結果的に河道内に大量の遺物が残されることになるが、最終的に「宮ノ台」末期に大規模な洪水に起因すると考えられる厚い砂礫層で一気に埋没することに伴い、上層部分が多少押し流されたのか、５期相当の遺物が量的には減少する。ただし、それを考慮に入れても土器の量的なピークが３～４期であるのに対して、石器・骨角器は２～３期になり、４～５期には減少というように、それらの製作活動は「宮ノ台期」の新しい段階にはやや下火となるらしい。一方、木製品は数的には多少減るものの、埋没直前まで河道周辺の各所で製作が盛んに行われていたようで、河道上層で比較的現位置を保った状態で出土する各種未製品が多い。特に後述「１号しがらみ」の前面の河道東岸の斜面途中に断面三角形の厚板を２箇所縦杭で留めた踏み台状の施設が設けられており、その前面の河道上層には多数の農具未製品があたかも水漬けそのままといった状態で出土している（第８図）。実際、河道の岸辺近くには数箇所から掘立柱建物址が発見されていて、厳密な時期比定は、出土遺物に乏しいこともあり困難だが、形態からは住居とみなすより、それらの各種生活用具製作の「作業小屋」もしくは「倉庫」のような施設であったと考えたい（第３図）。



第８図　東流路北側（Ｄ－ＸＩ－73・74グリッド）における木製品出土状況

（ｄ）No.１－Ａ地点周辺における集落の位置について

それでは、以上の各種遺物を河道に残した集落の本体はどこに存在していたのかと言うと、No.１－Ａ南地点側の微高地部分と思われるが、残念なことに近世～近代段階に大幅な転地返しを受けて、50cmから１ｍ近くは削平されたようであり、数軒の「宮ノ台期」竪穴住居址及び方形周溝墓らしき遺構が発見されているものの、いずれも柱穴もしくは周溝のみといった残骸状態で、実態はほとんど不明となっている。ただし、集落の形成されていたと推定される平場の範囲は、さらに現在の京浜急行線路敷の南側に広がるものと思われ、その面積は5000㎡前後に及ぶ可能性もある（第２図のトーンの範囲）。なお、No.１－Ａ南地点の南西側に隣接する山裾部の桟敷戸遺跡では、数基の方形周溝墓が南北に列状に発見されているが、出土した土器を見る限りでは、３～５期に渡るらしい。ただし、墓域はさらに調査区外の南方に広がるようであり、なお多くの方形周溝墓がそちらにも存在する可能性が強い。ちなみにその方形周溝墓出土土器の中には北武蔵系統の紋様が施される壺が含まれていて、注目される（第９図）。



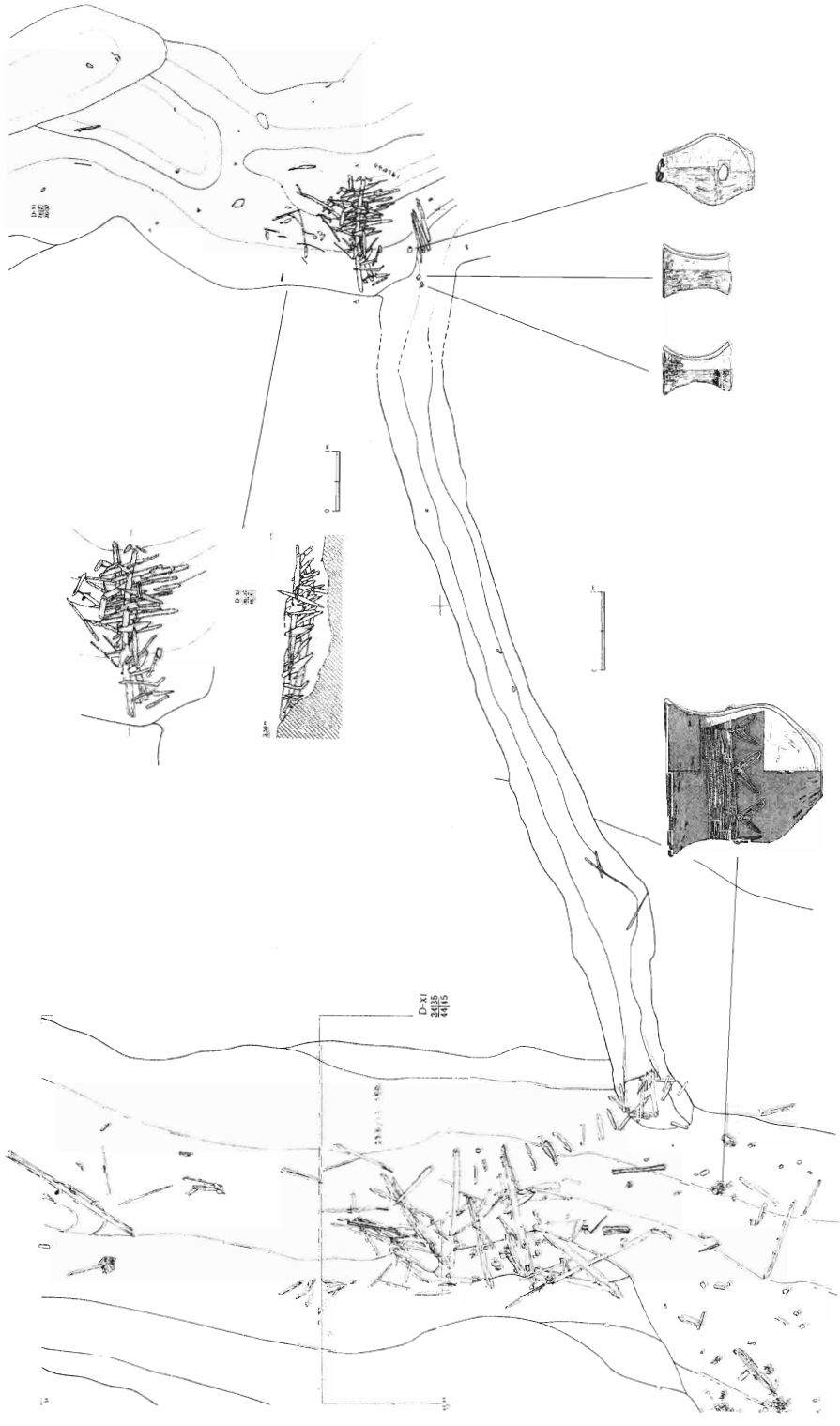
第９図　池子桟敷戸遺跡の方形周溝墓群と出土土器

そのNo.１－Ａ南地点の集落とは別にNo.１－Ａ地点北西側山裾、河道上流部東側のやや狭い平場に「宮ノ台期」の小規模な集落（１～２軒程度？）が形成される（第３図)。出土土器からはおよそ３期で、西側に接する河道内に投棄された一括土器も同時期に比定される。１～２期及び４期以降の土器は平場からも西側河道内からも出土しておらず、この段階に南側の母村から分岐して住居を構えたものの短期間でなぜか廃絶してしまったらしい。河道内の一括土器はおそらく廃絶の際に投棄されたものと思われる。この内、１軒の住居内から短く使い切った状態の扁平片刃石斧や骨角器の細部加工に使用したと考えられる板状砥石が出土しているので、あるいは山裾部で木製品もしくは骨角器製作にあたっていた小集団の住居かもしれないが、隣接する河道内からはそれらの未製品や原材の出土は明確でなかった。

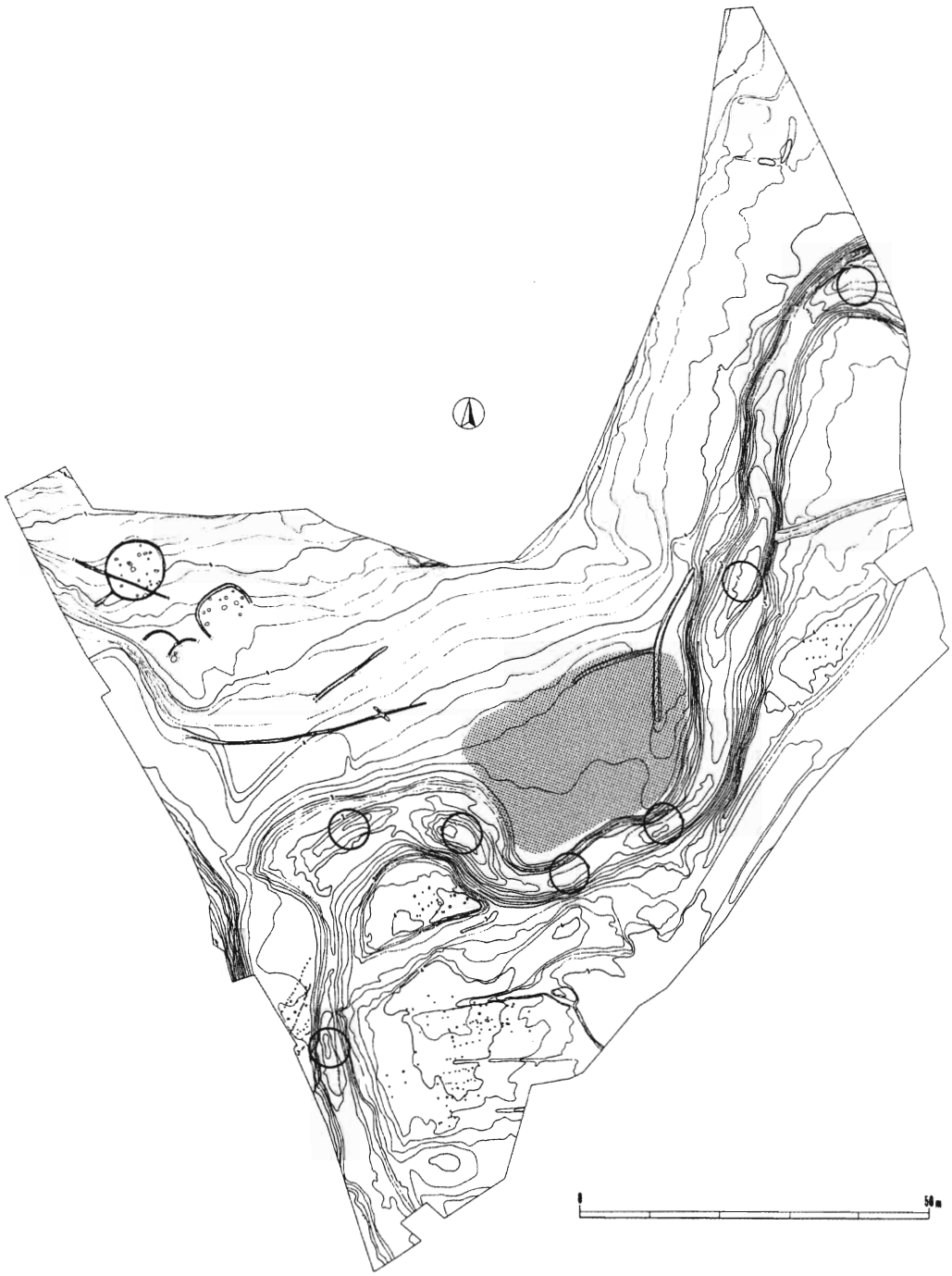
（ｅ）水のコントロールに係る河道と「しがらみ」及び溝の相互関係

ここで河道内より発見された「しがらみ」について、その構築時期などを検討する。まず、No.１－Ａ東流路をやや下った箇所に長大な木材が乱雑に折り重なった状態で検出されており、調査当初は必ずしも「しがらみ」とは想定していなかったが、その河道東岸に接続する溝（第33号溝）が、後に調査したさらに下流のNo.１－Ａ東地点側で検出された明確な「しがらみ」(調査時点の「１号しがらみ」) に接続することが判明したため、この木材集中箇所も「しがらみ」が後の洪水等で乱されたものと判断したものである（こちらを「２号しがらみ」とする、第10図)。両「しがらみ」とも実際には河道の底面よりやや浮いており、河道が多少埋没した段階で、先の溝との関係から「２号しがらみ」とほぼ同時に構築された可能性が強い。「２号しがらみ」の前面の河道下層からは３期でも古手の大型広口壺、下流側の河道底面では２期の横走羽状紋甕が出土している。また「１号しがらみ」周辺では２期の櫛描紋壺が底面、３期～４期の櫛描紋及び羽状縄紋壺が「しがらみ」のすぐ後方のほぼ同レベルで出土している。したがって、２期から３期までのやや埋没し始めた段階で、どちらの「しがらみ」も構築されたものとほぼ判断される。機能的には「２号しがらみ」は３期以降５期末の埋没まで機能していたと思われる（上面を覆っていた砂礫層より後期初頭の土器が出土)。ただし「１号しがらみ」の方は、「２号しがらみ」を含む東流路全体を覆っていた黄褐色砂礫層ではなく、きめの細かい砂層で埋没しており、その砂礫層の原因となった洪水の発生時にはすでに埋没していた可能性がある。実際、その砂礫層は東流路がNo.１－Ａ東地点に入って急激に南方に屈折する箇所に接続して直線的に東北側（No.１－Ｂ・１－Ｃ地点側）に伸びる「２号旧河道」側よりもたらされたものと思われるが、その屈折箇所から南方の「１号しがらみ」側には及んでいない。こちらの周辺では、ほかに上面で４期の羽状縄紋壺破片が出土しているのみで、５期の資料は明確でなく、その頃までには機能を失っていたものと思われる。

では、この「しがらみ」を含めて、河道において当時どのような水流のコントロールがなされていたのだろうか。それを考えるには、最初に河道底面の数箇所に認められる周囲より一段深くなる部分について、触れなければならない。これらの全てが人為的とも決め付けはできな

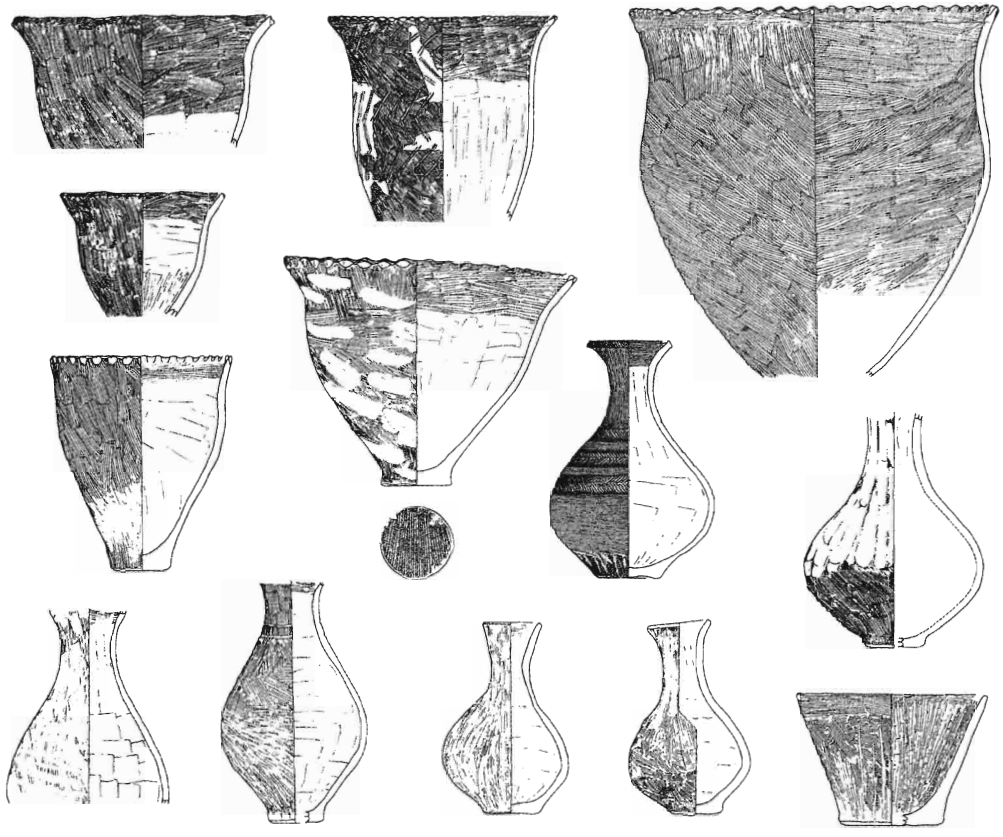


第10図　「1号しがらみ」（右）及び「2号しがらみ」（左）及び第33号溝周辺



第11図　No.1－A地点「宮ノ台期」旧河道における底面の「掘り込み」箇所
（○箇所）及び水田推定範囲（トーン部分）（山本1991より作成）

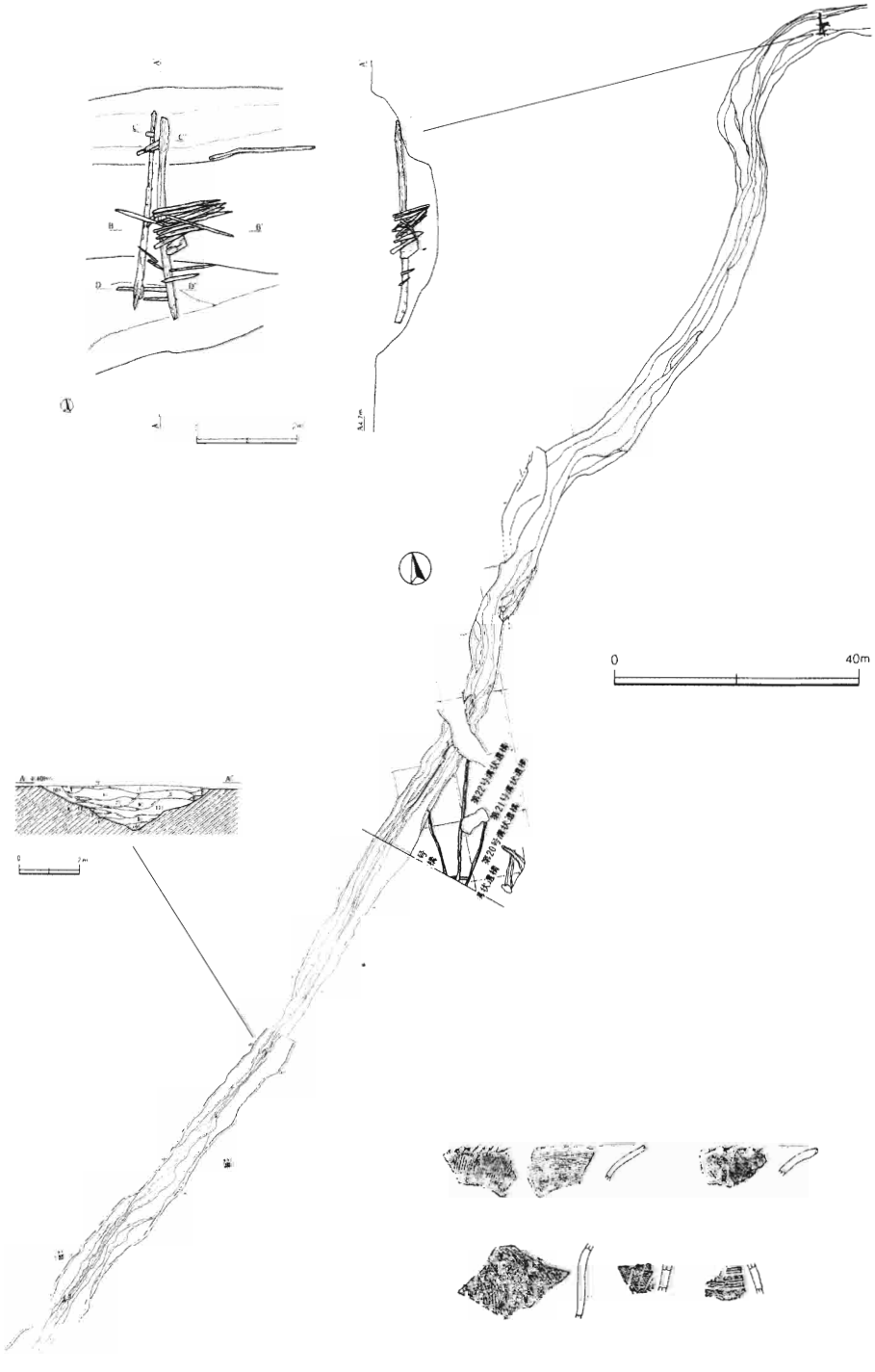
いが、単に水流の結果としてこのような凹凸が生じたとみなすにしては不自然な要素もあり、筆者としてはそのいくつかについては「水ため」の目的で意図的に掘り込まれたものと考えたい（第11図の○部分）。時期はそのような部分の底面より出土した土器から２期から３期の時間幅の中でそのような掘り込み行為がなされたものと推測する。前述した河道底面における１期以前の層位の不明瞭さはこれに起因する可能性もある。多分に想像が入るが、当時水量がそれほど多くなかったこともあって河道底面を部分的に掘り下げ、その凹地部分に水をためて、生活用水のくみ上げを行ったり（周辺では弥生期の井戸は発見されていない）、木製品（及び骨角器？）製作の「水漬け」作業を行っていたものと思われる。動機としては木製品製作の本格化に伴う必然的な行為とも解釈できるかもしれない。そういった人為的な掘り込み行為の傍証として、貝殻破片が胎土に混入した土器の存在を挙げてみたい（第12図）。報告書でも触れたが、河道の底面は縄紋海進時に形成された自然貝層を含む緑灰色粘土層に達しており、それを掘り上げた土で土器を焼成すれば貝殻破片が胎土中に当然混入するものと考えられる。そして、そのような胎土の土器は２～３期にほぼ限定できるのであり、その段階に自然貝層を含む河道底面の粘土の採取、つまり掘り込み行為がなされたと考えるわけである。



第12図　No.１－Ａ地点出土の貝殻破片混入「宮ノ台式土器」

そのような河道に対する底面の掘り込みという初期的な働きかけの後に、先述のように「しがらみ」が構築される。これは河底を掘り込んでも多少の出水ですぐに埋没してしまうことに対して、能動的に「水ため」状態を確保するためのより積極的な働きかけと評価できる。この２箇所の「しがらみ」によって、どのように水が堰きとめられたのかというと、当然それぞれの「しがらみ」の上流側になるが、まず「２号しがらみ」の前方と「１号しがらみ」の後方を接続するように先述第33号溝が接続することは前者によって堰き止められた水のオーバーフロー分を下流側に流すための施設と考えられる。一方、「２号しがらみ」前方の西岸側には別の溝（第30・34号溝）が山側から接続している。この延長上の平場部分は上面の削平が著しいが、さらに延長すると先述調査区北西側のテラス部分を巻くように河道上流部から分岐した溝（第19号溝）につながる。このテラス南東側の河道との間の部分は、地形的にもフラットであり、このような溝の存在からもあるいは狭いながらも水田が営まれていた可能性もあり、これらの溝はそれに伴う水路とも考えられ、調査区北西河道上流部からと「２号しがらみ」によって下流側からも取水していたと想定することができる。実際、河道内から広鍬等農具木製品の未製品・完成品のほか、破損品も出土しており、このエリア（第11図トーン部分）に水田が営まれていたと仮定すると、そこでの使用における破損ということで説明が付けられる。なお、第19号溝内からは完形の４（～５）期の壺が出土していて、あるいは先に触れた北西側テラス上の３期小集落の廃絶後に造られた可能性もある。

では「１号しがらみ」の場合は、その前面からそれこそ「２号しがらみ」までの間に「水ため」が生ずることになる。同じ河道の比較的至近距離になぜ２箇所も「しがらみ」を設ける必要があったのか、という疑問が生ずるが、それを解明する鍵は、両「しがらみ」の中間、東流路屈折箇所に接続する小規模な河道（№１－Ａ東地点の「２号旧河道」、№１－Ｂ地点の「小旧河道」、№１－Ｃ地点の「第18号溝状遺構」、今回「２号旧河道」に統一する）にある（第13図）。「２号旧河道」は、底面から２～３期の土器片が出土していて、中期末には先の黄褐色砂礫層によって埋没する「宮ノ台期」の遺構である。これについては、調査当初は地形的に谷奥側の№１－Ｃ地点側が上流で、そちらから平地側の№１－Ａ東地点側に注ぎ込むものと想定されていたが、実際№１－Ｃ地点側の同河道内より発見された「しがらみ」（「３号しがらみ」とする）の構造を再検討すると、縦杭が打ち込まれた方向からはその南側に水を堰き止めるように構築されていることに気付く。また、各地点での「２号旧河道」の底面のレベルを見ると、№１－Ａ東・１－Ｂ地点ではほぼ標高2.8m前後で一定するが、№１－Ｃ地点では標高２mからそれ以下になり、明らかに低くなっている。つまり、２号旧河道の水流の方向は、少なくともこの「３号しがらみ」構築時点までは、これまでの想定とは逆に南から北方向と考えられるのである。以上から「１号しがらみ」はその堰き止めた水を「２号旧河道」側に流すために設けられた施設と考えてみたい。そこで実際「２号旧河道」を見ると№１－Ｃ地点側で多少蛇行しているものの、№１－Ａ東・１－Ｂ地点側ではほぼ直線的であり、自然流路にしては不自然



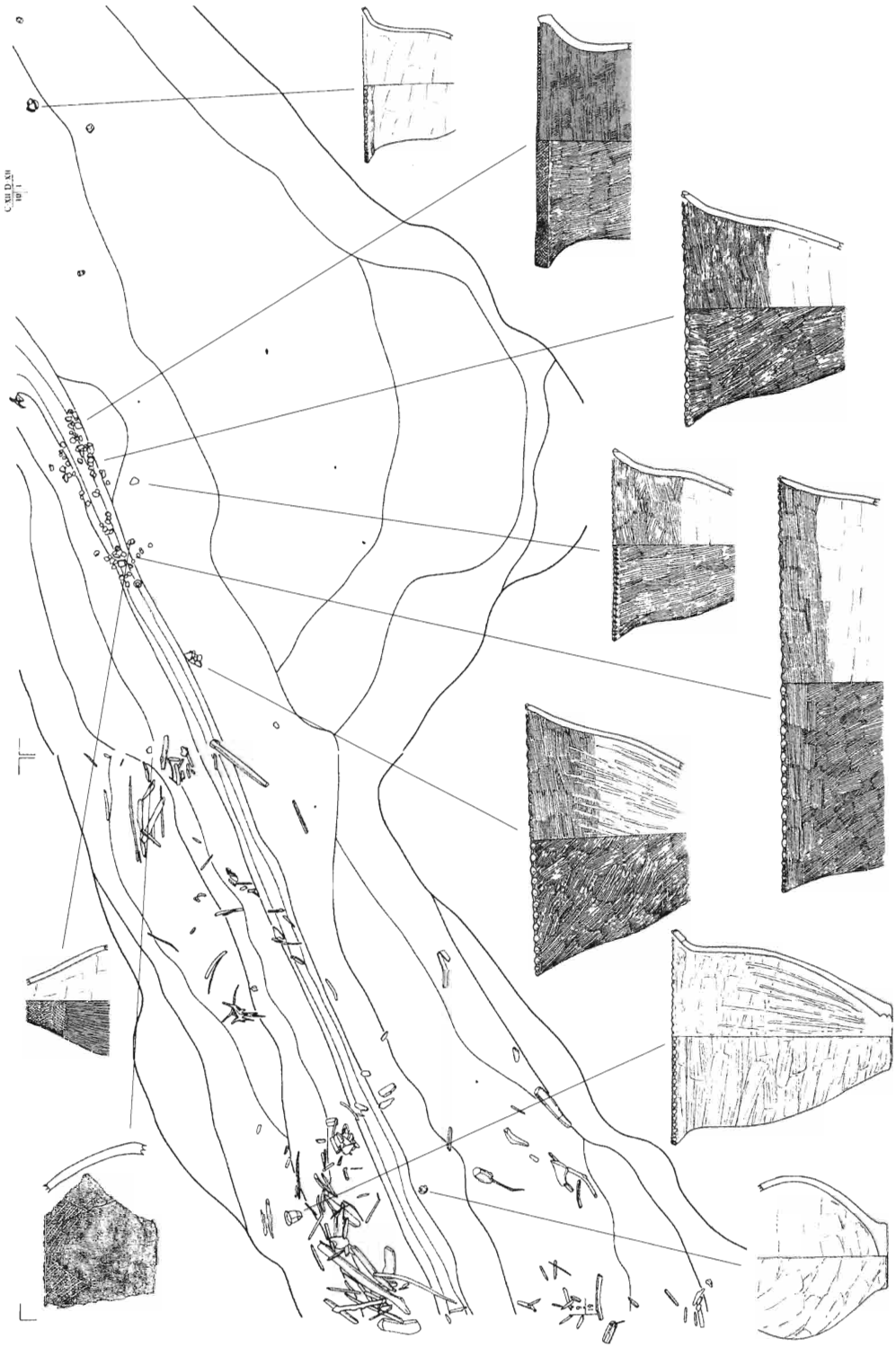
第13図　「２号旧河道」と「３号しがらみ」及び出土土器（右下）

な形状である。断面形態も特にNo.１－Ａ東・１－Ｂ地点側では「Ｖ字」状を呈することにも注意される。これらのことから「２号旧河道」も人工的な遺構である可能性も充分に考慮され、その目的は「３号しがらみ」の存在にも窺えるように北西側（No.１－Ｃ地点側）の山裾部の低地一帯を可耕地とするべく灌漑用に構築されたもの、それに加えて山手からのイノシシ・クマ・蛇など害獣の侵入を防ぐためのものとも考えてみたい。

実際、No.１－Ｃ地点側の南東部では「２号旧河道」に小規模な溝が接続している状況が確認されており、水田に関連する遺構とも考えられるが、「３号しがらみ」付近にはそれが見られず、水田そのものの遺構の存在も不明確である。こちら側では農具を含め、「２号旧河道」内からの遺物の出土自体が極めて少なく、「３号しがらみ」も「１号しがらみ」と比較すると、それほど構造的に堅固なものでもないので、仮に調査では検出が困難だった水田関連の遺構が周囲に存在していたとしても、実際の耕作作業はそれほど盛んではなかったとは言える。なお、「２号河道」の排水路としての掘削時期については、前述の底面出土土器の時期から、「しがらみ」構築以前の２期段階に遡る可能性が高い。

それでは、「２号河道」の流れの向きが南から北方向と考えた場合、その先はどうなるのかという問題については、No.７地点西側及びNo.５地点南側で検出された、少なくとも弥生後期には存在し（遺物の出土に乏しいので時期不確定、「宮ノ台期」に遡る可能性は大）、古墳前期に埋没した旧河道が池子遺跡群を南北に貫く「本谷」のメイン流路とみなした場合、それに注ぎ込んでいたものと考えたい。肝心の接続部分及びその下流の状況は現在の池子川の流路にほぼ重なってしまったために、不明確になったものと推測される。

このように「しがらみ」と河道、溝などの関係を検討してきたが、その中で「１号しがらみ」が４期に埋没したということは、それを含む東流路下流部分が機能を失ったことを意味する。そうなると先述した「１号しがらみ」前方からオーバーフローした水を「１号しがらみ」後方へ排水するための第33号溝も意味が無くなってしまう。では、その後「２号しがらみ」によって溢れた水の処置についてはどのように考えればよいのか。ここで東流路と南流路が分岐する前面に存在する「中州」が問題となってくる。この「中州」は、本来河道南側の微高地が分岐した東流路の蛇行により北側に半島状に突出した部分だったのが、東流路が東方に屈折する箇所から南流路に接続するように東西に走る浅いバイパス状の流路（以下「バイパス流路」）のために、そのような形状になってしまったものである。この「中州」上には先述した掘立柱建物址が検出されていて、それが「バイパス流路」に切られていることから、「バイパス」流路は当初には存在せず、ある段階に出現し、また下層に至るまで先の黄褐色砂礫層で埋没していることから、「宮ノ台期」末まで機能していたことは確実である。実際、下層から４～５期の資料、砂礫層上部より後期初頭（「宮ノ台式」直後？）の甕が出土している（第14図）。筆者はこれが第33号溝を経由した「１号しがらみ」後方への排水が機能しなくなって以後、オーバーフロー分を南流路側へ排水するために人為的に構築された流路であると考える。調査当初は、



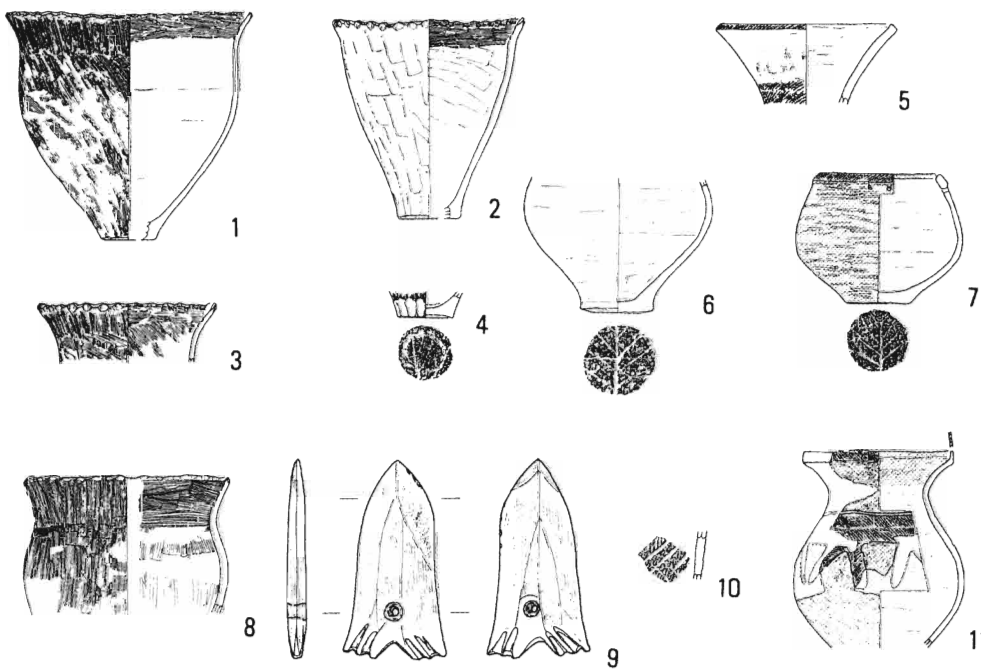
第14図　「バイパス流路」と出土遺物

砂礫層の原因である大規模な洪水により削り込まれた自然現象によって形勢されたとも思われたが、底面～下層より土器が投棄された状態で出土したことから、やはり「洪水」以前にはすでに存在していたものと思われ、形状が直線的であること、浅いが底部が細く溝状を呈することなどから、人工的な遺構（当初は断面Ｖ字形であった可能性もある）と判断する。構築時期については、先述出土土器から４～５期、「１号しがらみ」を含む東側流路下流が４期までに埋没してしまったことを契機に新たに掘り込まれたものと推測する。この「バイパス流路」底面とその東側の東流路底面の標高差は１ｍ以上になり、「バイパス流路」掘削時点では、東流路がそのレベル近くまで埋没していた可能性が高い。

なお、南流路は１期より５期に至るまで機能していたことが出土土器の時期から明らかであり、木製品製作も５期まで盛んに行っていたが、やはり最終的に東側流路側からもたらされた黄褐色砂礫層・砂層によって上面を覆われて、河道としての機能を失ったと推測される。ただし、各所で弥生後期及び古墳時代前期の土器が砂礫層及び上面に形成された粘質土層より出土していることから、「宮ノ台期」以後も南北に谷状の湿地帯を形成していたと思われる。

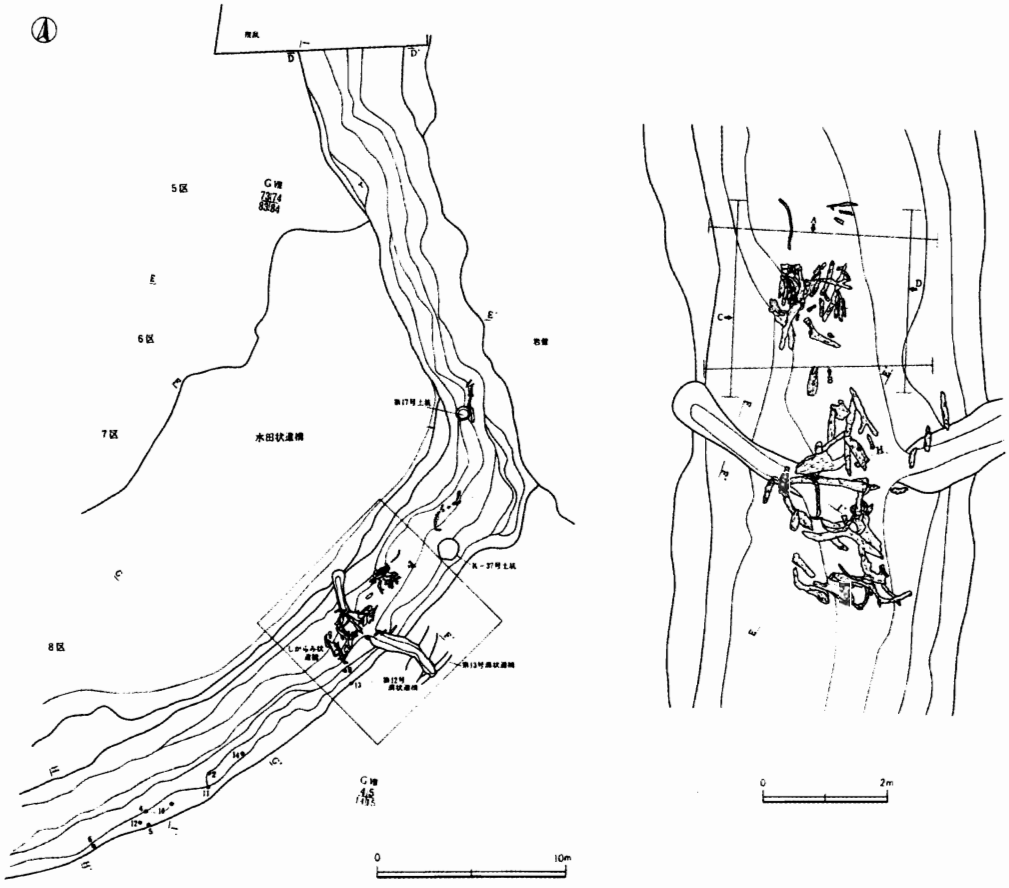
（ｆ）谷奥部の様相

ここで、谷奥部の様相に触れると、先に触れたNo.７・５地点の旧河道はその蛇行した形状から、自然の流路とみなせられるが、人為的な活動の痕跡としては、まず「本谷」を遡った西側に伸びる谷戸に形成されたNo.６地点より土器集中箇所が発見され、炭化材も伴うので住居址の可能性もある（調査時点では壁等の存在は不明瞭）。時期は先述した１点の１期甕破片を除け



第15図　池子遺跡群谷奥部各地点における２期以降の遺物
（１～７－No.６地点、８－No.７西地点、９－No.７東地点、10・11－No.８地点）

ば、ほぼ4期前後に比定される。これも先述したNo.8地点の1期比定竪穴住居址と同様に母村から隔絶した地における何らかの単独的な活動を示すものである。No.8地点でもその住居址とは別に遺構外包含層より1～3期の資料が少量ながら出土しており、1期以来継続的に谷奥部へも何らかの「働きかけ」が行われていたことを窺わせるが、あくまでも散発的なものに留まり、「谷水田」の経営など大規模な開発行為には、結局至らなかったようである。それに、出土遺物は土器のみであり、木製品及び磨製石斧等石製工具類は出土しておらず、谷奥部だからといって原木の伐採・加工などの木材生産活動を行っていたとも必ずしも想定できない。ただし、興味深いのは、No.6地点に相対する東側に伸びる谷戸であるNo.7地点のさらに奥の箇所から、「宮ノ台期」に比定して差し支えない有孔磨製石鏃がなぜか単独で出土したことである。この谷戸内からは当該期の遺構はおろか1片の土器も出土しておらず、あるいは狩猟活動の結果、偶然この地に残されたものとも思えるが、そもそも池子遺跡群を含めて周辺の「宮ノ台期」集落遺跡でも有孔磨製石鏃は決してポピュラーな遺物ではないにも関わらず、なぜこのような「奥地」で美麗な完形品が存在するのか、その意味は不明としか言い様がない（第15図）。



第16図　No.5地点検出「水田状遺構」と「しがらみ」

なお、№5地点旧河道の調査区南端近くで、「しがらみ」の残骸らしき木材がやや集中した箇所とその周囲に一段低い地形の広がり及びそれらをつなぐ取水口のような溝が検出され、「水田状遺構」と報告されている（第16図）。ただし、旧河道も含めて遺物は上面を埋積する黄褐色砂礫層より出土した古墳時代前期～中期土器がほとんどであり、報告者は「水田状遺構」は少なくとも弥生時代後期には遡れるとして、構築時期はそれ以前（弥生中期）になる可能性もあるとしている。土壌分析の結果、上層より「イネ及び水田雑草の植物珪酸体化石が検出」され、下層からも一部「水田雑草及び畦畔雑草の植物珪酸体化石」が得られたというが、分析された江口誠一氏の御教示によれば、「水田の可能性がなくはない」程度の量であったという。この「水田状遺構」には、弥生期の通常の水田とは異なり、畦畔や杭列等の区画施設は認められず、単なる広めの凹地状地形であるに過ぎないが、仮に「宮ノ台期」水田であった場合、先の土壌分析結果からあるいは試行的なものであったかもしれない。

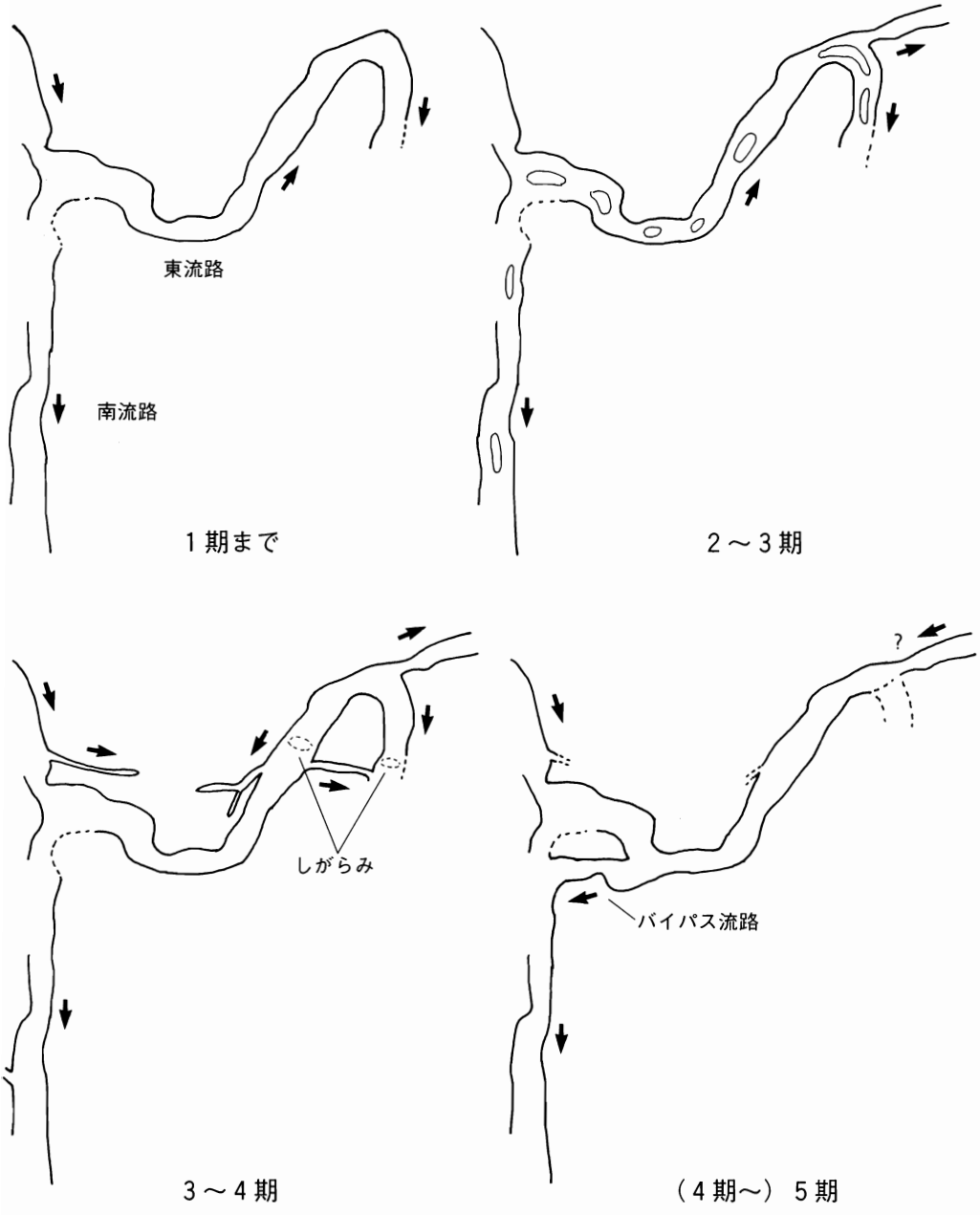
（g）池子「宮ノ台期」の終末

最後にたびたび触れている「宮ノ台期」末期の黄褐色砂礫層についてだが、先の№7及び№5地点で検出された旧河道が同様の大量の砂礫で埋没しており、おそらくは「本谷」上流部での丘陵部一部崩壊に伴う土石流の如き現象によるものと推測される。これまた想像部分が大だが、この「土石流」が「本谷」部のメイン流路を一気に流れ下る中で、本来№1－C地点側から注ぎ込んでいた「2号旧河道」へ逆流することになり、それによって№1－A地点へも影響が及んで河道全体を埋没させたほか、周囲の微高地上の集落にも壊滅的な打撃を加えたものと思われる。もっとも、これまで見てきたように、№1－A地点旧河道は1期以降徐々に埋没し、一部は5期までに流路としての機能を失っていた。そのような流路が埋没して浅くなった状態、換言すれば排水路としての機能が低下した状態を放置していたがために、それまで以上の土石流的な激しい出水に際して、集落として対応できなかったものとも想像してみたい。前述したように5期には遺物出土量が減少傾向にあり、この「流路の放置」という現象からも、5期における集落としての活力の低下が窺える。その原因の究明は今後の課題だが、いずれにしても、河道の埋没と同時に池子「宮ノ台期」弥生集落は終焉することになる。

以上の検討の結果、特に№1－A地点周辺の流路の時期による変遷を第17図にまとめたのでご参照いただきたい。

3. 小結

池子遺跡群の発掘調査成果に基づき、その集落というか、遺構の動向について、特に№1－A地点「宮ノ台期」旧河道の状況の変遷を中心に筆者なりの考察を試みた。結局は池子遺跡群でも最も海寄りの平地部分に集落が営まれ、水稲耕作や漁労・狩猟活動を行っていたと同時に、集落を取り巻く河道周辺で、木製品や骨角器生産にも従事していた、という報告書での結論に



第17図　池子遺跡群No.1－A地点「宮ノ台期」における流路の変遷

は根本的な変更はない。しかしながら、土器の時期細分を基に、可能な範囲で遺構の構築・埋没時期等を再検討した結果、報告書刊行時点での所見と異なる結論も得られたが、これにより当該期の複雑な遺構の展開がある程度整理できたことで、報告書刊行後に残された調査者の責務の一端を多少は果たせたものと考えている。

なお、今回は筆者の準備不足もあって、「宮ノ台期」以前の様相の詳細及び弥生時代後期以降の動向には触れることができず、また周辺の「宮ノ台期」集落との比較検討もかなわなかった。加えて木製品や骨角器の生産活動の実態についても別途再検討する必要を感じている。それらについては、別の機会に改めて論じたい。実際に発掘調査に携わったものでなければ判断が難しい微妙な問題も少なからず存在するので、それら再検討作業はなるべく早い段階で形にしたい所存である。

最後に、編集担当の小滝勉氏と依田亮一氏には本稿の本誌への掲載をお勧めくださったことに感謝申し上げるとともに、また原稿提出の遅れなど大変なご迷惑をお掛けしたことを深くお詫びする次第である。

註

1．これについて松島義章氏は、「約2000年前の弥生時代の小海退」が池子遺跡群でも認められることを指摘されていて(松島1999)、これにより河道の下刻が一時的に進行したものと想定される。このことは当該期資料の中で、河道内上下流のかなり距離が離れた状態で同一個体の破片が出土する場合が多く、「宮ノ台期」に現位置から流されて移動したと考えられる点からも裏付けられる。

参考文献

松島義章1999「縄紋海進に伴う逗子低地の地形変遷」『池子遺跡群X別編・自然化学分析編』
若松美智子他2000『神奈川県逗子市池子桟敷戸遺跡』東国歴史考古学研究所
山本暉久1991「逗子市池子遺跡群No.1－A地点弥生時代旧河道の調査」『第15回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会
（池子遺跡群発掘調査報告書）
桝渕規彰他1994『池子遺跡群Ⅰ－No.2地点・No.1－B地点』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告27
桝渕規彰他1995『池子遺跡群Ⅱ－No.1－D地点』かながわ考古学財団調査報告3
桝渕規彰・新開基史他1996『池子遺跡群Ⅲ－No.1－C地点』かながわ考古学財団調査報告11
山本暉久・谷口肇・小林泰文・植山英史1996『池子遺跡群Ⅳ－No.6地点・No.7地点他』かながわ考古学財団調査報告26
桝渕規彰・植山英史他1997『池子遺跡群Ⅴ－No.8地点・No.9地点・No.10地点他』かながわ考古学財団調査報告27
桝渕規彰・植山英史1998a『池子遺跡群Ⅵ－No.5地点他』かながわ考古学財団調査報告36
桝渕規彰・植山英史1999b『池子遺跡群Ⅶ－No.1－E地点他』かながわ考古学財団調査報告43
長谷川厚・新開基史他1999『池子遺跡群Ⅷ－No.3地点・No.4地点他』かながわ考古学財団調査報告44
山本暉久・谷口肇1999a『池子遺跡群Ⅸ－No.1－A東地点・No.1－A南地点』かながわ考古学財団調査報告45
山本暉久・谷口肇1999b『池子遺跡群X－No.1－A地点』かながわ考古学財団調査報告46

隠蔽された「小田原式」

—「小田原の土器」の復権と「小田原式」研究の展望—

鈴　木　正　博

1. 序－「藤村新一事件」と「小田原式」隠蔽は同根！－
2.「小田原式」隠蔽の形成と「小田原の土器」の行方
3.「小田原の土器」の復権による新たなる「小田原式」隠蔽の展開
4.「小田原の土器」研究法と「小田原式」の復権
5. 結語—「小田原式」研究の今日的意義—

1. 序－「藤村新一事件」と「小田原式」隠蔽は同根！－

尚記憶に新しい「藤村新一事件」は、極論すれば皮肉にも戦後における似非考古学の形成過程を如実に露呈した点が戦後の主導者にとって悲劇的致命傷なのであり、「こうした学界形成は捏造者一人の責任ではあるまい。それは演劇における、道化役（捏造者）・主役（取り巻きの研究者）・演出家（意義付けを担う研究者）・プロデューサ（前期旧石器のオピニオン・リーダ）・評論家（学界の権威者）のそれぞれに責任があり、もたれ合った学界の構造的な汚染なのである」（岡本東三2003）と社会的な役割分担のみは明らかとなったものの、実体不在にも拘らず摩訶不思議な組織的展開が進行したため、「藤村新一事件」の国民への背任意識は当事者達にとっては転嫁・回避という新たな捏造対象となり、何故か真摯な学徒のみが自己責任として歴史的な重荷を以後背負うことになった。

加えて「藤村新一事件」が悲惨なのは、犯罪的な物理的な捏造から学問的な捏造へと反映させるモラルハザードとしての展開プロセスそのものをも赤裸々に検証してしまった点であり、実はそれを為し得た点が日常茶飯事の縦割り行政的な広報活動であったという、学問的な倫理不在の構造実態もが露呈されてしまった点である。官学民による共謀共同正犯を決して疑わない理由は正に学問手続きの不在にあるのであって、その根は想像以上に深い（紅村弘2003）。

特に日本先史考古学では戦前の人類学先史学を基盤とした学史の重要性を理解せずに学史を捏造する風潮が顕著であり、最近は学生思想家よろしく人生観を「宙返り」させるときには、皆を喜ばせたい一心で驚くほどの幼稚な曲解を、初学者向きに意識的に誘導するものもいる（大塚達朗2000）。読み物としては面白く、最近はそれで良しとする風潮が蔓延っているが、山内清男氏の学説を意識的に捏造した行為だけは絶対に赦し難い。

このように戦後の日本考古学には、原因が犯罪的な捏造であろうが、正規な学問的な手続きであろうが、実体の無い摩訶不思議な組織形成プロセスによって、学問か否かの問題を不問に

してしまうような非科学的な考古学運用が一般化していたのである。これは最早「学問不在」と呼ばざるを得ない状況であるが、戦前にはミネルヴァ論争に代表されるように「土器型式」による先史考古学の方法が確立されており（山内清男1936ａ・ｂ）、科学的な学問成果が非科学的な捏造（具体的には純粋な子供の言い分をそのまま信じて学問的に検証する術を持ち得なかった喜田貞吉氏の常識考古学）に打ち勝ってきたのである。

問題は戦後の何でもありの野放し文芸風潮であり（人生に夢や希望を与えるための便法に留めるべき知性が必要であったが、高度経済成長と共に感性依存に興じ過ぎ、歯止めが掛からなかったところに捏造の温床を指摘しなければならないのであり）、戦前の学問に求められていたのは基盤の確立という、禁欲性かつ論理の熟練性を背景にした体系的な接近であり、それを達成したにも拘らず、戦後は解釈との間を埋める学問的基盤構築努力を惜しむために、人生観や感想を考古表現として押しつける風潮に価値観を求めて、戦前への反動形成が加速された。このような戦後の「学問不在」を目の当たりにすると、実は型式学不在などは可愛いレベルの悲観現象である。それ以上に不気味な村社会が形成されていた点に真の反省が求められるべきであり、「考古学」から「（埋蔵）文化財学」への転換（即ち、学界から業界への恣意的転身）が正にそれを象徴しており、学問としての地域研究を蔑ろにし、情報戦略としての地域広報に組織的に特化した結果、「考古学栄えて考古学滅ぶ」（鈴木正博1997）と警告したとおりに捏造の温床が加速したのであった。

このような認識に立った時、南関東弥生式でも方法的に再検証を必要としている多くの問題が山積みしている（特に本稿では精製土器様式を中核に議論する立場で、粗製土器様式は精製土器様式に準ずる位置付け（つまり、粗製土器様式は「土器型式」の内容を充実させる意義は認められるが、「土器型式」を規定する役割は認められない）であることだけは冒頭にて明記しておく必要がある）。私は西部弥生式全般への直接の関わりが尚薄く、その影響もあり、南関東では主に弥生式の成立から中期までを見直してきたが、ここ四半世紀にわたる継続性により、どうやら俗称「須和田式」までは「土器型式」研究における議論の基盤が再認識されてきたように思われるので、本稿では南関東弥生式社会の転換点と推察される「小田原式」研究の意義を認識するための土台構築を目指して、「分類の標準」から観た「小田原の土器」研究法を確認し、一層の議論の活性化に貢献したいと思う。

そこで先ずは「小田原式」を隠蔽しようとする心の持ち方が、実は「藤村新一事件」発覚以前における疑義を抹殺してきた群集心理と極めて共通した意識であり、あるべき学問的手続きを踏まえることなく特定の結論へと導いてきた経緯から確認しておく必要があろう。

2.「小田原式」隠蔽の形成と「小田原の土器」の行方

「小田原式」理解には幾つかの立場があり、それらはそのまま弥生式研究の理念及び方法と

相同であり、しかも既に戦前に原型は決定されていた。そしてそこには遺蹟・遺物の理解から地方の理解に至るまで影響を及ぼす、方法の恐ろしいほどの違いが顕現していた（鈴木正博1999）のであり、南関東の研究者は山内清男氏が確立した基礎理論の学習を疎かにしているためか（伊丹徹1990)、先史考古学の方法に疎く、しかも意見の相違に立脚した今後の課題を螺旋上昇的に生成すること無く、人生前向き、学問後ろ向きを標榜し、業界談合よろしく仲間内のマニュアル整備（思考停止状態）に腐心しているように見える。必要なのは個々人の資質の発現促進であり、それを効果的に進めるには基本的な守→破→離の手続きを踏むべきと思量する。

「小田原式」の真相は後述するとして、特に最近の潮流は「小田原式」を「宮ノ台式」の中に吸収しようとする意見が圧倒的に多い。この見解は原型が「様式論」思考（小林行雄1939）にあり、関東地方の「土器型式」から除外した扱いに範を求め、やがて神澤勇一氏が関東地方の「土器型式」に戻すとともに「宮ノ台式」から除外した東京湾西部の独自性の扱いを弥生式全体の地域性の中で捉え直し、更には杉原荘介氏が土器群の持つ属性から「細別」（杉原荘介1936ａ・1936ｂ）した小田原遺蹟出土土器群、特に著名な「小田原の土器」２個体を検証せずに一括してしまう立場（神澤勇一1968）に尽きる。

そうした動向にあって三宅島ボウタ遺蹟の調査（大塚初重1965）は特に精製土器様式の文様としては注目すべき成果をもたらしたのであるが、何故か杉原荘介氏の議論展開を重視した大塚初重氏の立場を端緒として多くは粗製土器様式のみを根拠とする、編年的位置を特定し得ない議論が展開されることになり、その悪しき発想は私の学生時代にも着実に影響を与えていた（星田亨二1976)。

そこで「土器型式」を特定する重要な「精製土器様式」の壷については、杉原荘介氏による最終的な見解を確認しておく必要がある。そこには極めて重要な分類概念が示されていたからである。即ち、「小田原前期」（杉原荘介1936ｂ）には「第二類土器」（杉原荘介1936ａ）とした「器の内外面には多く丹が塗られる」「文様は所謂櫛目文」とともに、「第四類土器」とした「小田原出土の弥生式土器として最もよく知られているもの」２個体の「特異化せる櫛目文」（丹は塗られていない）の櫛目文二者が見事に分類され、最終的な見解としては「赤色の塗彩をほとんどおこなっていないのは、次期と比較して、また一つの特色としてよいであろう」と裁断されたのである（杉原荘介1968)。こうして「小田原前期」の「第二類土器」は自らの定義の変更により「小田原式」ではなく、「宮ノ台式」との明確な認識のみを示した（実際には変更手続きを明示しなかったので混乱の原因にもなっている）のであり、従って結果的に小田原遺蹟において「小田原式」を定義できる精製土器様式としては、「第四類土器」に型式学的な焦点が絞られるべきである。特に唐突に掲載された池辺町の「白岩式」系重弧文に接する時、その思いは一層強くなるばかりである。

「小田原式」制定の最終的な見解としてもう一つ重要な指摘がある。それは精製土器様式においても「須和田式土器の一部とをあわせたものである」との理解を示し、南加瀬貝塚の壷を

「小田原式」に含めた点である。このようにそれ以前の伝統からは形成されない「櫛描文系列」（施朱の風習が未発達）と、俗称「須和田式」の伝統を継承した「非櫛描文縄紋系列」の二者を特徴とする一群が「小田原式」を規定する壷の標準とされた点は、「宮ノ台式」の定義と比較する上で極めて重要な視点であった。

この結果、皮肉にも戦前に山内清男氏が『日本先史土器図譜』（山内清男1940）で提示した「分類の標準」のみが、漸く戦後に至り杉原荘介氏によっても根拠として重視されたことになる。これに大塚初重氏によって伊豆方面との系統関係が措定されたボウタ遺蹟の磨消縄紋を含む各種文様が加われば、山内清男氏の「特に変った弥生式」（山内清男1940）展開は「宮ノ台式」成立に向けてかなりの精度で達成されたはずである。こうした経緯を学習してきた立場（鈴木正博1979ｂ）に立つと、やはり山内清男氏の「小田原式」への拘り（杉山博久1996）には、後述するがその方法を再検証する意味も含めて是非とも注目し、接近する必要がある。

尚、杉原荘介氏は分類した土器群を再編成するアッセンブリジの特定法には意を払わず（「分類の標準」の重みは全く感じられず）、型式学的根拠が不明で直感に頼っていたかの方法に問題が顕在化しており、これは多くの研究者が粗製土器様式を例にとって批判している通りであるが、精製土器様式においては更に深刻である。小林行雄氏が山内清男氏の方法を水面下で勉強していたのに対して、杉原荘介氏は補助学払拭の立場と哲学への傾倒が災いして、住居址の発掘方法のように外部（例えば歴史学）に対して考古学の独自性を強調する場面では方法的な真摯さが窺えるが、先史考古学の内部における専門的かつ具体的な方法には何故か無頓着で、かつ想念重視の印象が拭えないのである。それでも私が「小田原式」に拘泥するのは方法の正規化を求めるためであり、後述したい。

山内清男・小林行雄・杉原荘介・神澤勇一諸氏の「小田原式」研究はこれ以降頓挫することになる。それは「宮ノ台式」研究者にとっては精製土器様式の「櫛描文系列」と粗製土器様式との関係が整理できず、加えてより古い俗称「須和田式」研究（杉原荘介1977）に編年の展望が見出せない状況を併せ持ってしまったからである。しかも、俗称「須和田式」の混乱はそれ以前に中村五郎氏が見事に収拾していた（中村五郎1972）にも拘らずの結末であり、この時点で杉原荘介氏の編年観は根底から疑われ崩れてしまい、本来の「土器型式」に再編成する動向が顕著となってきたのである（鈴木正博・鈴木加津子1980）。こうした反省とは無縁な状況として「宮ノ台式」研究が進められてきたことは、誠に不幸な停滞といわざるを得ない。

こうして杉原荘介氏の「小田原式」理解は俗称「須和田式」で披露した型式学不在の影響を受け、「土器型式」制定の主役である精製土器様式から、伴存関係によってしか判明しない粗製土器様式への依存が混沌を招いてしまったのである。関東地方における縄紋式の組織化が精製土器様式によって秩序化してきた人類史的意義を不問とし、何故縄紋式を成立基盤としているはずの弥生式に秩序を乱すような方法を導入したのであろうか。ここに杉原荘介氏の「様式論」に対する対抗意識が強く感じられるのであり、先史考古学とは科学的体系的に構築されて

きたものであるにも拘らず、局所最適化に邁進し、「様式論」に引きずられてあるべき全体最適化を見失ってしまったのである。

さて、1970年代前半は中村五郎氏が小田原考古学研究会の活躍に刺激を与える目的で「野沢1式」を総論し、俗称「須和田式」の混乱を収拾した如く、先行研究の「小田原式」に対して地域研究として分類の検証が進められてきた堅実な実績があり（飯塚博和氏が何故か省略に従っている研究史でもあり（鈴木正博2001ｂ））、本稿で明記しておきたい。

先ずは小田原遺蹟出土資料で「小田原式」より新しいとされた壷が拓本にて示された点（杉山博久1970ａ）は、「小田原式」との相違を検討する上で大いに参考になったものである。更に小田原市山ノ神遺蹟の土器群の分析に当たって「山ノ神遺跡出土の土器の示す特徴は複雑である」（杉山博久1970ｂ）と纏めた点は重要であるが、惜しむらくは具体的な分析が粗製土器様式に集中し、精製土器様式の複雑さに到達しなかった点である。地域性という観点では駿河湾方面の資料と比較している点が注目されるが、先行研究である「相模湾沿岸地域の弥生式土器は、隣接する東海地方東部（駿河湾沿岸地域）の土器と比較すると、土器の組成、各器形における形状、文様等に差があり、（中略）独自の地域性を示している」（神澤勇一1968）という指摘を意識しての対応と思われる。

続いて検討されたのは山寄りの厚木市愛名鳥山遺蹟（杉山博久1974）で、最古の「宮ノ台式」期壷（「宮ノ台式愛名鳥山系列」（鈴木正博2001ｂ）と命名）等興味深い資料が検出されている。杉山博久氏は山ノ神遺蹟での見解を踏襲しつつ、杉原荘介氏の方法に疑問を呈し、改めて神澤勇一氏の視点を確認した上で資料の再構成を推進した。特に「小田原式」については「その1形式の形式名を学史的な観点から小田原式としても良いと思う」として神澤勇一説に準拠することになった。

そこでこうした地域研究進展の重要性に鑑み、本稿では「宮ノ台式」に対して相模方面の地方差とする立場を「新説小田原式」と呼んでおく。勿論、問題が無かった訳ではない。特に精製土器様式については「文様は多様」としただけで分析を深めることはなかった。しかし、それでも特記すべきは、「本遺跡出土の土器の示す特徴は複雑である」との全体性の「特徴」について比較が行われた点である。それは小田原の諸遺蹟の「特徴」とは「共通する」、駿河湾沿岸地方の諸遺蹟の中に「類似した特徴をもつ資料を検出することができる」、そしてボウタ遺蹟は「きわめて類似した特徴を示している」という比較結果であり、準拠したアナログ根拠は明確である。蛇足ながら、精製土器様式を編年の根拠としない伝統は根強く、私よりも若手では大島慎一氏が継承することになった（大島慎一1983）。

1970年代は千葉県でも「小田原式」をめぐる議論が活発化するのであるが、その評価については飯塚博和氏の研究が的を射ている（飯塚博和1993・1994）ので本稿では省略に従いたい。本章では小林行雄氏の「様式論」に端を発した似たもの雰囲気の寄せ集めから、相模方面の系統性が徐々に地域研究によって矯正されていったにも拘らず、編年不在、精製土器様式の型式

学不在のために、その後如何に本来あるべき姿が捏造されていったかを明らかにしたい。

1970年代の東京湾西部における「小田原式」研究は主として遺蹟における実態把握に努め、その特徴が一筋縄では行かない所までは明らかにし得たかに見えた。そしてその特徴を大枠として捉え、独自の地域性を構成する「土器型式」として「小田原式」を拡大解釈し、杉原荘介氏の趣旨であった「宮ノ台式」を生成する基盤としての年代的な理解は退けられてしまった。これは中期後半における「土器型式」の年代的な「細別」を否定し、地方的な「細別」に意義を求めた結果であるが、では、年代的な「細別」を推進する立場からはどのような評価が与えられたのであろうか。

1980年代はこれから述べるように「宮ノ台式」の「細別」研究と「小田原式」隠蔽が進行した時代であった（他方では俗称「須和田式」が本来の「土器型式」に再編成される伏流と「小田原式」の復権が着実に形成された時代でもあった（飯塚博和1982、鈴木正博1982・1984・1985、関義則1983））。

先ずは何を措いても「鶴見川流域ドングリ云々」（鈴木正博1999）と一括した研究姿勢形成の基本認識から確認していく必要があるだろう。1980年、因縁（因縁とは神奈川県遺蹟発表会にて私が石井寛氏の発表に対して「小田原式」を質問した経緯があるからである）の折本西原遺蹟の報告が上梓された（石井寛1980）。私は「小田原式」を否定するにはそれだけの根拠があるものと理解して臨んだが、要するに石井寛氏に「小田原式」や俗称「須和田式」の知識が無かっただけで、杉原荘介氏の方法にのみ反動形成で拘った村社会的な拒絶理由であった（これは報告書に丁寧に記述されており、最終的には「こうした問題をかかえる須和田式以降の土器群に対しては、明確な型式概念規定を行わずに土器型式名を使用することは問題を複雑にする」のが理由であるが、どうやら石井寛氏の該期理解は「単純」でないと困るようである。このような考え方だから山内清男氏の方法や縄紋式社会へ接近ができないのである）。

その結果、「須和田式以降の中期土器群」と言葉上でのみ勝手な規定を行い、それらに該当する土器群の系統性を全く分析することなく、また折本西原遺蹟以外は新古の基準も議論せず、単純に縦に並べているだけである。1970年代後半、私は弥生式の「土器型式」が「複合」構造を有して実体化している点を明らかにしており（鈴木正博1979ａ）、しかも弥生式中期の東日本では「渦文系統論」を構築し、動的な交渉関係を導出していた（鈴木正博1978）のであり、石井寛氏の議論はあまりにも弥生式研究に近視眼で無知な結果であると判断された。このような低レベルの議論で学史的な「小田原式」が隠蔽されてしまうのであり、そしてそれで良しとする姿勢を「鶴見川流域ドングリ云々」なる表現で埋蔵文化財業界の振幅である「ドライ（業務志向）→ウェット（考古学志向）→ドライ（埋蔵文化財学汚染）」の到達点を象徴化し、「様式論」同様に先史考古学の方法以前の低レベルの状態にあり、先史考古学本来の基盤研究になっていないと結論したのであり、いつでもどこでも誰にでも明言して来た経緯がある。

さて、石井寛氏が採用した「須和田式」は「小田原式」のように「問題をかかえる」ことが

無いのであろうか。既に触れたとおり、1970年代の東部弥生式研究を学んでおれば、そのような認識は冗談も甚だしいのである。それを証明するかのようにその直後の栃木県出流原遺蹟（杉原荘介1981）の報告を皮切りとして、千葉県勢至久保遺蹟（飯塚博和1982）、神奈川県王子台遺蹟（関根孝夫1982、大島慎一1983）、埼玉県池上遺蹟（中島宏1982）・上敷免遺蹟（関義則1983）など多くの「問題をかかえている」実態が明らかになった（鈴木正博1982・1984・1985）のであり、単に型式学不在を証明したに過ぎなかったのである。

特に須和田遺蹟の俗称「須和田式」は「平沢式」や「出流原式」よりも新しく、本来的には「小田原式」に比定されるべきであるとした私の指摘と連動するかのように、石川日出志氏も「須和田遺跡の「須和田式」は須和田系では最も新しい１群の１部をなしており、宮ノ台式（古）の幅の中に納まるとみられる」と裁断するに至った（石川日出志1986）。そして具体的な精製土器様式図版の指示と記述は『日本土器事典』の「須和田式土器」解説文（石川日出志1996ａ）で明らかとなった。

このように石井寛氏が「小田原式」を隠蔽すべきとした「複雑」な研究経緯の背景は、拠って立つ方法の研鑽故であり、学問の発展が過去の正しい継承から形成される過程を知るものにとっては、隠蔽することは決して学問的な手続きではなく、単に個人的な趣味の問題に過ぎないことは明白であった。何故石井寛氏は先学に学ぶ姿勢を放棄したのであろうか。これが埋蔵文化財業界の悪しき風潮なのであり、学問とは単なる作業ではなく、学問の蓄積に対する正当な批判や継承であり、従って報告書作成業務の効率のみを目指してはいけないのである。

尚、石井寛氏に対する私の批判は「小田原式」研究の学史から学ぶ姿勢を無視する隠蔽態度だけにあるのではなく、折本西原遺蹟の土器群が精製土器様式を基準として構成された点には縄紋式研究者としての面目躍如があるものの、真の批判は「この大別は土器の様相と流れに重点を置いて行なうもので、大まかな分割になる」とした点が「土器型式」の議論ではなく、多摩ニュータウン考古学に影響された悪しき作業分類因習（即ち、型式学ではなく、形態学に留まってしまった作業）であった点である。特に「こうした細分は土器の様相のみによる細分であり、背景となる社会論的な段階付けがなされていない」とした認識を知るとき、石井寛氏が縄紋式で組織化されてきた「土器型式」を捨て、暗黙のうちに解釈を先行する「様式論」に従っていることが判明してしまうのである。

では、石川日出志氏は「小田原式」をどのように理解していたのであろうか。幸い石川日出志氏のご教示により『日本土器事典』の「小田原式土器」解説文（石川日出志1996ｂ）が1987年－1988年提出の内容であることを知ったので、当時の認識が理解できることになった。それは「現在の知見によれば、杉原の小田原式は宮ノ台式直前～宮ノ台式中段階の例が殆どで」、「杉原の宮ノ台式は現在の宮ノ台式中～新段階に属す例がほとんどであった」というものであるが、問題は「現在の知見」や「現在の宮ノ台式」にあった。「須和田式」、「小田原式」、「宮ノ台式」はどれをとっても杉原荘介氏が定義し議論したものであるが、石川日出志氏によ

って「小田原式」は隠蔽され、「須和田式」は再構成され、「宮ノ台式」は拡大誇張された。

そこで気になるのは「宮ノ台式」の継承と拡大誇張であり、果たして「宮ノ台式」のみは問題が無いのであろうか。そして神澤勇一・杉山博久両氏の指摘は全く意味が無いのであろうか。つまり、石川日出志氏は神澤勇一・杉山博久両氏の「新説小田原式」に対しては石井寛氏を楯とし、「小田原式」を隠蔽することによって躱わし、更に「須和田式」を再構成し、「宮ノ台式」を石井寛氏の精製土器様式基準に準拠しつつも東京湾東部にも目配せした「細別」を提示することによって、神澤勇一・杉山博久両氏の「新説小田原式」への批判としたのである。ここでの具体的な問題は「宮ノ台式直前」と「宮ノ台式」の定義であるが、前者は不明、後者には「須和田式」の一部と「小田原式」が組み込まれている点に注意するならば、杉原荘介氏による「須和田式」、「小田原式」、「宮ノ台式」の全ての内容が否定されたことに注意すべきであり、「宮ノ台式」のみを存続させる意味が不明・不可解である。やはり、石井寛氏同様に趣味的対応であり、学問的な手続きに則った対応とは思われない。

「土器型式」制定で重要なのは山内清男氏が明確にしたように精製土器様式を中核とした「分類の標準」による議論なのであるが、「宮ノ台式」「古段階」として指摘した静岡県から埼玉県までに至る諸遺蹟が並行することを果たしてどのようにして証明したのであろうか。「様式論」に則って似ているものを並べただけの印象が強いが、似ているものが並行すること及びそれらが同一の「土器型式」に属することの先史考古学的な検証が必須なのである。

特に遺蹟間の比較であれば、杉山博久氏による「特徴」のアナログ3レベル分析（「共通」、「類似を検出」、「極めて類似」）の方が遥かに真摯な対応である。このように学問的な手続きを無視し、「相違」と「類似」の関係を議論しないような遺蹟の排列対応は正に石井寛氏の悪影響と言わざるを得ない。つまり、「土器型式」による組織化を捨て、大枠を決めて掛かる手続きには優れて「様式論」による混沌が見られ、神澤勇一・杉山博久両氏が「様式論」への対応から「新説小田原式」として是正した地域研究の視点が不幸にも欠落していたのである。

しかし、こうした混沌状態に対して幸いにも秩序の方向性を明確に示した研究、即ち「土器型式」の成り立ちを分析し、相互の動態を検証しようという姿勢も登場した（黒沢浩1987）。黒沢浩氏は伊勢山遺跡の土器群を考察するに当たり、「東海地方の土器型式からの系譜」と「在地の土器型式からの系譜」（但し、「在地」という意味が問題であり、「東海地方」に対する「在地」という意味合いで、埼玉県・千葉県も神奈川県にとっては「在地」としている点、即ち先史土器から地方を考察するのではなく、「関東地方」という枠組みを固定して説明している点に注意！）という仮想系譜をシミュレーションしながらも、「「在地」の基盤」は課題としつつ、敢えてかつて杉原荘介氏が岩櫃山の考察で実践した（杉原荘介1967）ように東海地方と伊勢山遺跡との関係に属性分析の意義を求めた。

勿論、それ自体は黒沢浩氏にとって伊勢山遺跡の土器がどう見えるかの発想を一部の属性で表現しただけであるが、重要なのは精製土器様式による議論の展開であり、この時点では正に

厳密さの深耕（鈴木正博2001ｂ）を問題にするよりも、石井寛氏による効率的な大量処理作業に課題を見出し、「動態論」的に分析する新たな方向に転換させた点を高く評価すべきであり、その価値は如何なる課題を導出し得たかにある。黒沢浩氏は次のように課題を明確にした。「「小田原式」は未だ学史の中で清算されていない」点、「小田原式」との関係やその終末の特定も含めて「宮ノ台式土器の概念規定もまた問題となろう」点、そして「最重要課題の一つ」として「宮ノ台式土器は決して宮ノ台式土器としてのみ存在するわけでなく、様々な要素のからみあいのなかで成立している。そのような様々な要素を他地域との併行関係を踏まえて動態論的に把握していくこと」を強調した。この視点はその前年に石川日出志氏が広域にわたる編年関係を簡潔に議論した動向（石川日出志1986）と決して無縁ではなく、石川日出志氏が「土器型式」を道具として利用し「文化動態」を語ったのに対して、黒沢浩氏は「土器型式」の実態に「生成動態」から接近したのである。この二者は山内清男氏が指示したとおり外部構造と内部構造として統合されるべきであり、そしてここまでが「小田原式」隠蔽と「小田原の土器」隠蔽の相乗効果を巡る定着に至った経緯と理解しており、黒沢浩氏の「小田原式」課題に良心を残して新たな展開へと進行することになる。

特に学問の継承という観点から、「小田原式」の隠蔽が顕著となった1980年代後半までの研究事情が明らかにした点を纏めれば、「土器型式」の理解によって立場が多様に分裂したという一点に尽きた。「土器型式」に日本先史を組織化するための「年代学的の単位」としての意味しか与えない山内清男氏による土台構築論の立場と、「土器型式」に恰も文化史（あるいは石井寛氏のように社会論的な段階付け）的な意義まで与えてしまう「様式論」による解釈論の立場に大きく代表され、特に後者は個々人の問題意識に依存するため多様となり、例えば杉原荘介氏の立場も弥生式の単純伝播を議論した「様式論」に近いことは明白である。

少なくとも私は「地方差、年代差を示す年代学的の単位」として「土器型式」を制定し、それらを組織して文化史を構成する先史考古学（山内清男氏）の立場で、例えば縄紋式晩期中葉においてさえ相模方面には異なる「土器型式」が存在することを既に導出してきた経緯（斎藤隆・鈴木正博1978）があるが、これまで見てきたように多くは「様式論」の立場で議論しており、研究が進展するにつれてより実態に合わせるべく修正している姿勢が顕著である。

それ故に「小田原式」は問題となった「小田原の土器」という実態が極めて明確であるにも拘らず、型式学研究の対象からは除外され続け、とうとう隠蔽されてしまったのである。黒沢浩氏が見せた逡巡もあるいはそこに由来している可能性があり、ここまでが「小田原式」隠蔽の定着によって暗黙のうちに進行してきた「小田原の土器」隠蔽事情である。

3.「小田原の土器」の復権による新たなる「小田原式」隠蔽の展開

弥生式研究の先達には逐一の文献引用は省略に従うが、山内清男氏の経済史観と「年代学的の単位」としての「土器型式」、小林行雄氏の「様式論」、杉原荘介氏の「原史学」による「限定型式」があり、「小田原式」は山内清男氏が「分類の標準」として認め、杉原荘介氏も最終見解では「分類の標準」を中核とする限定性に回帰したものの粗製土器様式に拘泥してしまい、小林行雄氏は駿河地方の「様式」に含めることによって「小田原の土器」を関東地方の「土器型式」から隠蔽し、神澤勇一・杉山博久両氏は「細別」を否定した上で「様式」的扱いから相模地方における独自な「土器型式」として復活させた「新説小田原式」の学史があり、畢竟するに小林行雄氏のみが「小田原の土器」を関東地方から隠蔽したのである。

このような学史を知ってか知らずしてか、1970年代後半からの埋蔵文化財調査結果は、「分類の標準」を真摯に議論することなく、先ず東京湾東部から「宮ノ台式」への解消が宣言される（斎木　勝1978）や否や、早速東京湾西部にも瞬く間に感染した（石井寛1980）。具体的には千葉県では「小田原式」の「分類の標準」になった「千葉寺町の土器」が型式学的に議論されず、神奈川県では「小田原の土器」が隠蔽されてしまったのである。

しかし、そうした浅薄な意見に対して形態学的な手続きを重視する研究が松本完氏によって開陳された（松本完1988）。これにより「小田原の土器」が改めて復活し、その結果として「小田原式」隠蔽を新たな展開へと導くことになるのであるが、石井寛氏のドライな業務扱いに対して松本完氏は極めてウェットな研究姿勢に終始した点が対照的で面白い（業務として早く切り上げたい石井寛氏の報告書に対して、研究の展開を求める松本完氏の極めて対照的な姿勢が埋蔵文化財と考古学の違いを鮮明にしたのである）。そこでの負に作用した姿勢は悩むことを免罪符としているように見えてしまう松本完氏の逡巡姿勢にあり、この反動形成が「土器型式」を列島における組織形成を目指した編年ではなく、単なる「タイムスケール」として利用する「様式」準拠姿勢（安藤広道1990ａ・ｂ）を登場させ、ここにおいて「鶴見川流域ドングリ云々」は発生時点に戻り、ドライに収斂したのであるが、モラルハザードを回避する意味でも、私は当時における免罪符（負に作用した姿勢と表現したのはその後の研究に課題の継承が見られないからである）を再確認する立場である。

即ち、「東京湾西岸地域に於いて、（中略）壷形土器を飾る櫛描文が定着する段階、特に壷形土器の櫛描文に関してはそれが言わば「貫入的」に出現、定着する段階に相当し、「内的変化」を大前提的に係類を求めること自体に危惧を感じる。この問題は、櫛描文の成立問題に係わり、従前の「須和田式→宮ノ台式」の図式に対する疑義を含む点、簡単に解決できる問題ではない」との指摘（ｐ.346）や、「その「宮ノ台式土器とは何か」という問いを発した途端、些か複雑な問題がわき起こってくるようである。「小田原式」の問題もさることながら、「原添式」、「有東式」と呼称された東海地方東部の土器との区分の問題、混乱の坩堝と化したかに見える後期

土器の編年との接合等山積する問題は枚挙にいとまがない」との指摘(p.371)を免罪符として確認しておきたい。

前者は黒沢浩氏の立場と共通する認識であるが、違いは後者に明確で、「宮ノ台式」の生成過程については隣接土器型式との関係如何で見直すべきとの姿勢である。そして最終的な免罪符は、「用語の問題に関しては、第Ⅱ・Ⅲ次調査出土土器を含めた本遺跡出土の弥生土器のほぼ総体を、現在通用の宮ノ台式に包摂されるものとすることを以って出発点とし、そこから得られた「全体」を、大きな断絶を含まない限りに於いて宮ノ台式土器とする立場を取る。用語並びに概念の混乱、就中「小田原式」を巡る混乱を鑑るに、いづれより精確な変遷の軌跡が跡付けられ、さらに他地域、他地方との関係が整序され、時空双方に亙る明確な位置付けがなされた段階に、改めてより適確な名称が与えられるべきであると考える」(p.372)との枕詞である(尚、蛇足ではあるが、「混乱」とは山内清男氏に収斂した「小田原式」にあるのではなく、無秩序の限りを尽くした俗称「須和田式」に顕現していた事情であることは明白であり、「小田原式」如きに見られた「混乱」は可愛いほうである)。

さて、こうした免罪符を提示することによって松本完氏の折本西原遺蹟における研究が披露された訳であるが、本稿の趣旨から特記すべきは「小田原の土器」の内「分類の標準」になった一例を広口壷形土器の変遷の中で分析の対象とした点である。その結果、松本完氏が措定する「宮ノ台式」の「最古段階」の例として三宅島坊田遺蹟が、そして「時期的に多少下って」「小田原の土器」が排列され、「小田原の土器はやはり例外的な器形と言ってよく、むしろ広口壷形土器の定着過程の一姿相とすることが出来るかもしれない」との位相を導出した。ここで問題となるのは、坊田遺蹟例と「小田原の土器」は異なった系列の土器であるにも拘らず、どのようにして比較を成しえたかという型式学の基本である。そしてそれは土器の形態にも関係していたが、それはさておき、こうして「小田原の土器」は分析の俎板に漸く乗ったものの、「宮ノ台式」の「最古段階」よりも新しいという見解が登場した点に注目したいのである。

この松本完氏による免罪符と「小田原の土器」の位置付けによって、本人の中のウェットな見方とドライな見方の振り子により、「小田原式」とは「宮ノ台式」の一部との見解が定着し、その後提出された石川日出志氏の編年表(石川日出志1986)が「小田原式」隠蔽を決定的にした。

では、松本完氏が復活させた「小田原の土器」の分析はその後如何なる展開を示したのであろうか。ドライな研究者が無視を決め込む中(安藤広道1990a・1990b、犬木努1992)で、黒沢浩氏が「宮ノ台式の最古段階」について安藤広道氏の編年を批判しつつ検討結果を開陳した(黒沢浩1993)。即ち、「宮ノ台式」の「第1期」は安藤広道氏の子ノ神遺蹟は「ふさわしくない」とし、坊田遺蹟の一部を当てるが、これまた「厳密な意味では宮ノ台式ではない」とする。そして「この時期に該当する資料として小田原市小田原遺跡」を位置付けた。根拠は残念ながら不明であるが、松本完氏よりは古く位置付け、しかも「厳密な意味では宮ノ台式ではない」

とする資料に敢えて比定した意図は、「小田原式」に関わる問題が脳裏にあったものと思われる。

このように個々人の問題意識は各様であるが、時代の流れとでも言うべき対応は明らかに「小田原式」隠蔽へと進んで行った、軍国主義や「藤村新一事件」の流れを思わせる正にその時に「小田原式」の原点に戻るべきと主張したのが飯塚博和氏であった（飯塚博和1993・1994）。「宮ノ台式」に編入されてしまった「小田原の土器」や東京湾東部の系統である「千葉寺町式」（鈴木正博1979）について飯塚博和氏が文様系列別の変遷過程を議論し、「宮ノ台式」以前に「小田原式」期という範疇を確認した。この議論は犬木努氏が本来扱うべき方法に基づいていたが、俗称「須和田式」に理解が及ばなかった点が犬木氏に災いした結果であろう。飯塚博和氏の議論は「小田原式」の問題を東京湾東部で展開した点に特徴と優位性があり、ここにおいて改めて「千葉寺町式」が分析の俎板に乗った。つまり、杉原荘介氏の「小田原式」は東京湾西部と東京湾東部の動向を見据えており、飯塚博和氏は東京湾東部の原点資料に対して型式学的な位置付けを行い、今日において「小田原式」期とすべき範疇を再考したのである。

そこで再注目された「千葉寺町式」は新たな展開を示すことになるが、この時期には東京湾西部を理解する上で欠かせない三宅島大里東遺蹟の報告が注目された（小林青樹ほか1995）。小林青樹氏は技法の分析から「この段階の土器群が宮ノ台式土器の範疇に含まれるのではなく、宮ノ台式直前型式として切り離して考える必要がある」との理解の下に「駿河湾東岸から相模湾西岸地域までの空白を埋める型式として仮称ではあるが「大里東式」の設定」に至った。小林青樹氏の議論の中には何故か「小田原式」も「小田原の土器」も登場しない。既に「小田原式」隠蔽を承認した上での議論に加えて、中核となる精製土器様式の型式学も重視していない状況に対して問題は山積みであるが、本来「大里東式」とすべき資料に対しては「宮ノ台式直前型式」の「小田原式」期（鈴木正博2000ｂ）と認めつつ、東京湾東岸との関係で「野沢２式」系の伴存を重視し（鈴木正博2000ａ）、更に型式学的に「狢式」や「小田原の土器」と共通する文様帯が伴存する点や、「池上式」が伴存しない点も図示・解説した（鈴木正博2001ｄ）ように、更には「小田原の土器」の「偽流水文」と同じ櫛描手法もＫ－２遺物集中区で検出され、黒沢浩氏は「大里東式」よりも１時期新しいと考察している（黒沢浩1998）が、私は「小田原式」との並行関係は疑えないものと判断している。

いずれにしても「小田原式」を隠蔽することによって「宮ノ台式」を拡張・拡大せざるを得なかったわけだが、今度は「小田原式」を隠蔽したために不具合の多い「宮ノ台式」の成立過程が見直され、「宮ノ台式直前型式」という議論が復活したのである。その延長に位置付けられるのが谷口肇氏による「７期」の設定である（谷口肇1996）。俗称「須和田式」から「宮ノ台式」を観ると子ノ神遺蹟の一群は全て「７期」という「宮ノ台式直前」に納まるという結果が導出されたのであり、安藤広道氏の「宮ノ台式」概念（安藤広道1996）とは異なる理解を示した。遺蹟群研究としての立場と黒沢浩氏が示した「宮ノ台式」の「生成動態」に従えば、谷

口肇氏の見解の方が集落論的な継続性を社会論との関係で議論する際には理解し易いように思われるが、それはそれとして型式学と集落論が統合されていない現状に真の課題を見抜く必要がある。必要なのは「タイムスケール」ではなく、型式学である。

飯塚博和氏による東京湾東部の「小田原式」研究（「宮ノ台式」成立までを仮家塚遺蹟などの特定の文様系列別に議論）と小林青樹氏の「大里東式」（「宮ノ台式直前型式」）を受けて、「それを認める認めないにかかわらず「小田原式」に拘泥する」と宣言したのは黒沢浩氏であり、「大里東式」を認めた上で「見通しとして常代・仮家塚の土器は宮ノ台式の範疇で、千葉寺町の土器は別な範疇で考えるのが適当ではないか」（黒沢浩1997）との房総における優れた立場を明確にした。

ところが早速翌年には「仮家塚の文様帯構成は池上式・中里式との間に連続的であり、そこに大里東を組み込むことは難しい。したがって、大里東が仮家塚段階をさかのぼる可能性は低いと考える。仮に、将来大里東段階の分離が可能になったとしても、それはやはり有東式－宮ノ台式の範疇で理解すべきであろう」（黒沢浩1998）と房総から暴走することになった。

勿論、暴走の原因は「御新田式」（石川日出志1996ｃ・1997）にあり、とうとう「千葉寺町式」も隠蔽され、「御新田式」に吸収されてしまったのである（石川日出志1998）。こうして石川日出志氏は「小田原の土器」を「宮ノ台式」に、「千葉寺町式」を「御新田式」に吸収してしまい、「小田原式」研究における「分類の標準」を徹底的に解体しながら隠蔽し、最終的には「小田原式」隠蔽の広告塔的存在になった。

さて、「「小田原式」に拘泥する」とした黒沢浩氏の予告した「別稿」（黒沢浩1993）はその後途絶えたかの印象を強くせざるを得ないほど、結果的に石川日出志氏の「小田原式」隠蔽は徹底したものになったかの感がある。最近では大島慎一氏が型式学的な根拠を一切示すことなく「小田原の土器」を「相模ＩＶ－２様式」、手広八反目遺蹟第15号住居址出土土器群の階段に比定したが、どうやらその理由は安藤広道氏への依存にあるようだ（大島慎一2002）。

では、松本完氏が復活させた「小田原の土器」の分析結果は最早典型的な「宮ノ台式」として理解する以外、他に議論する余地がないのであろうか？　「小田原式」の一系列である「千葉寺町式」も「御新田式」が原因となって生成された土器なのであろうか？　「小田原の土器」のもう一例と「千葉寺町式」のもう一例に観る共通の性質に注目すべきであり、私には「小田原式」隠蔽は全て型式学不在と埋蔵文化財業務型マニュアル主義がもたらした学問不在の捏造行為に思えてならないのである。

そこで「小田原式」隠蔽の風潮に対して、改めて「小田原の土器」に学ぶ立場から東部弥生式研究の土台を確認し、「小田原式」の意義を議論したい。

4.「小田原の土器」研究法と「小田原式」の復権

戦前と近年の対比で見るならば（錯綜した見解ながらも、現時点で「小田原式」継承者は杉原荘介氏と山内清男氏の学門を継承している者のみであり、昨年無念にも私と同期の飯塚博和氏が鬼籍に入られてしまった)、最近の潮流は無意識のうちに「様式論」に駆逐されているように見える。特に埋蔵文化財業務にとっては「小田原式」とは如何様に取り扱われても仕方が無い（考えるだけ面倒で熟考する時間が創出できない）存在であり、触れる意味すらないかの如くである。

しかし、理論に長じた山内清男氏、及び直感と意欲に長けた杉原荘介氏の「小田原式」研究に学ぶことは微塵も無いのであろうか。寧ろ、「小田原式」に学ぶところから新たな道が開けるような、学問の独創性の本質に触れられるような気がしてならないのである。

そこで本章では「小田原式」に学ぶと如何なる展望が開けるかを議論する。特に「小田原式」研究において隠蔽された方法、即ち「分類の標準」に徹した山内清男氏による方法について議論を展開するが、それは弥生式研究では東京考古学会のプロパガンダにより隠蔽され続けてきたからである。

東京考古学会との確執により『日本先史土器図譜』（以下『図譜』と略）は北関東弥生式の後半と前半を代表する「十王台式」と「野沢式」から刊行された(山内清男1939、鈴木正博1999ｃ)。更に昭和14年に刊行が遅れた『弥生式土器集成図録　正編解説』（以下『正編解説』と略）の「様式論」に反論する目的で、南関東を中心として北関東を補いつつ、「特に変った弥生式」（山内清男1940）として「土器型式」を制定し、「分類の標準」を示した。「様式論」と「分類の標準」の具体的な違いは詳細にわたり解説してある（鈴木正博1999ｂ）ので本稿では省略に従う。

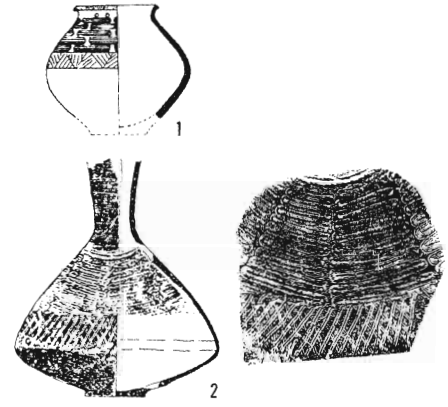
「土器型式」の在り方については、「野沢式」では「縄紋式の伝統に富む」弥生式で、かつ東北地方や中部地方との広域にわたる連絡・交渉が指摘され、「様式論」のような単純な類似関係では理解できない点を明確にし、「特に変った弥生式」では「様式論」の単純伝播論による理解を否定し、関東地方には「在地化基盤」を異にする多くの「土器型式」が並存している状況を象徴化した。「野沢式」では「土器型式」の成立構造を、「特に変った弥生式」では地方の斑状構造を明らかにする接近法を開陳したのである。

その中で「小田原式」には抜きん出て先進的な方法が示されたのであるが、先ずはその認識を共有するところからはじめる必要がありそうだ。それは「十王台式」や「野沢式」、あるいはそれ以外の「特に変った弥生式」では使用されず、「小田原式」にのみ使用された概念であり、「頸から体上部は文様帯となって居る」との解説文に見られるとおり、弥生式において縄紋の施文されない「文様帯」が特定され、しかもそれが他の弥生式の「分類の標準」では使用されないという指示に注目しなければならない。

そこで「小田原の土器」を「文様帯」として理解する方法が必要になる。これは「様式論」で安易に「駿河湾地方」に裁断された点に対する方法的批判を「文様帯」という用語で指示していたのであり、東京考古学会の櫛描文による単純伝播論思想を危惧し、「文様帯」の特定に着目し、成立基盤に対する真の議論を提案したものであった。この時点で参考になるのは『正編解説』の図録であり、私には隣接している駿河湾地方や伊勢湾地方の文様構成ではないと考察した。独得の形態と「文様帯」の由来を改めて議論するのが筋である。

加えて「文様帯」としてみる場合に更に重要な属性があり、「文様帯」よりも上位に位置付けられる属性が杉原荘介氏も拘った「宮ノ台式」の「施朱様式」であり、その成立基盤を型式学的に展望した結果、中部地方南部の「阿島式」から東京湾へと受容されたものと考察した（鈴木正博2000ｂ）。その後早速、「嶺田式土器の赤彩様式が白岩式土器に引き継がれ、それが南関東の宮ノ台式土器に至る赤彩壷の基盤となった点にも注目しておきたい」(安藤広道2002)という応答が見られたのは、今後の「嶺田式」から「白岩式」成立に掛けての議論に重要である。

「施朱様式」の系統はさて置き、第１図１は『図譜』で指示された「小田原式」である。この文様帯の構造は既に詳細にわたり解説した（鈴木正博2001ｂ）通り、「小田原型文様帯」と特定できる性質で、その概念は『正編解説』で示されたもう一例の「小田原の土器」の拓影にも共通していることを検証した。共に縄紋が関与しない点が「文様帯」の特定に重要なのであり、そこで前述の如く『図譜』「文様帯」の由来を真摯に議論する必要がある。



第１図　「小田原式土器」の「文様帯」

この問題には中里遺蹟で顕著になった遠隔地との連絡・交渉関係（杉山浩平1998、石川日出志2001）が拍車を掛けたのであり、本来は全体の関係を分析すべく報告書の刊行を俟ってから「宮ノ台式」以前の特徴に由来することを議論する予定でいた。それが「中里式→小田原式」の意味であり、そうした結果に基づいて「小田原型文様帯」から「宮ノ台式」の「文様帯」が生成できることを示したのであるが、早速安藤広道氏の目に留まり、「小田原型文様帯」の由来を「宮ノ台式」の中に求める従来型の理解（「小田原型文様帯」概念の拡張）が改めて強力に提示された（安藤広道2002）。

安藤広道氏の議論は私が次に明らかにすべき在地系列の課題にまで踏み込んでいる点で、根拠とすべき編年と系列間の「複合」が分析されておらず、先走った議論と熟練に対する不安と発散を読み取っているが、確認すべきは、私が整備したのは「小田原型文様帯」の特定のみであって、それ以外の系列の「文様帯」は「王子ノ台式→砂田台式→子ノ神式」として「在地化

基盤」を明確にし、「中里式→小田原式」とは異なる並行系列と理解している点である。従って、「磨消縄文という在地の施文手法の連続性からみて、櫛描文＋磨消縄文の文様に先んじて「小田原型文様帯」が成立していたとは考えがたい」との単純進化論は考えがたく、そこに『図譜』例の由来を見抜く必要があったのである。

こうした見解を導いた安藤広道氏の議論には根本的に問題と思われる対応が２点ある。即ち、１点は「小田原型文様帯」の定義を正確に適用しなかった点であり、それゆえに原型と変遷の分析が発散してしまったのである。２点目はその由来を非縄紋という同じ性格の文様構成に追及しなかった点であり、「中里式→小田原式」の独立性を生成した非縄紋の系統として「海」を鍵語とした遠隔地環境との関係性が措定されていたのである。

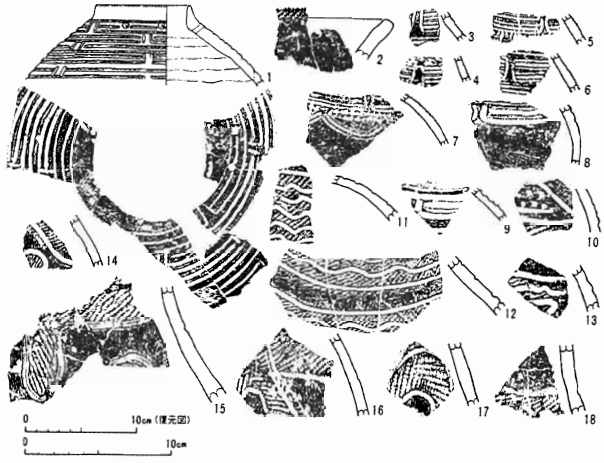
さて、杉山浩平氏の紹介と石川日出志氏による「中里式」の新展開以来、私が改めて問題にし、具体的に「中里式」理解で石川日出志氏や安藤広道氏と中里遺蹟現地説明会や関東弥生研の中里遺蹟資料検討会で議論したのは、遠隔地土器群「貫入」実態とその変容レベルの分析方法と総合方法である。中里遺蹟の分析が出来ない現状での議論は大変心許ない限りであるが、『図譜』の「文様帯」の由来を私がどのように措定して検討していたのか、その視点だけは開陳しておく必要がある。

第１図２は兵庫県田能遺蹟（村川行弘ほか1977）の櫛描文壷である。肩部から胴部上半にかけて櫛描による流水文と竹管による幾何学文という２種の原体による文様を２段構成で充填させる特徴を有しており、『正編解説』の図録に比して特徴がより特定できる例である。形態は『正編解説』に共通する例があるものの、「文様帯」の性質を議論する場合には田能遺蹟例が便利である。『図譜』例の個々の文様レベル、例えば、口唇部の縄紋や「偽流水文」の手法、あるいは最下段の充填三角文は全て在地周辺に限定できる文様であり、山内清男氏が取り立てて文様の特定を問題にしなかった理由は正にその点にあるものと推察している。即ち、技法を超えた次元で「文様帯」と対峙していたのであり、「小田原型文様帯」の原型を同じ『正編解説』の図録の参照に従って、「様式論」による位置付けとは異なる交渉・連絡を見抜く方法を提示したのであった。尚、杉山浩平氏による中里遺蹟の紹介直後、私は田能遺蹟の資料を皮切りに神戸市まででではあるが、遠隔地土器群の雰囲気を実感し、「小田原式」では何故「文様帯」としたのか、その意味が確認できた。「文様帯は文様帯から」との教えであったが、それが「小田原型文様帯」と命名した意味でもある。

次は年代の特定に影響を及ぼすと取り沙汰されている「偽流水文」について触れておきたい。既に大里東遺蹟Ｋ－２遺物集中区から出土していることは触れておいたが、第２図に文様に特徴のある精製土器様式を示した。第２図３～７が櫛描文系「偽流水文」の壷で、３・６によって縦位方向は交互に「反弧文スリット」を展開していることが分かる。７には最下段の文様があり、刺突列による境界以下を連弧文としている。伴存している磨消縄紋は14～18を見る限り、頸から胴部にかけて空白部の少ない曲線文を展開しており、「宮ノ台式」直前の「小田原式」

期に例の多いものである。10・12もそうした時期に見ることができる。

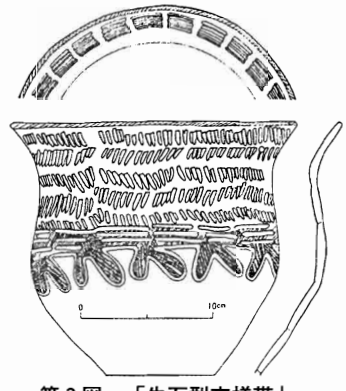
重要なのは１・８・９の沈線文系「偽流水文」である。１の短頸壷は第１図１と同様に二つ一組の穴があり、短頸の外反が異なるものの、共通した形態にも注意したいと思う。問題は沈線文系「偽流水文」の系統で、黒沢浩氏の「擬似流水文Ｂ」（黒沢浩1987）とは明らかに異なる系統である。「流水文」からの系譜を引く櫛描文系「偽流水文」は「反弧文スリット」のように、単位文様を作出させる手法というよりも、縦位のスリット構成に意味を持たせているように考察しており、そうした意味で１・８・９を沈線文系「偽流水文」と呼んだのである。更に吟味すべきは櫛描文系「偽流水文」と沈線文系「偽流水文」の関係であり、共振構造における二者と措定しておきたいと思う。



第２図　大里遺蹟Ｋ－２遺物集中区出土土器

その根拠として提示したのが第３図の「牛石型文様帯」（鈴木正博2003ａ）における境界部の沈線文の性格である。この文様は口縁内面の櫛描文を沈線文で模倣したものであり、櫛描文系と沈線文系が同時と考える根拠になり、「偽流水文」においてもその蓋然性は高まったのである。

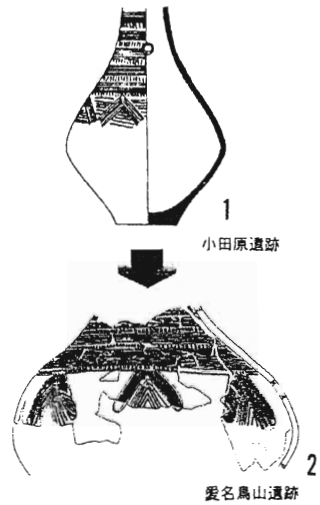
とすれば、「擬似流水文Ｂ」以前に別な「偽流水文」が形成されている可能性が高く、安藤広道氏が「初期のものは、櫛の一本一本と）（部分に同一の施文具を用いた太く大柄のものが一般的」（安藤広道2002）として、櫛描文系の「小田原の土器」がより新しくあるべきとする裁断はあまりにも単純な図式で「様式論」に犯された結果である。「文様は文様から」由来を検討すべきで、型に嵌まった図式でマニュアル的に判断を下すべきではない。



第３図　「牛石型文様帯」

このように「土器ＤＮＡ関係基盤」に立つならば、「小田原の土器」の「文様帯」が原型を「在地化基盤」には求められず、かつ文様が「在地化基盤」に従っている以上、「小田原型文様帯」自体を変遷の初期状態とするのが正道であり、それ以降は２段構成が多段化したり、または充填構成から中央分離帯を挟むように充填度を弛緩したり、あるいは肩部から胴部上半に

掛けての広い範囲にわたる施文帯から肩部のみに縮小したり、と様々な変遷を辿っている。こうして安藤広道氏の見解とは大きく異なる変遷列が措定されるのであるが、俗称「宮ノ台式」の議論は本稿の趣旨とは異なるので、機会を得て詳述することとし、これ以上は深入りしないでおきたい。



第4図　杉山浩平氏の変遷図

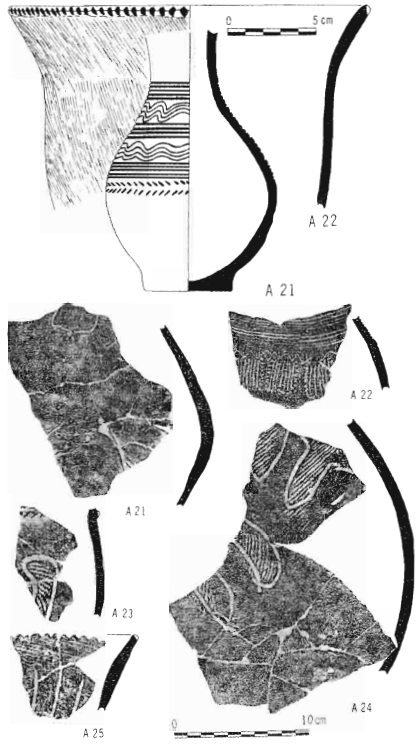
『図譜』以外の「小田原の土器」についても多少触れておきたい。第4図1がそれであるが、「小田原式」の型式学が展開されなければ、「宮ノ台式愛名鳥山系列」（第4図2）の重要性には気がつかないであろう。最近実測図が公表され（杉山浩平2003）、多くの研究者によって見直される機運が乗じてきたのは喜ばしく、折角の機運でもあるので、愛名鳥山遺蹟の資料について兼ねてより気にしている点について「小田原式」との関連で課題を明確にしておきたい。

第5図はA地点2号住居址出土土器群である。実測図のA21・A22（手広八反目遺蹟第15号住居址出土土器群よりは古式の「宮ノ台式」）と拓影資料A21～A24とは出土状況が全く異なり、別に考えるべき纏まりである。拓影資料A21・A23・A24は磨消縄紋が発達する壷である。「宮ノ台式愛名鳥山系列」より古式の「文様帯」で、「子ノ神式」の磨消縄紋と共通した特徴である。これに拓影資料A22の「小田原型文様帯」が伴存するものと思われ、「小田原式」期の土器群と措定している。この直後の土器が実測図のA21・A22であり、A21のような胴部最大径部を最下段とする文様に相模方面の特徴が認められる。

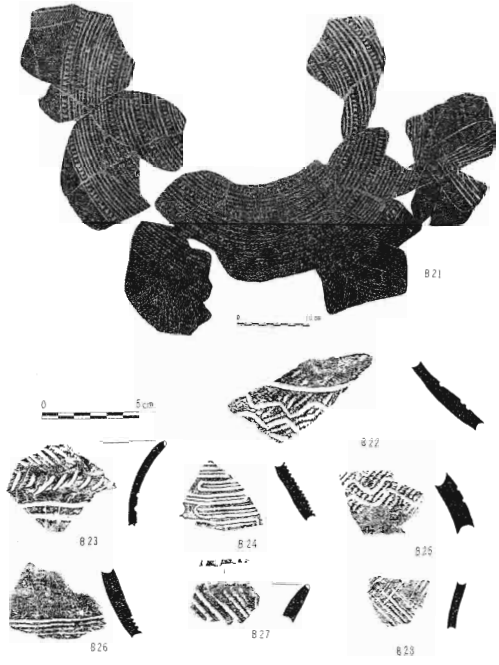
第6図はB地点2号住居址出土土器で「宮ノ台式愛名鳥山系列」とした階段の資料である。「擬似流水文B」がB21とB24に認められており、小田原市山ノ神遺蹟で纏る例も含めて、「宮ノ台式」の最古の階段に定着していることが分かるのである。よく引き合いに出される坊田遺蹟（橋口尚武ほか1983）では櫛描文系「偽流水文」とともに「擬似流水文B」も生成されているので、他に見られる類型を異にした櫛描文と併せて理解を深める必要がある。注目すべきはB23の深鉢文様帯であり、山寄りの厚木市遺蹟を考える際には「牛石型文様帯」を継承している点は重要であろう。

ここで「文様帯」を志向した研究動向について見ると、松本完氏の小林行雄氏と似たような認識に始まり、大木努氏が説明のための便法として施文帯という概念で縄紋式との連続性を断ち切り、黒沢浩氏が「栗林式」研究の動向も踏まえて全面的に採用・推進し、それを受けて更に活発化した経緯がある（安藤広道1999、石川日出志氏2002）ように、今後の「小田原式」研究には山内清男氏の指示の通り、必須の接近法であることが理解されよう。

さて、約束の紙数も尽きてしまい、神奈川方面以外の資料には殆ど触れることができなかっ



第５図　愛名鳥山遺蹟A地点2号住居址出土土器



第６図　愛名鳥山遺蹟B地点2号住居址出土土器

たが、簡単に纏めるならば、「小田原式」研究は学史的な「小田原の土器」と「千葉寺町式」によって櫛描文系列の「文様帯」を特定し、「千葉寺町式」の「文様帯」が縄紋と併用され新に形成されたのが「真の御新田式」であった（鈴木正博1999ａ・2001ｃ）。これに「野沢式」や「飛鳥山式」等で注意された筒形土器の「文様帯」研究もより広くより深く進展するに及び（石川日出志2003、鈴木正博2002ａ・2002ｂ）、更には東部関東の「磨消渦文系統論」（鈴木正博2003ｂ）と「複合」することも可能となり、「小田原式」期の関東は「特に変った弥生式」で組織し得る展開が顕著となったのである。ここにおいて改めて『図譜』による「分類の標準」の重要性を思い知らされることになり、訳の分からない大枠とか「様式論」による先史土器の解釈を行う前に科学的に検証できる「年代学的の単位」という土台を構築し、その方法を継承し、駆使することが「小田原式」研究の本来的意義と今後の展望なのである。

5. 結語―「小田原式」研究の今日的意義―

「小田原式」とは戦前に注目された「小田原の土器」によって方法検証の事例として着目され、戦後の高度経済成長時代の埋蔵文化財調査の中で隠蔽された「土器型式」である。つまり、

研究方法として議論が展開し、具体的に多様な結果を導出し、それへの対峙が研究目的と研究方法を磨いてきた経緯があったにも拘らず、埋蔵文化財調査の進行によって先史考古学の方法を検証する学問の基盤に関わる研究プロセスが無視される風潮が助長した。学問の土台構築と研究の進展（即ち知識の蓄積）ではなく、業務の効率化（即ち知識の消費）が目的と化し、その結果、「小田原式」研究の意義が捏造され、具体的には接近することによって混乱が一層甚だしくなるかのように捏造・吹聴され、昭和14年の小林行雄氏と昭和15年の山内清男氏による方法的切磋琢磨を抹殺し、最終的には「小田原式」を隠蔽することで研究の進展が図られるかのように捏造・誤解されてきたのである。

そこで「藤村新一事件」の教訓から反省すべきは、戦後の高度経済成長時代の隠蔽プロパガンダによる構造的思考停止状態からの抜本的な解放であり、「小田原式」研究を原点に戻すことにより、再度先史考古学の方法を具体的な資料に基づいて再検証する意識改革と実践を促すことにほかならないのである。

その点で飯塚博和氏による「小田原式再考」は重要な問題提起であり、俗称「須和田式」の研究進展状況から観て正に時宜な対応であった。これは杉原荘介氏の櫛目文単純伝播論への批判が高じる中で、「土器型式」の「在地化基盤」を特に重視した実践であり、黒沢浩氏による「在地」概念をより厳密な文様系列の展開へと導き、複数の文様系列別により深い変遷プロセスを検討した点に、「小田原式」研究においては珍しく素直に「土器型式」研究としての展望を見出した仕事であった。ここに故人のご冥福を謹んでお祈りする次第である。

「小田原式」研究とは、「小田原式」研究の意義が理解されるまでに弥生式研究の深耕・進展が見られてはじめて重要性が前向きに議論でき、その真相と方法を含めた先史考古学的展望に意義が見出せるのである。これは『図譜』の「特に変った弥生式」が「土器ＤＮＡ関係基盤」に根差した接近法であることに人類史的意義があり、特異ゆえに分析を怠ったり、マイナーゆえに無視したりする研究姿勢を、非科学的で型式学不在として痛烈に批判したものである。

層位などのイベント情報を用いて遺蹟内の局所最適化に当座の目的を設定し、「タイムスケール」として土器を排列する作業は決して否定しないが、型式学研究とはそこから始まる本質への接近である。手続き的には個々の来し方行く末の検証を行い、集団の「複合」状態を確認し、人類史として総合可能な「土器型式」を組織する手掛かりを見出し、編年としての全体最適化に向けて試行錯誤するという、本来の先史考古学研究目的に接近し、及びそこから集落の成立や展開、そして遺蹟群研究における「土器社会論」の議論を可能にするのが、「小田原式」研究の方法であり、今日的意義であると展望した。そしてそれは畢竟、戦前の到達点に過ぎなかったのである。そして戦後の資料は「文様帯」により再構成すべきであり、別稿を予定している。

隠蔽する心よりも学ぶ心によって山内清男氏の学史的な論点に接近可能な構えで、隠蔽された「小田原式」研究と対峙すると、当たり前ではあるが「藤村新一事件」は考古学に関わる者

にとって決して他人事であってはならないことと痛感せざるを得ない。そして戦後、特に高度経済成長期における先史考古学の脆弱性を徹底的に反省し、再構築の強い意志と継続的な実践に着手しない限り、時代の潮流と同期し迎合された「藤村新一事件」を学問として乗り越えることは絶対に不可能であるとの決意に逢着する。「小田原式」研究を通して捏造の温床が極めて考古学的であることを認識し、「藤村新一事件」成立事情が決して特殊でなく、我々の日常茶飯事の意識であることを実感してしまった点は極めて残念であったが、幸いにも戦前までの学史は尚記憶と記録の範囲内にあり、再認識と再検証による再出発は可能であると思量する。管見ゆえの誤解はご叱正頂ければ幸いである。

引用文献

安藤　広道1990ａ　「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式の細分（上）―遺跡群研究のためのタイムスケールの整理―」『古代文化』第42巻第６号、（財）古代学協会

安藤　広道1990ｂ　「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式の細分（下）―遺跡群研究のためのタイムスケールの整理―」『古代文化』第42巻第７号、（財）古代学協会

安藤　広道　1996　「南関東地方（中期後半・後期）」『ＹＡＹ！―弥生土器を語る会20回到達記念論文集―』、弥生土器を語る会

安藤　広道　1999　「「栗林式土器」の成立をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』92号、長野県考古学会

安藤　広道　2002　「静岡県沼津市東椎路久保出土の弥生土器について」『民族考古』第６号、慶応義塾大学『民族考古』編集委員会

飯塚　博和　1982　『遺跡調査会報告第１冊　千葉県野田市半貝・倉ノ橋・勢至久保』、野田市遺跡調査会

飯塚　博和　1993　「小田原式土器再考」『異貌』第13号、共同体研究会

飯塚　博和　1994　「小田原式土器再考（続）」『異貌』第14号、共同体研究会

石井　寛　1980　『折本西原遺跡』、横浜市埋蔵文化財調査委員会

石川　日出志　1986　「中部・関東の弥生時代中期をめぐる諸問題」『第７回　三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』、北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古文化研究所・群馬県考古学談話会

石川　日出志　1996ａ　「須和田式土器」『日本土器事典』、雄山閣出版

石川　日出志　1996ｂ　「小田原式土器」『日本土器事典』、雄山閣出版

石川　日出志　1996ｃ　「東日本弥生中期広域編年の概略」『ＹＡＹ！―弥生土器を語る会20回到達記念論文集―』、弥生土器を語る会

石川　日出志　1997　「御新田式土器をめぐって」『シンポジウム南関東の弥生土器』、弥生土器を語る会・埼玉弥生土器観会

石川　日出志　1998　「弥生時代中期関東の４地域の併存」『駿台史学』第102号、駿台史学会

石川　日出志　2001　「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号、駿台史学会

石川　日出志　2002　「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100号、長野県考古学会

石川　日出志　2003　「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第27号、土曜考古学研究会

伊丹　徹　1990　「様式論と関東」『神奈川考古』第26号、神奈川考古学同人会

犬木　努　1992「宮ノ台式土器基礎考―施文帯の検討を中心として―」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第11号、東京大学文学部考古学研究室
大島　慎一　1983「南関東地方の弥生中期編年研究について―王子台遺跡を中心に―」『東海史学』第18号、東海大学文学部
大島　慎一　2002「第ⅠⅤ様式」『弥生土器の様式と編年－東海編－』、木耳社
大塚　達朗　2000『縄紋土器研究の新展開』、同成社
大塚　初重　1965「東京都三宅島ボウタ遺跡の調査」『考古学集刊』第3巻第1号、東京考古学会
岡本　東三　2003「多岐亡羊の縄紋文化起源論」『季刊　考古学』第83号、雄山閣
神澤　勇一　1968「相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について」『神奈川県立博物館研究報告』第1巻第1号、神奈川県立博物館
黒沢　浩　1987「神奈川県伊勢山遺跡出土の弥生式土器」『明治大学博物館　館報』№3、明治大学考古学博物館
黒沢　浩　1993「宮ノ台式土器の成立―東海地方の櫛描文土器群の動向から―」『駿台史学』第89号、駿台史学会
黒沢　浩　1997「房総宮ノ台式土器考―房総における宮ノ台式土器の枠組み―」『史館』第29号、史館同人
黒沢　浩　1998「続・房総宮ノ台式土器考―房総最古の宮ノ台式土器―」『史館』第30号、史館同人
紅村　弘　2003「加生沢遺跡の新資料2点と最近の問題点」『古代人』63、名古屋考古学会
小林　青樹ほか　1995『東京都三宅村　大里東遺跡発掘調査報告書』、大里東遺跡発掘調査団
小林　行雄　1939『弥生式土器集成図録　正編解説　1938　東京考古学会学報第1冊』、東京考古学会
斎木　勝　1978「第Ⅳ章　東京湾東岸における弥生中期遺跡の集落構成と出土土器」『研究紀要3　―考古学から見た房総文化―　3　弥生時代』、千葉県文化財センター
斎藤　隆・鈴木　正博　1978「千葉県多古町桜宮遺跡の土器について」『古代文化』第30巻第10号、(財)古代学協会
杉原　荘介　1936a「相模小田原出土の弥生式土器に就いて」『人類学雑誌』51－1、日本人類学会
杉原　荘介　1936b「相模小田原出土の弥生式土器に就いての補遺」『人類学雑誌』51－4、日本人類学会
杉原　荘介　1967「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」『考古学集刊』第3巻第4号、東京考古学会
杉原　荘介　1968「南関東地方」『弥生式土器集成本編2』、東京堂出版
杉原　荘介　1977「須和田式土器の細分について」『わかしお　若潮会連絡誌』№1、若潮会
杉原　荘介　1981『明治大学文学部研究報告　考古学第8冊　栃木県出原における弥生時代の再葬墓群』、明治大学文学部
杉山　浩平　1998「小田原市中里遺跡の弥生土器から」『史峰』第24号、新進考古学同人会
杉山　浩平　2003「愛名鳥山遺跡出土土器の再検討」『西相模考古』第12号、西相模考古学研究会
杉山　博久　1970a「2.付編　山ノ神遺跡周辺の弥生中期の遺跡とその出土資料」『小田原市文化財調査報告書』第3集、小田原市教育委員会
杉山　博久　1970b「1.小田原市山ノ神遺跡発掘調査報告」『小田原市文化財調査報告書』第3集、小田原市教育委員会
杉山　博久　1974『愛名鳥山』、愛名鳥山遺跡発掘調査会
杉山　博久　1996「お目に掛りたかったです　山内清男先生」『画竜点睛―山内清男先生没後25年記念論集―』、山内清男先生没後25年記念論集刊行会

鈴木　正博　1978 「「赤浜」覚書」『常総地』９、常総台地研究会
鈴木　正博　1979ａ 「特別寄稿　高野寺畑の弥生式土器について」『高野寺畑遺跡発掘調査報告書』、茨城県勝田市教育委員会・高野寺畑遺跡調査会
鈴木　正博　1979ｂ 「「十王台式」理解のために（３）―分布圏南部地域の環境（上）―」『常総地』10、常総台地研究会
鈴木　正博　1982 「「出流原」抄」『利根川』３、利根川同人
鈴木　正博　1984 「「王子台」の頃」『利根川』５、利根川同人
鈴木　正博　1985 「関東地方（当日配布資料）」『＜条痕文系土器文化＞をめぐる諸問題』、愛知県考古学談話会
鈴木　正博　1997 「1996年の考古学界の動向　縄紋時代（関東・中部）」『月刊　考古学ジャーナル』423、ニューサイエンス社
鈴木　正博　1999ａ 「栃木「先史土器」研究の課題（３）―「宮ノ台式縁辺文化」としての「富士前式」制定とその意義―」『婆良岐考古』第21号、婆良岐考古同人会
鈴木　正博　1999ｂ 「「十王台式」研究法から観た南関東弥生式（序説）―「縄紋原体論」と「施文帯」による「宮ノ台式縁辺文化」への接近―」『茨城県考古学協会誌』第11号、茨城県考古学協会
鈴木　正博　1999ｃ 「北関東弥生式後期「二軒屋式」の研究―「二軒屋式」制定60年の清算と「土器型式」研究の再構築―」『日本考古学協会第65回総会研究発表要旨』、日本考古学協会
鈴木　正博　2000ａ 「木戸口貝塚論序説―東京湾東岸における大型ハマグリ・マガキ主体「宮ノ台式」直前期弥生式貝塚の形成―」『利根川』21、利根川同人
鈴木　正博　2000ｂ 「「宮ノ台式」成立基盤の再吟味―北方文化論的視点から観た「宮ノ台式」在地化基盤と進行濃度―」『日本考古学協会第66回総会研究発表要旨』、日本考古学協会
鈴木　正博　2001ａ 「「王子台」の頃、そして「王子ノ台」から―相模弥生式中期中葉における「土器ＤＮＡ関係基盤」の構築―」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』、日本考古学協会
鈴木　正博　2001ｂ 「「小田原式」研究序説―「十王台式」研究法である「土器ＤＮＡ関係基盤」から観た「小田原式」の真相―」『茨城県考古学協会誌』第13号、茨城県考古学協会
鈴木　正博　2001ｃ 「「弥生式中期「雲間式」と「富士前式」の間―「十王台式」研究法から観た真の「御新田式」、及び「宮ノ台式縁辺文化」における進行濃度の実態―」『栃木県考古学会誌』第22号、栃木県考古学会
鈴木　正博　2001ｄ 「貝田町ぱくり事件は迷宮入りか、それとも型式学の復権は可能か！―埼玉土器観会「秩父」の論点は「中里式」概念を止揚する！―」『関東弥生研究会　第１回研究発表資料』、関東弥生研究会
鈴木　正博　2002ａ 「「白倉」と「関所裏」の筒形土器に観る型式学的引力」『群馬考古学手帳』、群馬土器観会
鈴木　正博　2002ｂ 「関東弥生式中期中葉の突起文と筒形土器の型式学―「様式論」では接近不能な「特に変った弥生式」と「土器ＤＮＡ関係基盤」―」『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』、日本考古学協会
鈴木　正博　2003ａ 「「脱条痕文縁辺文化」研究序説―弥生式「zigzag 文様帯系土器群」と「脱条痕文」に観る相互作用と「共同の母体」観―」『婆良岐考古』第25号、婆良岐考古同人会
鈴木　正博　2003ｂ 「「野沢２式」研究序説―「磨消渦文系統論」への新たなる接近―」『栃木県考古学

会誌』第24集、栃木県考古学会
鈴木　正博・鈴木　加津子　1980「「女方文化」研究（１）―平沢式の東進・北上について―」『第４回茨城県考古学協会研究発表要旨』、茨城県考古学協会
関根　孝夫　1982「神奈川県王子台遺跡」『日本考古学年報』32、日本考古学協会
関　義則　1983「須和田式土器の再検討」『埼玉県立博物館紀要』10、埼玉県立博物館
谷口　肇　1996「神奈川県地域（弥生前期～中期中葉）」『ＹＡＹ！―弥生土器を語る会20回到達記念論文集―』、弥生土器を語る会
中島　宏　1982「熊谷市池上遺跡発掘調査概報」『資料館報』ＮＯ.13、埼玉県立さきたま資料館
中村　五郎　1972「野沢１式土器の類例とその時代」『小田原考古学研究会会報』第６号、小田原考古学研究会
橋口　尚武ほか　1983『東京都埋蔵文化財調査報告　第10集　三宅島坊田遺跡』、東京都教育委員会
星田　亨二　1976「東日本弥生時代初頭の土器と墓制―再葬墓の研究―」『史館』７、史館同人
松本　完　1988「第９章　折本西原遺跡の弥生集落―第Ｉ次調査の成果と問題点―」『折本西原遺跡－Ｉ横浜市都市計画道路新横浜元石川線折本地区埋蔵文化財発掘調査報告書』、折本西原遺跡調査団
村川　行弘ほか　1977『田能遺跡概報』、兵庫県社会文化協会
山内　清男　1936ａ「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』第１巻第４号（山内清男・先史考古学論文集・第三冊1967所収）
山内　清男　1936ｂ「考古学の正道」『ミネルヴァ』第１巻第６－７号（山内清男・先史考古学論文集・第三冊1967所収）
山内　清男　1939「第一部　関東地方　第一輯　十王台式　野沢式」『日本先史土器図譜』、先史考古学会（山内清男・先史考古学論文集・第六～十冊1967所収）
山内　清男　1940「第一部　関東地方　第五輯　弥生式」『日本先史土器図譜』、先史考古学会（山内清男・先史考古学論文集・第六～十冊1967所収）

古代鎌倉の卜骨と三浦半島

—律令期における海浜部集落の一側面—

押　木　弘　己

1．はじめに
2．神澤氏の形式分類と近年の研究動向
3．由比ヶ浜出土の卜骨
4．三浦半島の事例
5．出土遺跡の様相と特質
—漁撈・卜占に見る伝統性—
6．おわりに—卜骨をめぐる諸問題—

1．はじめに

筆者は先に、近年鎌倉市由比ヶ浜地区での出土・報告例が続いている古代の卜骨について、研究に蓄積のある三浦半島の類例を参照しながら比較・検討を行い、併せて律令期由比ヶ浜における集落形成の動態、また卜骨がそこに持つ意義について言及したことがある（押木2004）。そこでは、先行研究の経過・方向性を再確認するとともに、その過程において生じた幾つかの視点をもとに、以下の要点で試論を示した。

a．三浦半島では、弥生時代中期まで骨卜（獣骨を用いた卜占）の伝統が遡ることが確認されているが、鎌倉の卜骨も、地勢・出土資料に見る同地域との親縁性の深さから、この伝統の一環に位置付けられるものといえる。

b．鎌倉の卜骨は、出土遺跡の立地や供伴遺物、また三浦半島での研究動向から見て、海上・海辺での生業活動に従事する漁撈民らの習俗遺物であった可能性が高い。

c．由比ヶ浜の集落は、律令国家の確立期において地域の拠点集落として設営されたもので、この中に骨卜を伝統習俗に持つ在地集団が、国家の介在下に取り込まれて形成されたのではないか。

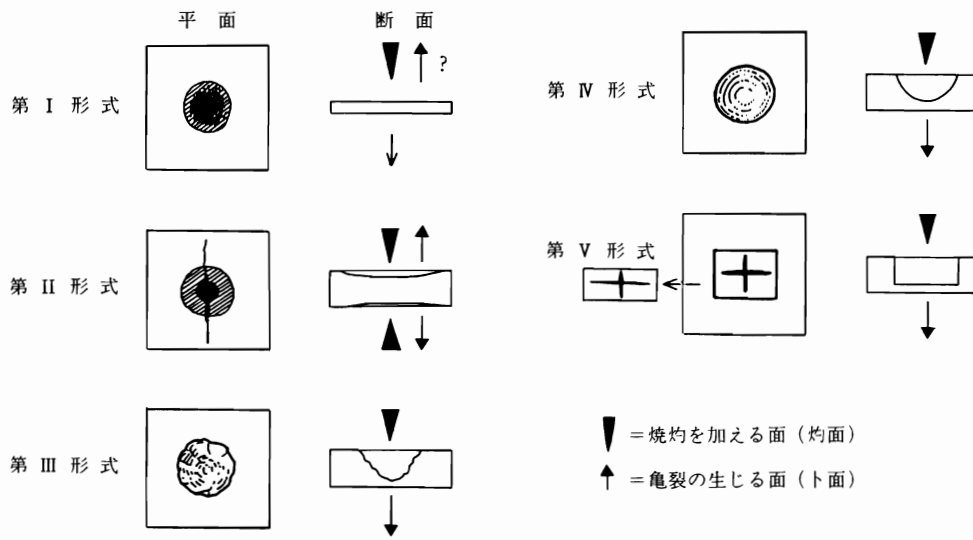
といったところであるが、いずれも具体的な論議には踏み込めず、印象的な問題提起を示すに留まった。そこで本稿では、上記の論点に則して幾つかの事例検討を加え、鎌倉の卜骨から何が見出せるのか、改めて考えることにしたい。

2．神澤氏の形式分類と近年の研究動向

1949年の三浦市間口A洞窟での発見以来、三浦半島は卜骨研究において常に一先端を担ってきた地域である。その経過については前稿でも述べているため、ここでは細かく触れないが、ほぼ定説となっている神澤勇一氏の形式分類および近年の研究動向についてのみ概観しておく。

神澤氏は、自身が担当した三浦市間口A洞窟の再調査(1)において、弥生後期の卜骨と全国的にも初例となる古墳後期の卜甲（占いに用いた亀甲：ここではアカウミガメ腹甲製）を発見し、これを契機として卜骨・卜甲の資料集成を全国規模で進めた。その上で、整形・焼灼技法に基づく形式分類を試み、地域的偏差は認められるとしながらも、形式差に基づく時代差・変遷を提示した(第１図)。三浦半島に関わる形式のみを挙げれば、第Ⅱ形式および第Ⅴ形式の類例が出土していることになり、前者では骨材への整形を殆ど施さない弥生時代的様相と、切削を加えた後に焼灼を加える古墳時代的様相とが把握されている(後節４参照)。第Ⅴ形式は、骨材へ切削・研磨を施した後、方形ないしは長方形の鑽と呼ばれる彫り込みを切り、この底面に「＋」・「－」といった直線形の焼灼を加えるものである。本形式では、間口の卜甲例が古墳時代後期・６世紀後半頃の所産とされ最も古く、これ以降、奈良・平安時代に至る資料は全てこの形式に属するものとなる。第Ⅱ形式では灼面の裏面に亀裂が見られないのに対し、第Ⅴ形式では彫鑽と加熱によって意図的に亀裂、若しくは変色を発生させて占う方法が取られていることから、氏は前者を「焼灼面・卜占面一致型」、後者を「焼灼面・卜占面分離型」と呼んで上記５形式の上位に設定している。(2) また、今のところ当地域における出土例はないものの、円形鑽を設ける第Ⅲ・Ⅳ形式(彫鑽の粗・精により類別)が第Ⅴ形式に先行する形態となる可能性も指摘され、こうした所見も全国での類例増加とともに、逐次裏付けられつつある(神澤1976・1983・1987・1990)。

1990年代の後半以降は中村勉氏によって、三浦半島という地域性を重視した多角的視点から考察が加えられている。一例を挙げれば、律令体制の確立期前後を境に、卜骨用材がシカ・イノシシの肩胛骨といった狩猟獣骨から、ウマ・ウシ肋骨といった家畜獣骨に変移する点に留意し、当時の生産体系に転換のあったことを暗に示唆する一方、これに伴う可用骨材の増加から、卜占自体にも形態・内容面で弥生時代以来の伝統からの変容があった可能性を指摘している。



第１図　焼灼形式模式図（神澤1990から転載）

中村氏は一方で、従来説である漁撈民と骨卜との関わりにもやはり重要性を認め、弥生時代の卜骨が海蝕洞窟に偏在して出土する点、また古代の海浜部遺跡における漁具・魚骨などとの伴出事例をもとに、三浦半島における骨卜祭祀は、漁撈・採貝といった海上・海辺での生業に従事する海人の伝統的習俗であったろうとする考えを改めて示した。さらに、骨卜に見るこのような伝統性は、伊豆や房総半島といった他地域との海を背景にした広域的ネットワークの中で培われたのであろうとする視点も示している(3)（中村1996・2002、中村他1998）。

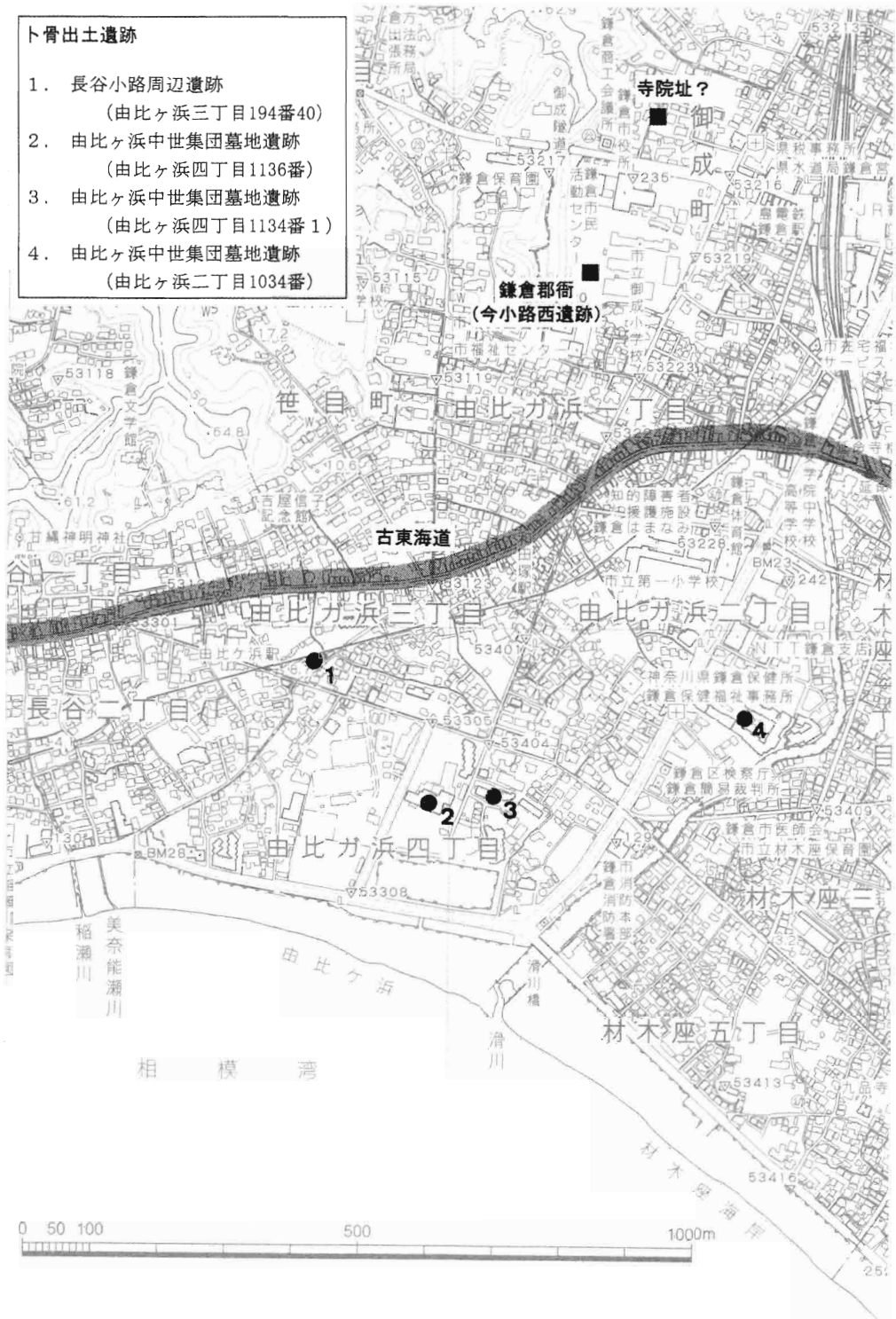
鎌倉では、1980年代における発掘件数の増加に伴い、由比ヶ浜地区において古代集落の発見が相次いだが、それと比例するように卜骨出土例も確実に増加していった。1990年代後半にはそれらの調査報告がまとめられ、この中で大河内勉氏は、遺跡の立地性や出土遺物から海浜部における生業活動に言及し、由比ヶ浜の集落を「半農半漁」と性格付けたが、その上で従来的視点から漁撈従事者と卜骨との関係を認知し、豊漁や航海の安全を対象に卜占祭祀が行われたのだろうと解釈した。その一方で、伴出した「神主」銘の墨書須恵器などとの関わりから卜占を主宰した人物像にも言及し、鎌倉郡内に所謂「式内社」が鎮座しない点も考慮し、集落内の長老者らが卜占を取り仕切ったのだろうとする推論を述べている（大河内1990・1996、大河内・菊川1997）。

以上のように、鎌倉・三浦半島における卜骨研究は、海上・海辺における生業との関わりの中で理解する向きが主流であったといえ、このことは冒頭で述べたように、本論の主要論点ともなっている。

3. 由比ヶ浜出土の卜骨

（1）遺跡の概要

鎌倉市内では、現在までに長谷小路周辺遺跡と由比ヶ浜中世集団墓地遺跡の2遺跡4地点で卜骨の出土が報告されている(4)（第2図）。いずれも滑川右岸の河口部付近(5)に形成された海岸砂丘（由比ヶ浜）に立地する遺跡で、地点によって様相に多少の違いは見られるが、一体の遺跡群として捉えることが可能である。この砂丘域に集落が営まれるのは、律令体制の確立期に当たる7世紀後葉頃になってからで、それ以前は生活空間としての痕跡は見て取れず、葬地や祭祀場としての様相が僅かに確認されているに過ぎない。菊川英政氏の分析によると、集落の出現段階となる7世紀後葉から8世紀初頭にかけて遺構数の急激な増加が見られ、その後、8世紀前半代には比較的落ち着いた遺構の展開を示すという。一方で、当段階における増減の動きが郡衙（今小路西遺跡・御成小学校地点）周辺域に先んじて進行することにも触れ、郡衙などの造営に係る第一段階として、工人らの集団的移住があった可能性が指摘されている（菊川1997）。これ以降、9世紀前半代までは比較的密な遺構の展開状況が続くが、次第に遺構件数も減少傾向を示しつつ、10世紀中葉頃を最後に集落は姿を消す。卜骨の出土も、こうした集



第２図　鎌倉の古代関連地図および卜骨の出土分布

第１表　鎌倉における卜骨の消長

地点番号	遺　跡　名	7世紀	8世紀			9世紀			10世紀
		後様	前葉	中葉	後様	前葉	中葉	後様	前葉
1	長谷小路周辺						■		
2	由比ヶ浜中世集団墓地	▮▮▮	═	═	■			■	
3	由比ヶ浜中世集団墓地	▮▮▮	═	═	═	■	═	■	■
4	由比ヶ浜中世集団墓地	▮▮▮	■	▮▮▮	▮▮▮				

実線は10点未満、二重実線は10点以上を表す。破線は報文から卜骨の存在が想定されることを示す。

落の存続期間を通じて継続的に認めることができる(6)（第１表）。

出土遺物の様相としては、土器類では集落開始期から相模中央部における土器変遷の流れを汲む一方、７世紀末から８世紀前半にかけて盤状坏の出土が一定量ある点、また相模の他地域に若干先行する形で甲斐型坏の搬入が認められる点などが特筆される。さらに、三浦半島全域において９世紀代から10世紀前半にかけて盛行する「三浦型甕」が、当地域においても出現・展開する状況などは、鎌倉と三浦半島との親縁性を窺う上で看過できない事象といえる。その他の遺物には、腰帯具の鉈尾や多量の瓦など、官衙・寺院的色彩を帯びたものに加え、鎌や鋤先・穂摘み具といった鉄製農具が少量認められ、また釣針・土錘を中心とした漁撈具も一定量の出土があり、集落の多様な側面を見て取ることができる。

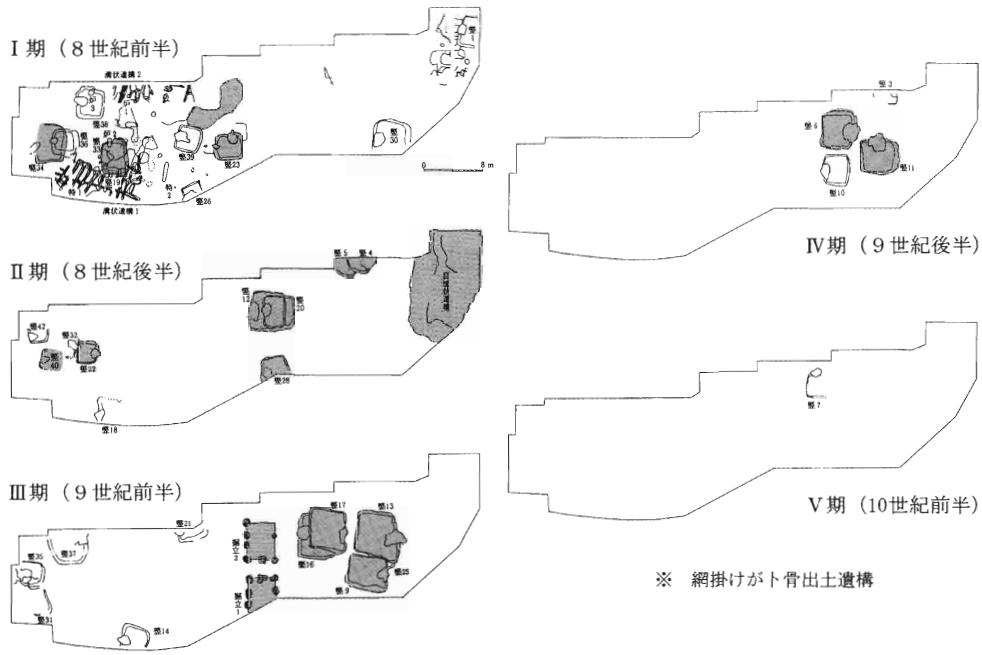
以下、前稿と記載が重複するが、由比ヶ浜出土の卜骨について地点ごとに成果概要を述べ、次いでその形態・特徴を見て行くことにしたい。

（２）出土状況

地点１：竪穴住居址４軒と土坑１基が検出。９世紀前半から中頃に時期的な中心を置く。卜骨は、９世紀中頃の２号住居址竈内より出土した１点が図示され、他に遺物包含層（８～９世紀の遺物が主体）からの出土も記述されている。

地点２：住居址が11軒の他、竪穴状遺構、貝塚状遺構、屋外炉、焼砂址、炭層、祭祀遺構、廃棄遺構などが検出した。集落の存続期間は７世紀後半～10世紀前半と考えられ、８世紀前半に形成のピークが認められる。卜骨は鑽を確認しえた69点が図示されているが、住居址からの出土はなく、貝塚状遺構や炭層・廃棄遺構に投棄されたものが大半を占めている。年代的には８世紀前半に集中する傾向が見て取れ、後段の地点３と比べて時期的なまとまりが窺える。

地点３：古代の遺構は住居址42軒と掘立柱建物址２棟の他、貝塚状遺構、屋外炉、焼砂址、炭層や祭祀跡と考えられる特殊遺構などが検出し、遺跡内でも最も密集した遺構展開を見せている。出土遺物も豊富で、土器様相により８世紀前半から10世紀前半にかけて、５時期に亘る集落変遷が明らかとされた（第３図）。卜骨は整形や鑽灼の曖昧なもの、未製品を含む151点が報告されている。住居址覆土や貝塚状遺構、炭層から多く検出し、使用後は他の残滓とともに



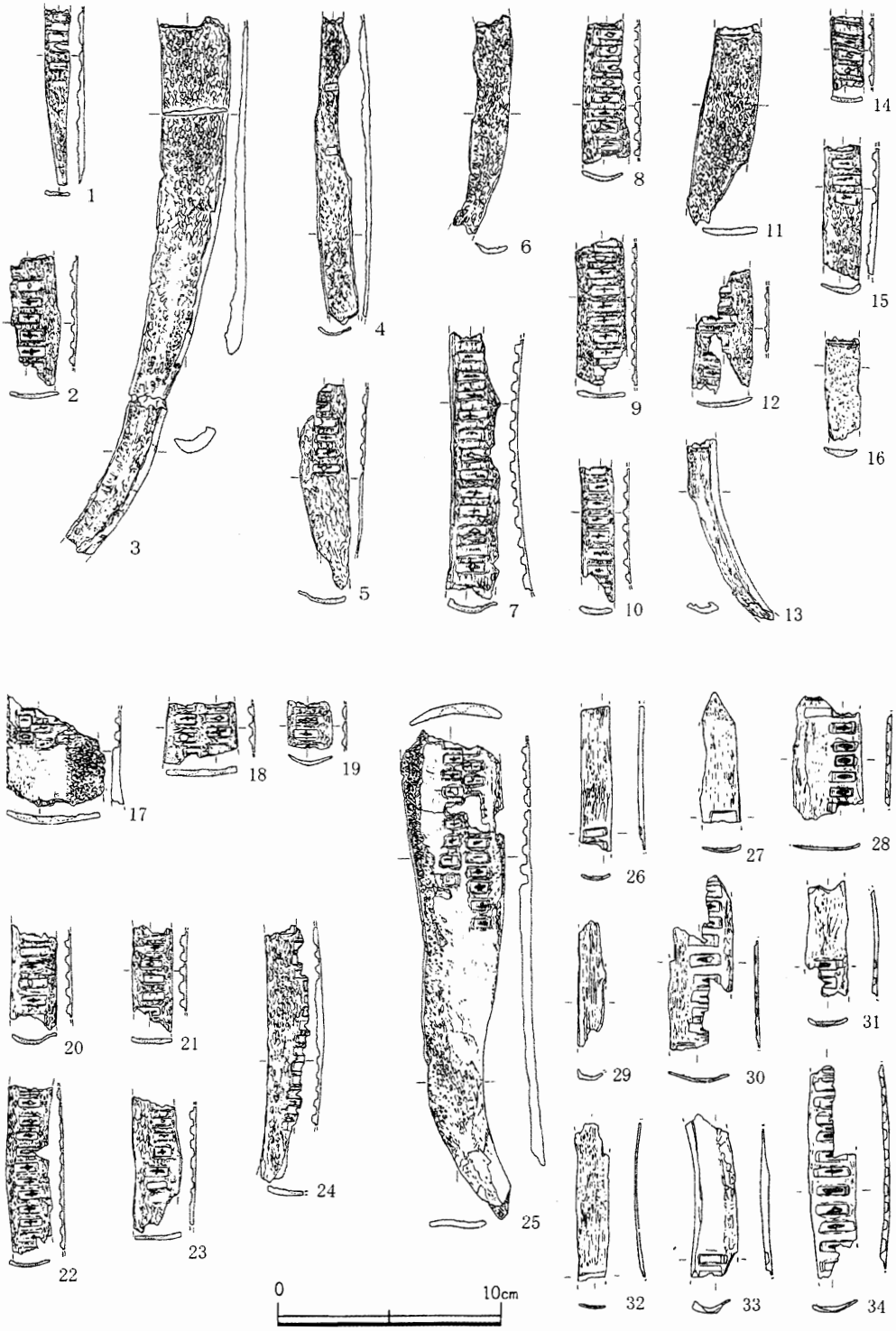
第３図　古代遺構の変遷・卜骨分布（地点３：大河内1996を改変）

廃棄された傾向が強い。年代的には８世紀前半から９世紀前半に集中している。本地点では、鎌倉で唯一となる肩胛骨使用例があり、周辺の同一層上では祭祀関連と思しき特殊遺構が発見されるなど、特筆すべき出土状況も確認された。この資料については、特殊遺構からの出土土器をもとに８世紀前葉の年代観が付与されている。

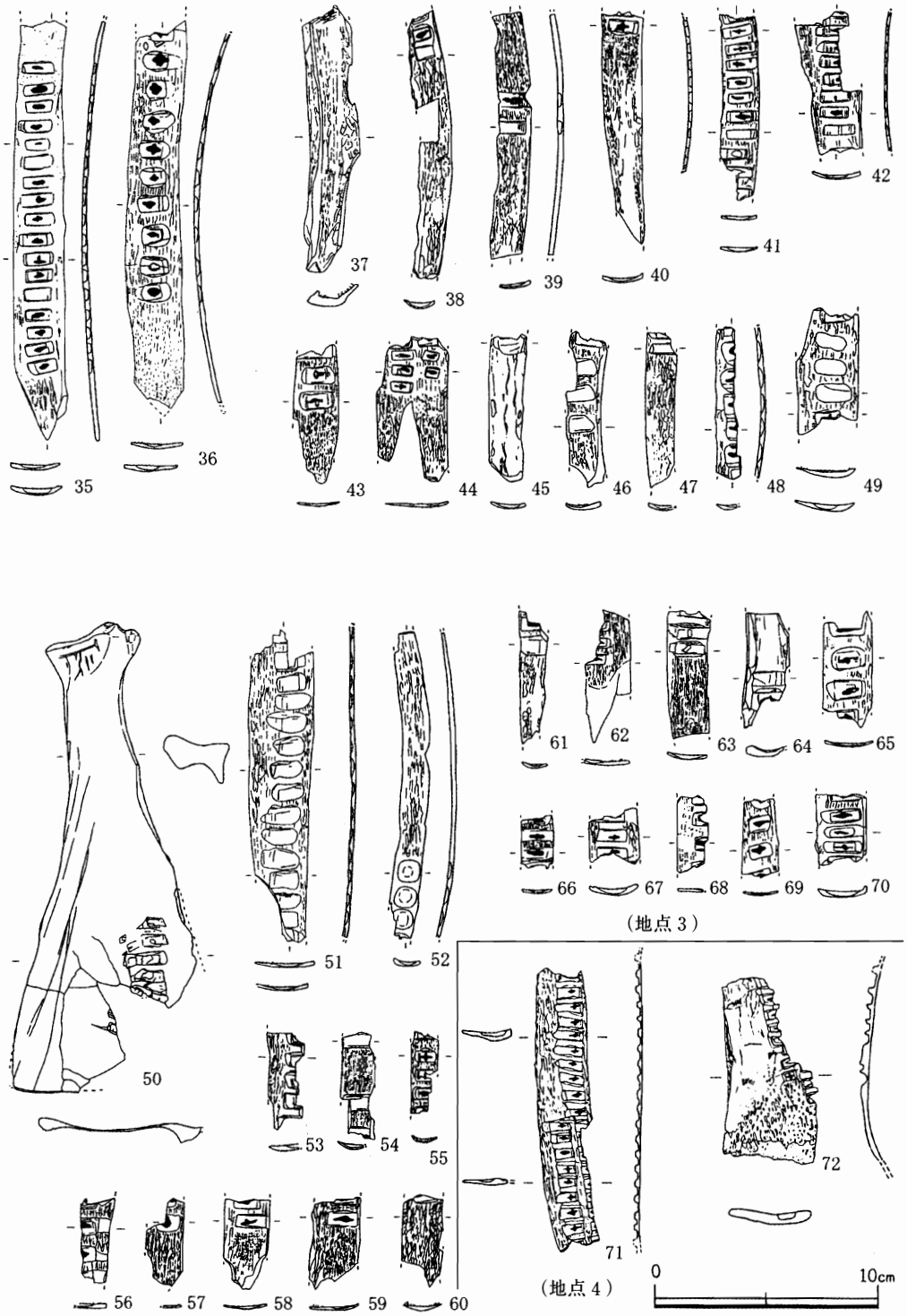
地点４：古代の遺構としては溝状の平面プランを有する祭祀遺構、土坑などが検出している。祭祀遺構は７世紀中葉、土坑には10世紀後葉頃の年代観が与えられている。卜骨は古代の遺構確認面から５点が出土したとのことで、うち２点が図示されている。報告では確実な年代観は不明としながらも、周辺出土遺物から、７世紀後半～８世紀代とする考えが示されている。

（３）形態・特徴

次に、出土した卜骨の特徴について見ていくことにする。第６・７図には地点ごとに鑽灼の明瞭な資料を掲げたが、全てにおいて完形といえるものはなく、細かく破損したものが大半であった。これが神澤氏の指摘するような人為的破砕(7)の結果と見なせるかは不明であるが、少なくとも、前述の貝塚状遺構などを中心とする出土状況を見る限りでは、卜占後の埋納といった意識が働いたとは想定しがたい。人為的・意図的破砕の有無は別儀として、卜骨自体が非常に薄く作られる点と、故意に亀裂を生成させる祭具としての属性を考えれば、細片化という結果はやむを得ないことであろう。一方、こうした細片化は資料の実数を捉えにくくもしており、由比ヶ浜における出土総数が200点を超え多数に上るとはいえ、実際にどの程度の頻度で卜占が行われたのか、また一度の卜占に伴う卜骨の使用数はどれ位であったのかなど、明確に



第４図　鎌倉出土の卜骨（地点２）



第５図　鎌倉出土の卜骨（地点３・４）

しえない一因となっている。

これらの卜骨は、いずれも神澤分類の第Ⅴ形式、「焼灼面・卜占面分離型」に属し、獣種は未鑑定ながら肋骨など細身の管状骨を用いた例が大半を占める。骨材は半載された後、海綿体を切除して平滑に均されているが、これは骨材全体に及ぶものではなく、鑽を成形する周囲に限られている。第5図35は鑽を設けない図の上方部にも除去が及んでいることから、ここに親指を添えるなどして焼灼されたとも考えられる。全体の厚さは2㎜前後に削られ、側縁部は面取りされる。次いで幅4㎜・長さ6～7㎜前後の長方形鑽が一列ないし二列彫り込まれるが、鑽底厚は0.2㎜前後と極めて薄く作られており、製作には熟練した技術を要したことが推測される。ただし、出土資料には焼灼痕を持たずに破損している個体も散見されることから、製作途中の失敗品も多少あったことは推察できよう。一例のみとなる肩胛骨（50）も、骨材の下半側縁部と下端を削って面取りを施しているが、肩胛棘の切除には至らず、この点では古墳前期の類例における調整方法と差異がある（後節4参照）。

大河内氏は鑽の形状に関して、古相では明瞭な角を有する長方形から、新しい段階になると隅丸状へと変化する傾向を指摘しており、9世紀前半の51・52などがこれに該当する。これらの資料を実見したところ、まず鑽の長さ・幅が一定でないことが一目で判別しえた。鑽は骨材の短軸方向に鑿状工具を当てて成形するが、これを2～3回に分けて行うため、長辺側の壁面に細い筋が入るのが通常である。両者はこの壁が面をなさずに階段状を呈しており、短辺側の壁面でも刃の入れと止めの位置が安定せず、結果的に鑽の大きさ・形状が区々となっている。1㎜内外の誤差のため実測図、ましてや報告書掲載図には反映されづらい部分であるが、こうした細部の状況から作り手の意識の退化・粗雑化を読み取ることができるかもしれない。

卜骨は土器類との供伴性・一括性に乏しい遺物であり(8)、また今の段階では年代ごとに相対化しうるだけの資料数を得ていないため断定はできないが、それでも、大よその傾向として如上の時期的変化を窺うことが可能である。また、次節で紹介する間口洞窟出土の古墳後期の卜甲と比べると、鑽の長幅比という点で卜甲が6：4前後であるのに対し、由比ヶ浜の卜骨は平均で7：3と横長傾向にあることが認められ(9)、古墳後期の類例が僅かなため推測の域を出ないが、こうした要素も卜骨・卜甲の時期差を推し測る材料として設定できるかもしれない。

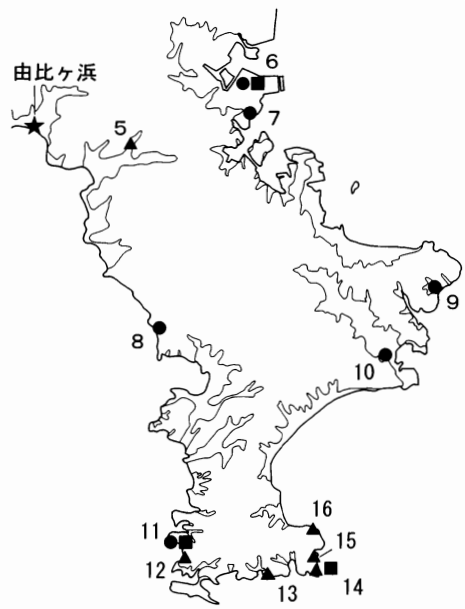
4. 三浦半島出土の卜骨・卜甲

次に、三浦半島地域における卜骨出土例を見て行くことにする。第6図には出土遺跡の分布を示したが、一見して海岸近くの遺跡に偏よりがあることが分かり、弥生時代の事例については、中村氏の指摘にあるように海蝕洞窟に非常に強い偏在性を認めることができる。こうした分布上の特性は房総半島南部でも共通する一面というが、こと三浦半島においては、遺跡数の多さもあって一段と際立ったあり方を示している。第2表には、遺跡・地点ごとの出土状況を

まとめたが、ここで特徴的な遺跡について数例をピックアップし、当地域における卜骨（卜甲）の時代別様相を見ることにしたい。

（1）弥生時代～古墳時代前期

海蝕洞窟（地点12～16）では、洞窟内貝塚から貝殻・魚骨といった食物残滓や多種の漁具とともに卜骨が出土する事例が多く、採貝・漁撈従事者の習俗として卜占が行われたであろうとする、従前見解の根拠となっている。時期的には弥生時代後期前半・久ヶ原式期が中心となるが、層序の上では中期後半・宮ノ台式期にまで遡る可能性も含んでいる。三浦市赤坂遺跡に代表される、台地上での集落形成が活発化するのと時期を同じくするだけに、洞窟—台地間における遺跡形成の連動性、また両所に生活・生産の場を求めた集団間の接点といった事柄を考える上でも興味深い動態といえる。卜骨にはシカやイノシシの肩胛骨・肋骨を用いたものの他、イルカ椎骨を使用した例もある。骨材への加工は研磨程度の簡単なもので、焼灼方式は第Ⅱ形式に属する。



第6図　三浦半島の卜骨・卜甲出土遺跡

逗子市池子遺跡群（地点5）では、№1－A地点で谷戸部を流れる宮ノ台式期の旧河道が検出し、この埋土中から卜骨7点が発見されている。河道跡は弥生後期まで流路としての機能を果たしていたようであるが、層位・伴出土器の面から、卜骨が中期後半の所産となることに誤りはないだろう。海蝕洞窟の資料では層位上の不安要素を抱えていた中期卜骨の存在を確実なものとした点で、本例は大きな意義を持つ。該期河道跡からは他に、多種の農具を主体とする豊富な木製品が発見されて注目を集めたが、この中に混じって釣り針・モリ・ヤスなどの骨角製品を中心とする漁撈具も出土している。出土した卜骨は全てシカ・イノシシの肩胛骨を使用したもので、洞窟資料や後述する埋没谷の出土資料とは組成面で差異が認められる。骨材へは研磨程度の簡便な加工を施すのみで、焼灼は第Ⅱ形式を取っている。

池子遺跡群では、№1－A東地点と№4地点においても卜骨が発見されている。いずれも弥生後期末～古墳前期に位置付けられる資料で、シカ・イノシシの肩胛骨の他、寛骨・肋骨を使用した例も見られる。焼灼はやはり第Ⅱ形式に類別されるものであるが、№－A東地点の肩胛骨使用例は肩胛棘を切除した後に焼灼を施しており、この点で宮ノ台式期資料との相違が認められる。当遺跡群において時代・形態の異なる卜骨が複数発見されたことは、三浦半島における骨卜が弥生・古墳時代の一期間を通じて伝統を保持したことの証左となり、一方で、こうし

第２表　三浦半島の卜骨・卜甲出土遺跡一覧

市	地点番号	遺跡名	地　点	時代・時期※1	立地	出土位置	数量※2	
							卜骨	卜甲
逗子市	5	池　子	No.1－A	弥生中期	谷戸	旧河道	7	
			No.1－A 東	弥生末～古墳前期		埋没谷	15	
			No.4	弥生末～古墳前期		溝址（流路）	3	
横須賀市	6	鉞　切	C・D・E	古墳後期～平安？	砂丘	遺物包含層	（1）	4？
	7	日　向		古墳後期～平安？	谷戸	遺物包含層	1？	
	8	芦名浜		平安	砂丘	遺物包含層	41	
	9	小荷谷		平安	谷戸	井戸址掘り方	1	
	10	蓼　原		古墳末～奈良	砂丘	貝塚・竈	10	
三浦市	11	浜諸磯	C・E	奈良	砂丘	住居址覆土	14	2
	12	海　外		弥生後期	洞窟	貝層	30	
	13	毘沙門	B・C 洞窟	弥生後期	洞窟	貝層・混貝層	5	
	14	間　口	A 洞窟	弥生中期・後期	洞窟	貝層	18	
				古墳後期	洞窟	墓壙覆土？		3
	15	大浦山		弥生中・後期～古墳前期	洞窟	灰層・混貝砂層	7	
	16	雨　崎		弥生後期～古墳前期	洞窟	貝層	4	

※１　時代・時期については、卜骨・卜甲に関わる部分のみを表示した
※２　未報告遺跡の資料数については、神澤・中村両氏の集成に拠った

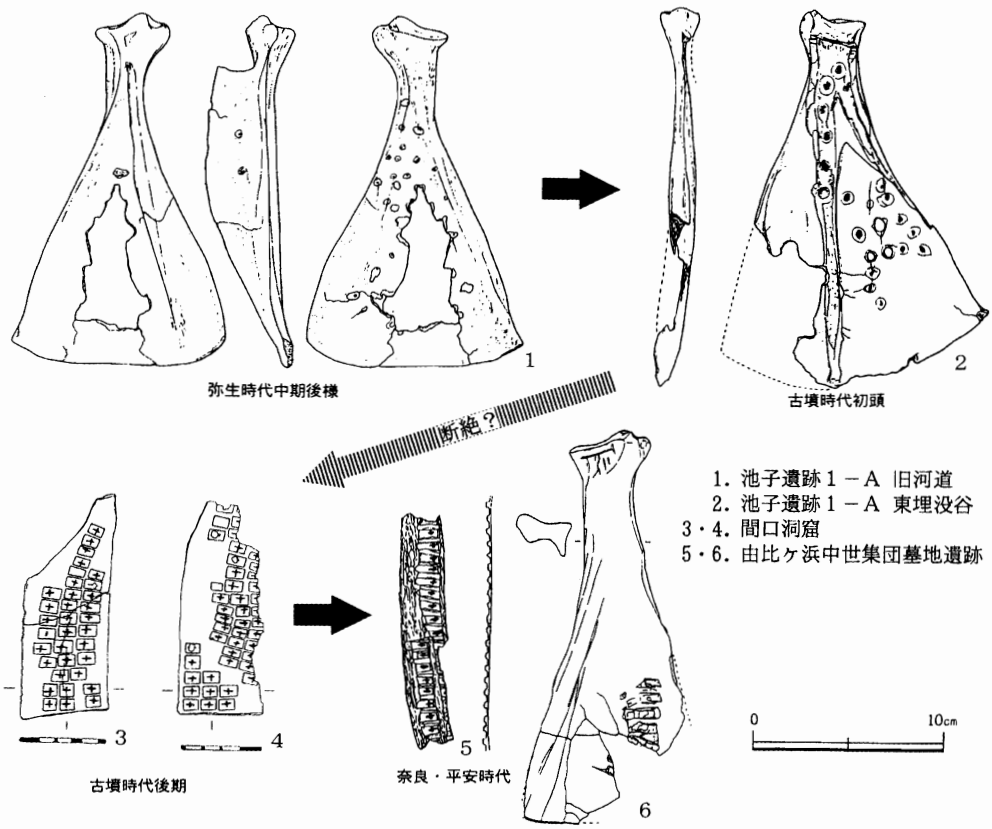
た伝統性が次代に繋がる可能性を示した点でも重要な意味を有している。

（２）古墳時代後期～奈良・平安時代

三浦市間口洞窟遺跡（地点14）では、古墳後期の墓壙から卜甲が出土している。出土位置が上下に重複する墓址の中間位にあったため、副葬品としての性格を持つものか定かでないが、墓域的である該期洞窟空間のあり方から、何らかの葬送観念を有していた蓋然性は指摘できるだろう。本例は卜甲出土例としては全国でも初めてで、この発見によって我が国における甲卜（亀卜）の風習が古墳後期までには成立し、かつ三浦半島にまで伝播していたことが考古学的に実証された。当該期の卜甲は鉞切遺跡（地点６）でも出土している。祭祀遺構として名高い７世紀初頭の牛頭・土師器埋納遺構と同一層での発見で、同遺跡で認められている多様な祭祀の一形態として注目されるものである。また同層中からは、肩胛棘を一部切削したシカ肩胛骨も出土しており、報告では卜骨としての可能性が示されている。ちなみに、鉞切遺跡は平潟湾頭の旧汀線に程近い立地条件にあり、上記埋納遺構のレベルは海抜1.8ｍを測る。

奈良時代から平安時代にかけては、海浜部の集落遺跡が卜骨出土地の主体的な存在となる。浜諸磯遺跡は独立丘と海蝕崖とに挟まれた幅70ｍ程の砂堆上に立地し、現況海抜は４～５ｍ、海岸線と非常に近接した遺跡である。これまでの調査では住居址が９軒の他、カツオ解体後の廃棄址とみられる土坑などが検出し、結合式釣り針の柄や「類製塩土器」と報告された土師器短頸甕（三浦型甕）などの遺物が多く出土している。こうした調査成果から、７世紀後半から９世紀代にかけて営まれた、漁撈専業集団の居住・作業空間といった性格付けがされている。Ｃ・Ｅ地点の合計で卜骨14点、卜甲２点が発見され、Ｃ地点では８世紀初頭の住居址覆土に、Ｅ地点においては８世紀中葉～９世紀前半の包含層（ゴミ捨て場？）に伴うものであった

この時期には、一地点における卜骨出土点数の多い遺跡が目立つようになる。先述の如く、卜骨自体が細かく破損しているため実質的個体数の把握は難しいが、由比ヶ浜や浜諸磯の他、



第７図　鎌倉・三浦半島における卜骨・卜甲の変遷

工事中の発見ながら横須賀市芦名浜遺跡（染屋砂丘遺跡・地点10）でもイルカ肋骨を使用した平安時代の卜骨41点が出土しており、特定の集落における卜占行為が頻繁、或いは卜骨を多用する形態であったことを窺わせる。

5. 出土遺跡の様相と特質—漁撈・卜占に見る伝統性—

ここでは、卜骨を検出した遺跡の様相・特質について、幾つかの例証を示しながら具体的に見ていくことにする。本論の主題からは時代が遡るが、弥生時代から始めることにしたい。

（１）弥生時代の漁撈活動と卜骨

海蝕洞窟については、遺跡の立地性や出土遺物の特徴を見れば、漁撈を主生業とする人々の居住、或いは漁期に際してのベースキャンプといった性格を与えることに異論はないだろう。問題となるのは、彼らが台地上、或いは内地側の集落とどのような接点を持っていたかという点であり、この問題を検討することは該期社会のより具体的な姿に迫るだけでなく、三浦半島という小地域における卜骨の性格的位置付けを行う上でも有効かと思われる。この解明に一歩

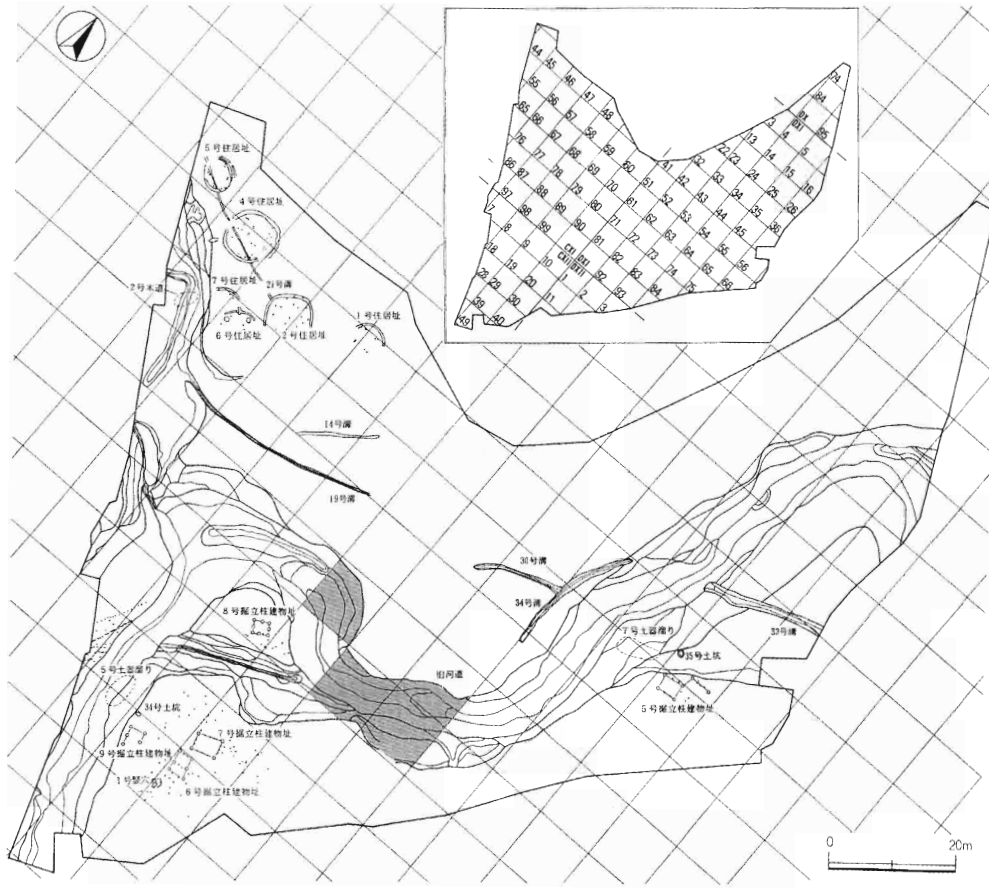
近付くべき視点として、前節で紹介した池子遺跡群の宮ノ台式期旧河道の存在を挙げることができる。ここからは多種の遺物に混在して骨角製を主体とする漁具の出土も一定量あったことは既に述べたが、これら漁具の属性に関連しては、やはり旧河道検出の魚類遺体の分析を通じ、漁獲対象種・漁法の実態という視点から検討を行った樋泉岳二氏の論考がある（樋泉1999）。そこでは、外洋性中・表層魚であるサメ類・カツオの個体数が他の魚種に卓越して多いという分析結果が示され、これが出土した釣り針や刺突漁具の機能・組成と矛盾を持たない点から、これらの魚が池子に暮らした人々の手によって直接捕獲されたのではないかとする見解が示された。その上で、当地の漁撈活動がカツオに強い選択性を持っていた点に注意が払われ、その盛漁期が水田稲作における農繁期と重複する問題、またカツオに限らず対象魚の大きさ・性質に適合した各種漁具の出土から、集落内には水田経営を主な生業とする集団とは別に、極めて高度な漁撈の知識・技術体系を持った集団も存在していた蓋然性が高いとする意見も呈された。(10)

一方で、河道における卜骨の分布がカツオ遺体のそれとほぼ合致する点は、留意すべき状況といえる（第8図）。カツオ遺体については、カタクチイワシ・サバ属とともに「一部の集団のみで消費されたか、骨の除去後に集落全域へ分配された可能性が考えられ」ているが（傍点筆者）、その場合、カツオの漁獲・加工を行う集団・空間と、骨卜を行う集団・空間との接点が想定可能ではないだろうか。ただし、これらが分布する箇所は流路が大きく蛇行する曲折点に当たり、木製品などもこの周辺で非常に集中して出土したというから、一種吹き溜まり的な様相も考慮に入れなければならない。その点を加味しても、サメ類その他の分布状況と比較して、やはり特異な出方として認識することは可能であろう。恣意的な理解であることは承知の上、次項の「角釣り針」と結び付く事象とも考え、参考として取り上げた。

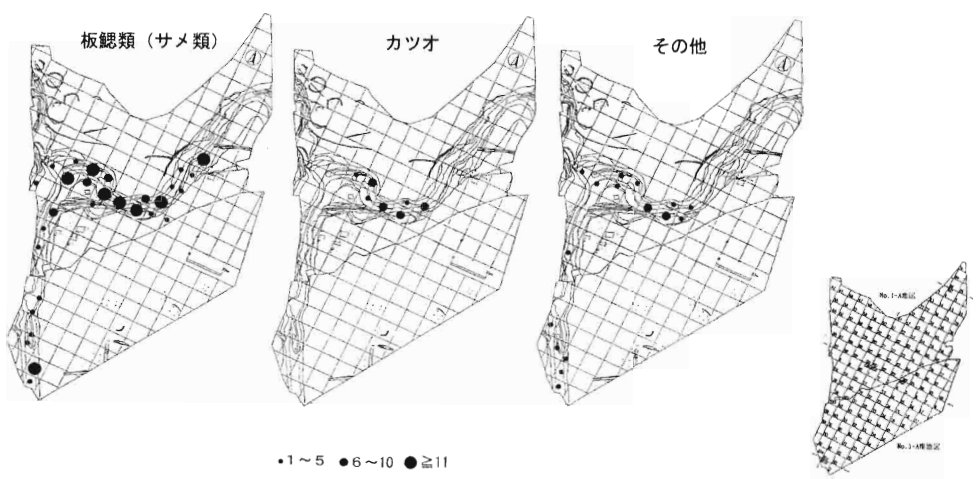
（2）「角釣り針」と卜骨

中村勉氏は、三浦半島の海辺遺跡において検出する結合式釣針について、現行のカツオ釣漁に用いられる擬餌針（角釣り針）との関わりから文献例を含めた検討を行い、併せて製作技法・形態・法量による分類を試みている。そこでは、出土した角釣り針の諸属性と民具・現用資料のそれが相似する点、また先に触れた浜諸磯遺跡では多量のカツオ遺体とともに12点(11)の類例が検出している点が考慮され、やはり出土資料にもカツオを主対象とした擬餌針としての機能が付与されている（中村1993）。浜諸磯で検出したカツオ遺体には、片側の側面にのみ切裁痕を残す椎体が多く見られ、また鰓部を集中的に検出した廃棄土坑も発見されたことから、同遺跡においてカツオの捕獲から解体・製品加工に至る一連の工程が集約的に行われた蓋然性が高まっている。角釣り針とカツオとの有機的関連を窺う上で、重要な事例といえるだろう。

出土遺跡の分布に目を向けてみると、卜骨同様、やはり海岸近くに偏った状況が確認できる（第9図）。遺物の用途を考えれば当然のあり方といえるが、集落遺跡から出土する以外に、横穴墓や洞窟内埋葬に伴う副葬品として使用された例も少なくない。大浦山洞窟では弥生後期～古墳前期の層準より出土しており、当地域では最古例となるが、総体的には古墳後期以降に

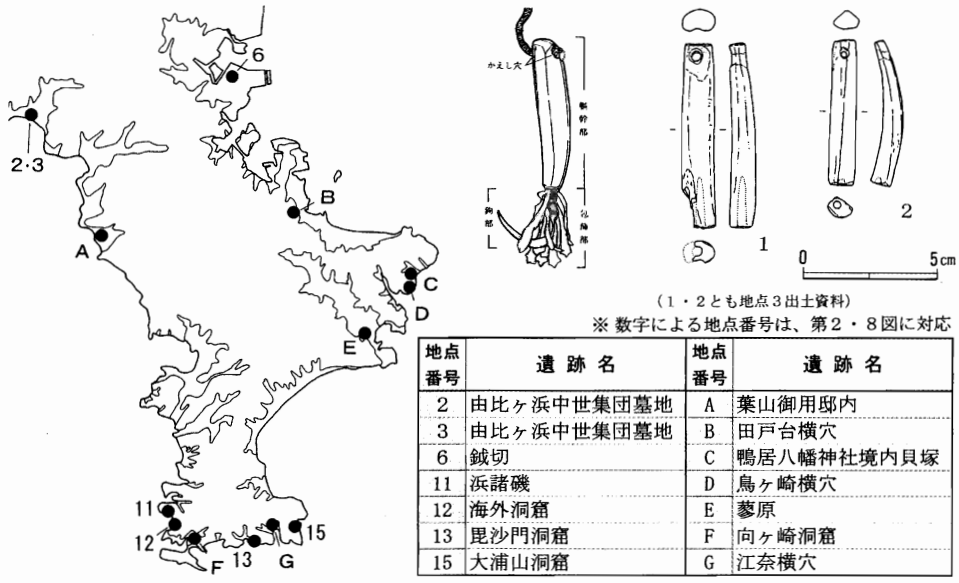


ト骨出土分布（No. 1－A地点）



魚類遺体の分布

第８図　池子遺跡群・弥生時代旧河道におけるト骨・魚類遺体の分布
（山本・谷口1999、樋泉1999を改変）



（1・2とも地点3出土資料）

※数字による地点番号は、第2・8図に対応

地点番号	遺跡名	地点番号	遺跡名
2	由比ヶ浜中世集団墓地	A	葉山御用邸内
3	由比ヶ浜中世集団墓地	B	田戸台横穴
6	鉞切	C	鴨居八幡神社境内貝塚
11	浜諸磯	D	鳥ヶ崎横穴
12	海外洞窟	E	蓼原
13	毘沙門洞窟	F	向ヶ崎洞窟
15	大浦山洞窟	G	江奈横穴

第9図　「角釣り針」と分布（中村1993、渡辺2000をもとに作成）

なって急速に分布範囲が広がるようであり、大浦山の時期にあって角を持つ釣り針が三浦半島全域に通有の漁具であったのか、今の時点では明らかにし得ない。集落遺跡では住居址や貝塚（状遺構）、遺物包含層などから検出し、特に偏った出土傾向は窺えないようである。ただし、数量的には遺跡による多寡が看取され、由比ヶ浜の地点2・3では合計15点が出土するなど(12)、浜諸磯とともに突出した数値を示している(13)。

由比ヶ浜での出土状況を具さに見ていくと、地点2では住居址覆土・炭層・包含層から出土しており、8世紀前半～中葉にまとまった傾向が見て取れる。地点3でも出土遺構は同様であるが、こちらは8世紀代～9世紀中葉と時期的にやや幅を有しており、この点では第1表に見た卜骨の消長と同じ傾向が窺える。ちなみに、両地点で角釣り針を検出した遺構・層位の11例中10例において卜骨の出土も確認されており、厳密な意味での供伴関係は認め得ないまでも、大よその共時性を示す状況証拠となることはいえるだろう。

残念ながら、由比ヶ浜の報文では魚類遺体についての詳細な分析がなされてなく、浜諸磯のように集落における漁獲→加工→流通（消費）といった一連の動きを体系的に把握することはできなかった。よって現時点では限られた事例からの類推に頼るしかないが、由比ヶ浜および浜諸磯をはじめとする三浦半島の古代海浜部遺跡は、立地条件に加えて卜骨と角釣り針という、精神面・生業面における共通の文化的要素を有していたことが想定される。そして、こうした側面の背景には、弥生時代以来の漁撈民と骨卜との伝統的関係があったことを、可能性として指摘しておきたい。弥生・律令の両時代を線的に、かつ実証性を以って結び付けることは今の時点では不可能である。ただ、一地域における文化の基層性という問題を視野に入れた場合、あながち無視できない視点であるようには思う。

6. おわりに—卜骨をめぐる諸問題—

古代の鎌倉からはやや乖離した論点を示してきたが、ここで鎌倉に話を戻し、卜骨をめぐる二、三の問題に触れてまとめとしたい。

（1）分布傾向・遺存条件

卜骨分布の特性に関連して先ず前提とすべき点に、遺存条件の問題が挙げられる。これまでに見てきたような分布を示す一因として、出土遺跡が貝塚（貝層）の存在や土壌の成分など、骨材遺存の上で好適な条件を備えていたことが指摘できる。台地上の遺跡ではよほどの好条件が整わない限り有機質遺物の残存は難しく、実際のところ、ここでの卜骨出土は皆無である。内地寄りの遺跡としては池子遺跡群が唯一となるが、ここでは河川跡・埋没谷という保水性に優れた立地条件にあったことが幸いしている。従って、現時点での分布のあり方が本来の姿を表すものであるのか、谷戸をはじめとした今後の調査成果を注意深く見ながら考えていく必要があるだろう。

鎌倉に目を転じると、例えば郡衙跡が検出した今小路西遺跡やその周辺域では、中世の多様な木製品・骨角器の出土が示すように地下水位が高く、有機質遺物の遺存条件は比較的整っているように思えるが、現時点における卜骨の出土例はない。近年の調査では、砂丘域北側に展開する低湿地において古代の遺構・遺物が検出することも稀ではなく、このような中での卜骨の海浜部への集中は、本来的な分布傾向を概ねで示していると捉えることもできよう。ただし、こうした地域では砂丘域ほどまとまった集落址の発見は未だないことから、安直に対比を行える状況にないことは付言しておく。

本論では、少なくとも鎌倉において遺存条件の適否を理由とする分布傾向の誤差はないものと考え、その認識の下に海浜部集落という遺跡の立地・性格との関連から卜骨に関する考察を行ってきた。聊か性急な理解であることは自覚しているが、こうした分布のあり方が今後どのような進展、或いは変化を見せるのか、新たな類例の発見に注目したい。

（2）卜骨の伝統と変遷について

ここまでに、鎌倉・三浦半島の卜骨が弥生時代中期以来、その形態を変化させつつ一定期間の伝統を保持していたことを確認した。変化の過程については、神澤氏が提唱した形式分類・変遷に準じたあり方を示し、全国的な流れとも齟齬のないものである。このことは、当地域の骨卜習俗が一地域のみの伝統として受け継がれたものでなく、他の地方・地域との交流を重ねながら段階的に変容・伝承されたことを物語っている。間口や鉞切における方形鑽を持つ卜甲の出現は、遠く対馬・壱岐での新たな卜占方法の出現・展開からの波及と考えることができ、その後の卜骨が総じて卜甲に準じた第Ⅴ形式に移行する点を考えれば、骨卜伝統の上で大きな画期と評価することはできよう。しかし、その前提には前代における卜占形態の複次的波及・受容という素地があったことも無視できない。一方で、当地域では古墳中期の類例が全く欠落

していることが大きな問題として横たわり、該期において遺跡数総体が極端に減少することを考量しても、現時点では伝統の一時断絶という視点も含めた理解が必要であるかもしれない。

（3）海浜部集落の成立と卜骨

由比ヶ浜では8世紀前葉から既に卜骨の存在が認められ、一部は7世紀後葉に遡る可能性を有している。おそらくは集落の開始当初より骨卜を行う集団が存在していたと考えられるが、それでは、彼らは何処に出自を持ち、どのような経緯で海浜部に移り住んだのであろうか。

律令期前代の鎌倉中心域における集落様相については、実態不明というのが正直なところである。しかし、由比ヶ浜に集落が形成される直前段階には砂丘域の背後に展開する丘陵斜面に複数の横穴墓群が営まれ、間接的ながら周辺での集落の存在を示している。これらの横穴墓群は5・6基程度の小規模なまとまりを持ち、この造営に関与した数単位の集団が、丘陵裾部や谷戸内に居住・生産の拠点を置いていたことが想定される。このような在地の小規模集団が、7世紀後葉段階になって由比ヶ浜へ進出・集住したと見るのが自然かと思われる。

ただし、ここで注意しなくてはならないのが、郡衙などの整備に関わる拠点として由比ヶ浜の集落形成が行われたとする、先記菊川氏の見解である。第2図に目を戻すと、郡衙・寺院・古東海道といった諸施設と由比ヶ浜の集落が近接した位置関係にあることが分かるが、海浜・ラグーン（註2参照）を控えた由比ヶ浜には港津としての機能も想定され、これらの遺跡群が相互・有機的に結び付いて古代の鎌倉が形作られたとする理解である。近年の研究では、こうした見方が諸視点から検証されつつあり筆者も賛同するものであるが、その場合、拠点となるべき集落の形成には、律令政府の関与があったと見るのが妥当かと考える。無論、これは地域拠点にのみ限定された話ではなく、当該期には原則として全ての集落・集団（人民）について国家的統制に基づいた掌握、若しくは再編が進められた動きの一環に過ぎず、それが端的に表れた一事象が由比ヶ浜の集落形成ということがいえるだろう。諸施設の整備と人民の掌握・再編という、律令制施行に伴う二つの動態がここに見出されることは非常に興味深く、こうした中に、先に想定した在地小規模集団（群）が取り込まれていったものと推察される。

田尾誠敏氏は、古代における鎌倉と三浦半島に見る遺物様相の近似性から、由比ヶ浜を中心とする律令期鎌倉の開発が三浦半島側から進められた可能性を示唆しているが（田尾2002）、卜骨や角釣り針など、三浦地域における基層的文化要素がここに至って顕現化する点も、こうした論点を補強しうる現象として注目される。開発の方向という氏の指摘には、郡（評）域を超えた人の移動・再編があったのかなど、史料検討も含めた考証を必要とするため即座に答えを見出せないが、先記の在地小集団の中にも、三浦半島との関わりの中で漁撈専従・骨卜習俗を受け継ぐ者達があったと仮定しても不自然ではないだろう。集権的国家の介在下に成立した地域の拠点集落と在地集団、そして伝統習俗としての骨卜、こうした一見異質ともいえる側面を由比ヶ浜の卜骨は語っているように思える。

その一方で、浜諸磯の集落は由比ヶ浜とはまた違った国家的要求の中で成立した集落である

ことがいえる。中村氏は、カツオ・アワビといった『延喜式』に見える中央への貢納物の進貢が8世紀代に遡って行われていた蓋然性を認め、浜諸磯はまさにこの採捕・加工を目的とした専業集団の集落であったと位置付けている。このように、一口に海浜部集落といっても、その需要されるところによって景観や性格は多様であり、そこに目を凝らせば、何らかの形で国家と在地集団との接点が見出せるのである。

換言すれば、国家の側は在地集団の持つ伝統的生業体系・技術を十分に把握した上で支配・収税機構を構築していったということであり、そこに組み入れられた人々もまた、自らの精神世界を変わらずに保持していったことが窺えるのではないだろうか。

論点が多岐に及んだものの、そのいずれにも必要な分析を施せず、多くの課題を残す結果となった。自らの論理性のなさを恥じるばかりだが、今後も折に触れ、僅かずつでも古代の鎌倉・三浦半島と卜骨に関わる諸事の解明に近付くべく、検討を続けていきたい。

なお、本論は横須賀考古学会・古代研究部会および相模の古代を考える会における二度の発表内容をもとに構成したものである。稚拙な報告に対し貴重なご意見を頂いた両会々員の方々にはこの場を借りてお礼申し上げます。また中三川昇・中村勉の両氏には資料収集および研究の方向性の上で多くのご教示を頂いた。末筆ながら、心より感謝申し上げます。

（2003年12月30日脱稿）

註

（1）　1971年から1973年にかけて、県立博物館（現・県立歴史博物館）の学術事業として実施されたもの。同地点では、1949年にも赤星直忠氏の主導による調査が実施されており、この時にはシカ肩胛骨などを用いた卜骨が発見されている。現地調査で卜骨として認定された資料としては、同例が国内で初出となる（赤星1953）。

（2）　中村勉氏は後に、鑽の有無の違いから第一群・第二群形式を設定し、それぞれ神澤氏の「一致型」と「分離型」に対照させている（中村1996）。

（3）　今のところ伊豆半島での卜骨・卜甲の出土は報告されていないが、中村氏は『延喜式』に見られる亀卜長上者に関する記述、また伊豆半島・伊豆諸島に残る文献上の記載から、古代の伊豆においても亀卜が伝統的に行われていた可能性を示唆している。

（4）　前稿では他に、地点1の南東近接地から出土した資料も卜骨の可能性があるものとして掲げたが、中世遺構からの出土であるという点、また形態的にも古代の卜骨とは様相を異にするとした、報告者である馬淵和雄氏の所見に従い、本稿では対象外とした。

（5）　第2図では示していないが、卜骨が出土した各地点は旧汀線と滑川河口に広がる潟湖（ラグーン）に接する位置にあったと考えられている（菊川1997：図2参照）。ちなみに、東海道については現時点での研究成果をもとにした推定ラインで、木下他1997の想定図・記述に準拠したものである。

（6）　今回は報告書における遺構年代観に従って卜骨の年代も捉えたが、地点2・3に見られる時期差をどのように解釈すべきか、解答を得ていない。貝塚状遺構など、新旧の遺物が混在する要素が強い中での出土が多いことから、上記問題の解決を見るためにも、今後は卜骨の使用年代を絞り込む作業が

必要となってくるだろう。

（7） 弥生時代の卜骨の中には、明らかに人為的破砕を受けたものが多いという。この点について神澤氏は、神意を汲み取る媒体としての卜骨が、卜占終了後には神性を払拭するため故意に破砕された結果であろうと述べている（神澤1990）。

（8） 本文中でも述べたように、由比ヶ浜では貝塚状遺構や包含層から出土する例が殆どで、ここに新旧混在した土器様相が認められることはいうまでもない。彫鑽の精粗が時期差を示すものなのか、単に個体差として片付くものなのかは、今後の資料増ごとに検討していくべき課題といえる。

（9） この点は神澤氏も指摘しており、第Ⅴ形式とは類別して第Ⅵ形式を新たに設定することにも視野を広げた所見を示している（神澤1990）。いずれにせよ、古墳後期の資料増加が待たれるところである。

(10) ただし、こうしたカツオ・サメ類への強い選択性については、洞窟利用者といった外部漁撈民との選択的な交易の結果とする解釈も成り立つことを樋泉氏は述べており、様々な可能性を残しながら、今後の総合的な検討が必要であろうとの考えを示している。

(11) 論考が発表された時点では、C地点で出土した6点が報告されている。その後、E地点の調査でも6点の資料が追加されている（地点11文献）。

(12) 本文に記した他に、中世の類例として地点2と同一遺跡の由比ヶ浜4－6－9地点において各2点、若宮大路周辺遺跡群では古代河川への混入遺物として1点が出土している（脱稿後、鎌倉・三浦半島における中世漁撈具を主題とした宗墓秀明氏の論考に接し、鎌倉市内では他に2地点で各1点の中世事例が出土していることを知った（宗墓2003））。鎌倉市以外では、横須賀市蓼原東遺跡で中世前期～後期（13世紀前半～15世紀代）の類品4点が発見されている。

(13) 由比ヶ浜と浜諸磯とでは調査実施面積が大きく異なるため、出土数による単純な比較はできない。単位面積に対する出土点数の比率を見ると、由比ヶ浜では0.006／㎡（地点2・3の合計）、浜諸磯では0.035／㎡（C・E地点合計）という数値を示し、浜諸磯がカツオの捕獲に如何に重きを置いた集落であったか、この数字をもっても窺い知ることができよう。

卜骨・卜甲の出土に関する報告書・文献（番号は本文中の地点番号に同じ）

1 大河内 勉 1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書（由比ヶ浜三丁目194番40地点）』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団

2 大河内 勉・菊川英政他 1997『由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書（由比ヶ浜四丁目1136番地点）』 由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査団

3 大河内 勉 1996『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書（鎌倉市由比ヶ浜四丁目1134番地点）（第1分冊・古代編）』 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団

4 原 廣志・佐藤仁彦他 1993「由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）（由比ヶ浜二丁目1034番1外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9（第1分冊）』 鎌倉市教育委員会

5 長谷川厚他 1999『池子遺跡群Ⅷ No.3・4・11地点』 財団法人かながわ考古学財団

山本暉久・谷口 肇 1999『池子遺跡群Ⅸ No.1－A東地点・No.1－A南地点』 財団法人かながわ考古学財団

山本暉久・谷口 肇 1999『池子遺跡群Ⅹ No.1－A地点』 財団法人かながわ考古学財団

6 小出義治他 1986『鉞切遺跡（C・D地点）』 横須賀市教育委員会

川瀬智晴 1992「鉞切遺跡E地点」『埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』 横須賀市教育委員会

7 川瀬智晴 1992「日向遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』 横須賀市教育委員会

8 赤星直忠他 1979「横須賀市染屋砂丘遺跡」『神奈川県史』資料編20 神奈川県

9　中三川　昇　1994『小荷谷遺跡』横須賀市教育委員会
10　大塚真弘他　1987『蓼原』横須賀市教育委員会
11　岡本　勇・中村　勉他　1991『浜諸磯遺跡（C地点）』浜諸磯遺跡発掘調査団
　中村　勉他　1998『浜諸磯遺跡（E地点）』浜諸磯遺跡発掘調査団
12　海外洞穴調査団　1991「三浦市海外洞穴遺跡調査の概要」『横須賀考古学会年報No.26』横須賀考古学会
13　赤星直忠　1953「海蝕洞窟―三浦半島に於ける弥生式遺跡―」『神奈川県文化財調査報告』第20集
　神奈川県教育委員会
14　同上文献
　神澤勇一　1972～1975『間口洞窟遺跡（1）～（3）』神奈川県立博物館
15　赤星直忠他　1997『大浦山洞穴』三浦市教育委員会
16　赤星直忠他　1984『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』横須賀考古学会

引用・参考文献

大河内　勉　1990「鎌倉市由比ヶ浜中世集団墓地遺跡出土の『神主』銘古代墨書土器について」『東国史論』群馬考古学研究会
押木弘己　2004「研究ノート　鎌倉出土の古代の卜骨について―三浦半島との関連を中心に―」『鎌倉考古』No.49　鎌倉考古学研究所
神澤勇一　1976「弥生時代・古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について」『駿台史学』第38号　駿台史学会
神澤勇一　1983「日本における骨卜、甲卜に関する二三の考察―先史古代の卜骨・卜甲と近世以降の諸例との比較検討を中心に―」『神奈川県立博物館研究報告』第11号　神奈川県立博物館
神澤勇一　1987「日本の卜骨」『月刊考古学ジャーナル』No.281　ニューサイエンス社
神澤勇一　1990「呪術の世界―骨卜のまつり」『弥生人とまつり』六興出版
菊川英政　1996「古代鎌倉の様相―奈良・平安時代における鎌倉郷中心域の変化―」『考古論叢神奈河』第6集　神奈川県考古学会
木下　良他　1997『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会　博物館建設準備担当
宗臺秀明　2003「中世の鎌倉と三浦半島周辺の漁撈具」『物質文化』第76号　物質文化研究
田尾誠敏　2002「古代の遺物」『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書―第85地点―』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
田村良照　1998「古代（7～8世紀）鎌倉郡の様相」『湘南考古学同好会々報』73　湘南考古学同好会
田村良照　1999「続・古代鎌倉郡の様相」『湘南考古学同好会々報』75　湘南考古学同好会
中三川　昇　2000「奈良・平安時代の三浦半島―土器様相の特色を中心として―」『三浦半島の文化』第10号　三浦半島の文化を考える会
中村　勉　1993「『角』とよばれる釣針について―三浦半島出土の資料を中心として―」『考古学研究』158　考古学研究会
中村　勉　1996「三浦半島の弥生時代の卜骨について」『横須賀考古学会年報』No.31　横須賀考古学会
中村　勉　2002「三浦半島における卜骨・卜甲研究の現状」『月刊考古学ジャーナル』No.492　ニューサイエンス社
樋泉岳二　1999「池子遺跡群No.1－A地点における魚類遺体と弥生時代の漁撈活動」『池子遺跡群X　No.1－A地点』財団法人かながわ考古学財団
渡辺　誠　2000『考古ソフテックス写真集』第15集　名古屋大学文学部考古学研究室

相模の横穴墓

田　村　良　照

1　はじめに
2　土器編年について
3　出現期の横穴墓
4　普及期と終末期の横穴墓
5　造付石棺・高棺座の横穴墓
6　棺室構造の横穴墓
7　横穴墓出現の背景
8　副葬品の変化
9　おわりに

1. はじめに

神奈川県考古学会主催の「横穴墓とは何か」という考古学講座が10年前に開催され、その発表紙上にて上田 薫 が県内の横穴墓の基数について「・・・すでに消滅しているものを含めて約550群3200基を数え、年々新たな発見が報告されている。」と述べられたように（上田1994)、神奈川県は全国的に見ても屈指の横穴墓密集地域である。ところが、こうした歴史的環境にありながら横穴墓研究はさほど盛んでなく、かながわ考古学財団の古墳時代研究プロジェクトチームによって平成７年より継続的に独自の研究成果が公表されているくらいである。したがって、横穴墓のシンポジュウムが開催され、資料集が相次いで上梓された九州・山陰・東海地方に大きく水を開けられてしまっている。こうした現況を鑑みて、県内外の研究者にまずは実態を知っていただくことを目的として、第10集にて「南武蔵南部の横穴墓」と題する小論をまとめたが、今回はその第二弾として相模地方に焦点を当ててみた次第である。

本稿で取り扱う資料は基本的に副葬品が出土し、時期の判別し得るものを分析・検討対象とした。そこで重要になるのが土器の時期比定であるが、その際には須恵器・土師器の編年諸案を活用したことはいうまでもない。ところが周知のように土器編年の基準となる須恵器編年がいまだに確立しておらず、一部の研究グループから再検討の必要性が指摘されているのが現状である(1)。そこで依拠した編年案と相互の相対関係を最初に表示し、曖昧さを払拭したつもりである。

本稿の内容については、相模地方の横穴墓を紹介するといっても紙数の関係で限界があるので、まずは一般的な構造の横穴墓と他地域には見られない特有の横穴墓を取上げ、それらの資料をできるだけ図示し、後者については変遷試案を提示した。次にこうした分析結果を踏まえて、横穴墓が本地域に伝播した背景を探り、最後にこれまであまり関心の寄せられなかった副葬品の推移についても思料してみた。

2. 土器編年について

本稿で検討対象とした横穴墓は、構造がある程度判別でき、しかも造営時期を示す土器を伴うという資料に限った。そして土器の示す確かな年代をもとにして自説を披瀝せんとするものであるが、その際に問題になるのが土器編年の相関関係と年代比定である。というのは年代比定の基準となる須恵器自体に問題が指摘されて久しい上に、最近では相模地方の7世紀代を語る際に重要な地位を占める湖西古窯跡群の土器編年についても、一部の研究者たちによって疑義が出されているありさまで（贄1998）（贄他1999、2000）、決して万全とは言えないからである。しかしこうした問題はひとまず置いて、本論では陶邑窯跡群と湖西古窯跡群の須恵器編年（田辺1966・1981）（後藤1989・1995）を基軸とし、相模および周辺諸地域の土師器編年を駆使して横穴墓の造営年代を明確にしてみたい。

相模地方に横穴墓が出現する6世紀後葉には畿内から東海地方にかけての須恵器が将来され

第1表　土器編年対比表

暦　年	湖西編年			陶邑（田辺）編年		飛鳥・藤原・平城	水口編年	草山編年
550年	Ⅱ期	第2小期		Ⅱ期	MT85型式		Ⅱ段階	
		第3小期	前		TK43型式	飛鳥寺下層		
589年			後		TK209型式	飛鳥Ⅰ期	Ⅲ段階	
608年		第4小期						
		第5小期		Ⅲ期	TK217型式		Ⅳ段階	
645年		第6小期						
660年	Ⅲ期	第1小期	前		TK46型式	飛鳥Ⅱ期		
			後					
		第2小期	前			飛鳥Ⅲ期古		
671年			中					
			後			飛鳥Ⅲ期新		草山Ⅰ期
681年		第3小期	前					
			後		TK48型式	飛鳥Ⅳ期		草山Ⅱ期
701年	Ⅳ期	第1小期			TK21型式	平城Ⅰ期		
715年		第2小期				平城Ⅱ期		草山Ⅲ期
		第3小期	前			平城Ⅲ期		
735年			後					草山Ⅳ期
	Ⅴ期	第1小期		Ⅳ期		平城Ⅳ期		草山Ⅴ期
		第2小期				平城Ⅴ期		
		第3小期						
		第4小期			TK7型式	平城Ⅵ期		草山Ⅵ期
800年					MT83型式			草山Ⅶ期

るが、産地同定されたものは殆ど無く、今後の研究を待たなくてはならない。ところが7世紀前葉になるとこれらの須恵器にかわって湖西古窯跡群で生産された須恵器が次第にシェアを拡大し、7世紀中葉にはほぼ独占してしまう。こうした傾向は8世紀になって南関東諸窯の製品が流通するまで続くことは周知の通りである。そこで上記のように、須恵器に関しては猿投窯などの編年を睨みながらも、陶邑窯編年と湖西編年に拠った次第である。

土師器は6世紀後半から7世紀中葉にかけて隣接する房総、南武蔵や伊豆などの土器が搬入され、横穴墓の副葬品として用いられている事例が少なくない。ことにこの頃に盛んに流通した赤彩土器・黒色処理土器が一定量出土していることから、相模・房総地方は長谷川 厚（長谷川1989）、武蔵地方は水口由紀子（水口1989）、伊豆・駿河地方は山本恵一（1989）の編年案に依拠した。また7世紀第Ⅱ四半期ごろから散見されるようになる畿内産暗文土器は藤原・平城京編年を、武蔵地域を中心に分布するいわゆる在地産暗文土器については田中広明（田中1991）や山口辰一（山口1985）を参考にした。また相模地方での7世紀後葉から律令時代にかけての土師器編年に関しては、長谷川 厚 の業績である草山編年（長谷川1990）に拠ったことは言うまでもない。

表1は以上のような編年案のうちの主要なものについて相関関係をまとめたものである。作成にあたっては後藤健一の「湖西編年と他窯編年対比表」（後藤1995）を参考にさせていただいた。

3. 出現期の横穴墓

相模地方への横穴墓の導入は6世紀後葉（TK43型式）に海浜部からはじまり、次第に内陸部へ展開したとされるが、伝播のあり方は段階的であったと見られる(2)。また初現期の系譜に関しては、北九州あるいは畿内から伝播したとするのが一般的な見解であるが、実際のところはどうであろうか。

第7～10図は相模における古式横穴墓とその出土土器を集成したものである。形態はすこぶる多様であるが、大別すれば玄室平面形は正方形・縦長長方形・横長長方形・隅丸方形（楕円形）天井形はドーム形・家形・アーチ形・尖頭アーチ形といった構造の違いが見られる。ここではそれらを類別し、副葬土器から導きだされる確実な造墓・追葬時期を求め、さらに各類型の直接の故地がどの地域にあるのかを探ってみたい。

【A型式】　家形天井の横穴墓で時期の判別し得る副葬土器をともなった事例は、平塚市城山7号（第6図8）と三浦市高山8号墓（同図6）しか見出せない。両者とも切妻式の家形天井であるが、前者は玄室平面形がほぼ正方形で狭長な羨道をもつ構造であるのに対し、後者は玄室平面形が逆台形で羨道が幅広であり、形態的には前者の方が古い要素を備えている。城山7号墓からは6世紀末～7世紀初頭に比定される駿豆地方特有の黒色処理の土師器坏が、高山8号墓には7世紀第Ⅱ四半期ごろの須恵器坏身が伴う。したがって現時点では、家形横穴墓は6世

紀末に導入され7世紀第Ⅱ四半期まで使用されたものと想定しておきたい。分布的には大磯丘陵と三浦半島に限られ、両地域あわせても10数基程しか知られていない。主軸方向に棟をもつ切妻式天井の系譜は、北九州の筑前・筑後・豊後、中国地方の出雲南部から備後北部、東海地方の遠江・駿河などに分布するが、構造的に最も似ているのは遠江の大谷代・山脇・原横穴墓群などである。したがって本型式の直接の故地は遠江地方と考えられる。なお城山7号墓は排水溝や羨道など細部にC型式の影響が見られる。また諏訪脇6号墓（第6図7）は高山8号墓の退化形と考えられる。

【B型式】　玄室平面形が横長長方形、天井がドーム形を呈する横穴墓である。目下のところ三浦半島基部の逗子市久木2・3号墓（第7図30・33）と大磯丘陵の中井町中屋敷1号墓（同図37）、伊勢原市下尾崎26号墓（同図35）などがあげられ、熊之台7号墓も本型式に属す可能性が高い。分布的には大磯丘陵及びその周辺部において確認されている。久木2号墓からはこの型式の存続期間を明示する土器が出土している。すなわち初葬の時期を示す把手付提瓶は6世紀後葉（TK43型式）に遡る可能性がある一方、追葬時と見られる7世紀第Ⅱ四半期頃のフラスコ瓶と土師器坏が伴い、その他の四者からもこの期間に収まる土器が出土している。したがってA型式は6世紀後葉に出現し、7世紀第Ⅱ四半期まで存続したことが窺える。横長長方形・ドーム天井の横穴墓は北九州・中国地方・畿内・東海地方において確認できる最も普遍的な構造の一つであるが、中国地方・畿内のものは天井構造が異なり該当しない。東海地方では北九州から遠江に直接伝播したとされ、6世紀前半に遡る向山1号墓・前山1号墓・茶屋辻B1号墓などが知られているが、それらはいずれも玄室が隅丸横長長方形であり本型式とは若干異なるように思える。したがって北九州各地と遠江を故地の候補としてあげるに留めておきたい。

【C型式】　玄室平面形がほぼ正方形、天井がドーム形を呈する構造で、相模地方の初現期横穴墓としては普遍的なタイプである。副葬土器を伴う例として羽尾A1号墓、同B1号墓、諏訪脇201号墓、久木10号墓、新宿Ⅴ3号墓（第6図1～3・5、第7図29）などがあげられる。このうち久木10号墓と新宿Ⅴ3号墓は分布地域や天井構造の特徴などからB型式との関連が強いように思える。時期的には6世紀末～7世紀前半に位置付けられる。諏訪脇201号墓には6世紀後葉（TK43型式）に遡り得る須恵器と8世紀初頭まで下る須恵器類が共伴しており、長期間存続したことを物語っている。本型式も祖形は北九州に求められるが、直接の故地としては遠江地方が有力だ。特に、排水溝を四壁下と中央軸線上に設けた諏訪脇201号墓のような構造は、遠江の「横穴式木室」の影響も考慮する必要があるだろう。近似例をあげれば枚挙に暇がないが、北九州では豊後の上ノ原横穴墓群や筑前の相坂横穴墓群などとの関係が深いように見受けられ、また遠江では大淵ヶ谷A5号墓や堀ノ内F1号墓などが似ている。

【D型式】　玄室平面形が隅丸方形、天井がドーム形を呈する構造の横穴墓である。羽尾B5号墓、同D1・2号墓、諏訪脇10号墓（第6図12～15）などがあげられ、大磯丘陵西部にのみ分布している。羽尾横穴墓群の3基からは6世紀後葉～7世紀初頭（TK43～209型式）に比定さ

れる須恵器類が出土しており、諏訪脇10号墓には７世紀中葉の須恵器坏身が伴う。したがって本型式は６世紀後葉～７世紀中葉の期間に造営されたことがわかる。隅丸方形平面・ドーム天井の横穴墓は北九州と東海地方に分布が確認されている。北九州では豊前の上山田横穴墓群、豊後の下郡・飛山横穴墓群などに、東海地方では遠江の三十八坪・宇藤横穴墓群など近似例が多数ある。よって本型式の故地も遠江と見るのが妥当であろう。なお羽尾横穴墓群の３基は排水溝のあり方がＡ型式の城山７号墓やＣ型式の諏訪脇201号墓と共通しており、相互の影響が推察される。

【Ｅ型式】　玄室平面形が縦長長方形、天井がドーム形を呈する構造の横穴墓である。諏訪脇1001号墓、中屋敷６号墓、大日ヶ窪32号墓、新林左９・11号墓、森久西１・15号墓、久木１号墓、熊之台19号墓（第６図４・16、第７図17・18・24～26・28）などがあげられ、海岸部を中心に広範に分布している。このうち久木１号墓には６世紀後葉（TK43型式）まで遡る長頸壷・長頸坩と７世紀中葉のフラスコ瓶が共伴しており、また森久西１号墓と熊之台19号墓からも６世紀末（TK209）に遡り得る須恵器類が出土している。したがって本型式は６世紀後葉から７世紀中葉まで造営されたものと推察される。構造的には片袖タイプ、排水溝をもつタイプなどに峻別し得る。本型式の系譜も北九州、東海地方であることは疑いない。

【Ｆ型式】　玄室平面形がほぼ正方形、アーチ（尖塔アーチ）天井を呈する構造の横穴墓である。篠谷10号墓、下尾崎５号墓、森久南17号墓（第６図９～11）などがあげられ、Ｅ型式と同様に海岸部を中心に比較的広範に分布している。前二者は排水溝がＡ型式の城山７号墓、Ｃ型式の諏訪脇201号墓、Ｄ型式の羽根尾Ｄ２号墓と共通しており、構造的にもＡ・Ｃ型式との親縁性が深いようだ。副葬土器は６世紀末（ＴＫ209型式）から７世紀第Ⅱ四半期ごろに比定されるもので、時期的にもＡ・Ｃ型式の変容形として矛盾しない。

【Ｇ型式】　玄室平面形が縦長長方形、アーチ天井を呈する横穴墓である。篠谷５号墓、新林左11号墓、新林右西２号墓、臼久保３号墓（第７図18・20～22）などがあげられる。本型式のうち篠谷５号墓と新林右西２号墓はＡ・Ｃ・Ｅ型式の変容形と見なしてよかろう。著しく縦長の新林左11号墓の類例は地蔵ヶ谷５号墓（TK209型式）や道ヶ谷Ｂ２号墓（TK43～209型式）をはじめとして遠江地方に類例が多く散見される。

以上、紙数の関係でこれ以上詳述することはできないが、類別したＡ～Ｇ型式のうち相模地方の初現期横穴墓はＡ～Ｅ型式であり、Ｇ・Ｈ型式はその変容形と考えられる。そしてＡ～Ｅ型式のいずれもが遠江地方と最も親縁性の深いことが改めて確認された。遠江地方の横穴墓は６世紀前半（TK10型式）に北九州から伝播して定着したとされるから（松井2001）、一定期間を置いて６世紀後葉（TK43型式）に遠江地方から相模地方へ波及したのであろう。なお池上 悟の指摘するような畿内河内地方からの影響は（池上2001）初現期にあっては然程濃厚ではなく、６世紀末～７世紀初頭（ＴＫ209型式）に諏訪脇横穴墓群に見られる有縁棺座や代官山横穴墓群の造付石棺内蔵の横穴墓が導入されてから顕著になるようだ(3)。

4. 普及期と終末期の横穴墓

第11～18図は相模地方に導入された横穴墓が定着し、その後に爆発的に普及して終末を迎えるまでの各段階の横穴墓を集成したものである。赤星変遷案のH～J類にあたるが（赤星1959・1964）、定説化しているこの変遷案は信憑するに足るのか、また各段階の正確な年代観はどうなのか、検証してみたい。

【羽子板形の横穴墓】　玄室前壁が著しく形骸化した横穴墓である(4)。この形態の横穴墓は案外少なく、さらに時期の判別し得る土器を出土した例は図示した16基しかない。

まず構造的な点に着目してみると、両袖を比較的よく留めるもの（第10図1・2・3・6）も存在する一方で、片袖になったもの（同図5・7・9・11・12）、さらには一層退化して両袖が屈曲する程度になったもの（同図4・8・10・13～16）があり、厳密には類別できそうだ。また天井は全体的に残りが悪いので断定的なことは言えないが、玄室と羨道の間に前壁を留めたもの（同図7）、境で屈曲するもの（同図6・16）、緩やかに湾曲するもの（同図5・13）、そして奥壁から羨門に向かって直線的に下降するもの（同図2・3・4・15）などがあり、平面形と同様に類別可能である。このように第10図に掲載した16基をとっても先後関係のあることがわかる。それでは多少の時期差は認めるものの、羽子板形の造営時期はいつごろであろうか。

第11図の中で最古と見られるのは岩瀬B6号墓出土の須恵器坏類（第11図7～12）で、6世紀末～7世紀初頭（TK209型式）に位置付けられる。反対に最も新しいのは下田8号墓に伴う7世紀中葉～第Ⅲ四半期の土器群（同図52～54）である。その他の土器類はいずれも7世紀前半に比定されるものばかりである。したがって羽子板形の横穴墓は6世紀末～7世紀前半の期間に造墓され、一部は7世紀第Ⅲ四半期にまで追葬の痕跡が確認できると理解してよかろう。因みに遠江地方では羽子板形（逆台形）横穴墓は6世紀末～7世紀初頭（TK209型式）に出現するという（松井2001）。岩瀬B4・B6号墓の類例として谷口E1群2号墓、森久西9号墓の類例として金山B3号墓（TK209型式）を見出せる。

【半裁徳利形の横穴墓】　第12・13図は先学達によって「半歳徳利形」と呼称された、玄室側壁が緩やかに湾曲する構造の横穴墓で、赤星変遷案では羽子板形横穴墓の次段階に位置付けられている。

構造的には羨道を意識的に造作しているもの（第12図1・2・3・10～12・15～17）と、羨道を認めることができないもの（同図5・7・9）、さらにはその中間タイプに分類できそうだ。このうち羨道をもつタイプの中には形骸化した袖を有する羽子板形に極めて近いものも認められる。天井の遺存する例は少ないので断定的なことは言えないが、いずれも奥壁から羨門まで直線的に下降するアーチ天井構造になっている。なお奥壁側に低棺座をもつもの（同図13・14・18）は大住郡から高座郡の比較的内陸部に限って分布することから地域性として理解される。

第13図の土器の中では八重窪50号墓（第13図4）、八重窪46号墓（同図5・6）、宮ノ入6号

墓（同図８～13）、なはま２号墓（同図14～22）、代官山17号墓（同図33）などが比較的古く７世紀第Ⅱ四半期～同中葉に比定される。反対に時期の新しいのは羽根尾Ｅ３号墓（同図７）、八重窪38号墓（同図23・24）、北中尾16号墓（同図27）、山野根７号墓（同図34）、倉上６号墓（同図36）、河南沢２・７号墓（同図28・40～42）などで、８世紀前半～中葉まで下る。したがってこのタイプは７世紀第Ⅱ四半期ごろに出現し、７世紀後半から８世紀前葉に盛行期を迎え、一部は８世紀中葉まで追葬のなされたものと推察される。

【撥形の横穴墓】　玄室側壁が直線的で、基本的に玄室と羨道が区別し得ない構造の横穴墓を第14～17図に集成した。ただしこの中には側壁が僅かに湾曲して半裁徳利形に近いようなタイプ（第14図６・13）や、両側壁が羨門寄りのところで少し屈曲してフラスコ状に見えるもの（同図10）も一緒に含まれる。

構造的には一口に無袖の撥形横穴墓といっても実に多様である。分類すれば、Ａ類：規模が長大なもの（第14図９、第15図25・27・35）、Ｂ類：短小なもの（第14図５・６・８・10・12・17・20・29・30・32～34）、Ｃ類：奥行きに対して奥壁幅が広い扇形を呈するもの（第15図21～23）、Ｄ類：羨門側に低い段差をもち玄室と羨道の区別を意識した構造（第14図４・９・11、第16図27・28・35）、Ｅ類：奥壁側に低棺座を有するもの（第15図24・25・29・30・33・38）、Ｆ類：棺座が二段になったもの（同図26・36・37）、Ｇ類：羨門部に閉塞石の代わりに扉板を設置するための溝を穿ったもの（第14図15～19、第15図26）といった相違が認められる。さらに敷石や羨門部の積み石の有無といった地域性での類別も可能である。

さて多様な構造のあることがわかったが、造営時期はどうであろうか。副葬土器を集成した第16・17図の中では新林左４号墓（第16図12～14）、羽尾Ｃ11号墓（同図46）、倉上12号墓（同図47）、羽尾Ｂ11号墓（同図52～57）、新宿Ｖ７号墓（第17図62～64）、倉上３号墓（同図65・66）などが７世紀第Ⅱ四半期まで遡る可能性がある。したがってＡ・Ｃ・Ｄ類とした一群が撥形横穴墓の中でも古式の類型であることがわかる。一方新しい時期の一群は、大日ヶ窪14・27・33号墓（第16図３・４・８）、八重窪36・41号墓（同図９・43）、羽尾尾Ｃ２・Ｃ３・Ｅ２・Ｅ４号墓（第16図35・36・41・42、第17図67）、上栗原５号墓（第17図68・69）、下尾崎24号墓（同図71）、後谷原Ｍ４・Ｕ１号墓（同図75・76）などから出土した８世紀前葉～中葉に比定される土器群である。よって類別した中ではＢ・Ｇ類が新しく、規模の縮小化や閉塞石が扉板になるといった変化が新しい要素として指摘し得る。

以上、相模に横穴墓が盛行する７～８世紀に流行った三形態について検討してみた。三者の中では羽子板形が古く、６世紀末～７世紀初頭に遠江から導入され、７世紀中葉に至って他二者に切り替わっていくようだ。ただし赤星案のような羽子板形→半裁徳利形→撥形という図式は認め難く、羽子板形→半裁徳利形、羽子板形→撥形という二系統の変遷が想定される。また半裁徳利形と撥形の存続期間は100年間に及ぶことが改めて確認されたが、顕著な構造変化はないものの、規模や付帯施設のあり方である程度時期を判別し得ることもわかった。

5. 造付石棺と高棺座の横穴墓

1）研究略史　造付石棺や高棺座といった特有の施設をもった横穴墓が相模地方の一定域に分布していることは、おそらく昭和30年代までには赤星直忠をはじめとする研究たちには知られていたと思われる。しかし当時はまだ、この二種類の施設が系譜的に密接な関係にあることまでは認知されていなかったようである。

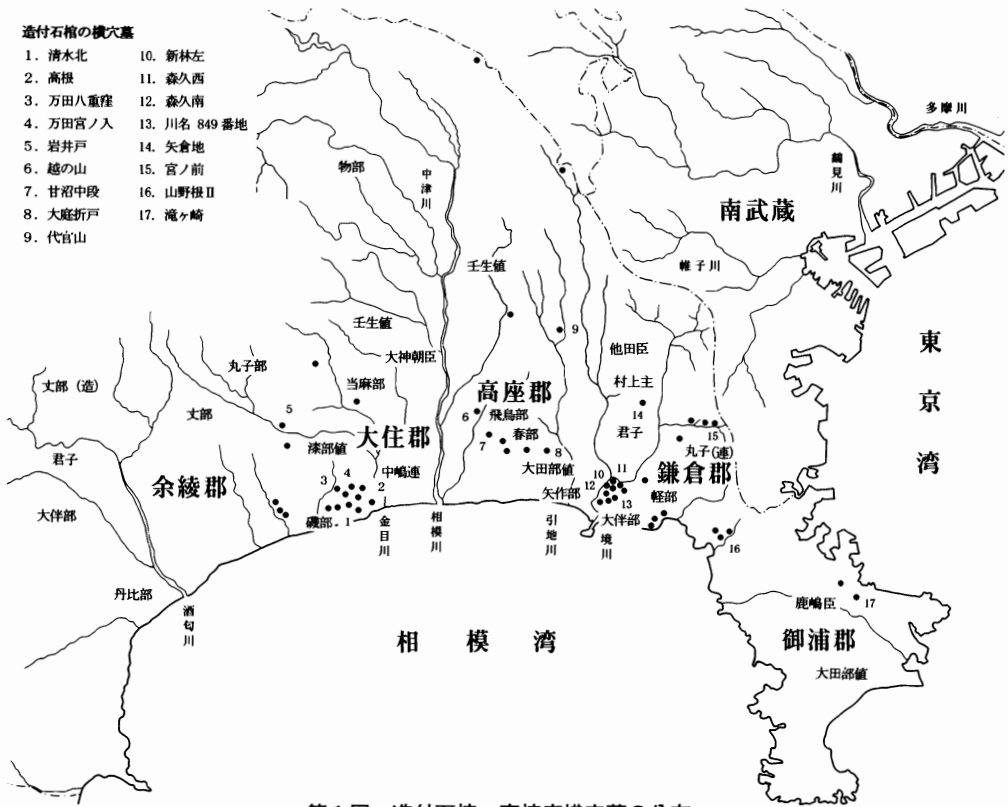
両者の関係について最初に言及したのは杉山博久である。氏は大磯丘陵に分布する多くの横穴墓を調査した経験をもとに、「横穴内部をみると、棺座は全くつくられていないものが多いが、低い棺座を置くものがあり、次第に高くなり、やがて１ｍをこす高いものがあらわれてくる。・・・（中略）やがて高い棺座の上面を船底形にほりくぼめて、つくりつけの石棺となっているものが現れてくる」として、両者が同系譜にあることを指摘した（杉山1976）。

これに対して系譜の流れが逆であるとして、疑義を突きつけたのが上田 薫 である。上田は自ら調査を担当した藤沢市代官山横穴墓群での成果をもとにして、造付石棺と高棺座の関係を表す具体的な変遷図を提示した上で、「・・・ともかくこの地域において６世紀末から７世紀初頭に出現した造付石棺が、おおよそ100年の歳月を経て高棺座へと変貌をとげたのである。」と結論づけた（上田1989）。現在ではこの上田説が広く浸透し、定説化している。しかしこの頃はまだ、造付石棺をもつ横穴墓の出自については明らかにされていなかった。

こうした相模地域における横穴墓研究を後押しするかたちになったのは花田勝広の論考であった。花田は、河内地方の高井田・安福寺東・玉手山東横穴墓群には玄室が矩形平面・家形ないしドーム天井で、奥壁または左右側壁に造付石棺を設けた構造の横穴墓が多数存在することを明らかにした上で、その成立過程について論及し、このような横穴墓に「河内型」横穴墓という名称を与えた（花田1990・1991）。この花田の研究成果を継承・発展させた池上 悟 は、全国的視野にたっての横穴墓研究を精力的に進めるなかで、畿内以東の美濃・遠江・相模・上総・南陸奥地方に分布する横穴墓の型式と伝播を論究した際に、造付石棺内蔵の横穴墓についてもその実態を明らかにした（池上1991）。

以上のように、昭和50～60年代に相模地方における調査研究が一定域まで醸成したことと、その後に研究活動が全国的な展開を見せたことによって、この種の横穴墓研究も新たな段階へと踏み出すことになったのである。

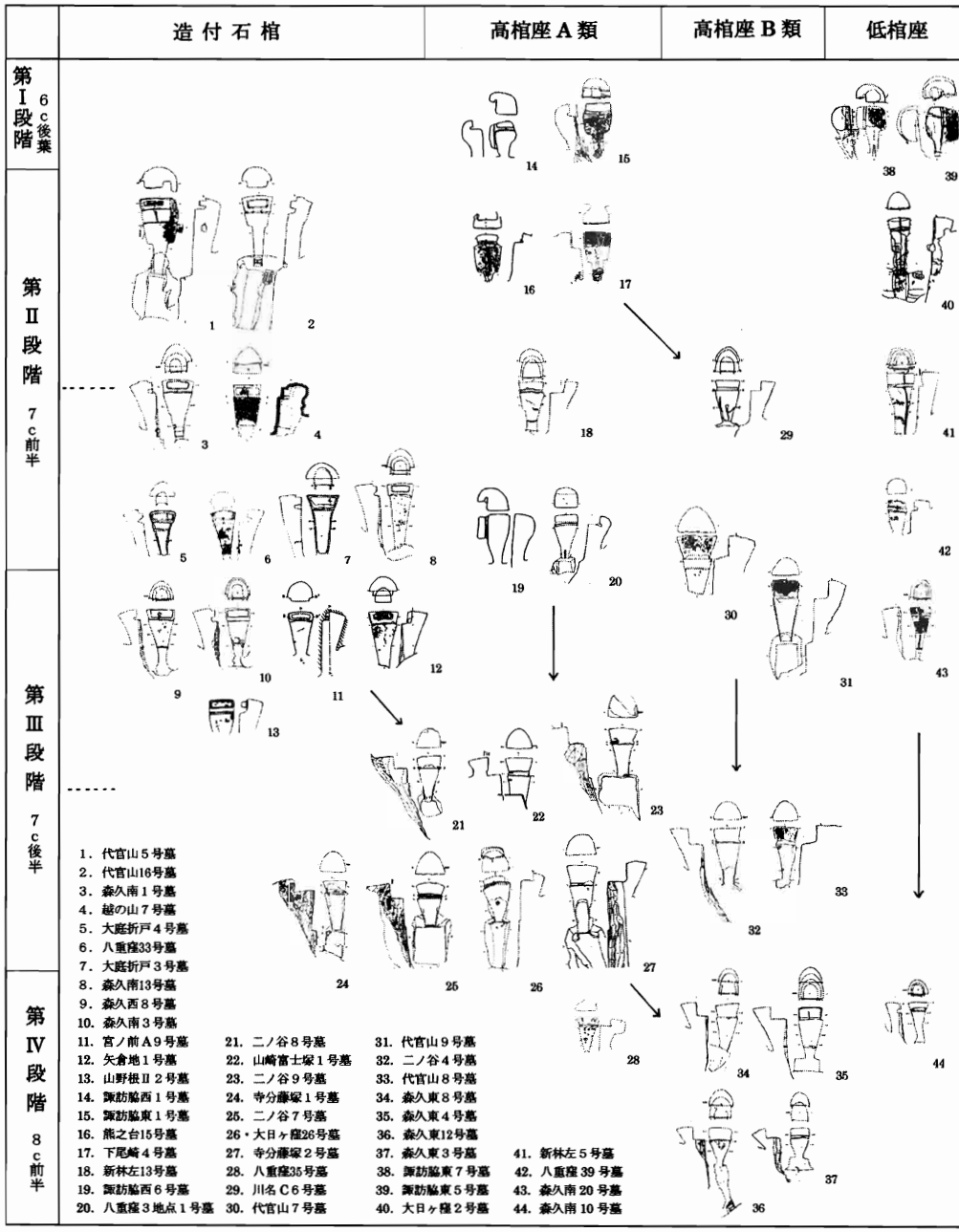
2）分　布　相模における造付石棺をもつ横穴墓は古代の高座郡を中心とした分布域を形成するようで、西は余綾郡や大住郡、東は鎌倉郡に客体的に存在し、例外的に三浦郡でも確認されている(5)。したがってこの種の横穴墓は高座郡において出現し、その後東西の郡境を越えて余綾郡と鎌倉郡にわずかに波及したという解釈が許されるだろう。一方、高棺座の横穴墓はそれよりもかなり分布域が広く、高座郡と鎌倉郡の全域及び余綾郡東部に分布域をもつ。



第１図　造付石棺・高棺座横穴墓の分布

３）系譜と造墓時期　すでに述べたように、高棺座の発展形態が造付石棺であるとした杉山説に対して、変容過程が反対であるとした上田説がここ10年ほどは支配的であった。しかし実際に資料を検討してみると、上田説では納得できないような例が少なからず存在するのである。結論から言えば、もともと両者は不分離の関係にあり、造付石棺が相模に導入された当初からその変容形として高棺座は存在するのであるが、７世紀中葉を画期として造付石棺の系譜は高棺座の系譜の中に収斂されてしまう、と筆者は理解している。具体的には、第２図に示したような４段階の変遷を想定できる。なお造付石棺と高棺座はこれまでの先学による研究で密接な関係にあることは自明であるが、ここではこの２種類の死床と共存する事例の多く見られる低棺座を加えて、三者の系譜と時期を明示してみた。その際に、高棺座のうち棺座前端にいわゆる「縁」をもつタイプを高棺座Ａ類、これをもたないタイプを高棺座Ｂ類として分類した。

第１段階　６世紀後葉～７世紀初頭（TK43～TK209型式前半）を本段階とした。本段階に該当する造付石棺を内蔵した横穴墓は相模ではいまだ発見されていないが、南武蔵では川崎市高津区の久本７号墓や同西前田第１次３号墓・２次１号墓といった例があり、特に久本７号墓には６世紀後葉（TK43型式）まで遡る須恵器が副葬されていることから、南関東最古の造付石棺内蔵横穴墓と見られる。隣接地域のこうした状況を鑑みれば、相模でも今後発見される可能性は



第2図　造付石棺・高棺座横穴墓の変遷

高いように思われる。この段階に相模地方では造付石棺に先行して、前端に「縁」を残した高棺座Ａ類がいち早く出現する。副葬品は伴っていないものの構造的特徴から、余綾郡の諏訪脇東１・７号墓、同西１・９号墓などがこの段階に収まると考える。

第２段階　７世紀前半に比定される土器を出土した横穴墓である。玄室平面形が逆台形のものと、それよりも新しい時期の無袖形の２種類が見られるので、前後２時期に細分されそうである。相模地方ではこの段階に造付石棺をもつ横穴墓が出現し盛行する。一方、高棺座は前段階からの系譜を引くＡ類が細々と命脈をたもち、その中から川名Ｃ地点６号墓のようなＢ類が出現するのであろう。

第３段階　７世紀後半に比定される土器を出土した横穴墓である。この段階になると玄室は完全に無袖・アーチ形となる。造付石棺の系譜はほとんど見られなくなり、遅くとも７世紀第Ⅲ四半期のなかで終焉を迎えるようである。これに連動するかのように高棺座の横穴墓が爆発的に数を増し、高さ２ｍ余りの高棺座もつくられる。本段階の前半では高棺座Ａ類が優位にあるが、しだいに高棺座Ｂ類が主流となるようだ。つまり簡略化が進行するのである。

第４段階　８世紀に比定される土器を出土する横穴墓である。高棺座Ａ類は８世紀第Ⅰ四半期の中で姿を消し、高棺座Ｂ類に収斂される。構造的には次第に小形化・簡略化の傾向が顕著となる。また土器では前段階まで見られたフラスコ瓶や長頸瓶といった明器や平瓶などが供献されなくなり、坏身蓋類に限られてくる。そしてこうした須恵器も８世紀第Ⅱ四半期以降は激減し、主体的となるのは相模型坏となる。高座郡の森久東４・８・12号墓などからは８世紀後半に比定される相模型坏が出土しており、追葬時期の下限を示すものと理解される。

４）小　結　造付石棺を玄室内に設けた特徴的な横穴墓は一般的に「河内型横穴墓」として理解されているが、この種の故地である高井田横穴墓群や安福寺横穴墓群のなかにも造付石棺が簡略化されて石棺前壁だけを残した構造の低棺座・高棺座が存在している。相模地方ではこの系譜を引くと見られる横穴墓が６世紀後葉に余綾郡の大磯丘陵に出現する。そして７世紀前葉になってようやく造付石棺の横穴墓が高座郡に将来されるが比較的短命で、７世紀中葉のなかで終焉を迎える。一方、それまで細々と命脈を保っていた高棺座の横穴墓は一挙に優勢となり、以後控えめに見ても70～80年間にわたって高座郡と鎌倉郡を中心とした地域で盛行するのである。したがって造付石棺石棺が変容して高棺座になるという上田説（上田1989）に対し、疑義を投げかけざるを得なくなってきた(6)。

また低棺座も構造的にみて造付石棺や高棺座と不分離の関係にあることは自明であるが、こちらも高棺座と同時期の６世紀後葉に出現し、常に傍流的な存在であるものの、８世紀前葉まで存続するのである。筆者は現在のところ、造付石棺・高棺座・低棺座の関係を第２図のように捉えている。

6. 棺室構造の横穴墓

1）研究略史　棺室構造の横穴墓（以下「棺室横穴墓」と略す）が学会へ最初に紹介されたのはいったいいつごろであろうか。管見では、戦時中に赤星氏が考古学雑誌に寄稿された「神奈川県浦賀町沼田城山横穴について」が初見であろうと思われる（赤星1942）。ところがこの時点ではまだ「棺室」という用語は使われていなかった。この用語の登場はたぶん赤星氏が昭和29年に神奈川県文化調査報告21集の中で、「逗子市山野根横穴群」を紹介した報文中の77頁に次のように定義されたのが最初であろう（赤星1954）。

「（山野根）第五号　様式及び大きさ－複室のように見えるが複室ではない。奥室に接して造られた棺座の前縁に中央を方形に残して障壁がつくられたものが変じて複室状になったもの。これを棺室と呼ぶ。」

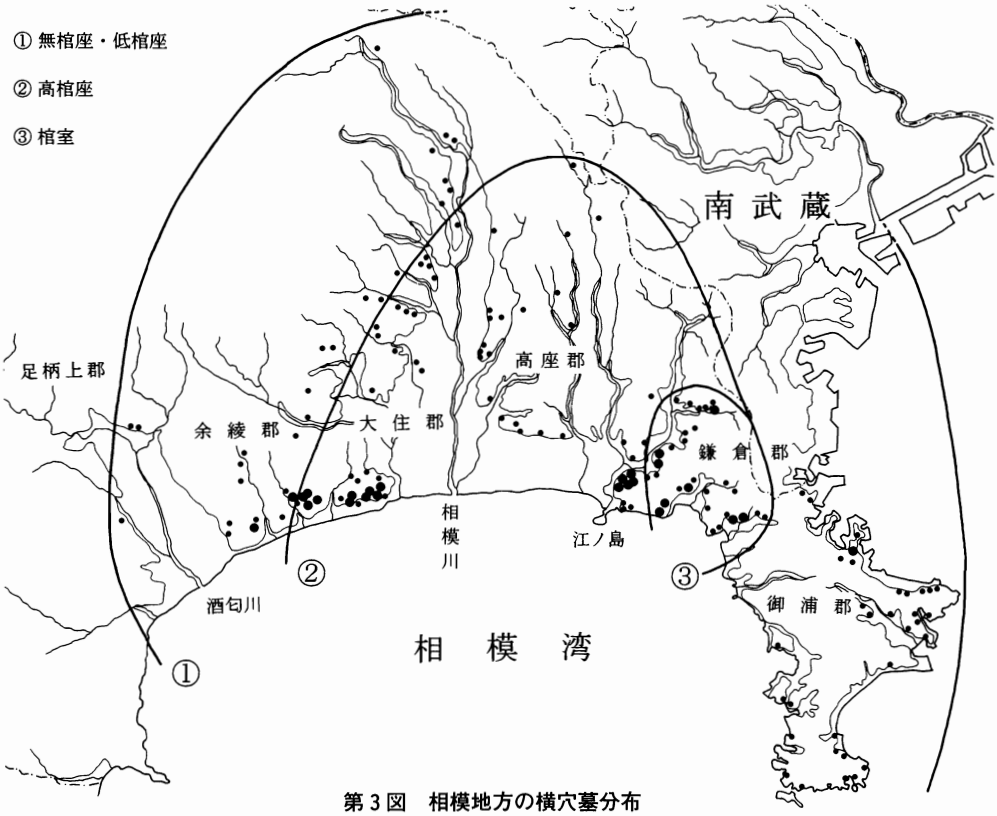
この一文は二つの重要な意味を内包している。一つは件のような用語としての初見であり、もう一つは、棺室は複室のように見えるが複室ではないと定義している点である。ことに後者に関しては、複室構造の出自問題にもからんで看過できないところである。

2）分　布　東原信行氏の論考によれば、棺室構造の横穴墓は相模を中心にして南武蔵・上総・伊豆地方に分布が確認されているという（東原1981）。このうち伊豆の柏谷横穴墓群などに存在する数穴と南武蔵の夢見ヶ崎横穴墓・矢上上ノ町2号墓の2基は相模のそれと同様の構造であるが、上総の事例は構造がだいぶ相違しており、単純に同じ土俵に置くことはできない。

第3図は、相模と南武蔵をあわせた範囲内（現在の神奈川県）における棺室横穴墓の分布状況を示したものである。県下ではこれまでに23箇所の分布が知られており、それらの傾向をみると、横浜市南端部から鎌倉市にその大半の集中していることがわかる。この地域は歴史的には古代の鎌倉郡の中におさまる。それ以外では余綾郡に3基、三浦郡に2基、南武蔵の橘樹郡に2基確認されているに過ぎない。県内の棺室横穴墓の累計は目下のところ148基であるから、実に9割以上が鎌倉郡内に集中していることになる。したがって棺室横穴墓はまさに「鎌倉型」と呼ぶにふさわしい地域色をもった横穴墓であるといえよう(7)。

棺室構造の横穴墓は柏尾川の支流にあたる鼬川流域に濃密に分布することが早くから知られていた。しかし実際は、鎌倉から横浜に抜ける鎌倉街道沿いに分布しているようである。その証左に最近では、鎌倉街道を少し南下した鎌倉市岩瀬で棺室横穴墓を多数内包した横穴墓群が調査されており、さらにこの地域には未調査の横穴墓群がまだまだたくさん存在することが分布調査で確認されている。

ところでこの鎌倉街道はもともと律令時代の伝路、すなわち鎌倉郡家と南武蔵の久良郡家を結ぶ幹線道路であった。現在でもこの地域には公田町、本郷町といった律令時代の遺名を匂わせるような地名が見出せるはその所以である。

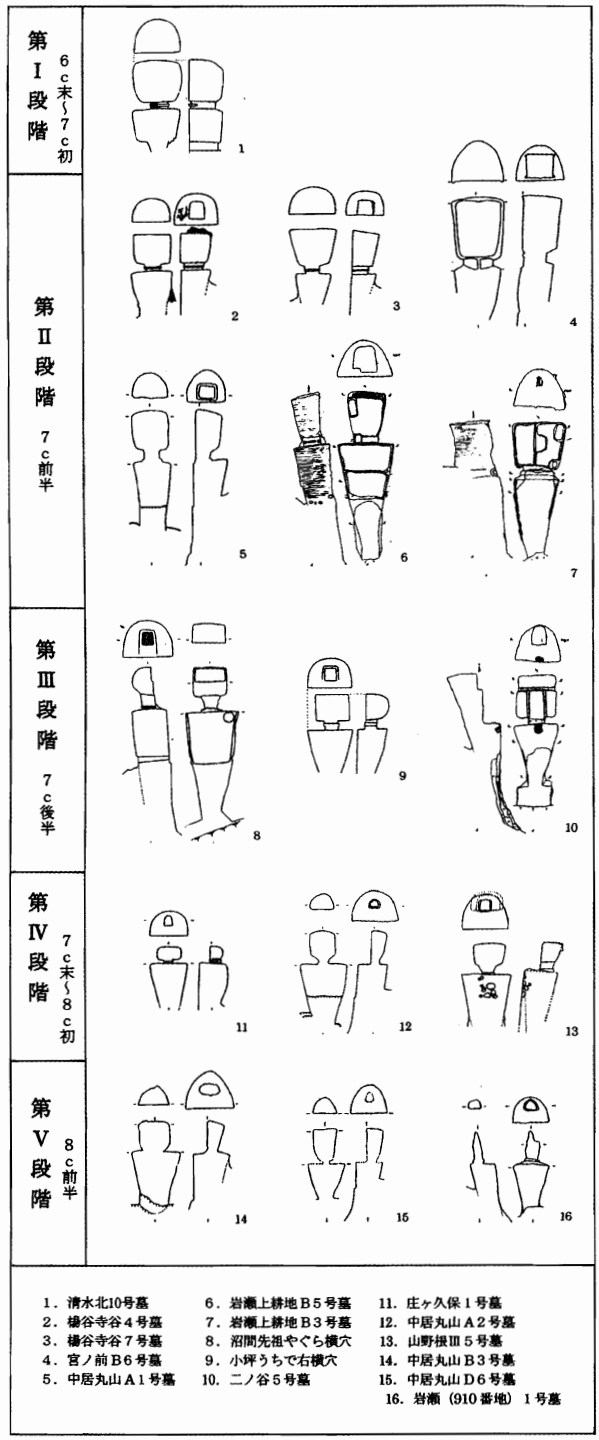


第3図　相模地方の横穴墓分布

このように棺室横穴墓の分布の背景には、どうも歴史的必然性が内在すると見て間違いないようだ。

3）系譜と時期　棺室横穴墓がいつどこで出現したのかという問題はいまだ解決されていないが、分布傾向からみた場合、相模で発生した蓋然性はきわめて高い。かりにそうであれば、最も類似した形態である複室構造からの発展形態と考えたくなる。というのは、赤星氏は否定的であったが、実際に資料を集めてみるとどちらにするか決めかねるような横穴墓も存在するからである。したがってここでは複室構造と棺室構造をひとまず同じ土俵に置いて、5段階の変遷を想定してみた次第である。

第Ⅰ段階に大磯町の清水北10号墓を初源形態として位置付けてみた。この横穴墓は相模で唯一の複式横穴墓とされているが、前後室の規模に格差がなく、天井高もほぼ同じである点を特徴としている。一般的に複室横穴墓は後室に比べて前室の規模が小さいが、この横穴墓は例外的である。もう一つは、前室が平面逆台形・切妻天井といった構造であり、この地域にみられる単室横穴墓の玄室と似ている点をあげることができる。おそらく池上（池上1980）・東原（東原1981）の両氏もこうした特徴を見抜いてこの横穴墓を棺室横穴墓と認識されたのであろう。



第4図　棺室横穴墓の変遷

第Ⅱ段階は、前室が平面半裁徳利形ないし撥形を呈することを最大の特徴とする。こうした構造は普遍的な複室構造から明らかに逸脱したものである。本段階は複室構造から棺室構造への過渡的段階として位置付けられよう。そして本段階後半になると前室と後室格差が顕在化し、岩瀬上耕地Ｂ５号墓の出をもって棺室横墓の成立と捉えたい。

第Ⅲ段階に分類した横穴墓をいわゆる複室横穴墓と見なす研究者はいなかろう。この段階の棺室は平面方形を基調とするすこぶる端整なつくりであるが、数は少ない。

第Ⅳ段階は棺室横穴墓の盛行期であるが、前段階と比較すれば棺室のつくりが粗雑化し、一層小形化するようだ。

第Ⅴ段階は終末期である。前室の規模が著しく小さくなる一方、棺室は前段階よりも一層歪な形態のものが多くなり、なかには成人を進展葬にて安置したとはとても思えないような小規模なものもつくられるようになる。

さて棺室横穴墓の造営年代であるが、事例は少ないが第Ⅲ・Ⅳ段階に土器を出土した事例があり、この段階が７世紀後半～８世紀初頭であることがわかる。またその他の段階は、前室の構造から概ね第４図に示したようなると考える。

4）棺室の性格　端的に述べるならば、筆者は棺室を改葬墓や火葬墓と密接な関係をもった施設ではないかと考えている。というのは棺室横穴墓にはつぎのような特性が窺えるからである。

第一に、分類の第Ⅳ段階から棺室規模が著しく小形化し、とても成人遺体を安置できるような空間ではなくなる。しかしこの段階以降に棺室横穴墓は爆発的に増加するのである。

二つ目としては、この第5段階の中心時期は7世紀第Ⅳ四半期～8世紀初頭と想定されるが、ちょうどこの時期に相模や南武蔵では古代寺院が相次いで創建される。仏教が国策として強力に推進され、具体的なかたちになって現れる時期にあたる。そして南武蔵では同時期に火葬墓が普及しはじめる。さらには伊豆の大北・万法院・宗光寺横穴墓群では火葬骨を納めた石櫃が発見されており、伝統的葬法と新来の葬法が融合している。こうした周辺地域のあり方を勘案すると、東国においてひときわ大和政権の息が強くかかった相模地域だけが旧態依然としていたとは思えない。

三つ目には、遅くとも7世紀第Ⅳ四半期までには横穴墓の副葬品は大きく変化し、土器以外の伝統的副葬品が認められなくなる。この点も仏教思想の浸透による葬送観念の変革として跡付けられよう。

以上のようなあり方から見て、8世紀に入ると棺室は改葬骨や火葬骨を納めた納骨施設としての機能も有したのではないかと思われる。今後の調査では人骨の出土状況をつぶさに観察することが肝要であろう。

7. 横穴墓出現の背景

相模地方に横穴墓が出現する背景、つまり被葬者と社会構造について推論する上で大きく貢献したのが花田勝広（花田1990）と池上 悟（1991）の業績であろう。すなわち、花田が「河内型横穴墓」の提唱をはじめとして畿内横穴墓群の様相を詳述したことと、池上が畿内以東の美濃・遠江・相模・上総・南陸奥についての実態を明らかにしたことで、畿内河内地方の横穴墓が東国の特定地域に伝播した事実が鮮明になったのである。

一方、文献史学の方面では現在、つぎのような考え方が支配的である。すなわち、6世紀に大和政権の関心は強く東国に向けられるようになり、当初は地方豪族を介しての点的支配であったが、推古朝のころ（592～628年）に面的支配へと政策転換したとされる（吉岡1999）。それは『日本書記』推古15年条に「亦国ごとに屯倉を置く」と見えるように、全国各地に壬生部を設置する政策であり、その管理・運営のために高い技術と知識を携えた渡来系氏族を入植させた。そして彼らの多くが河内に居住していた（水野1992）（山尾1992）というものである。

さて相模や南武蔵での横穴墓の出現は6世紀後葉にまで遡るが、これを第一波の導入期とすれば、相模において河内型の系譜を引く横穴墓が本格的に普及する7世紀前葉（TK209型式後半ごろ）は第二波にあたり、それはまさしく推古朝の壬生部設置に連動した現象であると理解

される。つまり壬生部設置にともなって河内方面から渡来系氏族が相模に入植し、彼らの死去にあたって故地で採用していた伝統的な「河内型」横穴墓を造ったのであろう。

勿論、こうした推論を立証するには相模における渡来系氏族の動向をあとづけなければならないが、この点については須藤智夫や荒井秀憲らの研究に詳しい。須藤氏によれば、相模における渡来系氏族の活動は、茅ヶ崎市居村Ｂ遺跡出土の「放生木簡」から８～９世紀にかけて高座郡には「飛鳥部氏と春日部氏」の居住していたことが知られ、さらに『三代実録』には９世紀の鎌倉郡に「上村主氏」のいたことも確認できるという（須藤1999)。また荒井氏は余綾郡大磯に残る高麗王若光をはじめとする高句麗系渡来人の伝承も史実と捉えている（荒井1990)。

ところで屯倉と渡来系氏族、そして河内型横穴墓の三者が深く関わっていることは、相模に限らずこの横穴墓の分布する遠江や南武蔵でも指摘されている（平野1981）（森田1992）（田村2002)。したがって相模に屯倉が設置されたか否かは別としても、大和政権の後押しで河内出身の渡来系氏族が推古朝のころに入植した信憑性はかなり高いといえよう（荒井2003)。

第２図は河内地方の高井田・安福寺・玉手山東横穴墓群に故地をもつと考えられる造付石棺と高棺座を内蔵した横穴墓の分布と、須藤の作成した「相模領域の古代氏族分布」図(須藤1999)を抱き合わせたものである。これを見ると、造付石棺横穴墓の分布と河内の渡来系氏族である飛鳥部・上村主・春部氏の居住地とが見事に重なり合い、件の研究成果を裏付けていると考える。ちなみに花田氏は河内の横穴墓群を造営した渡来系氏族を、物部氏と擬制的同族関係を紐帯とした有力家長層の下位の集団と想定している（花田2001)。

8. 副葬品の変化

横穴墓は副葬品を出土するのが一般的であり、これは後期古墳文化の重要な属性の一つとして認識されている。被葬者の亡骸を飾る玉類・耳環・釧などの装身具、被葬者が壮年男子であれば直刀・鏃なかには馬具や甲冑などの武具類、そして供物を供えたり酒や水を入れるための須恵器や土師器といった土器類がそれである。

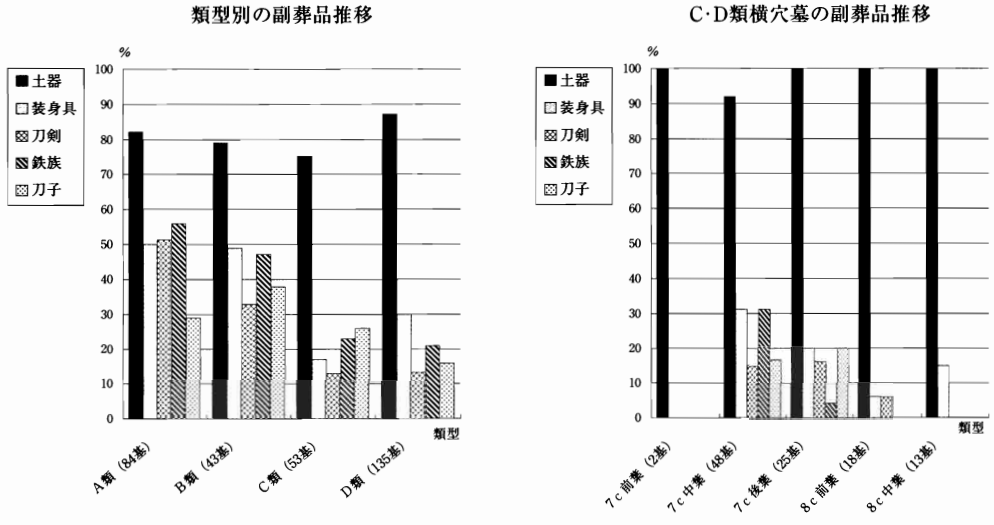
横穴墓を調査すると、その横穴墓が盗掘ですっかり荒らされていない限り、往々にこうした副葬品の出土する機会に巡り会う。そして矩形や逆台形を呈する古式の横穴墓ほどその確立は高く出土量も多い。反対に無袖の撥形や半裁徳利形であれば可能性の低いことを、私達は経験的に知っている。そしてこうした傾向は、葬送観念の変化あるいは政治的規制が強く影響したことに起因するのであろうと、ただ漠然と理解しているのである。しかしこれまでの横穴墓研究史のなかで、副葬習慣の衰退について具体的に検討した論考は意外と少ない。そこでここでは相模における副葬品の変化を垣間見てみたい。

第５図は副葬品を出土した形態の判別できる横穴墓293基を対象として、副葬品の統計をとったものである。左のグラフでは平面形をもとに矩形、羽子板形、半裁徳利形と撥形の４種類

に横穴墓を大別し、各類型の保有率を比較してみた。各類型の構築年代はこれまでの検討結果で概ね矩形（A類）が6世紀後葉～7世紀前葉、羽子板形（B類）は7世紀前葉、半裁徳利形（C類）と撥形（D類）が7世紀中葉～8世紀中葉と考えられる。また右のグラフは副葬習慣衰退の画期が一体いつ頃なのか、存続時期の長い半裁徳利形と撥形の2類型を対象に分析した結果を示したものである。

まず左のグラフで主要な副葬品の変化について見ると、いずれの類型も保有率80%前後の高い数値を示すのが土器類だけであることがわかり、須恵器や土師器といった器が葬送儀礼のなかで不可欠な存在であったことを如実語っている。その他の装身具（耳環・玉類）、刀剣、鉄族、刀子に関しては、装身具でC・D類に例外的な結果が見られる以外は、A類→B類→C類→D類という順に減少傾向を示す。つまり時期が下るにしたがって薄葬化したことを端的に表していると見てよい。またC・D類には副葬品皆無の横穴墓が多数あり、今回の統計ではこうした横穴墓は対象外としたので、実際には一層顕著であったと推察される。B類よりも後出的なC・D類にいたっては一層顕著になり、C類はグラフ化した品目以外では土錘（1例）だけしか認められない。D類は馬具（1例）が注目されるほかは、鉄釘（4例）、鎌（3例）、砥石（2例）、銅鈴（1例）だけで、C類ほどではないが簡素化の風潮が窺える。

つぎに右のグラフで副葬習慣が変化する画期を絞り込んでみよう。無袖のC・D類は7世紀前葉に出現し8世紀前葉まで100年以上にわたって造営される息の長い構造であるが、詳細に見れば少しずつ変容したことが確認された。ここでは出土土器の年代観をもとに、7世紀前葉から8世紀中葉までを5段階に分けて副葬品を集計してみた。形態が判別でき、時期の比定できる土器をともなったC・D類横穴墓は79基を数えた。まず7世紀前葉に比定される横穴墓は2基しかない。この時期には無袖のC・D類は出現したばかりで、盛行していたのは羽子板形



第5図　類型・時期別の副葬品保有率

（B類）であり、矩形の横穴墓（A類）もまだ存続していたからである。7世紀中葉段階では主要な副葬品は比較的高い数値を示している。ところが7世紀後葉段階になるとまず鉄族が組成から欠落する。そして8世紀前葉になると土器以外の副葬品がほとんど姿を消すのである。したがって最大の画期は7世紀後葉と8世紀前葉の間、すなわち西暦700年前後と見なすことができる。

7世紀中葉以降、畿内では四天王寺や山田寺をはじめとする大寺院が相次いで建立されるが、相模でも7世紀後葉に高座郡に周辺地域に先駆けて下寺尾廃寺が創建され、それと連動するように8世紀前葉に下寺尾廃寺の北側丘陵上に高座郡家（郡衙）が成立するのである。こうした政治的・宗教的な変革期に横穴墓にも質的変換が看取されるのは決して偶然とは思えない。

横穴墓の副葬品の変化に着目した研究者の一人に鈴木敏弘がいる。氏は南関東の横穴墓は7世紀第3・4四半期の境頃に急速に副葬習慣が衰退し、その背景に中央からの規制があった、と述べられている（鈴木1995）。しかし相模では7世紀後葉に質的転換がなされ、西暦700年前後に顕在化したようだ。その背景には政治的・宗教的な影響があったからに他ならない。

9. おわりに

横穴墓研究の課題は多岐にわたるが、最重要命題は何と言っても伝播原因の究明にあると考えるので、最後にこの点に関して私見を整理しておきたい。

端的に言えば、相模地方への横穴墓伝播は金井塚良一をはじめとして多くの研究者が述べているごとく（金井塚1975）（森田1992）、大和政権の屯倉設置に伴う歴史的事象と筆者は理解している。そして相模地域への第二波は7世紀前葉の推古朝における屯倉設置と重なり、この頃に河内地方から造付石棺を内蔵した特有の横穴墓が彼の地に居住していた渡来集団によって将来され、その後彼らは高座郡を中心とした地域に基盤を築いたという推察が、これまでの資料分析から可能なようだ。この点を本稿の帰結点としておきたい。

先頃の高座郡家の発見などで、相模地方における7世紀の研究が近年にわかに活況をていしている。この機に乗じて、他地域に比肩し得るシンポジュウムの開催と資料集の作成を期待したいところである。

最後に、いたずらに紙幅を裂いてしまったにもかかわらず、本稿の掲載を快諾してくださった編集委員諸氏に感謝申し上げて擱筆したい。

注

1　東海土器研究会による猿投・湖西窯の再編年案が提示されたが、この考えに従った場合、相模の横穴は9世紀中葉まで機能していたことになり、在地土器の年代観とも大きな齟齬が生じる。

2　近野正幸は相模へ横穴墓が伝播する時期をTK43型式段階とTK209型式段階の大きく二つの波に分け

られるとし、本格的な波及期を後者と見ている。

3　池上は諏訪脇横穴墓群に多数存在する有縁棺座を「河内型」の系譜を引く造付石棺と見ているが、類例を提示して検討する必要があろう。

4　「羽子板形」を袖の全く無くなった「撥形」と混同して表記している報告書や論文を目にすることがあるが、これは誤りだ。舞妓さんの描かれた伝統的な羽子板は羽を打つ部分と柄の部分がきちんと分かれているものである。

5　現在のところ、分布域の西端にあたる余綾郡では岩井戸・清水北横穴墓群で各１基、東端の三浦郡では滝ヶ崎横穴墓群で１基確認されている

6　造付石棺と高棺座の両方が存在する茅ヶ崎市の大庭折戸５号横穴墓や藤沢市の神光寺Ｄ１号横穴墓は石棺底が極めて浅くどちらとも言えないような構造であり、上田説を全く否定できないのも事実である。

7　九州の「肥後型」、山陰の「意宇型」、畿内の「河内型」に倣った次第である。

引用参考文献

明石　新　1999「第５章　平塚の古墳時代」『平塚市史11上　別編・考古（１）』

赤星直忠　1942「神奈川県浦賀町沼田城山横穴について」『考古学雑誌』第32巻４号

赤星直忠　1954「逗子市山野根横穴群」『神奈川県文化財調査報告』第21集

赤星直忠　1959『鎌倉市史　考古編』

赤星直忠　1964「神奈川県大磯町の横穴」『大磯町文化財調査報告』第１冊　大磯町教育委員会

赤星直忠　1970『穴の考古学』学生社

荒井秀規　1990「古代相模の渡来人と帰化人」『三浦古文化』第48号

池上　悟　1980「横穴墓」『考古学ライブラリー』６　ニュー・サイエンス社

池上　悟　1991「東国横穴墓の型式と伝播」『おおいた考古』第４集

池上　悟　2001「関東の横穴墓」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会

上田　薫　1989「高棺座について」『神奈川考古』第25号

上田　薫　1991「神奈川県内の横穴墓群」『関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城県考古学会

上田　薫　1994『入門考古学講座　－横穴墓とは何か－』神奈川県考古学会

上田　薫　1999「第Ⅴ章結語　－三浦市内の横穴墓－」『松輪坪井横穴墓群』（財）かながわ考古学財団

上田　薫　2000「第Ⅴ章結語　－横須賀市内の横穴墓－」『高山横穴墓群（２次）』（財）かながわ考古学財団

大谷晃二　2001「西日本の横穴墓　－型式・地域性の研究視点－」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会

岡本孝之・伊丹　徹　2001『かながわの古代寺院　－研究の成果と課題－』神奈川県考古学会

金井塚良一　1975『吉見百穴横穴墓群の研究』校倉書房

かながわ考古学財団　2003『高座郡衙（郡家）の世界』平成14年度の発掘調査成果発表会

後藤健一　1989「静岡県の窯業遺跡　本文編」『静岡県文化財調査報告書』第42集　静岡県考古学会

後藤健一　1995『須恵器集成図録第３巻　東日本編Ⅰ』雄山閣出版

杉山博久　1976「平塚市内の横穴墓群（Ⅰ）」『平塚市文化財調査報告書』第12集

鈴木敏弘　1995「－特集－東国古墳の終焉と横穴墓」『和考研究Ⅲ』

須藤智夫　1995「古代相模における在地社会の一様相」『考古学の世界』第10号　学習院考古会

須藤智夫　1999「古代の氏族と開発」『古代の相模を考える会　発表要旨』　古代の相模を考える会

田中広明　1991「東国の在地暗文土器」『埼玉考古』第28号　埼玉考古学会

田村良照　2000～2002「相模の横穴墓（1～4）」『湘南考古学同好会会報』80・83・84・88号

田村良照　2002「南武蔵南部の横穴墓」『考古論叢　神奈河』第10集　神奈川県考古学会

長谷川　厚　1989「神奈川・千葉県地域の赤彩土器・黒色処理土器について」『東国土器研究』第2号　東国土器研究会

長谷川　厚　1990「第Ⅲ章第1節　土器について」『草山遺跡Ⅲ』　神奈川県文化財センター

花田勝広　1990「河内の横穴墓」『考古学論集』第3号　考古学を学ぶ会

花田勝広　1991「近畿横穴墓の諸問題」『おおいた考古』第4集

花田勝広　2001「横穴墓の成立と展開」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅰ分冊　九州前方後円墳研究会

林部　均　1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻1号

東原信行　1981「川崎市夢見ヶ崎横穴墓発掘調査報告」『川崎市文化財集録』第17集　川崎市教育委員会

松井一明　2001「横穴墓の開始と終末」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会

水口由紀子　1989「いわゆる“比企型坏”の検討」『東京考古』第7号

水野正好　1989「河内飛鳥と漢・韓人の墳墓」『古代を考える　河内飛鳥』　吉川弘文館

山尾幸久　1989「河内飛鳥と渡来系氏族」『古代を考える　河内飛鳥』　吉川弘文館

山口辰一　1985「武蔵国府と奈良時代の土器様相」『東京考古』第7号　東京考古談話会

山口恵一　1989「静岡県の6～8世紀の黒色土器について」『東国土器研究』第2号　東国土器研究会

吉岡康暢　1999「東国の首長・村民と飛鳥の王権」『相模国の成立と地域社会』　東海大学校地内遺跡調査団10集年記念フォーラム

平野吾郎　1981「狩野川流域における横穴群について」『静岡県考古学会シンポジウム3群集墳と横穴』

森田　悌　1992『古代東国と大和政権』　新人物往来社

金井塚良一　1975『吉見百穴横穴墓の研究』　校倉書房

荒井秀規　2003「古代の高座郡」『高座郡衙（郡家）の世界』（財）かながわ考古学財団

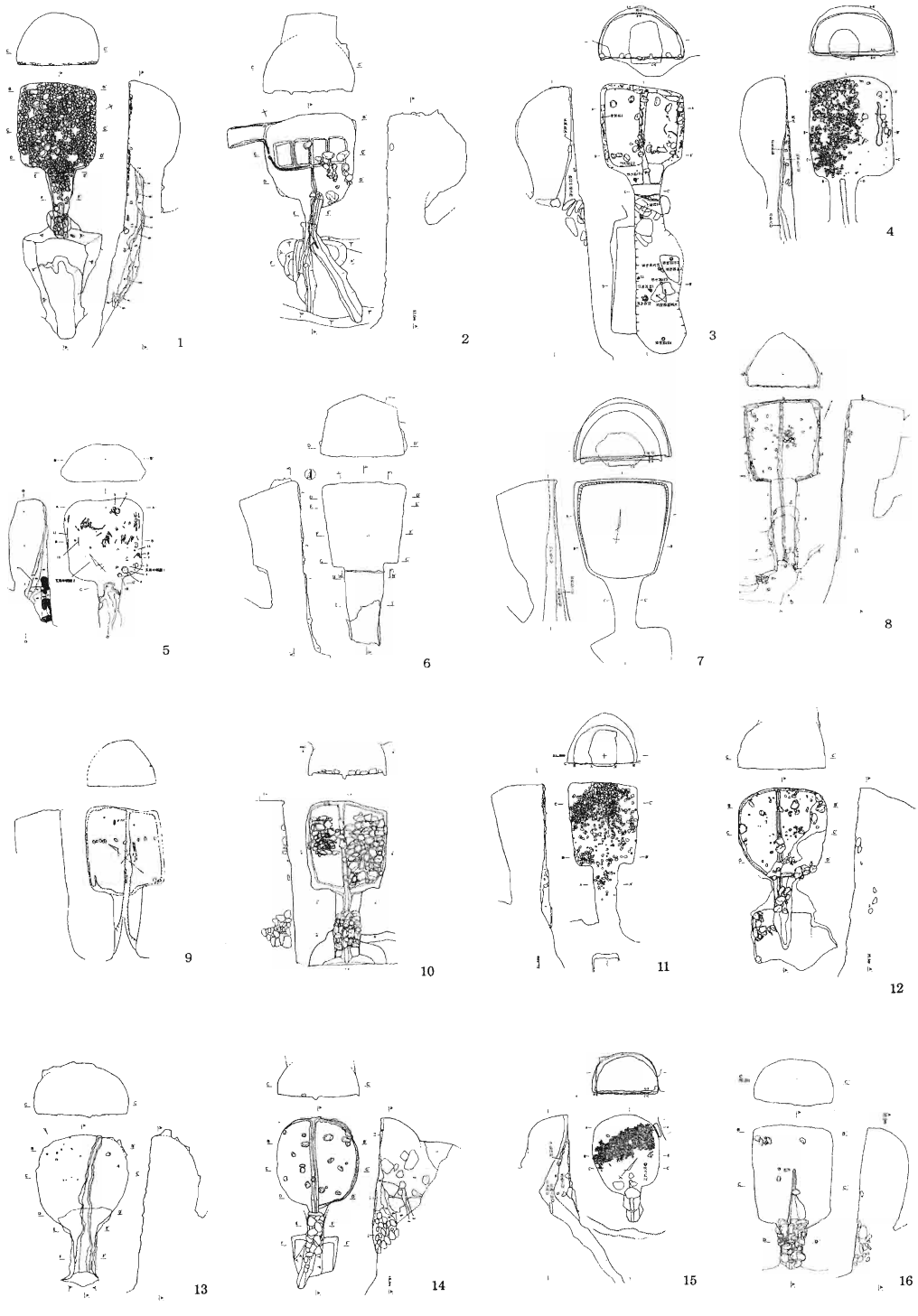
松井一明　2001「遠江における横穴墓の伝播と展開」『静岡県考古学研究』第33号

贄　元洋　1998「湖西窯編年の再検討」『静岡県考古学研究』第30号

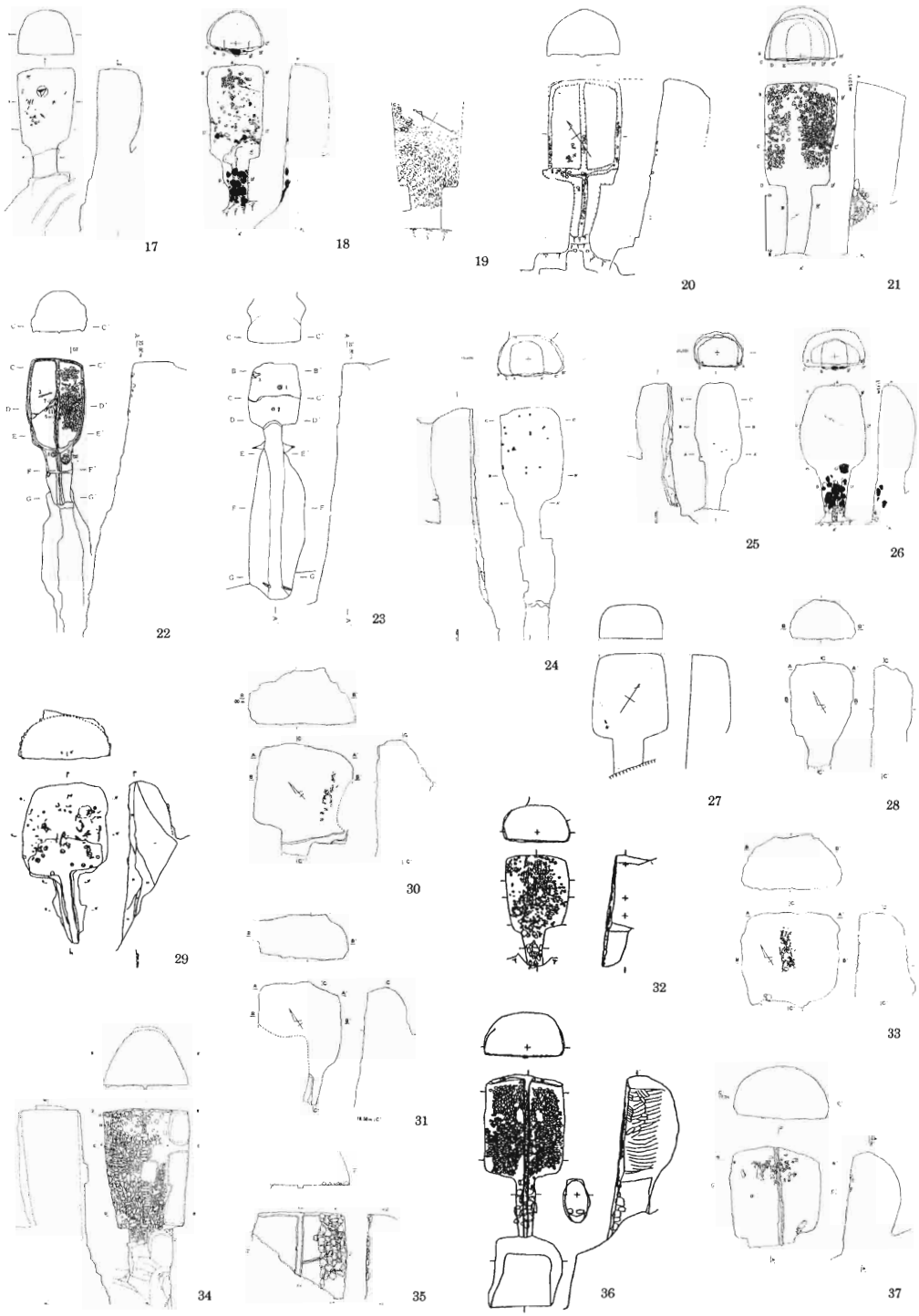
贄　元洋他　1999『古墳時代の猿投窯と湖西窯』　三河考古刊行会

贄　元洋他　2000「猿投窯・湖西窯編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』　東海土器研究会

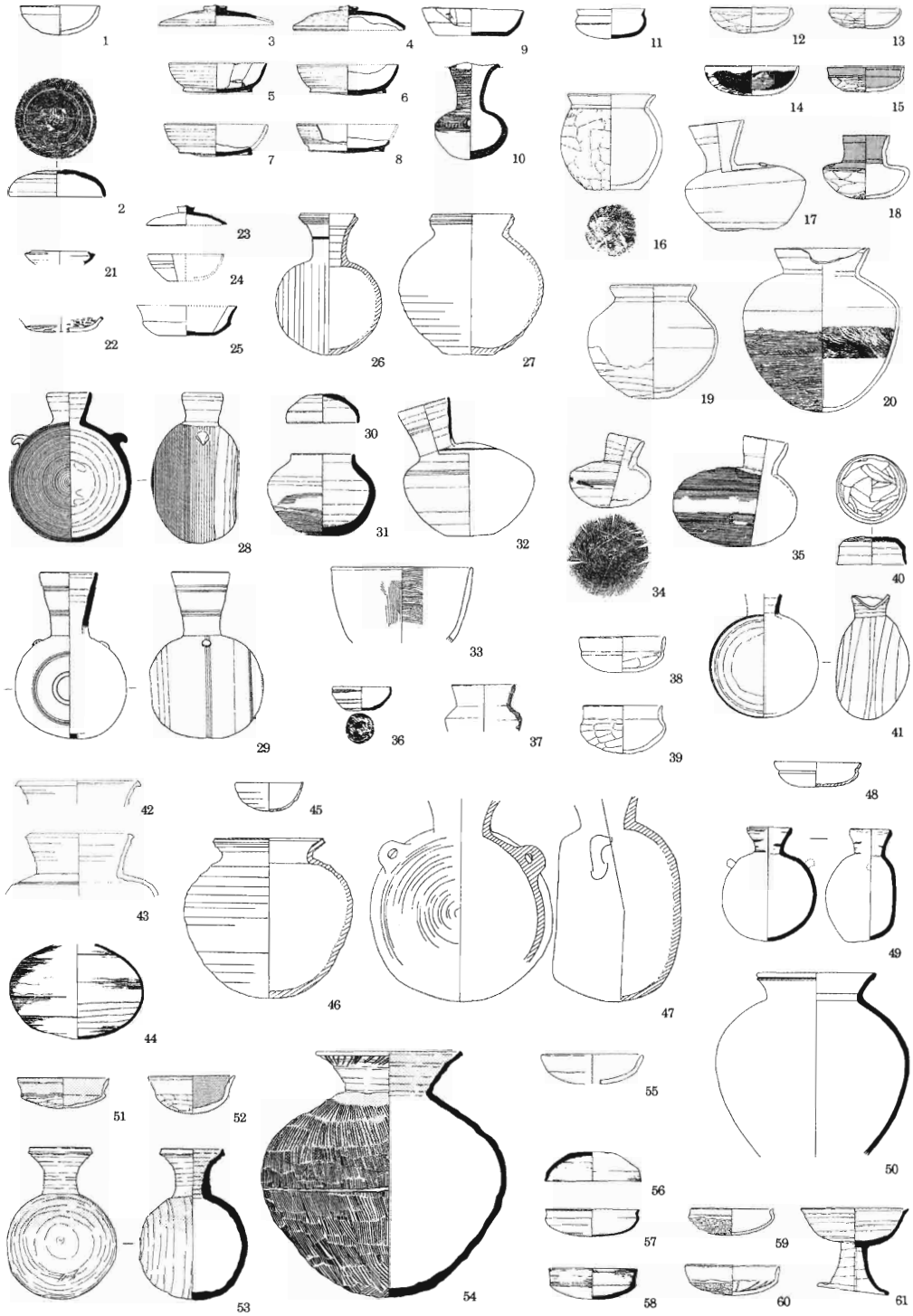
かながわ考古学財団　1993～2003『かながわの考古学』第1～8集



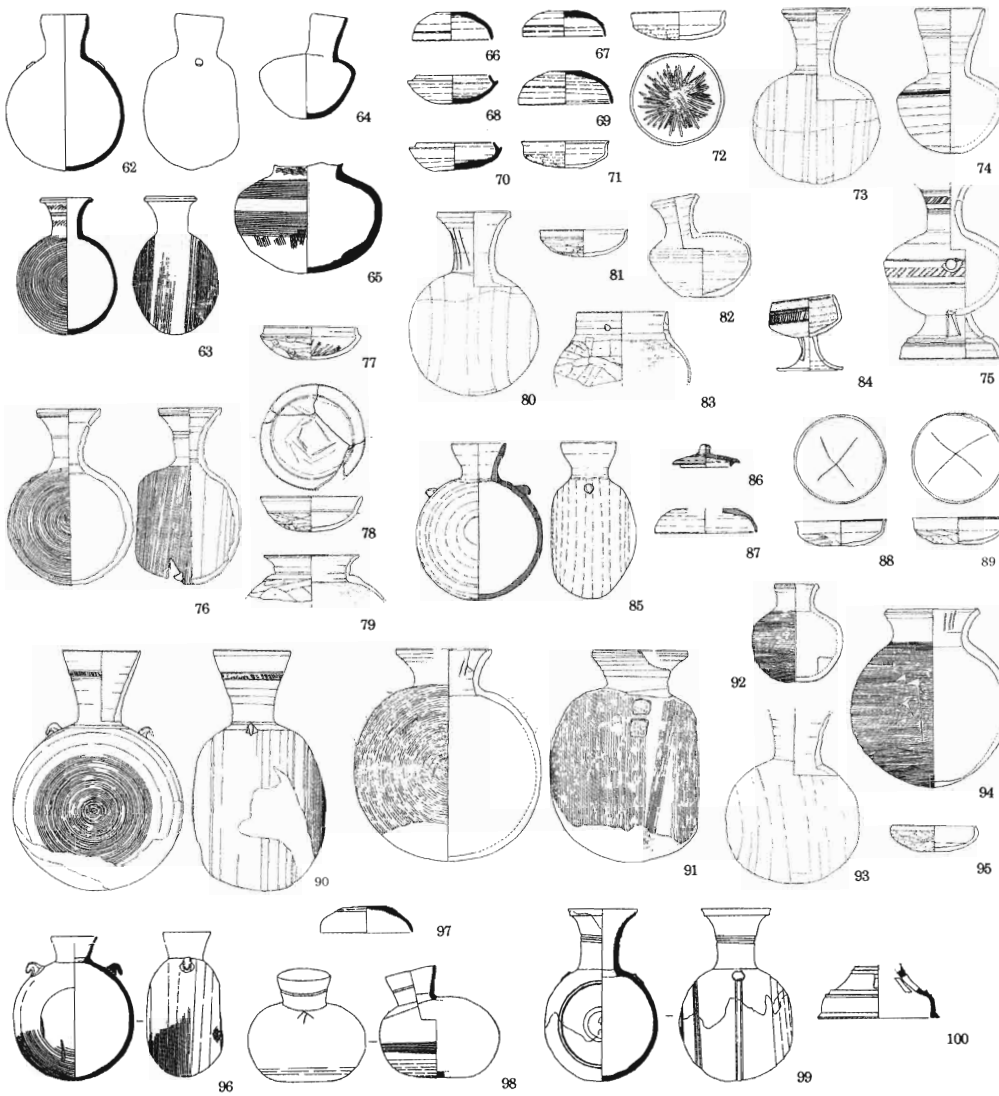
第 6 図　矩形平面の横穴墓（１）



第７図　矩形平面の横穴墓（２）



第 8 図　矩形平面の横穴墓（３）



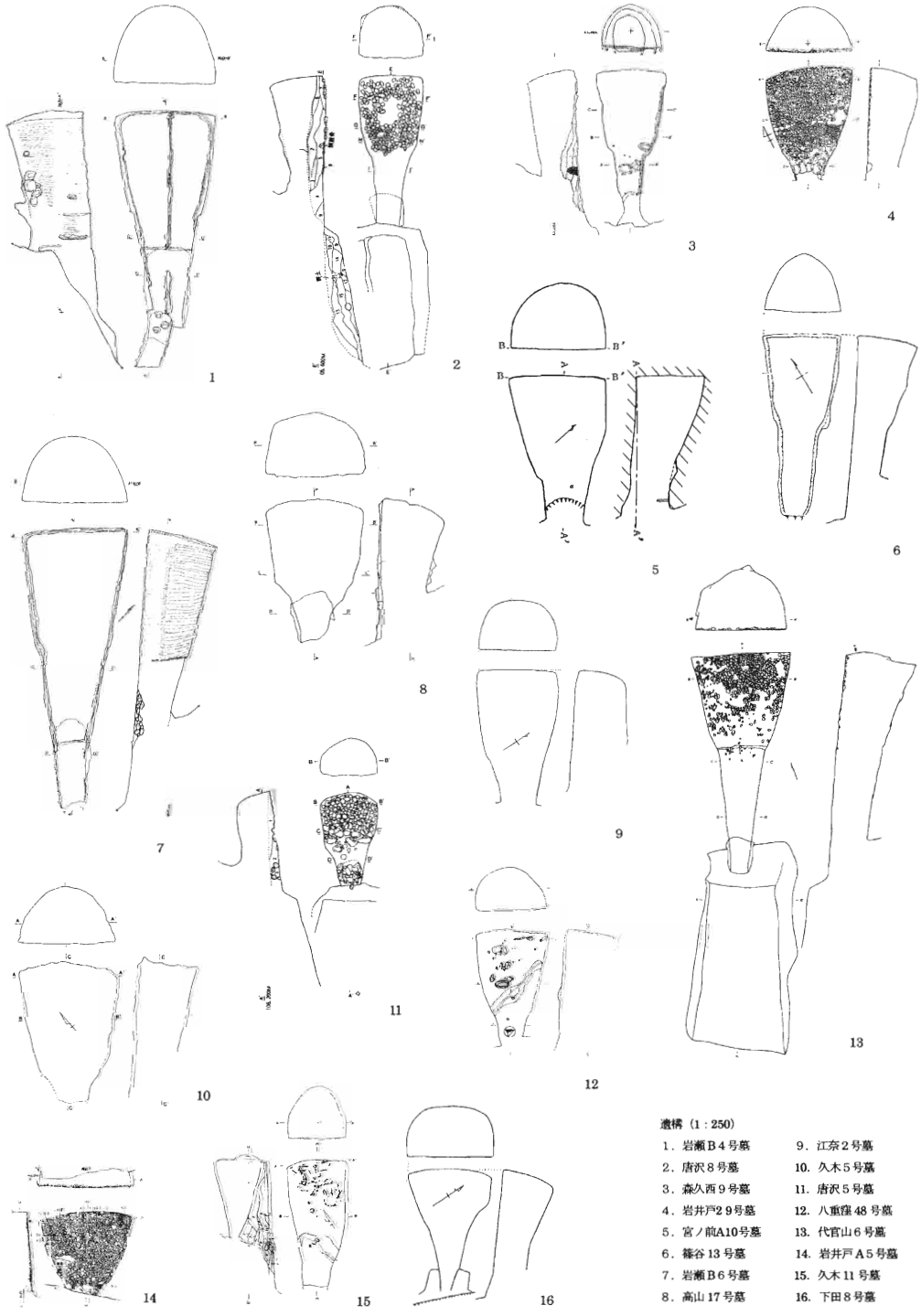
遺構（1：250）

1．羽根尾A1号墓
2．羽根尾B1号墓
3．諏訪脇201号墓
4．諏訪脇1001号墓
5．久木10号墓
6．高山8号墓
7．諏訪脇6号墓
8．城山7号墓
9．篠谷10号墓
10．下尾崎5号墓
11．森久南17号墓
12．羽根尾D2号墓
13．羽根尾D1号墓
14．羽根尾B5号墓
15．諏訪脇10号墓
16．中屋敷6号墓
17．大日ヶ窪32号墓
18．新林左11号墓
19．篠谷3号墓
20．篠谷5号墓
21．新林右西2号墓
22．臼久保3号墓
23．臼久保2号墓
24．森久西15号墓
25．森久西1号墓
26．新林左9号墓
27．なはま6号墓
28．久木1号墓
29．新宿V3号墓
30．久木3号墓
31．久木8号墓
32．熊之台7号墓
33．久木2号墓
34．今泉4号墓
35．下尾崎26号墓
36．熊之台19号墓
37．中屋敷1号墓

遺物（1：10）

1．羽根尾A1号墓
2．羽根尾B1号墓
3～10．諏訪脇201号墓
11．諏訪脇1001号墓
12～20．久木10号墓
21．高山8号墓
22．城山7号墓
23～25．諏訪脇6号墓
26・27．篠谷10号墓
28～33．羽根尾D2号墓
34・35．下尾崎5号墓
36．諏訪脇10号墓
37．中屋敷6号墓
38・39．森久南17号墓
44　新林左11号墓
40・41　羽根尾D1号墓
42・43　大日ヶ窪32号墓
45～47．篠谷3号墓
48．篠谷5号墓
49・50．新林右西2号墓
51・52．臼久保2号墓
53・54．臼久保3号墓
55．森久西15号
56～58．新林左9号墓
59～61．森久西1号墓
62～65．なはま6号墓
66～72．新宿V3号墓
73～75．久木1号墓
76～79．久木8号墓
80～83．久木3号墓
84．下尾崎26号墓
85～87．中屋敷1号墓
88・89．今泉4号
90～95．久木2号墓
96～98．熊之台19号墓
99・100．熊之台7号墓

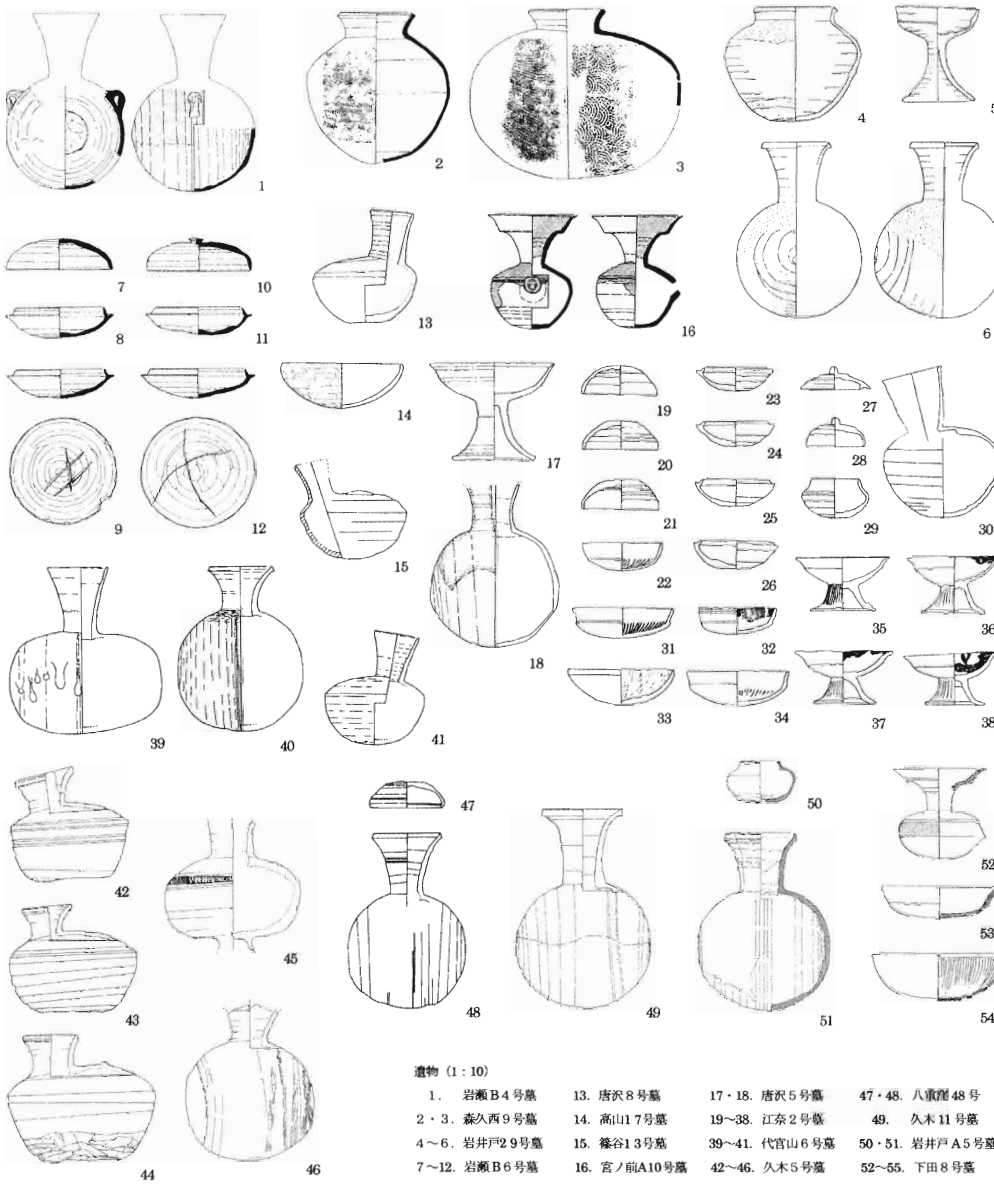
第9図　矩形平面の横穴墓（4）



遺構（1：250）

1．岩瀬B4号墓	9．江奈2号墓
2．唐沢8号墓	10．久木5号墓
3．森久西9号墓	11．唐沢5号墓
4．岩井戸29号墓	12．八重窪48号墓
5．宮ノ前A10号墓	13．代官山6号墓
6．篠谷13号墓	14．岩井戸A5号墓
7．岩瀬B6号墓	15．久木11号墓
8．高山17号墓	16．下田8号墓

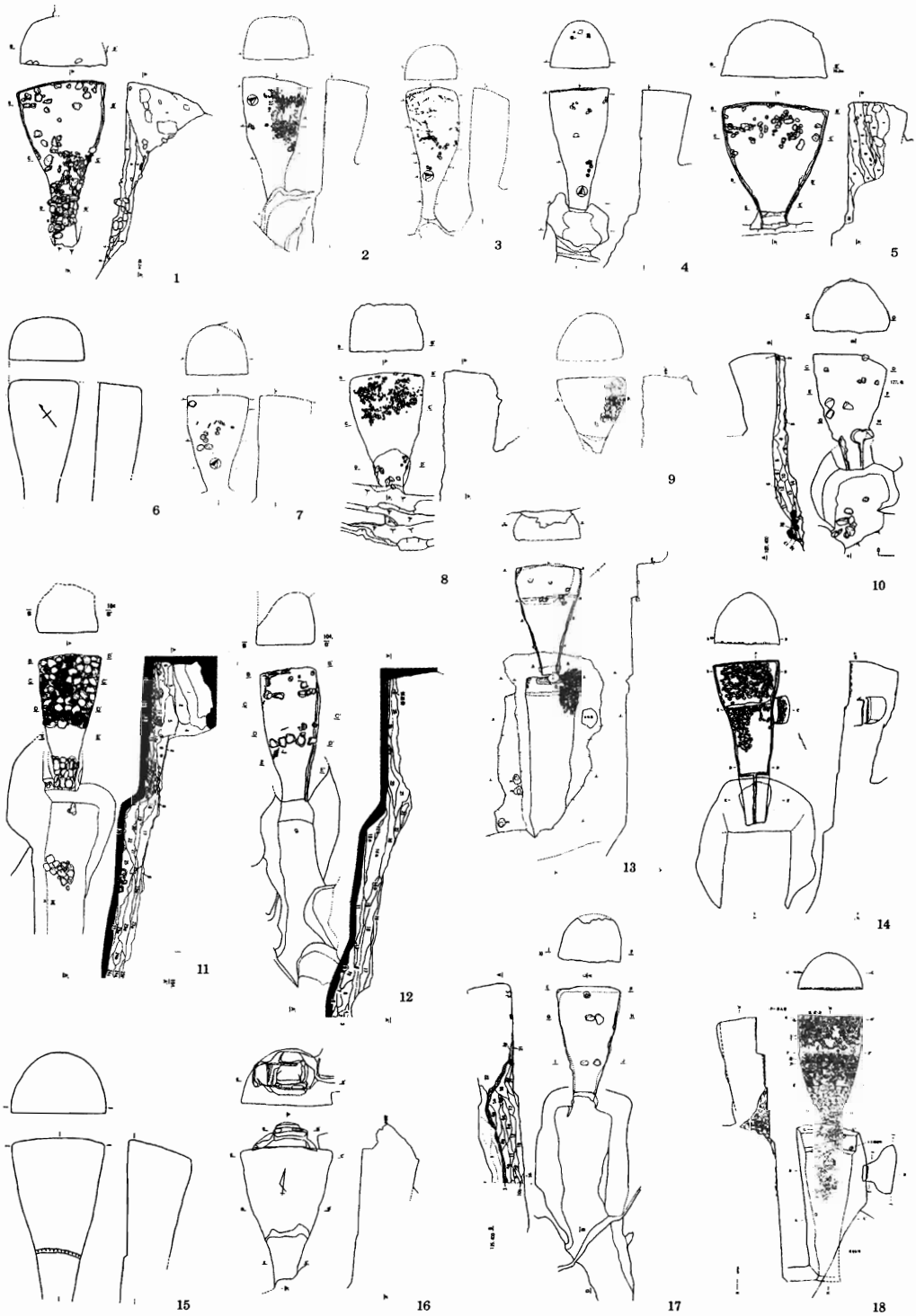
第10図　羽子板形平面の横穴墓（1）



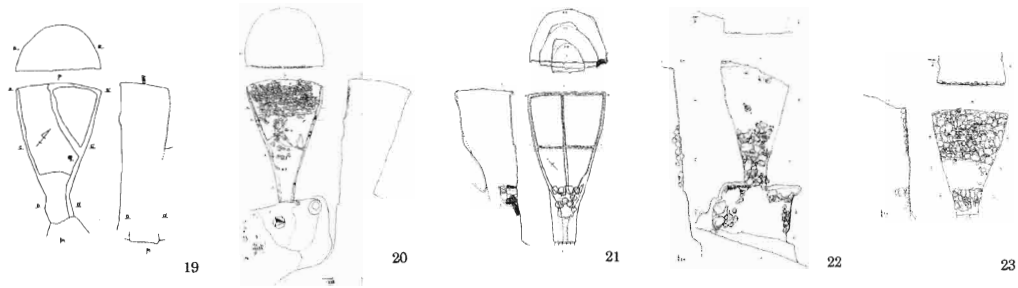
遺物（1：10）

1．岩瀬B4号墓	13．唐沢8号墓	17・18．唐沢5号墓	47・48．八重窪48号
2・3．森久西9号墓	14．高山17号墓	19～38．江奈2号墓	49．久木11号墓
4～6．岩井戸29号墓	15．篠谷13号墓	39～41．代官山6号墓	50・51．岩井戸A5号墓
7～12．岩瀬B6号墓	16．宮ノ前A10号墓	42～46．久木5号墓	52～55．下田8号墓

第11図　羽子板形平面の横穴墓（２）



第12図　半裁徳利形平面の横穴墓（１）

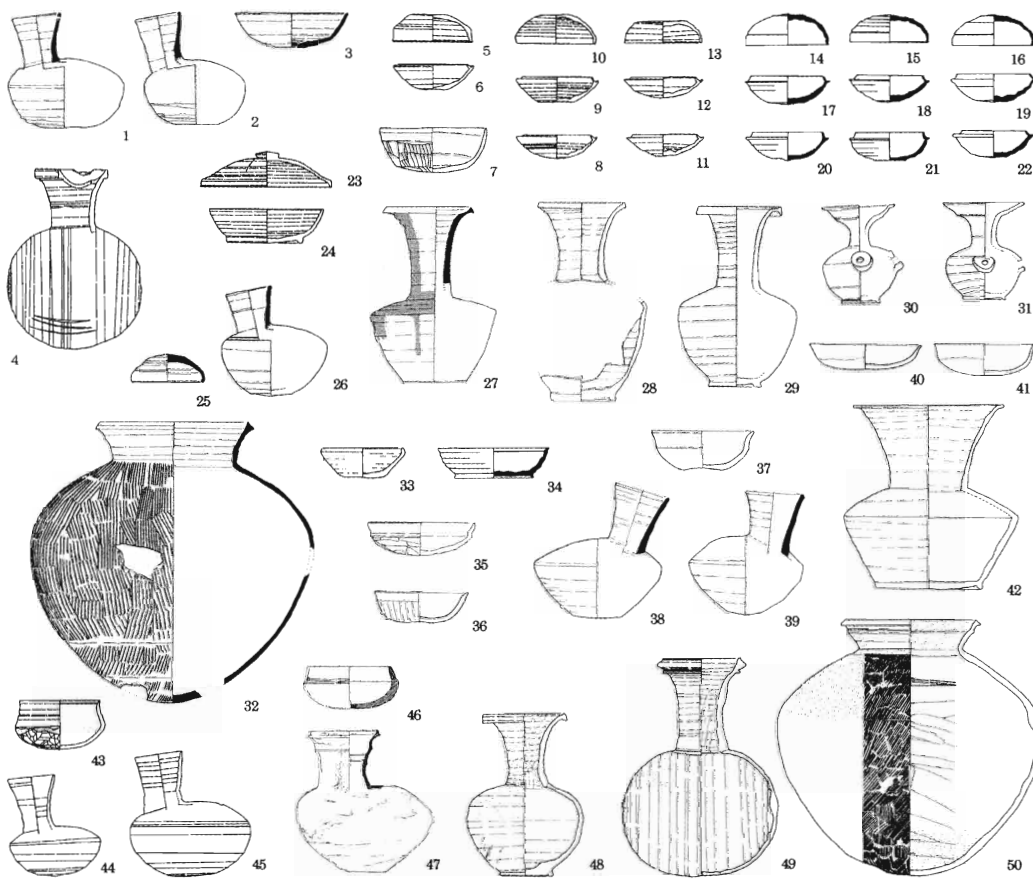


遺構（1：250）

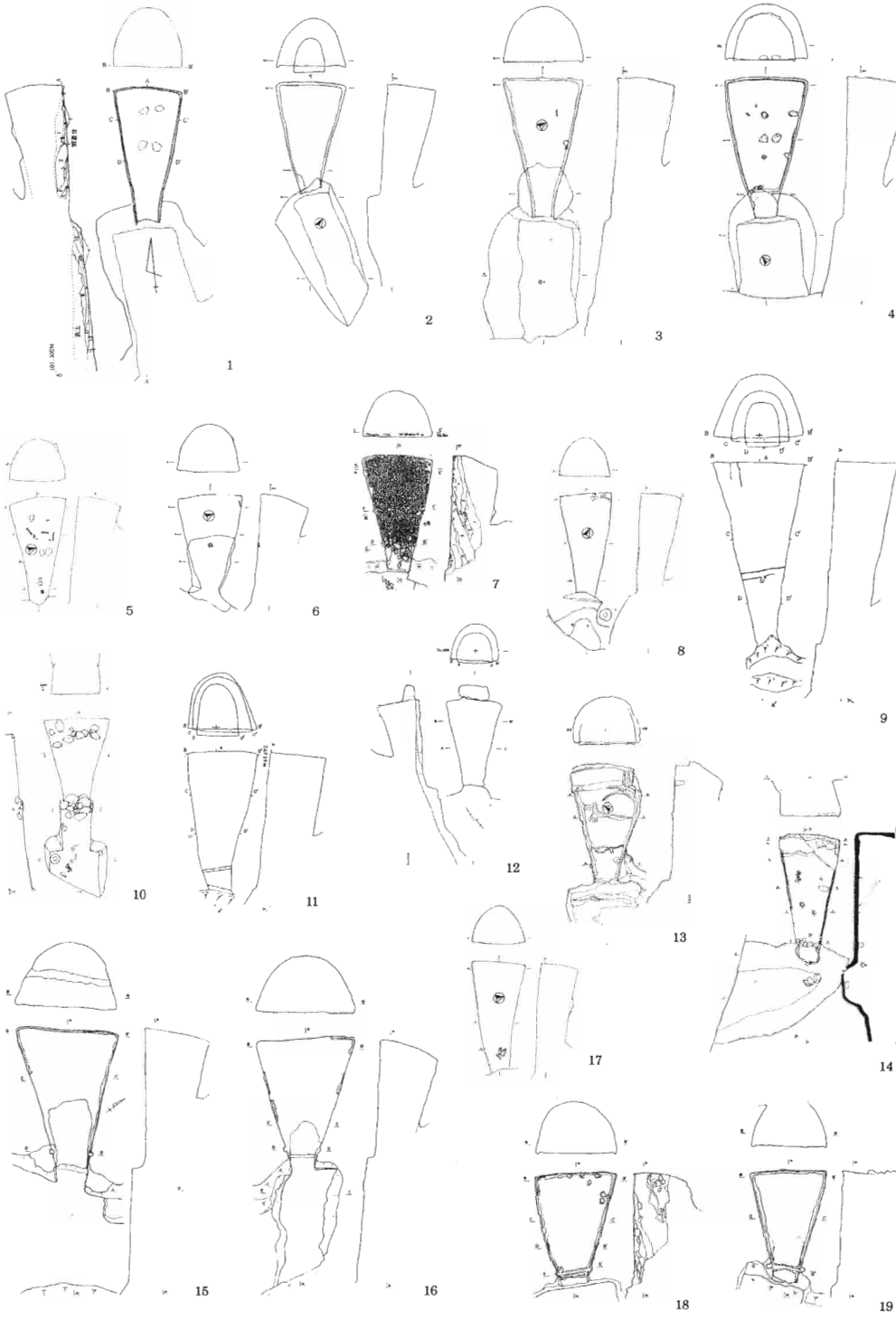
1．羽根尾Ｂ7号墓
2．八重窪50号墓
3．八重窪46号墓
4．宮ノ入6号墓
5．羽根尾Ｅ3号墓
6．なはま2号墓
7．八重窪38号墓
8．板取3号墓
9．北中尾16号墓
10．河南沢2号墓
11．唐沢2号墓
12．唐沢1号墓
13．城山4号墓
14．代官山17号墓
15．山野根7号墓
16．倉上8号墓
17．河南沢7号墓
18．岩井戸Ａ4号墓
19．倉上6号墓
20．八重窪45号墓
21．北矢名1号墓
22．下尾崎2号墓
23．上栗原6号墓

遺物（1：10）

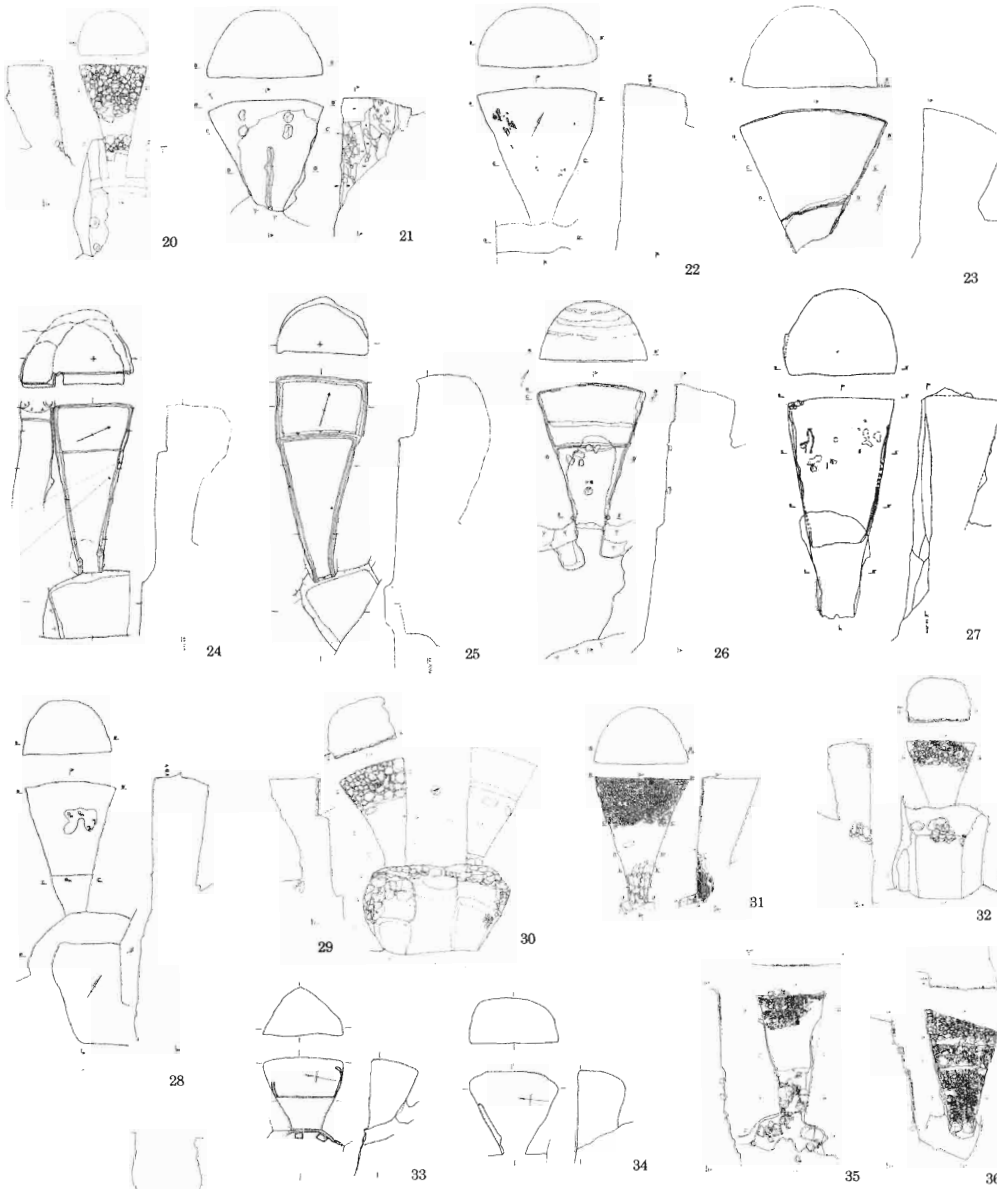
1～3．羽根尾Ｂ7号墓
4．八重窪50号墓
5・6．八重窪46号墓
7．羽根尾Ｅ3号墓
8～13．宮ノ入6号墓
14～22．なはま2号墓
23・24．八重窪38号墓
25・26．板取3号墓
27．北中尾16号墓
28．河南沢2号墓
29・30．唐沢2号墓
31．唐沢1号墓
32．城山4号墓
33．代官山17号墓
34．山野根7号墓
35．岩井戸Ａ4号墓
36．倉上6号墓
37～39．倉上8号墓
40～42．河南沢7号墓
43～45．八重窪45号墓
46・47．北矢名1号墓
48．上栗原6号墓
49・50．下尾崎2号墓



第13図　半裁徳利形平面の横穴墓（２）



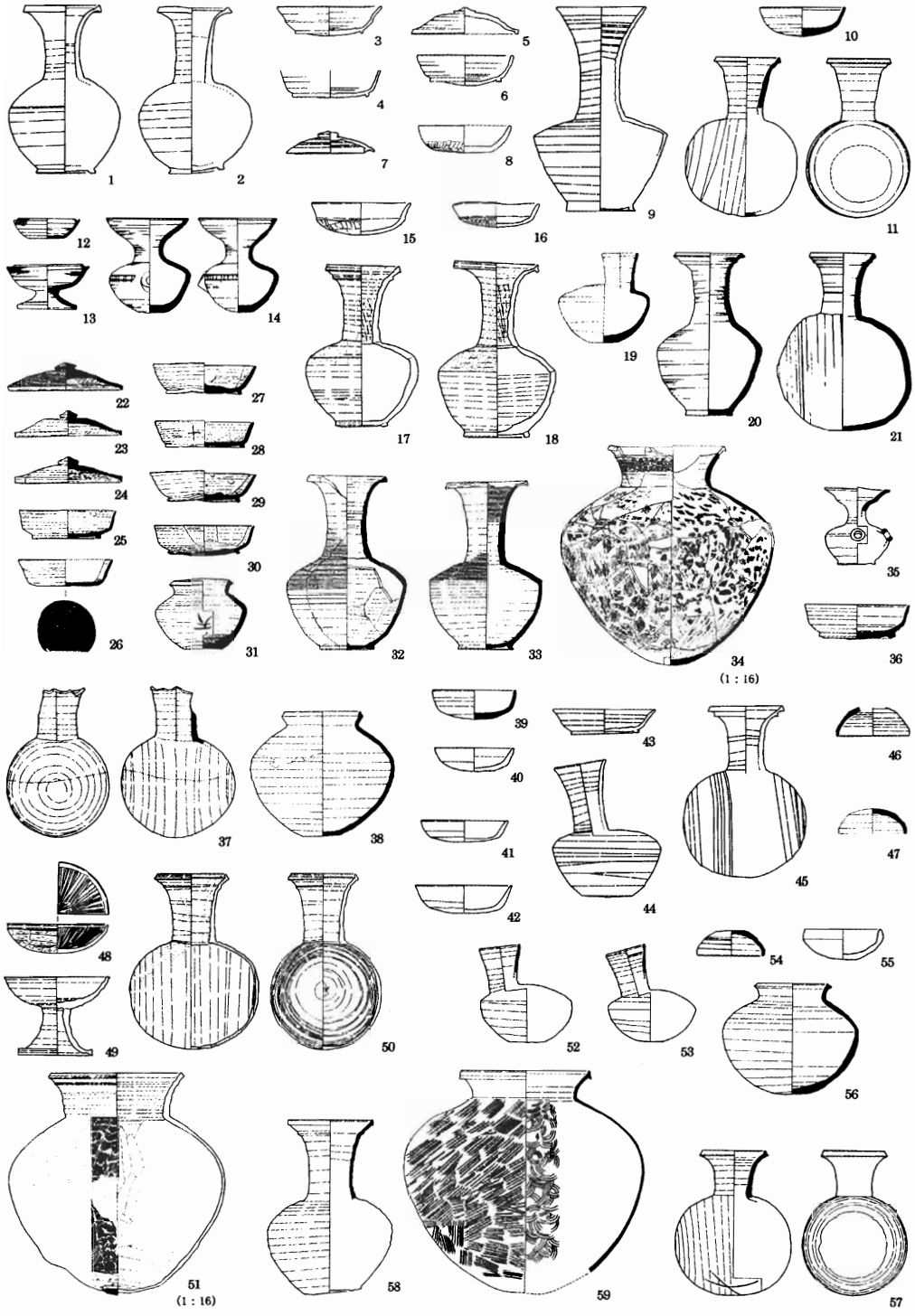
第14図　撥形平面の横穴墓（１）



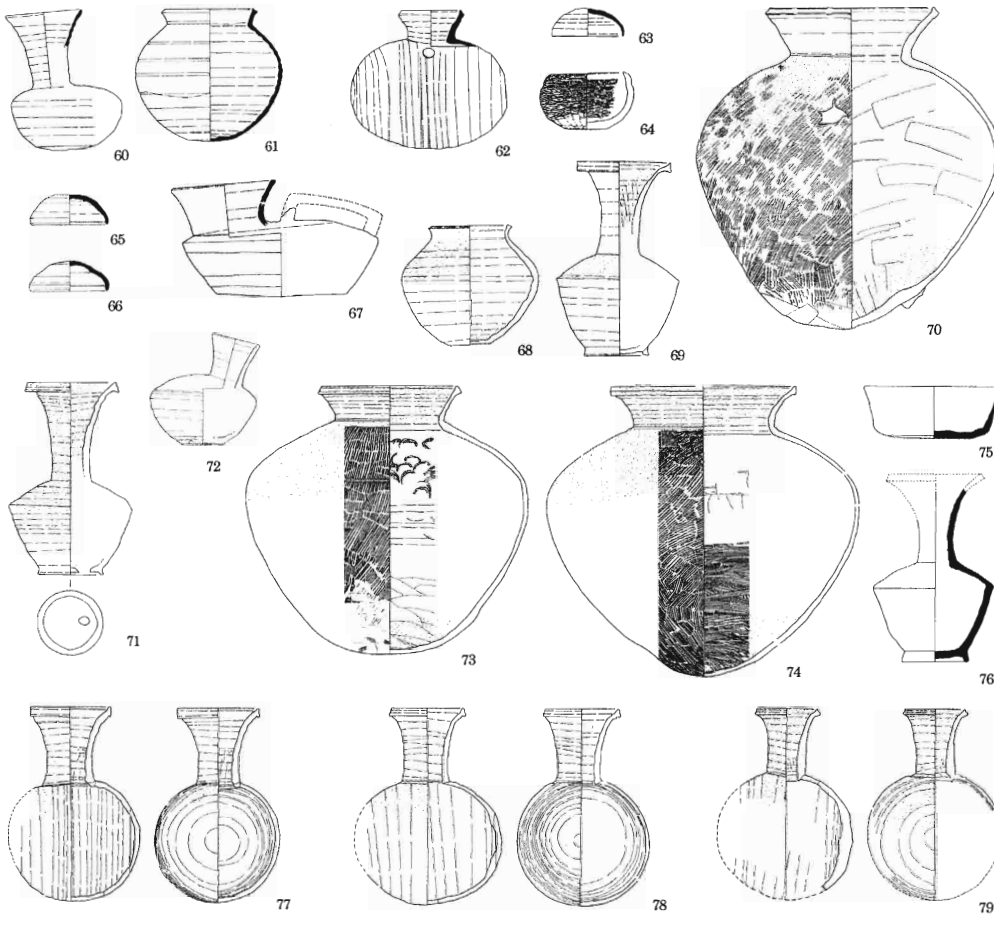
遺構（1：250）

1．唐沢３号
2．大日ヶ窪 33 号
3．大日ヶ窪 27 号
4．大日ヶ窪６号
5．八重窪 41 号
6．大日ヶ窪 14 号
7．羽根尾Ｃ６号
8．宮ノ入７号
9．新林左４号
10．上栗原１号
11．新林左２号
12．森久西 12 号
13．北中尾３号
14．根坂間３-１号
15．羽根尾Ｃ２号
16．羽根尾Ｃ４号
17．八重窪 36 号
18．羽根尾Ｅ４号
19．羽根尾Ｅ２号
20．下尾崎 11 号
21．羽根尾Ｈ１１号
22．倉上 12 号
23．羽根尾Ｃ１１号
24．根坂間２-５号
25．根坂間２-３号
26．羽根尾Ｃ３号
27．新宿Ｖ７号
28．倉上３号
29．上栗原４号
30．上栗原５号
31．飯山１号
32．下尾崎 24 号
33．後谷原Ｍ４号
34．後谷原Ｕ１号
35．下尾崎１号
36．下尾崎 20 号
37．下尾崎 23 号
38．洗間神社西８号

第15図　撥形平面の横穴墓（２）



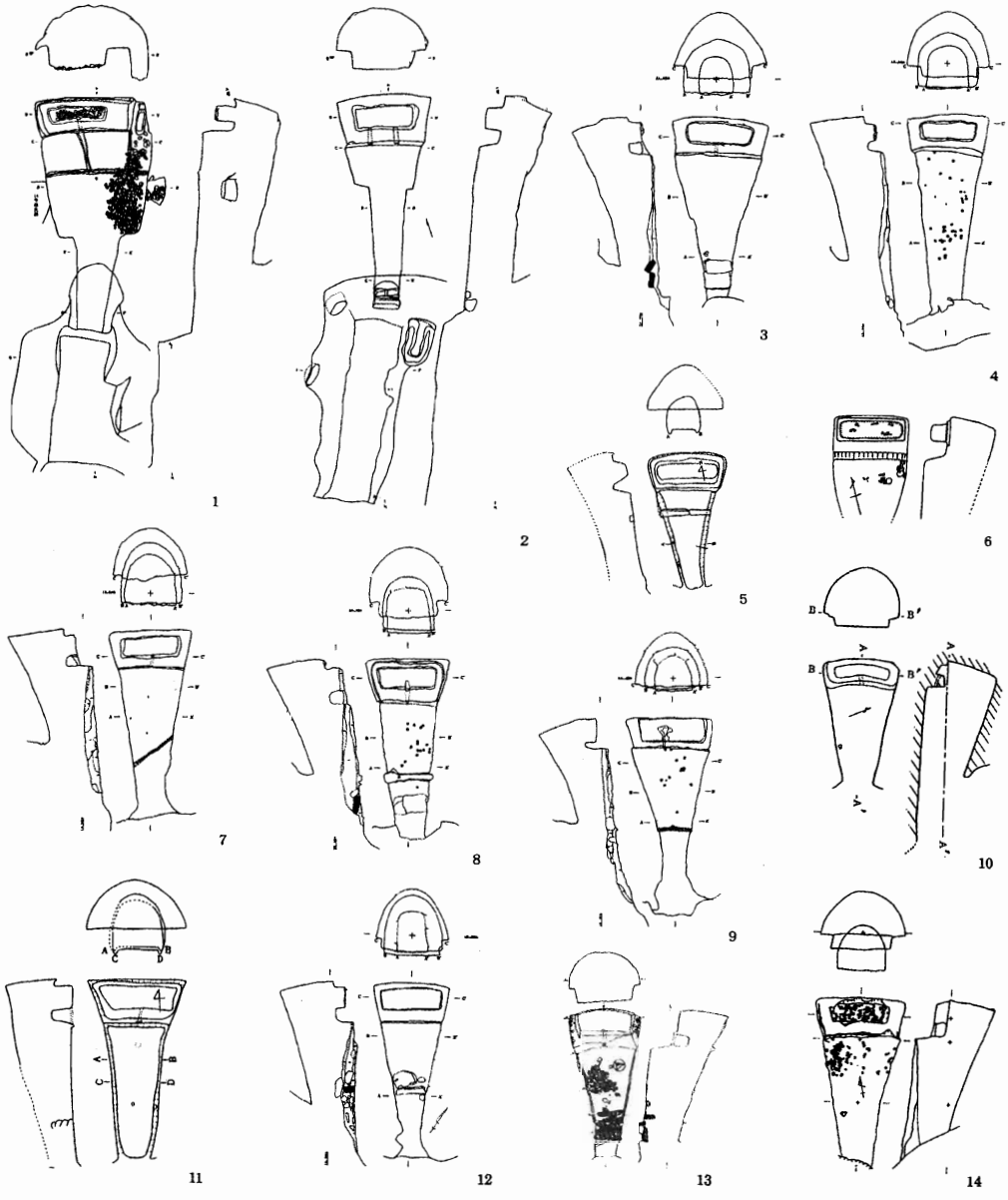
第16図　撥形平面の横穴墓（３）



遺物（1：250）

1・2．唐沢3号
3．大日ヶ窪33号
4．大日ヶ窪27号
5・6．大日ヶ窪6号
7．宮ノ入7号
8．大日ヶ窪14号
9．八重窪41号
10・11．羽根尾C6号
12～14．新林左4号
15～18．上栗原1号
19．森久西12号
20・21．新林左2号
22～34．北中尾3号
35・36．羽根尾C2号
37・38．根坂間3-1号
39・40．羽根尾C4号
41．羽根尾E4号
42．羽根尾E2号
43～45．八重窪36号
46．羽根尾C11号
47．倉上12号
48～51．下尾崎11号
52～57．羽根尾B11号
58・59．根坂間2-5号
60・61．根坂間2-3号
62～64．新宿V7号
65・66．倉上3号
67．羽根尾C3号
68・69．上栗原5号
70．上栗原4号
71．下尾崎24号
72．飯山1号
73・74．下尾崎23号
75．後谷原U1号
76．後谷原M4号
77～79．下尾崎1号
80～83．下尾崎20号
84・85．浅間神社西8号

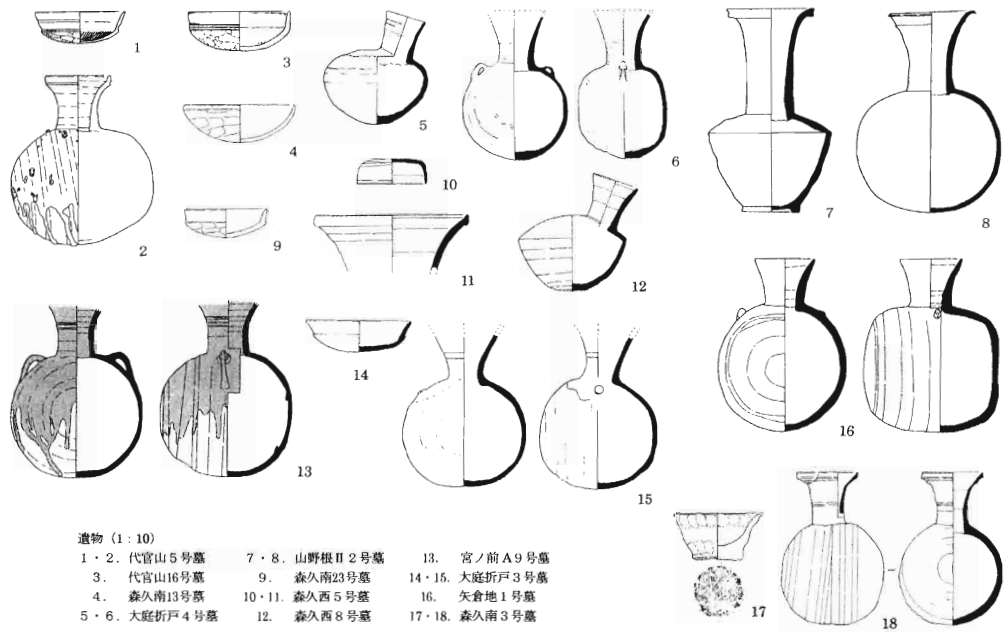
第17図　撥形平面の横穴墓（3）



遺構（1：250）

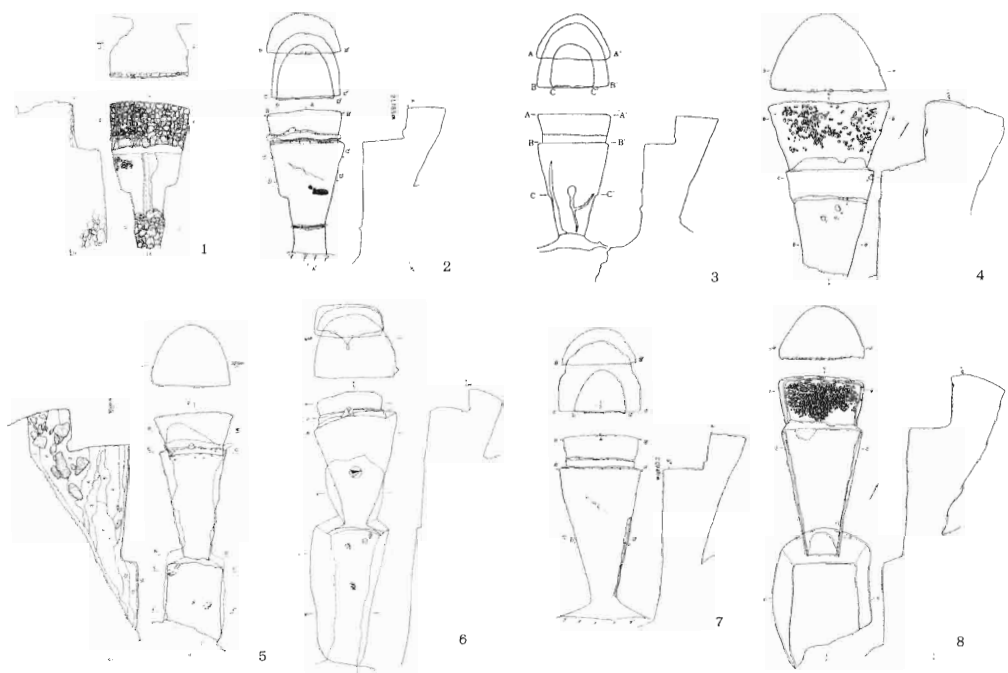
1．代官山5号墓　5．大庭折戸4号墓　9．森久西8号墓　13．八重窪33号墓
2．代官山16号墓　6．山野根Ⅱ2号墓　10．宮ノ前A9号墓　14．矢倉地1号墓
3．森久南1号墓　7．森久西2号墓　11．大庭折戸3号墓
4．森久南13号墓　8．森久南23号墓　12．森久南3号墓

第18図　造付石棺の横穴墓（1）

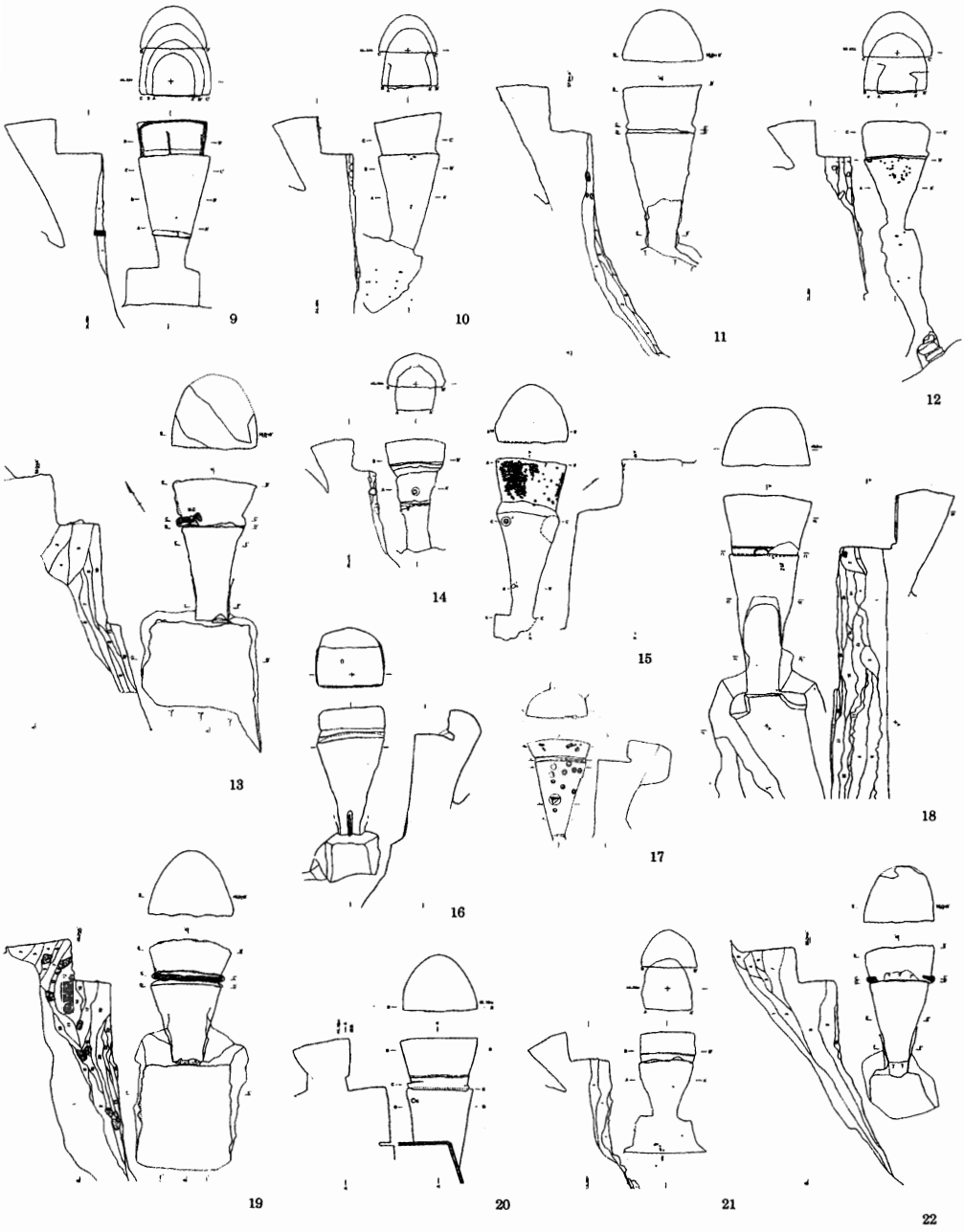


遺物（1：10）
1・2．代官山5号墓　7・8．山野根Ⅱ2号墓　13．宮ノ前A9号墓
3．代官山16号墓　9．森久南23号墓　14・15．大庭折戸3号墓
4．森久南13号墓　10・11．森久西5号墓　16．矢倉地1号墓
5・6．大庭折戸4号墓　12．森久西8号墓　17・18．森久南3号墓

第18図　造付石棺の横穴墓（2）



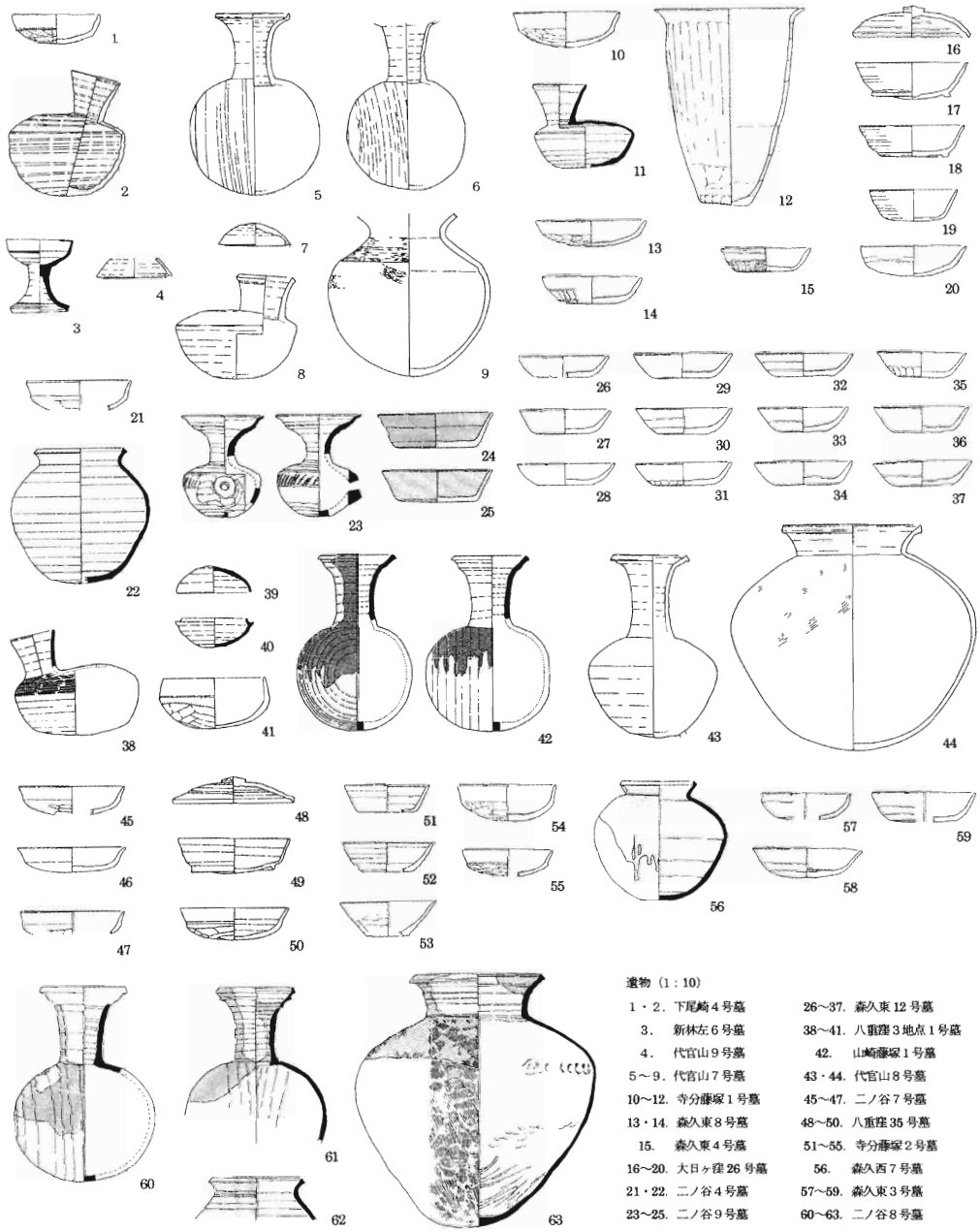
第19図　高棺座の横穴墓（1）



遺構（1：250）

1．下尾崎４号墓
2．新林左13号墓
3．神光寺Ｃ６号墓
4．代官山７号墓
5．寺分藤塚１号墓
6．大日ヶ窪２６号墓
7．新林左６号墓
8．代官山９号墓
9．森久東４号墓
10．森久東８号墓
11．二ノ谷４号墓
12．森久東12号墓
13．二ノ谷９号墓
14．森久西７号墓
15．代官山８号墓
16．八重窪３地点１号墓
17．八重窪35号墓
18．寺分藤塚２号墓
19．二ノ谷７号墓
20．山崎富士塚１号墓
21．森久東３号墓
22．二ノ谷８号墓

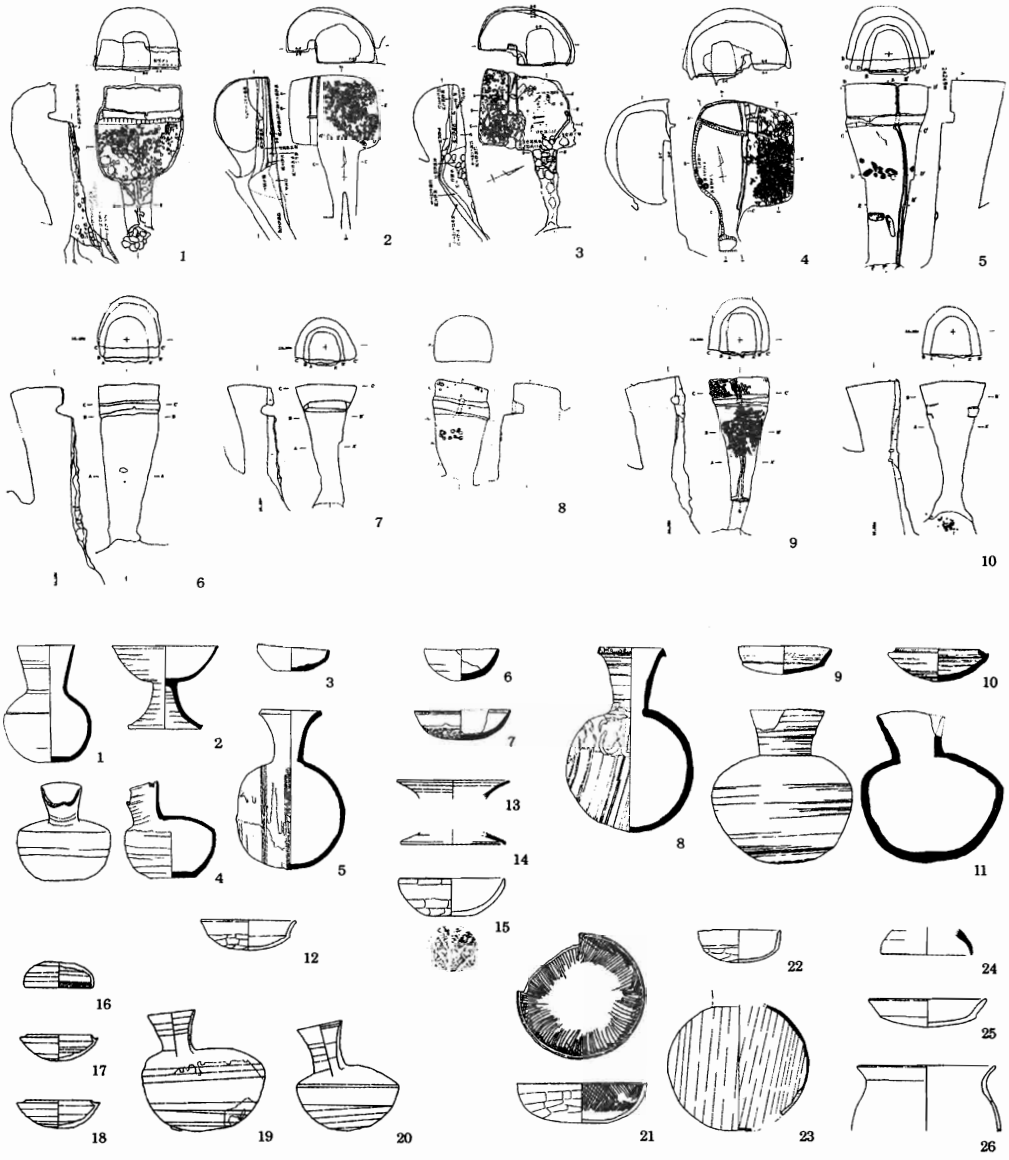
第20図　高棺座の横穴墓（２）



遺物（1：10）

1・2．下尾崎4号墓
3．新林左6号墓
4．代官山9号墓
5～9．代官山7号墓
10～12．寺分藤塚1号墓
13・14．森久東8号墓
15．森久東4号墓
16～20．大日ヶ窪26号墓
21・22．二ノ谷4号墓
23～25．二ノ谷9号墓
26～37．森久東12号墓
38～41．八重窪3地点1号墓
42．山崎藤塚1号墓
43・44．代官山8号墓
45～47．二ノ谷7号墓
48～50．八重窪35号墓
51～55．寺分藤塚2号墓
56．森久西7号墓
57～59．森久東3号墓
60～63．二ノ谷8号墓

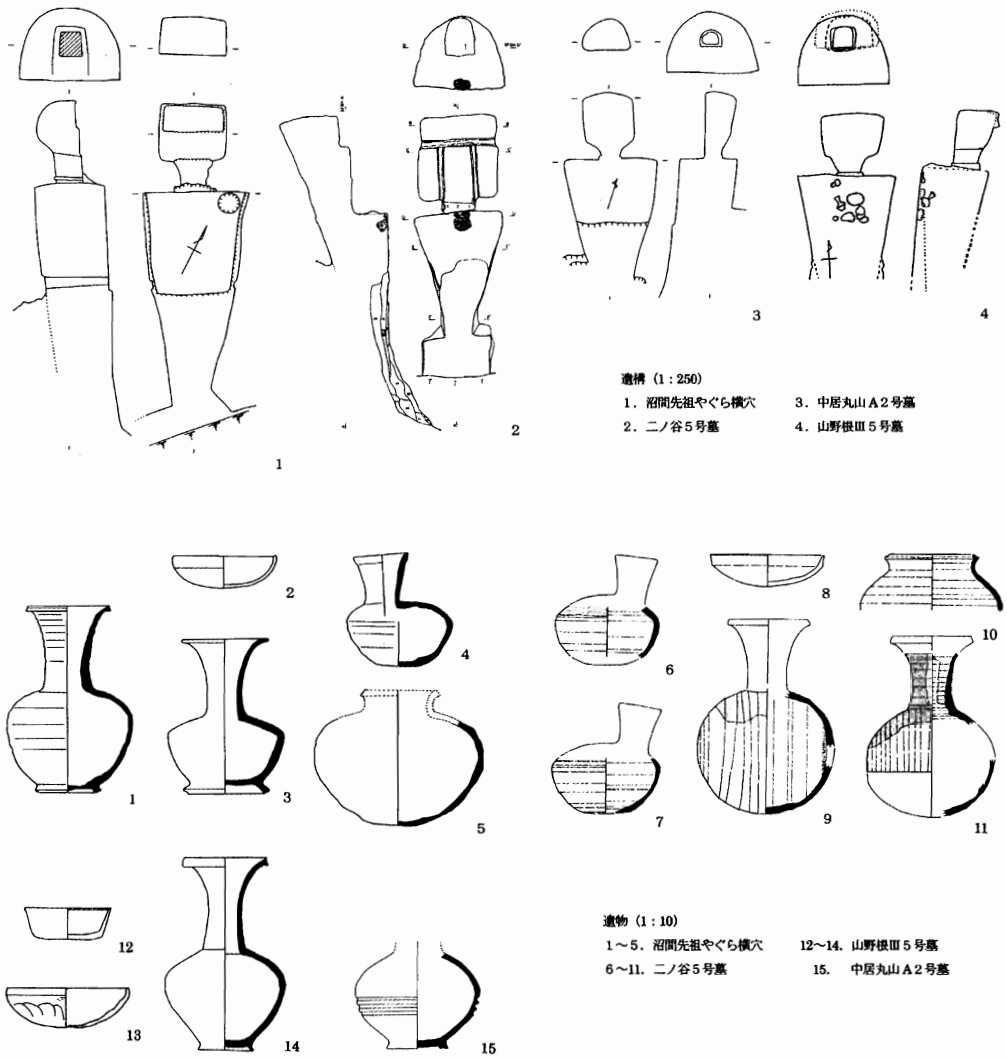
第21図　高棺座の横穴墓（3）



遺構（1：250）
1．諏訪脇1号墓
2．諏訪脇7号墓
3．諏訪脇901号墓
4．諏訪脇3号墓
5．新林左5号墓
6．森久南5号墓
7．森久南10号墓
8．八重窪39号墓
9．森久南20号墓
10．森久西14号墓

遺物（1：10）
1～5．諏訪脇901号墓
6・7．諏訪脇1号墓
8～11．諏訪脇3号墓
12．森久南5号墓
13～15．森久南10号墓
16～20．八重窪39号墓
21～23．森久南20号墓
24～26．森久西10号墓

第22図　低棺座の横穴墓



第23図　棺室構造の横穴墓

神奈川における古代集落・官衙・寺の鍛冶

－神奈川の古代製鉄・鍛冶遺構－

冨　永　樹　之

1．はじめに　　2．製鉄・鍛冶遺構の事例
3．製鉄・鍛冶施設を伴う遺跡の性格　4．まとめ

1．はじめに

すこし前に、ある機会に考古学から見た神奈川の歴史をホームページで見せる企画があり、奈良・平安時代についてテスト判を簡単につくったことがある。残念ながらこの企画は保留とされたが、テスト判の作成途中、神奈川県の古代の生産遺跡についてはよく知らず大変苦労した。生産遺跡はそもそも田畑、牧、製鉄・鍛冶遺跡、窯業遺跡、製塩遺跡、木製品・石製品製作工房など多岐にわたり、簡単に把握することは困難である。他県では詳細な分析を進めている研究者・プロジェクトがあるが、神奈川県では古代のこの分野については一部しか検討がなされていない。筆者の乏しい知識で神奈川県の古代生産遺跡についてまとめるなどと大それたことは考えていないが、この地域でどのような生産遺跡が見つかっているかは確認してみる必要があろう。

本稿では鉄についてあまり知識の無い筆者が無謀にも神奈川の古代の製鉄・鍛冶遺構を集成し、どのような地域、どのような遺跡でどのような出方をするか考察してみることとした。専門の方からご意見・批判を受けることを承知であえて提示し、神奈川の生産遺跡を考える上での叩き台となれば幸いである。近年、製鉄・精錬・小鍛治の遺構についてはその区分が研究者により違う部分があり、同じ化学分析の結果でも解釈が違うことがある。まして化学分析の無い場合では、製鉄なのか精錬なのか、または精錬なのか小鍛治なのかまたは共用なのか区別が難しいところである。本稿で取り上げる遺跡・遺構の性格について筆者なりの解釈をしたが、専門の方からの修正を賜りたいところである。

2．製鉄・鍛冶遺構の事例

（1）製鉄遺跡

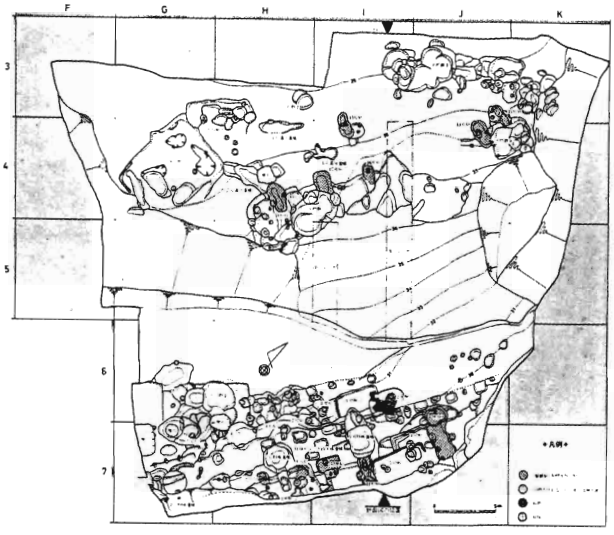
神奈川県における製鉄遺跡はきわめて少なく、同じ関東の千葉県、群馬県などと比べるとごくわずかである。関東でも西の入り口に属し、海運でも利便な位置にあることから西国からの

粗鉄搬入に頼ったと考えたくなるがなにも確証はない。

■横浜市上郷深田遺跡（第１図　平子1988）

現在、神奈川最大の製鉄遺跡と考えられるが、正式報告はまだ無く、概報のみである。南向きの勾配約18度の斜面地に二段にわたって人工的な平場を設け、報文によれば製鉄炉18基、竪穴状遺構６基（鍛冶炉を伴うもの１、砂鉄を多く出土したもの１）、特殊遺構３基、多数の土坑、また製銅炉も１基もしくは３基発見されているという。遺構は重複が激しく、遺存状況はあまり良好ではない。時期的には７世紀末から９世紀前半にかけて長期にわたって継続したと推定される。やや残りが良い16・17号炉を紹介すると16号炉は上段に位置し、埋没した古い遺構の覆土を掘り込んで構築されていた。炉本体底部を平面小判形に掘り込んでおり、左右には平場が形成されていた。炉の前部分は緩やかに傾斜している。炉本体は明確では無いが円形また円形に近い楕円形の炉が構築されていたと推定される。16号炉のすぐ近くにある17号炉はほぼ平面円形の炉壁が確認されている。炉前面は傾斜しており、赤化著しい焼土が検出された。両炉ともこの遺跡では上面すなわち新しい時期の遺構と推定され、８世紀後半から９世紀前半と考えられる。竪穴状遺構の多くは確証は無いが、工房と推定される。これら竪穴状遺構は製鉄炉や土坑との関連が予想される。鍛冶炉が検出されたのは１号竪穴で泥岩を伴った炉が鍛冶炉とされている。概報のためなぜ鍛冶炉と判断されたかは不明だが、鍛冶といっても精錬鍛冶かもしれない。また２号竪穴では床面直上から多量の砂鉄が検出された。特殊遺構や土坑についてはあまり報文で触れられていないが、「これらの遺構の性格は明らかでないが、炭焼き窯や、炉材の粘土に混入するための、砂土の採掘坑である可能性」が示されている。また２号炉は製銅炉とされており、円形の鍋底状の炉壁が残るというが、あまり具体的な資料の提示はない。同様の形状を持つ５・６号炉も製銅炉の可能性もあるとされているが明確ではない。遺物は７世紀末から９世紀前半の土師器・須恵器で炉や竪穴から出土している。特に７世紀末から８世紀初頭の畿内系土師器が４個体以上出土していることは注目される。他には羽口、鉄滓、炉壁などだが詳しい報告は無い。また３号竪穴では紡錘車も出土しており、混入でなければ完全な工房専用の竪穴では無く、通常生活も行っていた可能性がある。鉄製品は釘等が数点で小鍛冶は行われなかった可能性が高い。特筆すべきは３号炉や１・２号竪穴で鋳型が７点出土しており、鍋の獣足などの鋳型と見られている。８世紀後半から９世紀前半の遺構に伴った鋳型であり、この時期には鋳造が行われていたことがわかる。

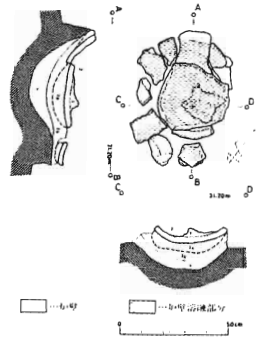
上郷深田遺跡の炉は遺存は悪いが半地下式竪型炉であると考えられる。半地下式竪型炉については近年使用目的を製鉄だけでなく、精錬の可能性もあるとされているが、本例は製鉄とみなしていいだろう。ただし概報では化学分析も行っているとしているが具体的な結果報告は無く、「鉄の製錬にかかわると考えられる、チタン含有率の高い試料が圧倒的に多く、なかには、砂鉄から鉄塊への一連の製成過程が、凍結されたような状態で封じ込まれた鉱滓状のものも含まれている」と記載があるだけである。もっとも精錬についても一部では行われていたかもし



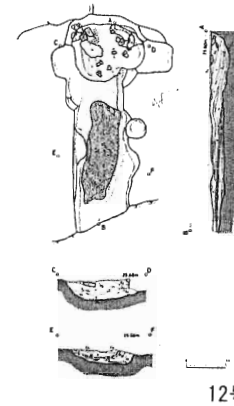
遺構配置図

16号炉

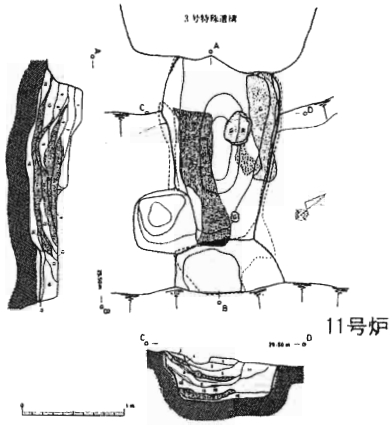
17号炉



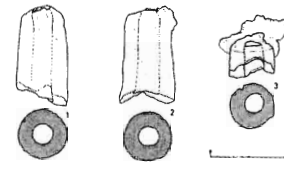
2号炉



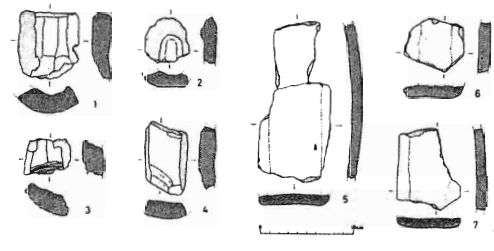
12号炉



11号炉



羽口片



鋳型

第１図　上郷深田遺跡　遺構配置図・製鉄炉・出土遺物

れない。製銅炉については製鉄と製銅が古代東国で併行操業された例がほとんど無いことから、やや疑問に思えるが、残念ながら報告を待つ以外にない。また鉄の鋳造が製鉄に伴ってことも興味深い。報文をそのままとめると8世紀後半から9世紀前半にかけてそれまでの製鉄中心の遺跡から鋳造や製銅など操業が多様化したと見られている。

本遺跡の周辺では第3紀末から第4紀前半にかけての古い地層の堆積があり、多くの砂鉄が包含されているという。また谷戸や水田の水流で多くの砂鉄が現在でも採集されるといい、これらの砂鉄を原料にした製鉄遺跡であろう。

■横浜市中谷遺跡（川上1976）

横浜市港南区にあり、上記の上郷深田遺跡とは1㎞前後しか離れていない。1972年とかなり古い時期の調査であることと、トレンチ調査の断片的なデータであることから明確な調査結果は得られていない。報告では「鍛冶場址」となっているが、遺構が急な斜面地にあることや上郷深田遺跡との位置関係から、製鉄または精錬工程の遺跡として考えた。遺構は斜面地のトレンチ内より「泥岩塊を不整形に集積した遺構が発見され」、「この泥岩塊の上部や泥岩に挟まれたような箇所から相当量の鉄滓が抽出された。更に輔の羽口で筒先の部分3個が高台付灰釉片底部と共に散在していた。」また上屋、竪穴については検出されていないが、近くの1基の柱穴の存在から外屋柱の可能性を触れているが確証はない。炉本体かどうかも不明だが、上郷深田遺跡でも泥岩を伴った「鍛冶炉」が検出されている。短期のトレンチ調査であったため鉄滓が多く出始めた面で調査が停止した可能性が高い。

上郷深田遺跡の箇所でも触れたようにこの一帯には砂鉄の富んだ地層が広がり、『新編武蔵風土記稿』でも「金」がつく地名が散見され、鉄生産にゆかりがあると言う。また両遺跡近くに現在でも「鍛冶ヶ谷町」「鍛冶ヶ谷団地」などの地名が見られる。中谷遺跡は灰釉陶器が混在していることから平安時代の遺構と推定されるが、この横浜市港南区と栄区の境周辺には古代の製鉄遺跡が多く展開している可能性がある。

（2）鍛冶遺跡

大きく分けて精錬工程と小鍛冶工程に分かれる。製錬の後、炭素の多い粗鉄を鋼に変えるのが精錬工程だが、工房によっては小鍛治を兼ねる場合もあり、明確に分別できるわけでもない。ただし精錬工程が中心の場合は高い火力が必要なことから比較的大きな工房で操業されていたと考えられるが、大きな工房に限定されるとは言い難い。

a）精錬工程を中心とする遺跡

精錬炉については化学分析や椀形滓の出土などから判断される。平塚市坪ノ内遺跡と六ノ域遺跡は数百メートルしか離れておらず，相模国府関連の工房とされている。

■平塚市坪ノ内遺跡（第2図　林原1996）

相模川の自然堤防・砂丘上に位置する坪ノ内遺跡は、相模国府が存在した推定される平塚市四之宮地区内に所在する。四之宮地区では多くの国府関連の遺構が発見されているが、国庁は

まだ発見されていない。本遺跡については概報のみの報告である。鍛冶工房はいわゆる連房式鍛冶工房で長方形竪穴のプランを持ち、遺構は調査区外に広がっている。東西約12m以上、南北約５m以上で竪穴内に二列に並んだ径約40cm前後の平面円形の鍛冶炉が検出された。鍛冶炉は重複が著しく約70基検出された。遺構内からは明確な製品、工具の出土はなかったが、羽口、鉄塊系遺物、鍛造剥片、鉄滓などの出土品が確認された。また佐々木稔氏は椀形滓が鍛冶炉底面に残った好例として坪ノ内遺跡を紹介している（佐々木・赤井ほか2002）。この鍛冶工房が精錬作業が主体であったと考えていいだろう。出土土器から８世紀末から９世紀初頭の時期が推定されている。また同じ調査のＡ区でも、長方形の竪穴状遺構２軒が検出されたらしいが、「鍛冶工房跡の可能性がある」としか触れられていない。

■平塚市六ノ域遺跡（第２図　柏木・依田2003）

坪ノ内遺跡同様、四之宮地区にある六ノ域遺跡は、坪ノ内遺跡から西に300m程離れた遺跡で、やはり国府に関する官的な工房と考えられる。この遺跡は現在整理作業中で、やはり概報から内容を紹介する。坪ノ内遺跡の工房とプランがよく似ており、同じ連房式鍛冶工房である。平面長方形の竪穴で、東西は約13m・南北は調査区外までのびて約５mになり、深さは30cmほどである。周囲の壁に切り込む形で柱穴が配されている。鍛冶炉は計18基、うち16基が２列に並んでおり、２基１対で整然と配置されている。鍛冶炉は大きさ径40cm前後であり、いずれも粘土による構築される。平面円形で皿状を呈し、東西方向には掻き出し口があり、南北には羽口を装着する小溝がある。東西の掻き出し口には掻き出した炭の集中があり、ピット状の浅いくぼみをなす。北列の炉が西の窪みで炭化物が多く、南列は東の窪みで炭化物が多く存在し、北列と南列は逆の現象が観察される。竪穴の西壁際には低いテラス状の廃滓場があり、椀形滓や羽口片、鉄滓が多量に出土した。工房の仮捨て場と判断されるが、工房から離れた土坑にも椀形滓や羽口片、鉄滓が多量に投棄してあり、仮捨て場から運ばれたと推定される。椀形滓の出土から精錬作業を中心とした工房だったと推定される。工房の出土品は椀形滓や羽口片、鉄滓（粒状滓、鍛造剥片）の他に砥石、鉄鏃、釘、刀子、金銅製飾金具、灰釉陶器、土師器、須恵器などがある。土器から９世紀頃の年代が推定されている。時期的にも坪ノ内遺跡の工房と近く、竪穴のプランや炉の大きさまで似ている。

■逗子市池子遺跡群№５地点（第３図　桝渕・植山1998）

池子遺跡群は丘陵部の谷戸を中心として展開する遺跡群だが、№５地点の古代の小集落も谷の微高地に位置する。遺構はその谷戸の谷奥の緩斜面に存在する。名称は「野鍛冶跡」で報告では製鉄主体となっていた。しかしながら砂鉄の検出が無く、折り返されたような鉄片が有ることから、精錬作業が中心ではないかと推定した。２基検出されているが、２号野鍛冶跡は船底状の掘り込みだけで炉が無く、近接する１号の関連施設かと記載されている。１号野鍛冶跡は残存が悪く、約1.1m×0.8mの楕円形の炉床が残存するのみで著しく赤化していた。周辺には多くの鉄滓が出土し、炉床から約３m離れた場所にピット状の鉄滓・焼土捨て場が存在する。

第２図　坪ノ内遺跡連房式鍛冶工房（上段）と六ノ域遺跡連房式工房と鍛冶炉（下３枚写真）

鉄滓は2662点で、27kgの量だというが、残念ながら、鉄滓の大きさについては触れているが形状は記載がない。また折り返されたような鉄片や羽口片が出土している。遺存が悪いため明確にはいえないが、竪型炉である可能性がある。土器類から９世紀後半の操業が推定される。近くの１号竪穴住居址と同年代であり、№５遺跡の小集落と関わりのある遺構と判断される。竪型炉については通常製鉄遺構とされるが、精錬工程にも関わっていたとされる説から想定した。

■茅ヶ崎市下寺尾西方Ａ遺跡（第３図　村上・宍戸2003、佐々木2000）

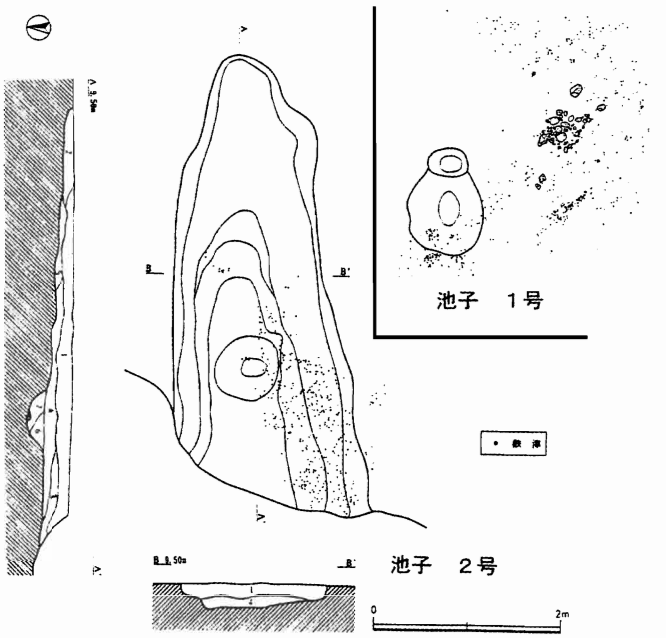
台地上に展開する遺跡で高座郡衙の政庁と正倉、館が発見されている。郡衙は８世紀初頭のきわめて短期間に存在したという。郡衙成立前と廃絶後に竪穴住居が建てられており、報告に従えば鍛冶炉は郡衙廃絶後の竪穴住居群に伴うと考えられる。Ｈ１号鍛冶炉は上屋の痕跡は無く、露天または平地建物だったと考えられる。炉は径30cm前後の円形の炉床が検出されており、炉床北側には羽口片があり、鉄滓状の溶融物が存在する。炉床には長さ28cmの小溝と小ピットが付随するが、炭などの掻き出し用の溝だろうか。底面の粘土は長軸87cm、短軸59cmのイチジク形に広がっており、掘方はさらに径1.6mの範囲に拡大すると推定される（保存のため完掘していない）。鉄滓は径５～８㎜の湯玉状のものや薄片状のものなど様々だが、報告の際の分析では、精錬工程によって生み出されたものとされている。鍛冶炉は竪型炉と復元されている。また鍛冶炉から数十m離れたＨ１・２・４竪穴住居の覆土からも鉄滓が出土しており、共通した組成から同一の炉のものと分析されている。竪穴住居出土の鉄滓には大型の椀形滓が含まれる。時期的には７世紀末の竪穴住居を鍛冶炉が切っていることと、１・２・４号竪穴住居の年代から８世紀第二四半期の頃と推定される。

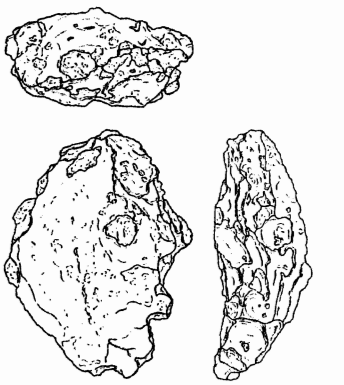
■伊勢原市坪ノ内・宮ノ前遺跡（第３図　宮坂・宍戸2000）

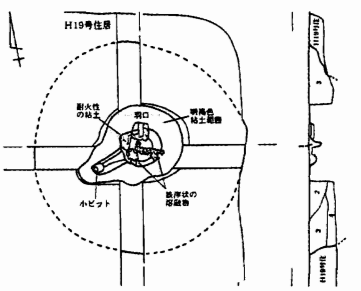
この遺跡では鍛冶遺構自体が見つかっていないので参考として記す。古代の竪穴住居が十数軒検出されているが、鍛冶関連遺物が出土したのは集落よりやや離れた谷戸の入り口で検出された３号溝である。椀形滓23点、鉄滓271点が出土したほか、羽口片や鉄塊系遺物、鉄釘、銅地金、銅碗の破片や坩堝、９世紀初頭から中頃の土器類が出土した。報告に伴う化学分析ではこれらの鉄滓や鉄塊系遺物は精錬工程から出たものとされており、鉄釘は作られた鋼を使って加工されたものとしても矛盾しないという結果が出ている。興味深いのは３号溝からは瓦塔片や銅碗破片などがから近隣に古代の仏堂施設の存在が予想されており、これらの鍛冶関連遺物がその寺の建立に関わる鍛冶の廃棄物と考えられていることである。寺に関わる鍛冶として精錬鍛冶が行われている可能性があるわけである。また銅地金や銅碗については銅鋳造に高い技術が必要なことからこの遺跡では行われていないと推定されている。

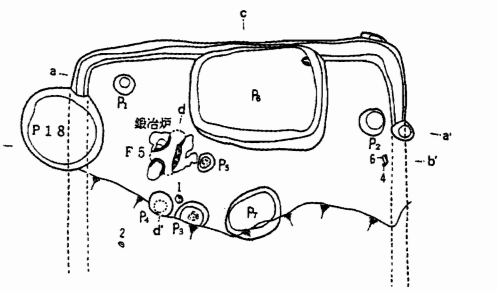
■横浜市西ノ谷遺跡（第３図　坂本1997）

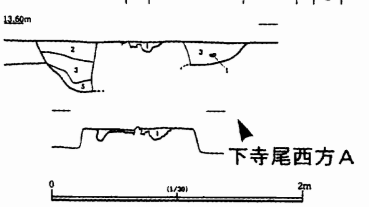
平安時代中・後期の鍛冶遺構である。10世紀後半に竪穴状遺構を鍛冶工房とし、３基の建て替えがある。特に竪穴Ｒは遺存が良く、泥岩切石を配した鍛冶炉が発見されている。炉内部は50cm×25cmの範囲で真っ赤に被熱し、鉄滓、微細薄片を含んでいた。また竪穴内から土器坩堝、

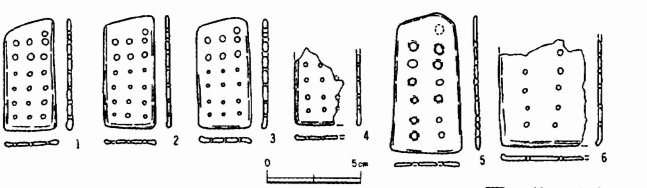


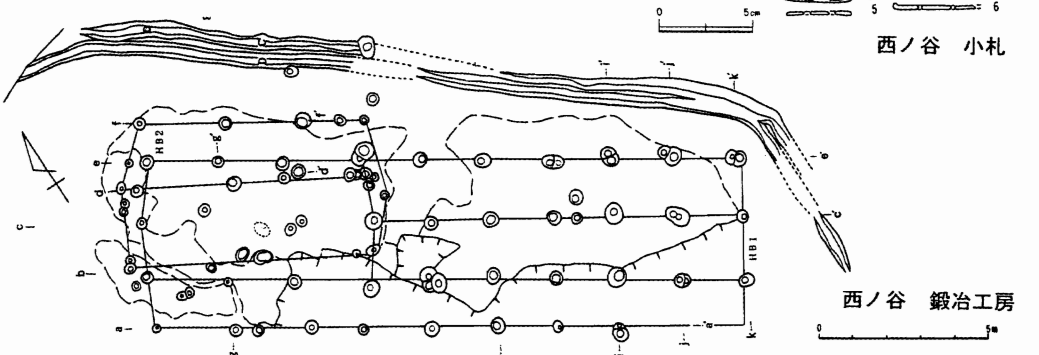












第３図　各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺物（１）

須恵器坩堝、羽口なども発見されている。11世紀になると溝などで区画された掘立柱建物の鍛冶工房に変化する。鍛冶炉は炉床のみだけだが4基が発見されており、1基づつ作り替えられたのだろう。12世紀には掘立柱建物の鍛冶工房は9間×2間片側庇付きの大型建物に発展し、このころ小札の出土から大鎧の他、武器の製作を行っていたと推定されている。化学分析から精錬鍛冶、小鍛治の他、銅細工なども行っていたようだ。遺物は鉄滓（椀形滓、鉄塊系遺物、微細薄片を含む）、小札、鏃、刀子、馬具、釘、鎌、金鋏、羽口片、台石、砥石などである。

b）小鍛治が主体の遺跡

いわゆる集落などの小鍛治を想定したが、明確な基準があるわけではなく、小規模な工房、竪穴住居などで製品製作を主体としている例を考えた。小規模な工房の場合でも、精錬を共に行っている例もややあるようである。

事例が多いため、第1表にまとめたが、漏れはあるかもしれない。

（3）鋳造を中心とした遺跡

鉄の鋳造を主体的に行う遺跡は古代ではあまり無く、製鉄遺跡や鍛冶遺跡で兼用していることが多いようである。実際1節で紹介した上郷深田遺跡では鋳型があり、製鉄と共に鉄の鋳造も行っていることがわかる。他に鋳造遺構が見つかった遺跡はないのだが、鋳型に関して注目されるのが厚木市愛名宮地遺跡である。

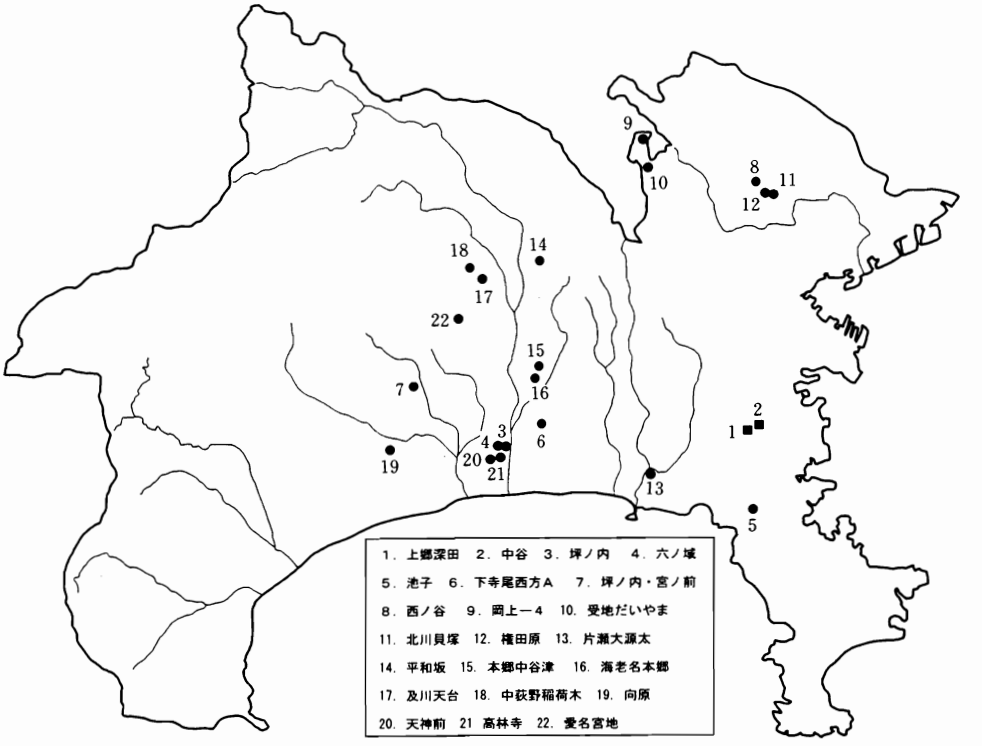
■厚木市愛名宮地遺跡（第8図　境・浅野ほか1999）

谷間の平坦地に古代の仏堂施設や関連した竪穴住居が発見されている。仏堂はいわゆる「村落内寺院」の範疇で捉えられるもので、詳細は避けるが仏堂として布掘りの大型掘立柱建物が8世紀後半に建てられ、9世紀に同じ位置に礎石建物として建て替えられている。瓦塔や仏鉢形土器、灯明皿、「寺」墨書土器など多くの仏教関連遺物を出土している。注目されるのはこの礎石建物から出土した鋳型2点である。獣足が付く鉄鍋の口縁部と獣足部の鋳型である。かつては筆者は獣足から仏教関連の遺物と考えたが、このような形態の鉄鍋は古代では一般的なものらしい。それはともかく、この仏堂周辺に鋳造（おそらく鍛冶をともなっただろうが）遺構が存在していたと考えられる。仏堂からは大量の大型釘が発見されており、建立時、建て替え時に鍛冶施設があったと考えても不思議ではない。このような形式の仏堂近くで鍛冶・鋳造が行われていたのだろう。

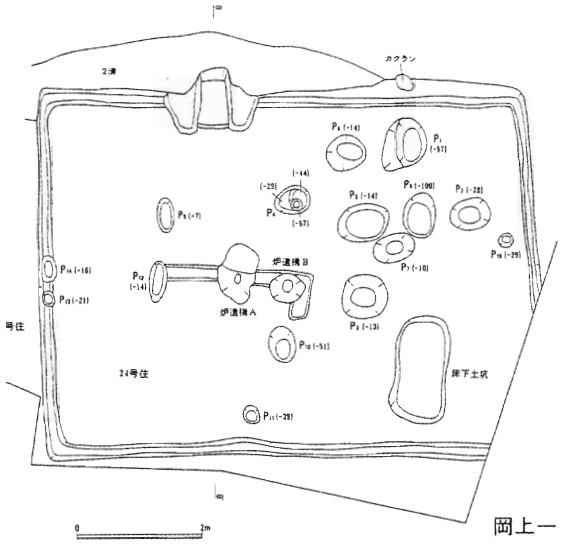
第１表　小鍛冶主体の遺跡一覧表

遺跡名	遺構名(工房遺構種)	工房の規模	鍛冶炉の形状	出土品	時代	所属遺跡	備考	文献	図番号
川崎市岡上－４遺跡２地点	H24号住居址(竪穴住居)	長方形 8m×6m	２基　A－径35cmほどの不整円形、擂鉢形、粘土　B－掘方のみ、関連区画小溝	鉄滓(多くは炉周辺)、羽口、土器類	8世紀中頃	寺院関連集落	炉２基の新旧不明、寺院関連か。カマドあり。	河合2001	第５図
横浜市受地だいやま遺跡	Ｊ区鍛冶関連遺構(テラス状遺構　竪穴も含む)	長方形テラス 12.0m×5.0m以上	7基　径30～70cmの円形、または長方形　併存ではなく同時は２基程度　テラスは簡単な上屋があり、竪穴状工房もある。	鉄滓、羽口	９世紀後半～10世紀前半	一般集落	大型掘立柱建物群、墓坑群との関連あり。精錬作業も含むか	伊藤ほか1986	第５図
横浜市受地だいやま遺跡	Ｄ区鍛冶関連遺構(半竪穴状遺構またはテラス)	方形 4.8m×3.0m	２基　１基は90cm×50cmの「レ」字形、１基は120cm×110cmの馬蹄形　共に痕跡程度	壁体、砥石、鉄滓	11世紀	一般集落	廃棄土坑あり。精錬作業もふくむか。	同上	第５図
横浜市北川貝塚	H2号住居(竪穴住居)	方形 約4m×4m(概算	住居中央に径１mの浅いくぼみ。そのくぼみの一部が被熱した炉	鉄滓、鉄片	9･10世紀	一般集落	概要のみ　カマドあり	坂本･鈴木1984	第６図
横浜市権田原遺跡	小鍛治関連遺構詳細不明	不明	不明	不明	9･10世紀	一般集落	概要のみ	鈴木1990	
藤沢市片瀬大源太遺跡	タタラ遺構(平地建物又は露天)	痕跡なし	長径1.36m×短径0.65mの隅丸長方形、長断面は船底形、焼土や凝灰岩ブロック	鉄滓	９から10世紀	一般集落		寺田ほか1997	第６図
座間市平和坂遺跡	第２号住居址(竪穴住居)	長方形 3m×4.5m	鍛冶炉かどうかは明確にわからない。径0.5m前後	取瓶	8後～9前	一般集落または駅関連	詳細な記載はないが、取瓶の出土や竪穴の形状めずらしい炉の存在から推定。カマドもある。	小池ほか1993	第６図
海老名市本郷中谷津遺跡	第４号住居址(竪穴住居)	方形 3m×3.1m	0.5m×0.6m　楕円形　断面鍋形	鉄滓、羽口片	10世紀	拠点集落	カマドはない。	滝沢1993	第６図
海老名市海老名本郷遺跡ＳＯＥ－Ⅱ地区	20号住居址(竪穴住居)	長方形 5.7m×3.0m	径0.4mの円形　深さ25cm、断面鍋底形、粘土貼り付け	鉄滓15(径１cm前後の湯玉状も含む)	平安時代	拠点集落	カマドはない。	合田ほか1987	第６図
厚木市及川天台遺跡	第１号鍛冶址(平地建物または露天)	痕跡なし	1.2m×0.7mの楕円形の炉を中心に3.5～5.8mの小溝四条がつく。２号に隣接	椀形滓、羽口片12、土師器･須恵器	9後～10初	一般集落	周辺の９後の住居から多くの鉄滓。精錬作業も行うか。	香村ほか1997	
厚木市及川天台遺跡	第２号鍛冶址(掘立柱建物)	2間×2間(3m×3.5m)	３基の炉址。いずれも50～80cmの円形。ロームの掘方に簡単な粘土。新旧不明	椀形滓、鉄滓、羽口片53	9後～10初	一般集落	周辺の９後の住居から多くの鉄滓。精錬作業も行うか。	同上	第６図
厚木市中荻野稲荷木遺跡	20Ｄ区第１号竪穴住居址(竪穴住居)	ほぼ方形 4.0m×3.5m	2基の炉址。1号は径90cm前後の円形で粘土貼り付け、2号は径142cm×120cmの円形で底部粘土貼り付け	鉄滓、羽口片４、	平安時代	一般集落	カマドなし	北川1999	第７図
平塚市向原遺跡	39号住居址(竪穴住居)	不整方形 3.0m×3.3m	２基の炉址。１号は径約30cmの円形、２号は径約40cmの円形。掘方に粘土貼り付け。２号の方が古く、炉とピットと組んだ可能性。	鉄滓3000点余(椀形滓を含む)、羽口87、砥石、鉄製品56(釘、刀子、鏃など)、鉄塊、不明鉄板、鉄棒、土器類	9世紀中頃から後半	拠点集落	カマドなし。通常の住居と異なり竪穴壁上を柱穴が巡る。北東隅を鉄滓置場、南西隅を材料置場に、南東隅を製品置場に利用。精錬作業も行うか。	清水･市川ほか1987	第７図

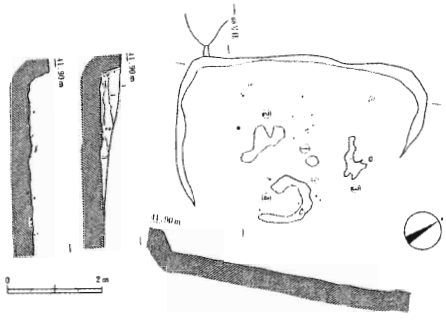
遺跡名	遺構名(工房遺構種)	工房の規模	鍛冶炉の形状	出土品	時代	所属遺跡	備考	文献	図番号
平塚市天神前遺跡第7地点	1号竪穴住居址(竪穴住居)	長方形 4.7m×3.7m	竪穴内に2.9m×1.2mの長方形土坑状の落ち込み。中に2カ所の焼土(径30～40cm　炉か)と直交する長方形土坑(1.6m×0.5m)鞴と鍛冶炉の跡か。	鉄滓215(椀形滓を含む)、羽口43、砥石、土器類	8世紀	国府関連集落	カマドあり。精錬作業も行うか。	明石1997	第7図
平塚市天神前遺跡第7地点	2号竪穴住居址(竪穴住居)	長方形 3.3m×2.6m	カマドで鍛冶か	羽口22、鉄滓44、土器類	9世紀後半	国府関連集落	明確に鍛冶工房とは言い難いが、報文によった	同上	
平塚市天神前遺跡第7地点	1号不明遺構(竪穴状遺構)	不整隅丸方形 3.0m×3.4m	壁際のピット(径60～70cm)が鍛冶炉か	鉄滓128、羽口16、土器類	9世紀後半	国府関連集落	カマドなし	同上	第7図
平塚市天神前遺跡第10地点	6号竪穴住居址(竪穴住居)	長方形 3.8m×4.0m以上	床中央に鍛冶炉か　詳しい報告なし	不明　多量の鉄滓・羽口という		国府関連集落	概要のみ　鍛冶工房とは報文による	栗山・菅沼1997	
平塚市天神前遺跡第10地点	7号竪穴住居址(竪穴住居)	方形 3.8m×3.5m以上	床中央に鍛冶炉か　詳しい報告なし	不明　多量の鉄滓・羽口という	9世紀後半	国府関連集落	概要のみ　鍛冶工房とは報文による	同上	
平塚市天神前遺跡第10地点	8号竪穴住居址(竪穴住居)	長方形 3.8m×3.8m以上	床中央に鍛冶炉か　詳しい報告なし	不明　多量の鉄滓・羽口という		国府関連集落	概要のみ　鍛冶工房とは報文による	同上	
平塚市高林寺遺跡第6地点	SX01鍛冶工房址(露天または平地建物)	痕跡なし	2基あり。1号炉址は平面舟形、長軸3.9m、短軸1.0m、深さ45cm～60cm、粘土と焼土。2号炉址は不整円形、1.6m×1.4m、深さ25cm。1・2号の新旧不明。2号は掘り足りないか。	鉄滓781、羽口58	9世紀後半	国府関連集落	詳細不明	小島ほか1988	第8図



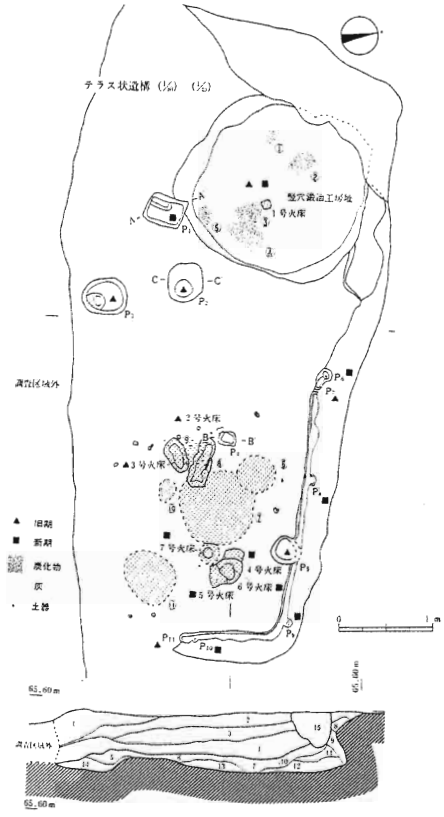
第4図　神奈川県の製鉄・鍛冶遺跡位置図



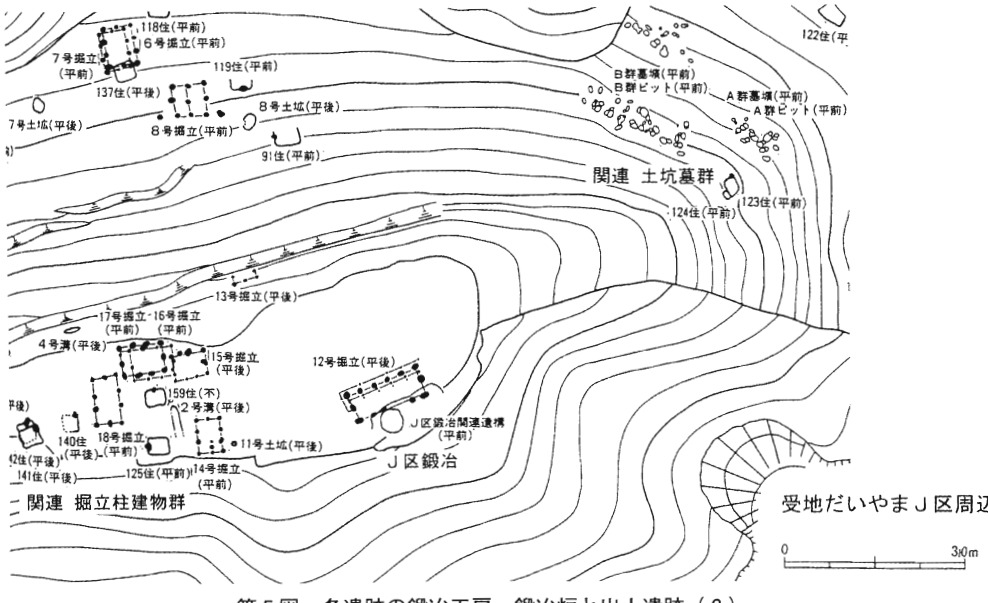
岡上－4



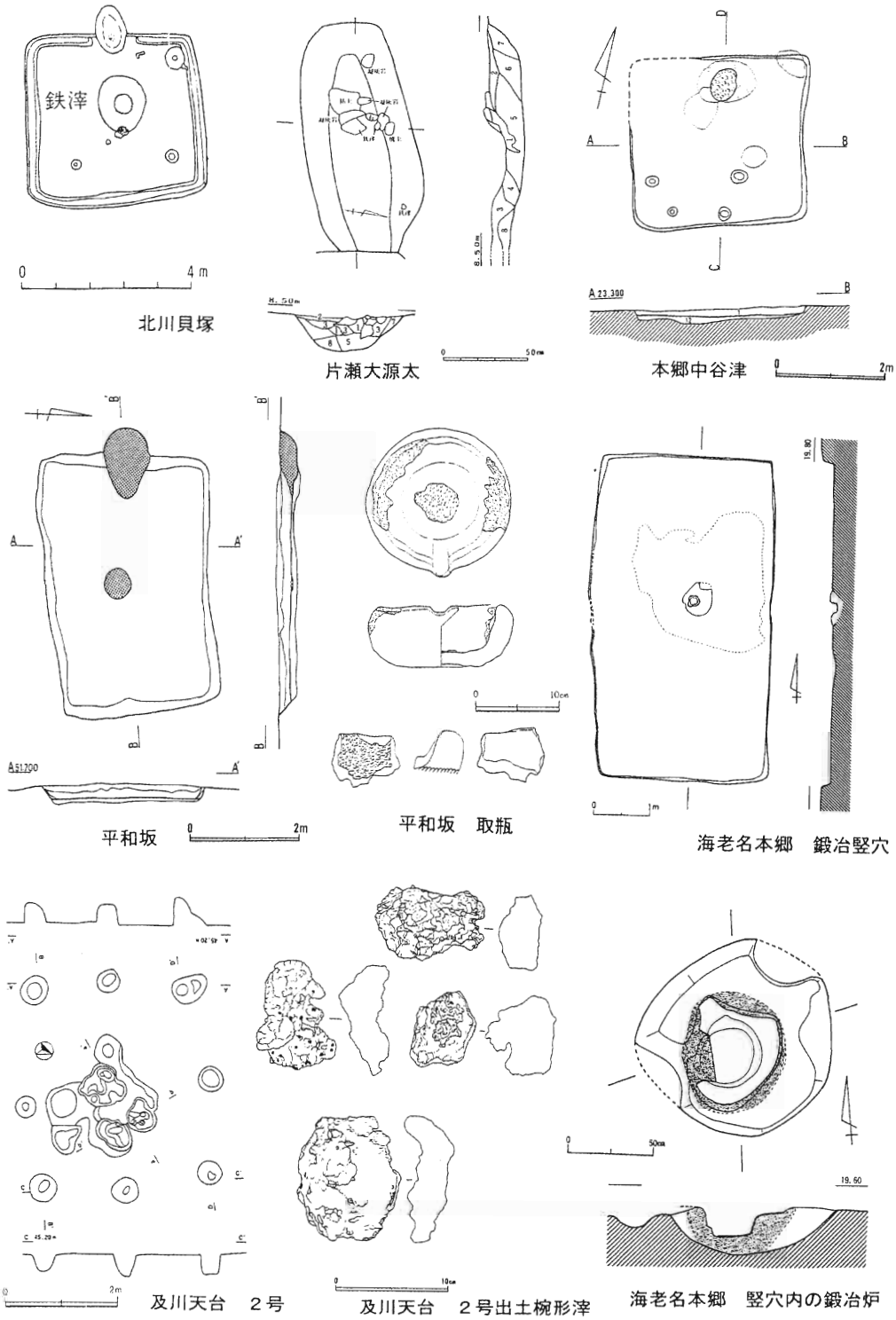
受地だいやま　D区鍛冶



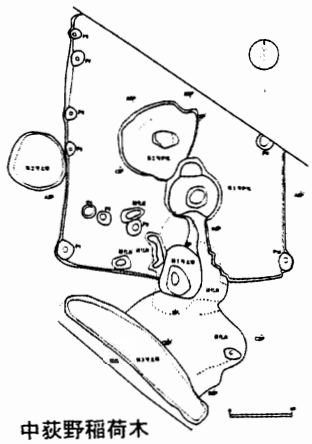
受地だいやま　J区鍛冶



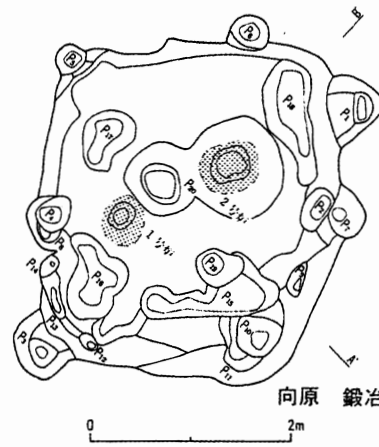
第５図　各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺跡（２）



第6図 各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺跡（3）

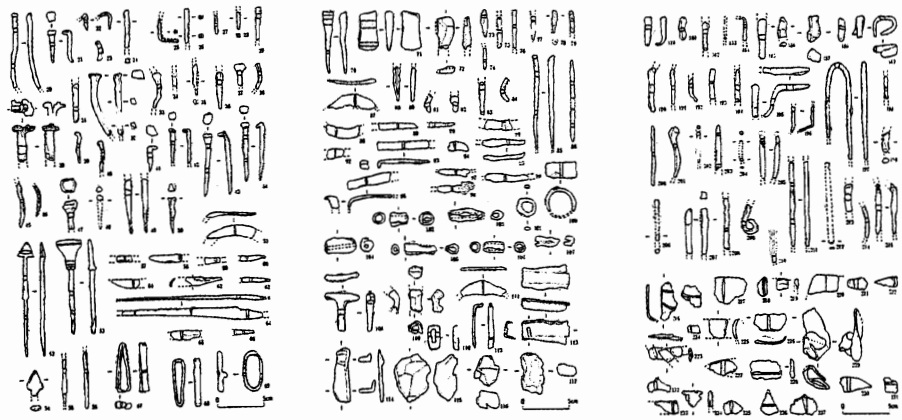


中荻野稲荷木

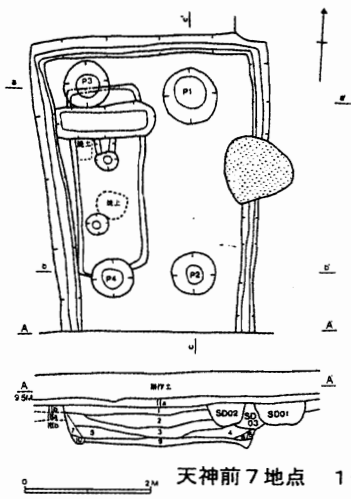


向原　鍛冶竪穴

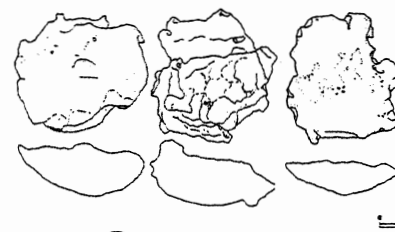
向原　鍛冶炉



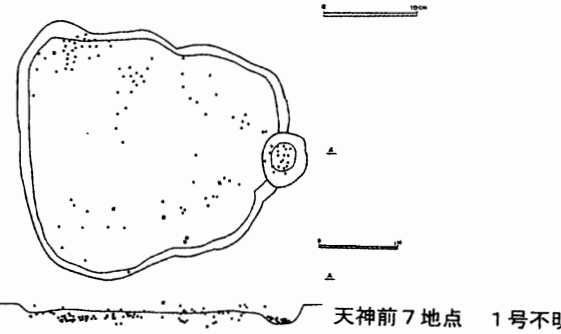
向原　鍛冶工房出土鉄器（一部）



天神前７地点　１号住

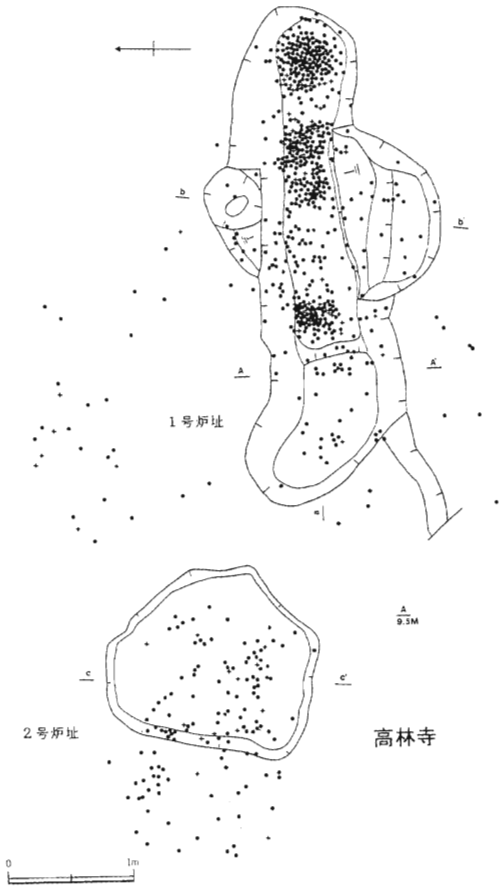


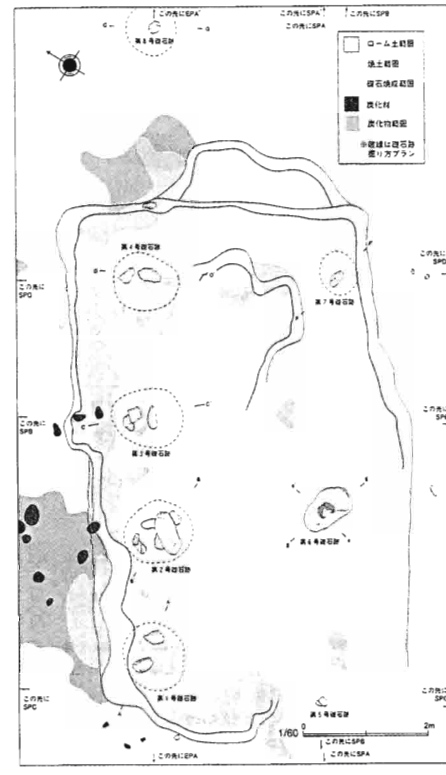
天神前７地点
１号住出土椀形滓



天神前７地点　１号不明

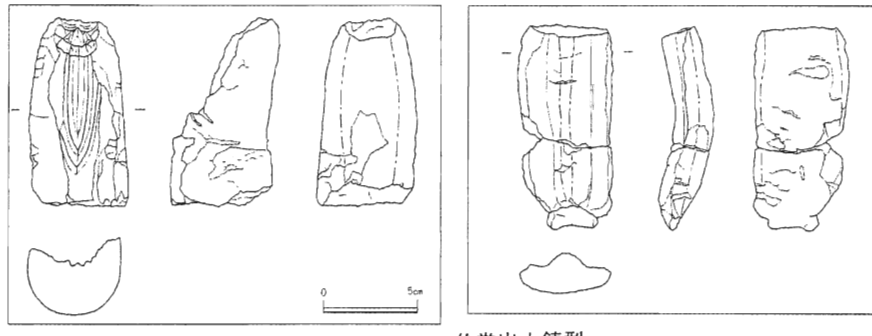
第７図　各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺跡（４）





愛名宮地　仏堂

仏堂　出土の仏鉢形土器と「寺」墨書土器



仏堂出土鋳型

第8図　各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺跡（5）

3. 製鉄・鍛冶施設を伴う遺跡の性格

（1）遺跡の種類による分類

さて大変大まかな区別で製鉄・精錬・小鍛冶・鋳造について遺跡を紹介してみたが、本稿の目的は製鉄・鍛冶関連遺構の位置した遺跡の性格を考えることにある。集落・官衙・寺院・専業的生産遺跡・その他に分けて考え直してみよう。

集落関連の鍛冶

池子遺跡群№5地点、受地だいやまＪ区・Ｄ区鍛冶関連遺構、北川貝塚、権田原遺跡、片瀬大源太遺跡、平和坂遺跡、本郷中谷津遺跡、海老名本郷遺跡ＳＯＥ－Ⅱ地区、及川天台遺跡、中荻野稲荷木遺跡、向原遺跡

官衙関連の鍛冶

下寺尾西方Ａ遺跡、六ノ域遺跡、坪ノ内遺跡、天神前遺跡、高林寺遺跡、（平和坂遺跡）

寺院関連の鍛冶

愛名宮地遺跡、宮ノ前遺跡、岡上－4遺跡第4地点

専業的生産遺跡

上郷深田遺跡、中谷遺跡（疑問あり）、西ノ谷遺跡

と分けてみた。専業的生産遺跡というのは数世代にわたる生産専門の遺跡を考えた。六ノ域遺跡や坪ノ内遺跡も専門性が高いが官衙の付属性が高いことからそちらに入れた。これらの遺跡分類に沿って概観してみよう。

（2）集落関連の鍛冶

池子遺跡群№5地点、受地だいやまＪ区・Ｄ区鍛冶関連遺構、北川貝塚、権田原遺跡、片瀬大源太遺跡、平和坂遺跡、本郷中谷津遺跡、海老名本郷遺跡ＳＯＥ－Ⅱ地区、及川天台遺跡、中荻野稲荷木遺跡、向原遺跡を取り上げた。工房の種類で区分してみたい。

竪穴住居、竪穴の例	北川貝塚、平和坂、本郷中谷津、海老名本郷、中荻野稲荷木、向原
掘立柱建物の例	及川天台2号鍛冶
露天または平地の例	片瀬大源太、及川天台1号鍛冶、池子
その他	受地だいやまＪ区

このように竪穴や露天（または平地住居）のものが多く、小規模な工房が多い。竪穴の大半はカマドが無いため、やや専門性があったことは伺えるが、鍛冶で生計を立てた職人が集落にいたかは疑問である。炉の被熱もさほどではなく、炉の数も少なく、鍛冶道具の出土もまれなため、半農半工状態だったのではないか。精錬作業を行っていた可能性があるのは、池子、受地だいやま、及川天台、向原遺跡などだが以上のうち、池子以外は椀形滓が出ている。大鍛冶

と小鍛冶を併用していた例は集落の小工房でもあり得たのだろう。しかし集落内の鍛冶工房の主体はやはり小鍛治にあったと推定したい。

古代集落において鍛冶工房が小規模な単位に分散する傾向は佐々木稔氏らによってすでに指摘されている。つまり集落内に小規模な鍛冶炉を持った小竪穴住居等が鍛冶を行うということである。神奈川県の大集落でも鍛冶工房が発見された例はさほど多く無いが、鉄滓や羽口片のみが遺構外から発見される例はかなり多い。例えば大集落として知られた厚木市鳶尾遺跡や海老名市上浜田遺跡、秦野市草山遺跡、秦野市下大槻峯遺跡、小田原市三ッ俣遺跡では鍛冶遺構は発見されなかったが、鉄滓または羽口等が出土している。つまり大規模集落の全てとは言わないにしても多くの遺跡で一時的なものも含んだ鍛冶が行われていた可能性はある。つまり地表などで痕跡が残りにくい簡単な鍛冶作業などもあり得たのではないだろうか。それは流しというか拠点集落から巡回するように鍛冶職人が出張した形は考えられないだろうか。

また鍛冶遺構が検出された集落は大半が大集落またはある程度の規模を持った集落である。孤立したような住居に鍛冶遺構はまれである。これは半農半工とはいえ、職人の数は少なく、拠点集落に在住していたのだろう。

集落の鍛冶遺構がほとんどは小規模なものだが、受地だいやま遺跡Ｊ区鍛冶遺構はテラス状の遺構に竪穴の工房や炉が配されるやや規模の大きいものである。この鍛冶遺構はすぐ近くにある規模の大きい掘立柱建物群や土坑墓群と関連があるもので（第５図下段）、富農クラスの鍛冶工房経営が予想される。集落内部にはこのような形態の鍛冶施設もあり、このような施設が後で触れる西ノ谷遺跡のように鍛冶の専業化につながるのかもしれない。

（３）官衙関連の鍛冶

相模国府はある時期平塚市の四ノ宮にあったことは定説化しているが、その四ノ宮地区にある六ノ域遺跡と坪ノ内遺跡は共に類似した規模の連房式鍛冶工房が検出され、注目される。長方形の竪穴に二列に炉が並列するもので神奈川県では初めてである。時期的にも共に９世紀であり、国府に関連したものであろう。事例紹介でも記したように精錬作業が中心の工房であるが小鍛冶も行っていたかどうかは正式報告を待ちたい。発掘調査の進んでいる平塚では国府および関連施設、そして国府周辺の集落は９世紀頃は数千人の人口があったと推定されており、これらの多くの建物の建設、建て替えや人々の生活道具に絶えず大量の鉄の鉄が必要だったはずである。多量に持ち込まれた粗鉄を鋼とするのに国衙主導の直営工房がこのような形で生産を行っていたと考えられる。問題はこの二遺跡の工房の時期である。現在、相模の平塚国府の成立を８世紀とみるか、９世紀前葉とするかで対立がある。もし坪ノ内遺跡のように９世紀初頭に大規模な工房があちこちに建てられていたとしたら、一体何の理由なのか興味深い。それは国府の移転なのか、弘仁地震からの復興なのか、軍団の活動（蝦夷討伐）なのか様々な憶測が考えられる。ただし特別な出来事が無くとも、通常の需要に応えるのにも連房式の工房があってもおかしくはない。

また平塚の国府周辺集落には多量の鉄滓や羽口が発見されており、表で表したように四ノ宮の天神前地区で竪穴を中心とした鍛冶工房が発見されているが、小規模な工房である。四ノ宮のなかで天神前地区および隣接する神明久保、高林寺地区はかなり鉄滓や鍛冶関連遺物が多く出土する一帯で、国府周辺の鍛冶工房が集中していた可能性がある。もっとも工房は小型であることから精錬作業も一部で行っていたが、小鍛冶が中心であり、小型釘や生活道具の生産が中心だったのではないだろうか。連房式の工房で精錬が主に行われ、やや離れた神明久保や天神前地区で小鍛冶が行われたという国府周辺での分業が成立していたとすれば興味深いが、そのような議論ができるほど事例がそろったわけではない。

また郡衙に伴う可能性の鍛冶として西方A遺跡を挙げたが、正確にはこの地点における郡衙は鍛冶遺構の成立の直前、つまり8世紀第二四半期前半に廃絶しているという。しかし8世紀第二四半期後半の鍛冶炉の存在やなんらかの作業施設と考えられる竪穴（H4号住）の存在は通常の集落とは性格がやや異なった印象を受ける。郡庁の維持期間についてすでに何人かの研究者（明石新氏ら）の疑問が出されているが、郡衙の正庁域はこのころまで機能しているのではないだろうか。

さらに駅家についてであるが表で示した平和坂遺跡は主軸をあわせた大規模掘立柱建物群の存在から東海道の「夷参駅」になる可能性が指摘されている。その場合は鍛冶工房は駅関連の可能性があるが、駅自体が確定したわけではないため、「集落関連の鍛冶」としておいた。

（4）寺院に伴う鍛冶

川崎市の岡上廃寺は仏堂自体の調査はされていないが、使用した瓦や瓦窯の調査、周辺集落の岡上遺跡の調査から8世紀前半に建立されたと推定されている。本格的な伽藍ではなく、単堂形式の寺院と考えられている。鍛冶遺構は周辺集落の岡上遺跡の竪穴住居に鍛冶炉が設けられているものである。寺と集落の結びつきは強く、竪穴住居からの「寺」墨書土器や大量の灯明皿（法会や読経に使われる）出土からも伺える。鍛冶遺構の年代が8世紀第二四半期と寺の創建期に近いことから仏堂の建設または改修に関わった可能性がある。建立時に多量の釘の製作や工具の製作・修理などに工房が活動していたことは十分に考えられる。

同じように宮ノ前遺跡では寺も鍛冶施設も見つかっていないが、溝状遺構から多量の鉄滓と鍛冶関連遺物および仏教関連遺物が発見されていることから寺と鍛冶の関連が推定されている。これも仏堂建設に伴って周囲の鍛冶施設で釘などを製作した可能性がある。

愛名宮地遺跡では鉄鍋の鋳型が仏堂から出土していることから寺の生活道具を周囲の施設で鋳造している可能性が高い。おそらく存在形態から考えれば鍛冶と鋳造が共に行われていたのだろう。

私見では岡上廃寺は小豪族クラスの氏寺、宮ノ前遺跡と愛名宮地遺跡は富農や村落有力者建立の寺などと勝手に解釈しているが、いずれにせよこのような寺の建設、維持には釘をはじめとした鉄製品製作のために鍛冶施設が周辺に設けられたと考えておきたい。

（5）専業的な鍛冶・製鉄施設

専業的鍛冶・製鉄遺跡というのは数世代にわたる生産専門の遺跡を考えた。神奈川の古代においてはあまり例がないが、先に提示した上郷深田遺跡は数少ない専業的な製鉄遺跡であろう。7世紀末から9世紀前半の長期間にわたって斜面地に遺構を積み重ねており、時期的に律令体制の成立期から最盛期にあたっているため、地方官衙の支配下にあり、律令体制に組み込まれた製鉄遺跡と考えている。この周辺は砂鉄の多く採集できる一帯であるため、同じ地域に属する中谷遺跡も不備のある調査結果ながら同じ性格の遺跡と判断した。

また平安時代中・後期の例だが西ノ谷遺跡は10世紀後半から12世紀にわたる専門的な鍛冶屋敷であり、小札や鏃の出土から地方武士の鎧・武器の製作を行っていたと考えられている。集落の鍛冶の節で触れた10世紀の受地だいやま遺跡Ｊ地区鍛冶遺構のように富農の支配下にある鍛冶施設が、地方領主の武装化に伴い西ノ谷遺跡のように専業化したとするには、まだ類例が乏しいかもしれないが可能性は十分にある。

4. まとめ

神奈川の鍛冶・製鉄遺跡を集落関連・官衙関連・寺院関連・専業的遺跡にわけて概観した。

集落遺跡では従来言われているように、小型の竪穴・平地建物（または露天）を工房とした小さな単位での鍛冶がやや大きな集落に見られた。しかし多くの大集落には鉄滓・羽口が出土しても鍛冶工房は無い場合が多く、その場合は一時的な巡回の鍛冶職人も想定した。また集落内の富農、有力者に属する鍛冶工房も確認された。集落内の小工房でも椀形滓が出土する例はかなりあり、もし椀形滓の認定に誤りがなければ大鍛冶と小鍛治を共に行っていた工房が少なからずあることになる。

官衙では精錬作業を中心とする連房式工房が二例、平塚国府周辺で確認され、国衙直営と予想した。また別の地区に国府関連集落に伴う小鍛冶工房集中地区がある可能性を考えた。郡衙と駅関連鍛冶施設についてもそれぞれ一例づつ挙げたが、まだ確定的とは言えない。

寺院関連について集落内の仏堂施設（村落内寺院）などの建立に際し、鍛冶施設を周辺に設ける場合があると推定した。また寺で使う鍋などを鋳造するケースもある。

数世代にわたる専業的な遺跡として神奈川の数少ない製鉄遺跡の上郷深田遺跡は律令体制に組み込まれた遺跡と考えた。また平安時代中・後期には地方武士階級の興隆に伴って鎧、武器を製造する専業的な鍛冶屋敷も横浜市西ノ谷遺跡で確認されている。

以上、神奈川県の製鉄・鍛冶遺構について、筆者の無知識を承知でまとめてみた。雑ぱくなまとめ方ながらも古代になると遺跡の性格によって鍛冶のあり方も差があると認識できたような気がする。「はじめに」でも記したように、専門研究者にご批判・ご意見をいただき、修正できれば幸いである。

末筆ながら以下の諸氏にはご指導・ご協力・資料提供を賜った。記して感謝したい。
栗原伸好、柏木善治、谷口肇、及川良彦、山口正憲、加藤久美、植山英史、依田亮一、
佐々木健策、伊丹徹、大上周三（敬称略、順不同）

参考・引用文献

明石新　1992『天神前遺跡第7地点』平塚市教育委員会
穴澤義功　1991「関東地方」『日本古代の鉄生産』たたら研究会
伊藤正義ほか　1986『奈良地区遺跡群』Ⅰ下巻　奈良地区遺跡調査団
河合英夫　2001『岡上－4遺跡　第2地点』岡上－4遺跡遺跡発掘調査団
河合英夫　2003「岡上廃寺出土の平瓦一枚作りの年代について」『多摩考古』33　多摩考古学研究会
柏木善治・依田亮一　2003『湘南新道関連遺跡発掘調査概報』（財）かながわ考古学財団
北川吉明　1999『中荻野稲荷木遺跡』国道412号線遺跡発掘調査団
合田芳正ほか　1987『海老名本郷』Ⅲ　本郷遺跡調査団
香村紘一ほか　1997『及川天台遺跡』国道412号線遺跡発掘調査団
川上久夫　1976「中谷遺跡」『港南台』神奈川県教育委員会
栗山雄揮・菅沼圭介　1997『天神前遺跡第10地点発掘調査概要』平塚市教育委員会
小池聡ほか　1993『平和坂遺跡』平和坂遺跡発掘調査団
小島弘義ほか　1988『諏訪前B・高林寺』平塚市埋蔵文化財シリーズ6　平塚市教育委員会
境雅仁・浅野哲哉ほか　1999『愛名宮地遺跡』愛名宮地遺跡調査団
坂本彰ほか　1997『西ノ谷遺跡』（財）横浜市ふるさと歴史財団
坂本彰・伊藤薫ほか　1996『鉄製品の生産・流通と武士団』横浜市歴史博物館
坂本彰・鈴木重信　1984「横浜市北川貝塚の調査」『第8回神奈川県遺跡調査・研究発表会』要旨
佐々木稔　2000「坪ノ内・宮ノ前遺跡出土遺物の金属学的解析」『坪ノ内・宮ノ前遺跡』（財）かながわ考古学財団
佐々木稔・赤沼英男・古瀬清秀ほか　2002『鉄と銅の生産の歴史』雄山閣
清水博・市川正史ほか　1987『向原遺跡』神奈川県教育委員会
鈴木重信　1990「権田原遺跡」『全遺跡調査概要』横浜市埋蔵文化財センター
滝沢亮　1993『本郷中谷津遺跡　第8次調査』本郷中谷津遺跡発掘調査団
千葉県立房総風土記の丘　2003『鉄づくり今昔』展示資料
寺田兼方ほか　1997『片瀬大源太発掘調査報告書』大源太遺跡発掘調査団
土佐雅彦　1986「鉄」『日本歴史考古学を学ぶ』下　有斐閣
林原利明　1996『坪ノ内遺跡発掘調査概要』坪ノ内遺跡調査団
平子順一　1988『上郷深田遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
桝渕規彰・植山英史　1998『池子遺跡群』Ⅵ　（財）かながわ考古学財団
宮坂淳一・宍戸信悟ほか　2000『坪ノ内・宮ノ前遺跡』（財）かながわ考古学財団
村上吉正・宍戸信悟ほか　2003『下寺尾西方A遺跡』（財）かながわ考古学財団
安間拓巳　2000「古代の鍛冶遺跡」『製鉄史論文集』たたら研究会

執筆者紹介　橋詰　潤（東京都立大学大学院）
小林謙一（総合研究大学院大学博士後期課程日本歴史研究専攻）
今村峯雄（国立歴史民俗博物館情報試料研究部）
天野賢一（財団法人かながわ考古学財団）
高橋毅（國學院大學大学院）
鈴木正博（早稲田大学文化遺産デジタルアーカイブ研究所）
谷口肇（神奈川県教育委員会）
押木弘己（鎌倉遺跡調査会・鎌倉考古学研究所）
田村良照（相模考古学研究所）
冨永樹之（神奈川県教育委員会）

目次英訳　吉田政行（財団法人かながわ考古学財団）

編集委員　依田亮一・加藤緑・小滝勉・佐々木健策

考古論叢 神奈河　第12集

平成16年4月24日　印刷
平成16年4月30日　発行
編集・発行　神奈川県考古学会
事務局　〒251-0043 藤沢市辻堂元町4-17-4
やよい荘102
郵便振替　00240－9－71208
神奈川県考古学会
印刷　朝日オフセット印刷株式会社
〒230-0048 横浜市鶴見区本町通1-22
Tel. 045-511-0141　Fax. 045-502-2170

KOKO-RONSO KANAGAWA vol.12

CONTENTS

Jun HASHIZUME	Stone tools excavated from Hachimanyama features in Odawara castle.
Ken-ichi KOBAYASHI Mineo IMAMURA Ken-ichi AMANO	Carbon-14 dating for samples from Kawajirinakamura site and Harahigashi saite.
Tsuyoshi TAKAHASHI	An Approach to the Context of "Cylindrical Clay Doll" -From the Case of Clay doll in Forepart of Late Jomon Period from Kanagawa Prefecture -
Hajime TANIGUCHI	Settlements of the Yayoi period in Ikego sites, Zushi city.
Masahiro SHUZUKI	A new perspective on Odawara type motif in Yayoi age
Hiromi OSHIKI	The relationship between oracle bones in ancient Kamakura and Miura peninsula -an aspect of settlements in the coast in Ritsuryo system-.
Yoshiteru TAMURA	Cave style tombs in Sagami province.
Shigeyuki TOMINAGA	The blacksmithing of the ancient settlement, government offices and Buddhist temple in Kanagawa prefecture. -On Iron-working and blacksmithing archaeological features-

2004.4